令和２年度

WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業

拠点校　研究報告書

2021 年 3 月 31 日

関西学院高等部

巻 頭 言

関 西 学 院 高 等 部

部長(校長)　枝川　豊

ワールドワイドラーニングコンソーシアム（WWLC）支援事業拠点校に指定され、2 年目を終えることができましたが、昨年、2 月末に突然の休校要請が出され、学年末を控えた学校は混乱に陥り、教育を取り巻く環境が一変しました。本校では２０１８年度入学の生徒から iPad を必携としており、２０２０年度入学の生徒をもって全員に iPad が行き渡っていたこともあり、いち早くオンライン授業へと切り替えることができましたが、奇しくもこのコロナ禍で、一気に、加速度的に教育現場の ICT 環境の改善が必要となり、GIGA スクール構想も前倒しで進められることとなりました。

オンライン授業となったことで、私たちは「学校」の、あるいは「対面授業」の意味・意義を改めて問い直す機会となり、また、オンライン授業の強みや生かし方を学ぶ機会にもなりました。しかし、地域、自治体、あるいは学校によっては ICT 環境に大きな差があり、如実に教育現場にその影響がおよびました。また、このコロナ禍では、様々な覆い隠されてきたことが露呈されることにもなりました。それは格差であったり、環境問題であったり、また貧困の問題であったりと様々です。

“No one will be left behind.”「誰一人取り残さない」。２０３０年までにこの世界を変革していこうと国連が国際社会共通の目標として定めた「持続可能な開発目標(SDGs)」のスローガンですが、「コロナ禍」の後は「貧困禍」の時代になるとも言われています。現在、来月のことすら見通せない世の中ですが、これからは未知なるもの、答えの見えない問題が横たわっている世界で、予測不能な世界です。その問題解決には課題発見能力や問題解決能力を養うための「探究学習」によって得られる力がますます求められます。

本校の WWLC 事業の構想名は“AI 活用 for SDGs”「地球と人類に貢献する平和構築のための学び」ですが、このコロナ禍にあって如実になった諸問題・課題解決こそ、まさにこの構想名にあるように、この WWLC 事業を通しての「学び」であることをこの 1 年で再認識いたしました。

「他者に、世界に仕える使命感」を現代の社会に生かし、また、関西学院の根幹にあるキリスト教主義教育に基づいたスクールモットー“Mastery for Service （奉仕のための練達）”を体現する「世界市民」として、一人一人が「平和な社会を築く担い手」を、本事業を通じて育ててまいりたいと考えておりますので、ご高覧の上、皆様のご意見、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

内容

巻 頭 言 2

拠点校による２０２０年度の研究開発実施状況について 4

研究開発の活動実績一覧 6

１．生徒の活動 6
２．対外会議・他校への視察・発表会・研究会等参加 7
３．事業連携校との取り組み 7
４．成果普及 8
５．その他 8
WWL コンソーシアム構築支援事業 事業連携校　教員交流会：これからの探究教育のあり方 9
WWL コンソーシアム構築支援事業 事業連携校　生徒交流会 10
WWL コンソーシアム構築支援事業 国際会議 First International Online Meeting (IOM①) 11
探究学習×ICT カンファレンス 2021 ～GIGA スクール時代に考える探究学習の未来～ 12
関西学院高等部 WWLC 事業 運営指導委員会・検証委員会 14

今年度の研究内容と評価の概要 16

【研究内容１の具体的な内容とその評価】 19
【１学年全体プログラム　「ソーシャル探究」について】 54
【研究内容２の具体的な内容とその評価】 63
研究内容１・２総括　グローバルな社会を探究するためのカリキュラム開発 136

コンピテンシーの成長を定量化することによる WWL 関連科目の教育効果の可視化と検証について 138

本研究における評価方法の展望と年度報告 155

拠点校による２０２０年度の研究開発実施状況について
～指定２年目を迎えたＷＷＬ事業でのプログラム開発～

今年度の拠点校関西学院高等部の研究開発実施状況は、新型コロナウィルス感染拡大の影響を大きく受けできなくなったことも多かったが、逆にこの状況だからこそ産み出されたものあり、総括すると概ね当初の計画を達成できたと考えている。

昨年度は今後の活動の基盤づくりの１年とし、今後、連携校等へ本校の取り組みをプロトタイプとして広げていくためにも以下の３点を推し進めた。

1. SGH 事業での課題と反省を基本方針としたプランニング。
2. 全ての教職員が同じゴールを見据えた上で、学校を変革するために本事業に取り組むためのマインドセットの醸成
3. 本事業の指定終了後も、人的にも経済的にも自走できるための体制づくり

今年度に入り、新型コロナウィルス感染拡大の影響で、昨年度準備した３つの教科横断型・PBL 型科目の新規開講を含め、事業における諸計画の実施が危ぶまれた。しかしながら昨年度の基盤づくりの結果、関係する教職員も意識を切らすことなく、約３ヶ月の休校期間も、様々な創意工夫の上でオンラインでの探究活動や評価等諸活動を続けることができた。更に、この期間の苦しい経験と想いから、計画外の試みとして「拠点校・連携校オンライン教員交流会」を８月に、拠点校・連携校の生徒運営による「オンライン生徒交流会」を実施することができた。また、この経験を踏まえて国際会議についても拠点校・連携校と海外の生徒運営によるオンラインでの実施を早々に決定し、全３回構成の１回目「オンライン国際会議Ⅰ(First International Online Meeting：IOM①)」を実施することができた。

1. 今年度の本研究開発の構成

本校は２０１８年度まで SGH 事業の指定校であった。よって今年度は、「２年前まで SGH 事業で実施されていたプログラムを継続して受講する生徒（高校３年生)」と「WWL 事業としての新規プログラムを受講する生徒（高校１・２年生)」が存在した。

これを受けて、実際の研究開発実施内容としては、以下の３つに分かれた。

(1) 高校１年生対象：
WWL 事業として昨年度より開講した教科横断型、PBL 型授業「グローバル探究-BASIC」の２年目の実践

(2) 高校２年生対象:
WWL 事業として今年度より新規に開講した教科横断型、PBL 型授業「グローバル探究 A（AI 活用)」「グローバル探究 B（ﾊﾝｽﾞｵﾝﾗｰﾆﾝｸﾞ)」「グローバル探究 C（ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙｽﾀﾃﾞｨ)」の実践

(3)高校 3 年生対象:
基本的には２年度までの SGH 事業の内容を継承しつつも、その課題を解決するために、WWL で新規に導入する要素を取り入れたプログラム「Global StudyⅢ（以下 GSⅢ)」の実践

2. WWL 事業での重点目標

昨年度報告書からの再掲となるが、拠点校において WWL 事業を考える上で以下の目標を掲げている。

① 学校全体として取り組み、全ての学校活動を巻き込む動きを作り上げること
② 全教員で時代に即した教育目標の見直しを行い、育むべき力の明確化と共有を行うこと
③ 学校全体で、ICT を用いたアクティブラーニング型授業を推進する体制を作り上げること
④ 実践や実地研修（フィールドワーク）を踏まえた上での、より深い探究学習への挑戦
⑤ 読書科をはじめとする他教科との連携

⑥　人権講座やホームルーム活動、クラブ活動、宿泊行事等、課外活動との連携
⑦　探究学習の評価方法の確立
⑧　継続的に外部の企業や有識者からアドバイスをもらえる体制の構築
⑨　すべての基盤となる、教員の働き方改革の推進

3.　本研究開発報告書の構成について

これまでの内容を踏まえて、本研究報告書の記載内容は以下の通りの構成とした

(1) 研究内容 1: 高校 1 年生を対象に、WWL 事業で新規に開発したプログラム
(2) 研究内容 2: 高校 2 年生を対象に、WWL 事業で新規に開発したプログラム
(3) 研究内容 3: 高校 3 年生を対象に、SGH 事業のプログラムを継承・改善したもの

なお、この中でも、(1)(2)が WWL 事業として新規に開発したプログラムであり本報告書においてもこの２つにおいて重点的に報告を行ったうえで、その総括を本事業のカリキュラムアドバイザーである、関西学院大学の時任隼平准教授にして頂いた (p.136 より)。また、これらの新規開発プログラムについては、IGS 社が提供する Ai-GROW テストの受検結果をもとに、コンピテンシーの成長を定量化することによる WWL 関連科目の教育効果の可視化と検証を目的とした分析を行った (p.138 より)。最後に、WWL 事業全体としての評価方法の展望と今年度の実施報告について、評価担当の責任者が記した (p.155 より)。

研究開発の活動実績一覧

１．生徒の活動

＜研究開発のスケジュール＞

期日		プログラム名	対象
4月		グローバル探究Ａ・Ｂ・Ｃ　COVID-19 感染拡大防止のため休校	２年生
5月		グローバル探究Ａ・Ｂ・Ｃ　オンライン授業	２年生
6月	1	グローバル探究Ａ・Ｂ・Ｃ　オンライン授業	２年生
	8	グローバル探究Ａ・Ｂ・Ｃ　オンライン授業	２年生
	25	グローバル探究Ａ・Ｂ・Ｃ合同授業	２年生
7月	2	グローバル探究Ａ・Ｂ・Ｃ	２年生
	9	グローバル探究Ａ・Ｂ・Ｃ	２年生
	16	グローバル探究Ａ・Ｂ・Ｃ	２年生
8月			
9月	2	グローバル探究 BASIC 受講希望者説明会	１年生
	3	グローバル探究Ａ・Ｂ・Ｃ	２年生
	9	グローバル探究 BASIC	１年生
	10	グローバル探究Ａ・Ｂ・Ｃ	２年生
	16	グローバル探究 BASIC	１年生
	17	グローバル探究Ａ・Ｂ・Ｃ	２年生
	23	グローバル探究 BASIC	１年生
	24	グローバル探究Ａ・Ｂ・Ｃ	２年生
10月	1	グローバル探究Ａ・Ｂ・Ｃ	２年生
	7	グローバル探究 BASIC	１年生
	8	グローバル探究Ａ・Ｂ・Ｃ	２年生
	21	グローバル探究 BASIC	１年生
	22	グローバル探究Ａ・Ｂ・Ｃ	２年生
	28	グローバル探究 BASIC	１年生
	29	グローバル探究Ａ・Ｂ・Ｃ	２年生
11月	11	グローバル探究 BASIC	１年生
	18	グローバル探究 BASIC	１年生
	19	グローバル探究Ａ・Ｂ・Ｃ	２年生
	21	SDGs オンラインミーティング WWLC 生徒交流会	２年生
	25	グローバル探究 BASIC	１年生
	26	グローバル探究Ａ・Ｂ・Ｃ	２年生
12月	7	グローバル探究 BASIC　フィールドスタディ（FS）①	１年生
	8	グローバル探究 BASIC　オンライン FS①②	１年生
	9	グローバル探究 BASIC　FS②	１年生
	10	グローバル探究 BASIC　FS③・オンライン FS③	１年生

	14	グローバル探究 BASIC　まとめ	1 年生
	20	全国高校生フォーラム	2 年生
1 月	13	グローバル探究 BASIC	1 年生
	14	グローバル探究 A・B・C	2 年生
	20	グローバル探究 BASIC	1 年生
	21	グローバル探究 A・B・C	2 年生
	27	グローバル探究 BASIC	1 年生
	28	グローバル探究 A・B・C	2 年生
2 月	3	グローバル探究 BASIC	1 年生
	4	グローバル探究 A・B・C	2 年生
	15	グローバル探究 A・B・C	2 年生
	17	グローバル探究 BASIC	1 年生
	20	With Classi 探究学習×ICT カンファレンス 2021	－
	24	グローバル探究 BASIC 最終発表会	1 年生
	25	グローバル探究 A・B・C 合同授業　ポスタープレゼンコンテスト	2 年生
3 月	6	AI 活用ワークショップ(オンライン)	－
	10	WWLC1 学年全体企画　ソーシャル探究　クラス代表者発表会	1 年生
	14	グローバル探究 C グローバルスタディ　オンライン生徒交流会	2 年生
	21	WWL・SGH×探究甲子園 2021	－
	27	WWLC 構築支援事業 First International Online Meeting (IOM①)	－

２．対外会議・他校への視察・発表会・研究会等参加

2020/7/29	SGH・WWL コンソーシアム構築支援事業令和 2 年度事務説明会
2020/12/20	全国高校生フォーラム 発表者：2 年生ハンズオンラーニング受講者（4 名） タイトル：Learning about the History of Kwansei Gakuin and World WarⅡ through Creating an AR Walking Map
2021/3/21	探究甲子園 2021 探究活動プレゼンテーション：A グループ（日本語発表） 発表 10 分／大学教員による質疑・応答 10 分 発表者　：グローバルスタディ受講者（2 名） タイトル：温暖化対策と経済活動が深く関わり合う社会に生きる私たちにできること グループディスカッション：《テーマ２》日本の少子化における課題と解決策 ディスカッション 90 分／大学教員による講評・質疑応答 10 分 出場校：宮城県仙台二華高等学校、富士見丘高等学校、名城大学附属高等学校 大阪教育大学附属高等学校平野校舎、和歌山日高高等学校、関西学院高等部

３．事業連携校との取り組み

・WWLC 事業連携校オンライン教員交流会　　2020 年 8 月 7 日

【参加連携校一覧】太字は分科会発表校

京都教育大附属高等学校、奈良県立畝傍高等学校、大阪府立千里高等学校、高槻高等学校、兵庫県立国際高等学校、啓明学院高等学校、兵庫県立神戸高等学校、兵庫県立明石北高等学校

香川県立観音寺第一高等学校

賢明学院高等学校、清風南海高等学校、関西学院千里国際高等部、兵庫県立長田高等学校、兵庫県立篠山鳳鳴高等学校、兵庫県立八鹿高等学校、兵庫県立洲本高等学校

・SDGs オンラインミーティング WWLC 生徒交流会　　2020 年 11 月 21 日
【参加連携校一覧】太字は生徒実行委員
奈良県立畝傍高等学校、啓明学院高等学校、賢明学院高等学校、関西学院千里国際高等学校
大阪府立千里高等学校、京都産業大学附属中学校高等学校、香川県立観音寺第一高等学校
【本学の連携校以外の参加校】
岡山操山高等学校、広島県立広島中学校高等学校、石川県立金沢泉丘高等学校、
中村学園女子高等学校

・関西学院高等部主催　国際会議　First International Online Meeting (IOM①)
2021 年 3 月 27 日　関西学院主催
【生徒実行委員参加メンバー所属校（連携校より募集）】
奈良県立畝傍高等学校、関西学院千里国際高等部、賢明学院高等学校、兵庫県立国際高等学校
兵庫県立篠山鳳鳴高等学校、高槻高等学校、西宮市立西宮高等学校、広島女学院中学高等学校
【海外参加国】
インド、インドネシア、エジプト、フィリピン　計４ヵ国

４．成果普及
⑴探究学習×ICT カンファレンス 2021 ～GIGA スクール時代に考える探究学習の未来～
2021 年 2 月 20 日(土)　Classi 株式会社、関西学院高等部　共催
オンラインセミナー全体会・関西学院高等部探究学習実施報告・分科会

⑵WWLC 紹介リーフレット　発行

⑶高等部 HP に WWLC ページの随時更新

５．その他
⑴　SGH・WWL コンソーシアム構築支援事業令和 2 年度事務説明会にて事例発表
日時：2020 年 7 月 29 日（水）13:00~16:30

⑵　WWLC 運営指導委員会・検証委員会
日時：2021 年 2 月 25 日（木）15:30~16:30

WWL コンソーシアム構築支援事業 事業連携校　教員交流会：これからの探究教育のあり方

日時：2020 年 8 月 7 日
主催：関西学院高等部
内容：オンライン会議（Zoom 使用）
　第１部　１４：００～１４：４０
　　開会の挨拶：関西学院高等部長 枝川 豊
　　基 調 講 演：「コロナ禍における探究授業のありかた、展望について」
　　村上 正行 教授（大阪大学 全学教育推進機構）
　第２部　１４：４５～１５：４５
　　グループセッション
＜発表校＞
　分科会１：
・本校の課題研究の構成・休校中の「ライブでないオンライン授業」とその後　大阪府立千里高等部学校
・「課題研究」（第２学年　全員履修）実践について　奈良県立畝傍高等学校
・休校・オンライン授業期間中の探究授業「ハンズオンラーニング」における生徒の学びの評価について
　～Zoom のブレイクアウトセッション中のペア・グループ活動と活動振り返りポートフォリオの評価～
　関西学院高等部
　分科会２：
・コロナ禍における各学校の課題と新しい取り組みの実践方法　株式会社 With The World
・兵庫県立国際高等学校の取り組み C.C.C.(Communication/Cultural Understanding/Contribution)
　兵庫県立国際高等学校
・今年度の高校１・２年グローバル課題研究の授業計画高槻中学校・高等学校海外の高校生とのオンラインディスカッションを通じた PBL 型学習の実践報告　関西学院高等部
　分科会３：
・コロナ禍での探究の推進　香川県立観音寺第一高等学校
・SDGs の視点を育てる　啓明学院高等学校
・休校・オンライン授業期間中における探究授業「AI 活用」の授業内容とその評価について　関西学院高等部
　分科会４：
・高校１年生の休校期間中の課題について　京都教育大学附属高等学校
・神高ゼミ(総合的な探究の時間)　兵庫県立神戸高等学校
・課題研究テーマ設定報告会の意義とＳＤＧｓの取組　兵庫県立明石北高等学校
・休校・オンライン授業期間中における探究授業「AI 活用」の授業内容とその評価について　関西学院高等部
　＜各分科会参加校＞
　　賢明学院高等学校、清風南海高等学校、兵庫県立長田高等学校、兵庫県立篠山鳳鳴高等学校、
　　兵庫県立八鹿高等学校、兵庫県立洲本高等学校、関西学院千里国際高等部、
　第３部　１５：５０～１６：１５
　　総括：村上 正行 教授　（大阪大学　本校検証委員）
　　時任 隼平 准教授（関西学院大学高等教育推進センター・本校カリキュラムアドバイザー）
閉会の挨拶：関西学院高等部副部長 田澤 秀信

WWL コンソーシアム構築支援事業 事業連携校　生徒交流会

日時：2020 年 11 月 21 日

主催：関西学院高等部

■実行委員会参加メンバー所属校（連携校より募集）

奈良県立畝傍高等学校 4 名　　関西学院千里国際高等部 1 名

啓明学院高等学校 4 名　　賢明学院高等学校 4 名

関西学院高等部 17 名

■実行委員会会議スケジュール

第 1 回：2020 年 10 月 10 日（土）

委員会メンバー顔合わせ・今後のスケジュール説明・準備班分け・講師選定など

第 2 回：2020 年 11 月 2 日（月）

各準備班の状況報告・講演会およびディスカッションのテーマ選定など

第 3 回：2020 年 11 月 9 日（月）

各準備班の状況報告・講演会およびディスカッションの司会等役割決定など

第 4 回：2020 年 11 月 16 日（月）

当日の動きや司会進行などの最終確認

■SDGs オンライン ミーティング当日について

参加者：約 110 名の高校生および教員　　オンライン会議（Zoom 使用）

第 1 部　開会の挨拶：北原 和明（関西学院大学 理工学部長 理工学部数理科学科教授）

"AI 活用 for SDGs"についての講演：巳波 弘佳（関西学院大学 学長補佐 理工学部情報科学科教授）

"SDGs についての講演（1）：田瀬 和夫（SDG パートナーズ有限会社 代表取締役 CEO）

"SDGs についての講演（2）：岸 博幸（慶應義塾大学大学院 メディアデザイン研究科教授）

第２部　高校生同士のディスカッション　参加する高校生のみ ※教職員・大学生・大学院生等は参加不可

参加高校生約 100 人を 10 人程度のグループに分け、ディスカッション

ディカッションテーマ：「2030 年、自分たちが大人になった時 26 歳から 28 歳の時、高校生、今の 6 歳～8 歳の子達にどういう社会に生きて欲しいか」

第３部　WWL 拠点校・連携校による取り組み発表　　※ＲＯＯＭ【１】とＲＯＯＭ【２】は、同時並行

◆ＲＯＯＭ【１】（各校 10 分発表・5 分質疑応答）

・SIS（Senri International School）における SDGs　関西学院千里国際高等部

・啓明学院の SDGs の取組について　啓明学院高等学校

・戦争を身近に　関西学院高等部(1)

・課題研究 α の取組について　奈良県立畝傍高等学校

◆ＲＯＯＭ【２】（各校 10 分発表・5 分質疑応答）

・授業外での研究活動　大阪府立千里高等学校

・AI 活用の授業内容について　関西学院高等部(2)

・地域活性化に向けたワーケーションの提案と、それに向けた地域紹介動画作成の取り組み　香川県立観音寺第一高等学校

・グローバルな問題への高校生のアプローチ　関西学院高等部(3)

閉会の挨拶　　巳波 弘佳（関西学院大学 学長補佐 理工学部情報科学科教授）

WWL コンソーシアム構築支援事業 国際会議 First International Online Meeting (IOM①)

日時：2021 年 3 月 27 日　（２回目：6／24（木）　３日目：8／24(火)を予定）
主催：関西学院高等部　　内容：オンライン国際会議（Zoom 使用）

■IOM 実行委員会

・参加メンバー所属校（WWL 連携校から募集：計４６名）

奈良県立畝傍高等学校 2 名　関西学院千里国際高等部 11 名　賢明学院高等学校 7 名
兵庫県立国際高等学校 6 名　兵庫県立篠山鳳鳴高等学校 1 名　高槻高等学校 5 名
西宮市立西宮高等学校 1 名　広島女学院中学高等学校 1 名　関西学院高等部 12 名

・委員会運営

委員全体を、全体会⑴・ブレイクアウトセッション・全体会⑵・広報の 4 チームに分けて
オンラインで実行委員会を開催

〈開催日時〉2/4(木)19:30～第 1 回実行委員会、2/11(木)19:15～第 2 回実行委員会〈海外組からのヒアリング〉
2/18(木)19:30～第 3 回実行委員会、2/24(水)19:30～第 4 回実行委員会
3/9(火)19:30～第 5 回実行委員会、3/16(火)19:30～第 6 回実行委員会
3/18(木)19:30～リハーサル（オンライン）、3/22(月)19:30～第 7 回実行委員会（兼 第 2 回リハーサル）
3/25(木)13:00～高等部にて対面リハーサル、
3/27(土)13:00～高等部にて直前リハーサル→15:30～IOM①本番

■First International Online Meeting 概要

テーマ…「コロナと共に生きる私たち　～ここでしか聞けない生の声～」
“Living with COVID-19　～High Schoolers' REAL Voices from all over the world～”
＜第１部 15:30~16:10＞
開会、各国の概要・文化・コロナの状況やそれに対する意見・学校の紹介
<第２部 16:10~16:00＞
自己紹介、互いの国への質問
グループセッション（「コロナが学校生活に与えた影響」をテーマに議論）
・グループ構成
日本人 9～10 人 ＆ 海外 5～6 人、TA（英語アシスタント）のグループ×約 19 グループ
・進行方法
日本側実行委員が各グループのファシリテーターとして司会進行
→必要に応じて TA の通訳サポートを受ける
＜第３部 16:00~16:30＞
グループセッションの話し合いの内容の共有、閉会式、記念撮影、アンケート

■一般参加者情報

・日本側 （WWL 連携校から募集）：計 183 名＋教員（見学のみ）
府立千里 1 名　白陵 1 名　畝傍 2 名　清風南海 2 名　賢明学院 3 名　市立西宮 3 名
関西学院千里国際 12 名　観音寺第一 14 名　兵庫県立国際 14 名　啓明学院 21 名　広島女学院 34 名
関学高等部 76 名
・海外側：計 103 人＋教員（見学のみ）…インドネシア、インド、エジプト、フィリピンの 4 カ国が参加

関西学院高等部 KWANSEI GAKUIN SENIOR HIGH SCHOOL　Classi

探究学習×ICTカンファレンス2021

GIGAスクール時代に考える探究学習の未来

開催形式
Web
セミナー
※学校での開催ではございませんのでご注意ください

2021.2.20 [SAT] 事前登録制

ICT環境の整備を追い風に
探究学習を前進させ、生徒の主体的な学びを実現する

この度、関西学院高等部とClassi株式会社で「探究学習×ICTカンファレンス 2021 ～GIGAスクール時代に考える探究学習の未来～」を開催する運びとなりました。

関西学院高等部は、「読書科」に代表される独自の探究学習カリキュラムをベースに、2018年度まではSGH指定校、2019年度からWWLコンソーシアム構築支援事業の拠点校として、新たな探究学習の形を目指し活動してきた学校です。探究学習を通じて、生徒達の学びに向かう主体性育成から学校としてのカリキュラム開発まで、改革を進めている学校です。

本研究会は、関西学院高等部を会場に昨年度開催し、好評につき、オンライン上で第２回目の開催となります。昨年度は現地開催のみでしたが、200人を超える参加者と関西学院高等部の先生方、４人の外部講師をゲストに招き、探究学習の一歩目を踏み出す機会となりました。

昨年度の声として多かった「探究学習を進める上での校内の組織体制」「生徒の課題意識をどのように深めていくか。学びにつなげるか」など、探究学習を始めるうえで課題に感じるポイントは、今回も継続したテーマとしています。更に今年度は、GIGAスクール構想等で加速度的に早まるICT環境の考え方や、活用ポイントも盛り込んだ内容となっています。

前半では、関西学院高等部の先生方によるWWLプロジェクト２年目の活動報告と実際に学習された生徒達の様子について、後半では、主催の関西学院高等部の「読書科」やWWLの取り組みはもちろん、全国で探究学習とICTについて実践されている3人の先生方も交えた分科会を、複数ご用意しています。

こんな先生におすすめです

- 探究学習を進めてきたが、上手くサイクルが回らない
- これから探究学習の一歩を踏みだしたい
- 新課程や総合的な探究の時間への対策について、自校にあった進め方のヒントを知りたい
- GIGAスクール構想を受けてICT環境は整えたものの、どのように活用を考えればよいか分からない

これから探究学習を始める学校、ICTを活用してより学びを深めようとしている学校の先生方や教育委員会の方々に、是非お越しいただきたい研究会です。

詳細・お申込み　https://classi.jp/event/accepting/post-3009/

お申込み締め切り 2.19 [FRI]

プログラム

15:00〜15:15	開催の挨拶 関西学院高等部 Classi 株式会社		
15:15〜15:50 ［セッション1］	関西学院高等部　探究学習実践報告 関西学院高等部　田澤 秀信先生、代表生徒		
	【テーマA】 探究 × プロセス評価	**【テーマB】** 探究 × 実践	**【テーマC】** GIGA 時代の ICT 教育
15:55〜16:25 ［セッション2］選択制	**［A-2］** 関西学院高等部 WWL 関連 3 科目の実践報告	**［B-2］** 関西学院高等部 読書科の実践報告	**［C-2］** 県立藤島高等学校様
16:30〜17:00 ［セッション3］選択制	**［A-3］** 長崎南山高等学校様	**［B-3］** 筑波大学附属坂戸高校様	**［C-3］** 関西学院高等部 ICT 担当部署より報告

講演者ご紹介（順不同）

関西学院高等部
副部長
田澤 秀信 先生　主催校代表 セッション1 講師

「探究学習の実践を通じた、学びに向かう力の育成と学校としてのカリキュラム開発」

SGH指定校からWWLの指定事業校として、4年前からICT活用と探究学習の実践に挑戦してきた、学校の中心的な先生です。現在は探究学習を通じたカリキュラム開発や評価手法など、組織的な動きへの挑戦から生徒主体の探究学習の仕組み作りを進めています。本会では、現在の取り組みの成果と課題点についてご報告いただきます。

福井県立高等学校藤島高等学
数学科・情報科
山谷 茂晴 先生　セッション2【C-2】講師

「公立高校におけるICT活用の考え方と探究・ポートフォリオ構想について」

今年の2月より1人1台端末が整備され、学校としてのICT教育の体制やルール作りを進められており、幅広いICTの知識と教育現場での運用視点を持ち合わせて、学校全体の設計をされている先生です。主にICT環境の整備とソフトの使い分けなど、ICT教育の全体感と探究学習やポートフォリオの将来構想についてご講演いただきます。これからICT整備がおこなわれる学校におすすめの内容です。

筑波大学附属坂戸高等学校
教務部・国際バカロレア部
本弓 康之 先生　セッション3【B-3】講師

「効果的な『総合的な探究の時間』の実践を考える〜自分の興味関心や強みを深め、進路に繋げるには〜」

2014年から5年間SGH指定校、2019年からWWLの指定校として探究的な学びを学校として推進されてきた学校です。その中で、学校全体として生徒達を探究的な学びに近づけるための仕掛け作りを担ってきた先生です。課題・テーマ設定のポイントや教員の関わり方などの探究全体の話から、消極的・無関心な生徒をどのように探究的な学びの方向へ向かわせるか？という、生徒の視点にたった実践事例をご講演いただきます。

長崎南山中学校高等学校
総合的な探究の時間委員長
徳田 憲一郎 先生　セッション3【A-3】講師

「探究学習とプロセス評価について」

昨年度から探究学習の実践を組織的に始めた学校です。1年目は長崎県内の地域課題について学びますが、2年目は課題設定を自由度高く設定し、生徒達の主体性育成を意識して取り組んでいる学校です。探究学習からポートフォリオ活用の設計まで中心として推進された先生にご講演いただきます。これから探究学習を進めていく学校やポートフォリオ活用について悩まれている学校におすすめの内容です。

開催概要

日時
2021年2月20日（土）15:00〜17:15

申込締切
2021年2月19日（金）18:00

開催形式
Web セミナー
※学校での開催ではございませんのでご注意ください

参加対象
全国の中学校・高校の先生、
各都道府県の教育委員会の方

定員
500名

参加費
無料（事前登録制）

主催
関西学院高等部、Classi 株式会社

お問い合わせ
Classi イベント事務局 event@classi.jp

お申し込みはこちらから
https://classi.jp/event/accepting/post-3009/

関西学院高等部 WWLC 事業 運営指導委員会・検証委員会

１ 実施日 ２０２１年2月２５日（木） １５：３０～１６：３０
２ 場所 関西学院高等部　高等部棟３階　会議室
３ 出席者
① 運営指導委員 浅野 考平（関西国際大学 副学長）
② 運営指導委員 坂西 卓郎（公益財団法人ＰＨＤ協会事務局長）
③ 運営指導委員 能島 裕介（尼崎市理事）
④ 運営指導委員 坂口 裕彦（毎日新聞社外信部 副部長）
⑤ 検証委員 泰山 裕（鳴門教育大学 大学院学校教育研究科 准教授）
⑥ 検証委員 梅本 貴豊（京都外国語大学外国語学部　講師）
４ 管理機関出席者
カリキュラムアドバイザー 時任 隼平（関西学院大学 高等教育推進センター 准教授）
５ 拠点校出席者

枝川 豊　（関西学院高等部 部長）
田澤 秀信　（副 部 長）
三木 真也　（教 諭）
西室 雅央　（教 諭）
原田 匠　（教 諭）
徳田 有希子（教 諭）
田中 章雅　（教 諭）
泉川 貴史　（教 諭）
上田 篤志　（教 諭）
山下 博信　（事 務 長）
中鶴 三奈　（事 務）

６ スケジュール
15:30～16:00 関西学院高等部の取組説明・意見交換
16:00～16:30 研究協議

【２月２５日（木）WWLC 事業　運営指導委員会・検証委員会　コメント振り返り】

泰山裕先生
・今後、総合的な探究の時間がカリキュラムに入ってきたときに、＜課題設定＞の難しさが出てくると思われる。
・学習指導要領にあるように、「自分の生き方、あり方」を探究する側面もある。「なぜ自分がこの問題に取り組むのか」など、社会問題を自分事としてとらえていくことができるような工夫も取り入れてはどうか。
・生徒にもっと主導権を与えていくのはどうか。自分たちが決めていく場面を増やすことで生徒自身の関わりも増え、教師の負担も減るのではないか。

梅本貴豊先生
・探究授業を受けたことで、他の教科の学びも変わっていくようなこともあればよい。
・異学年の学びは良い効果があるのではないか。良い支援となる。
・教師、生徒の負担感のバランスは考えながら。

坂口裕彦先生
・色々な姿勢、背景の人から多様な視点を学ぶ大切さ。
・デジタル時代だからこそアナログも大切に。
・世の中は二項対立ではなく、もっと多様であることを知る工夫。

能島裕介先生
・（他の教科の勉強に時間が割けないという生徒について）３度の飯を忘れても没頭するような探究であっても良いのでは。
・成績評価について、外発的な動機が内発的なものになるようであればよい。

坂西卓郎先生
・ロジカルな質疑が多く見られた。
・兵庫県立小野高校の Learning by Giving プロジェクト https://readyfor.jp/projects/ltg2020/announcements/147856 のように、大人が生徒を審査するのではなく、生徒が大人を審査するような主導権の渡し方があっても良いのでは。

浅野考平先生
・BASIC で前年の３５人が今年１５人になったしまったのは残念。プログラムを続けていく努力を。
・教師、生徒の負担もあるが、「良くなった」という良い波及効果にも目を向けて。
・活動を、学校全体に広げていく工夫を。

今年度の研究内容と評価の概要

研究内容１

1 年次は SGH から継続する GLP を「グローバル探究 BASIC」と改め続投。関心のある生徒を選抜し、知識の習得・活用・探究のバランスを考慮しながら、AI 活用・国際協働・ハンズオンラーニングの手法を用いた２年次の選択必修授業に向けて、探究授業の基礎を学ぶ。

また、第 1 学年全体を対象プログラムとして 3 学期に「ソーシャル探究」を行った。「グローバル探究 BASIC」受講者は学年末の発表会の司会を務め、各クラスの代表 9 グループと「グローバル探究 BASIC」の代表 2 グループは、学年全体の前でプレゼンテーションを行った。

《研究方法》

１.「グローバル探究 BASIC」のシラバス作成。

２．探究授業における評価の開発、実施。

３.「社会を知る」「社会の中の自己を知る」という目標を達成するために、フィールドスタディの実施。

４.学年全体の取り組みとして、ホームルームとコミュニケーション英語の時間を利用した「ソーシャル探究」を実施。個人・グループで様々な社会問題について調べ、その結果をクラス内、学年全体で共有した。

５．来年度に新規開講される「グローバル探究 A（AI 活用）」「グローバル探究 B（ハンズオンラーニング）」「グローバル探究C（グローバルスタディ）」の開発

＜研究開発の実施により明らかになったこと、および成果＞

１. 探究学習のプロセスである、【①課題の設定 ②情報の収集 ③整理・分析 ④まとめ・表現】のサイクルを、本校のカリキュラムと学習目標に適応したシラバスを作成することができた。

２．生徒の授業内/成果物に関する学びと思考を評価するルーブリックを作成することができた。
またそのルーブリックを用いて複数の教員が協働して評価にあたり、成績を算出するに至った。

３．学外の団体のご厚意とご協力により、学外の 6 か所においてフィールドスタディを実施することができ、生徒はその内 3 か所を訪問させていただき、3 か所はオンラインでお話を聞くことができた。

４.「ソーシャル探究」では、自分たちが学んできたことを誰かに伝えるという作業が自らの学びを振り返り、さらに深める意味でも大きな意味を持つ作業であることを再認識することができた。

５．新規開講科目のシラバス作成を通じて、「課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現」を繰り返す探究活動を基本としたカリキュラムが開発できた。

研究内容２

2 年次は必修選択授業のカリキュラムの中「グローバル探究 A（AI 活用）」「グローバル探究 B（ハンズオンラーニング）」「グローバル探究 C（グローバルスタディ）」を展開する。1 年次に「グローバル探究 BASIC」を受講した生徒に、一般生徒の希望者が加わり、学校として、学年として授業の中で探究授業が本格的に開始される。

《研究方法》

１．新科目「グローバル探究 A（AI 活用）」「グローバル探究 B（ハンズオンラーニング）」「グローバル探究 C（グローバルスタディ）」のシラバスの開発。

２．探究授業における評価の開発、実施。

３．来年度に新規開講される「AI 活用アドバンスド」「ハンズオンラーニングアドバンスド」「グローバルスタディアドバンスド」に向けた準備。

＜研究開発の実施により明らかになったこと、および成果＞

１．1 学期はコロナウィルス感染拡大による大幅なシラバスの変更を伴ったが、それぞれの科目において【①課題の設定 ②情報の収集 ③整理・分析 ④まとめ・表現】の探究サイクルを意識したシラバスを作成し、授業を展開することができた。

２．昨年度の「グローバル探究 BASIC」同様、上記３科目においても「生徒の成果物に関する学び/思考」と「生徒の授業内の学び/思考」についての評価を、ルーブリックを用いて行い、成績を算出することができた。

３．各科目を 2 名で担当することにより教科横断型の指導を行うことができ、また 1 年生の「グローバル探究 BASIC」の授業に各科目から数名ずつ参加するなど、異学年間の活動も行うことができた。

４．「WWL 連携校教員オンライン交流会」、「SDGs 生徒オンライン交流会」、「国際オンライン会議」といった、授業・学校・国の枠組みを超えた教員用の研修会や、生徒が主体となった活動を展開することが出来た。

５．各科目における成果ついては以下の通り。

「グローバル探究 A（AI 活用）」

・新型コロナウィルス感染拡大のため、オンラインでの授業等、制約を受けることも多々あった中、各学期 1 度以上のプレゼンテーションを行い、テーマに関するリサーチからそのまとめ、そして発表にいたるサイクルを行う機会を数多く持つことができた。

・関西学院大学にて AI を研究されている教授また大学院生、さらには AI の開発を行っている地元企業等、様々な方々を授業に招き、現場の声、専門家の声を聞く機会を持てた。

・10 人程度の比較的大人数でのグループワークから、4 人程度の小規模なグループワーク、また個人ワーク等様々な規模でのリサーチプレゼンテーションを行う機会を持ち、それぞれの場面でどのように協働するのが効果的なのかを考えるきっかけを作ることができた。

「グローバル探究 B（ハンズオンラーニング）」

・コロナウィルス感染拡大のために活動範囲が制限されながらも、Zoom を用いた講師による講義やインタビュー、近場の施設見学やインタビュー、業者さんとの交渉など、教室の外とつながる活動をある程度展開することができた。

・地図の作成という、目に見える形での成果物を得ることが出来た。

・エネルギーグループ、平和グループに分かれて、世界規模の課題をローカルな視点で自分事して捉える活動を続けたことを通して、来年度の活動において、クラス内で互いに自分の言葉で教えあうことのできる関係を構築することが出来た。

「グローバル探究 C（グローバルスタディ）」

・Zoom を活用し、フィリピンのローカル NGO のスタッフと 3 回のオンラインディスカッションを実施できた。温暖化に対する意識や、貧困・環境などのフィリピンの課題、それに対する解決策の提案など、国際交流や英語実践の意義を超えたディスカッションができ、深い学びを得られた。

・解決策の「実践」に先立ち、問題を「知る」過程を大切にした活動ができた。特に、温暖化について生徒が相互に「授業」を実施する経験を通じ、問題の構造を把握できたことで、経済とのつながりや様々なムーブメント、メディアや教育など、生徒個人の問題意識が広がった。

・「知る」過程から個々の関心の広がりを経て、最終的に実行できる実践を練り上げ、実施段階へとつなげられた。生徒個人のこだわりや想いを大切にしながら、ゴールや目標、そしてそれを具現化する手段など、常に一貫性を意識しながら計画を練ることができた。

研究内容３

3 年次は、SGH 実施期間の在籍生徒に対し、選択科目として、引き続き「グローバルスタディ（GS）Ⅲ」を実施。SGH で設定した、1 年次の「世界を体感する」、2 年次の「世界を学ぶ」というテーマを受けての 3 年次の目標「世界のために行動する」に沿って通信型 PBL 型授業を行う。海外の高校生とともに、共通する分野の身近な社会問題に対し、その状況や原因、背景などを分析し、そこから自分たちにできる解決策を立案し、実行することをサポートしていく。そのなかで、問題の分析や理解、チーム内での意識共有や役割分担、企画、広報、各方面との調整、実施、振り返りといった、社会で求められる実践的なスキルを養う。

《研究方法》

クラスを 9 つのチームに分け、インドの高校生とチームを組み、zoom によるオンラインディスカッションを通じて、身近な社会問題の解決・改善実践に取り組む。

＜研究開発の実施により明らかになったこと、および成果＞

１．問題解決のための具体的な行動を通して実践的なスキルを養うという GSⅢの目標は、コロナ禍で制約が多く、これまでのような対外的な実践はできなかったため、達成できたとは言いがたい結果となった。それでも、市役所に連絡したりカフェを紹介する動画を作成したりするなど、可能な範囲で実践できたことは、生徒にとって達成感や手応えにはなっていた。

２．今回の通信型授業のパートナーは、これまで連携したことのないインドの高校ということで、英語コミュニケーションやプログラムに対する思惑や意識共有など不安要素もあった。そのため、zoom のセッションを、間隔を置いて実施し、日印双方が内容を吟味・準備する時間を確保して進めた。実践的な英語コミュニケーションの機会は減ったが、その質はむしろ高まり、生徒の成長が見られた。

３．これまでの通信型 PBL 授業の課題であった、双方向性の欠如(両国の高校生が自国での活動に終始してしまい、互いに影響し合う要素が薄れる)を改善するため、今回は双方が自国の社会問題を提示し合い、それに対する解決策を考えて提案し合うというプロセスを組み込んだ。これにより、相手国の問題だけでなく、自国のことにも関心を持つ(双方のいいところに着目できるなど)ことができ、上記 2.の対策もあって、問題に対する理解はこれまで以上に深められた。

【研究内容１の具体的な内容とその評価】

探究型カリキュラムの開発のために＞

科目	グローバル探求 BASIC	学年	1	単位	1	※受講人数は 15 名
活動の目標	１．社会を知る 自分の周りの世界で何が起きているかについて、生徒が語ることができる ２．社会の中の自己を知る 自分の周りの世界に自分がどう関わっているか、接点を持っているかについて、生徒が語ることができる。					
教材	学びの記録・iPad (Classi / ロイロノート)・ビデオカメラ・マイク・マナボード・ホワイトボードペン・付箋・模造紙					
留意点	１．テーマ設定などについて、生徒たちが自分で決められるように教員は留意する ２．フィールドスタディ、得られる知見などが予定調和にならないように教員は留意する					

＜スケジュール＞

・詳細の年間スケジュールについては、資料１参照。

(今年度は 4 月開講の予定であったが、コロナの流行により、昨年度と同じ、9 月からの開始となった)

・授業は 60 分授業 / 毎週金曜日の放課後 15:45-16:45

第１フェーズ：知る SDGs/自分の関心/生の声/仲間/授業形態などを「知る」 【課題の設定】	①9/9	・ガイダンス：「学びの記録」の記入方法 ・SDGs のランキング作成
	②9/16	SDGs カードゲーム「×（クロス)」
	③9/23	日本の貧困問題　外部講師　能島 裕介 氏
	④10/7	世界の貧困問題　外部講師　坂西 卓郎 氏
第２フェーズ：探る 自分の関心/フィールドスタディ(FS)先の活動や課題/観点と問い/FS 先の生の声を「探る」 【課題の設定】 【情報の収集】 【整理・分析】	⑤10/21	・生徒たちが関心のある分野の企業調査 ・フィールドスタディのグループ作り
	⑥10/28	・フィールドスタディ先候補２つについてグループ発表（２分間） ・訪れたい FS 先の投票
	⑦11/11	フィールドスタディにおける学びの手法「観点と問い」の理解
	⑧11/18	フィールドスタディ先についての知識の整理と「観点と問い」の作成
	⑨11/25	フィールドスタディ先についての「観点と問い」の作成の続き
	FS12/7-10	フィールドスタディ(第３の居場所、晴れる屋食堂、UFJ、UNICEF、UCC、水道技術センター)
	⑩12/09	・フィールドスタディのまとめ（６つの観点）の指示 ・アクションプランについて考えるための大学生による講義
	⑪1/13	・中間発表に向けて、６つの観点を５つの観点に落とし込む活動 ・中間発表時に用いる「生徒相互フィードバック表」「教員による評価」の観点の説明
	⑫1/20	フィールドスタディについての中間発表
	⑬1/27	再解釈と再構築１　他グループの発表を見て評価・フィードバック
第３フェーズ：共有する 中間発表・最終発表を通じて学び/発見/課題/アクションプランを共有する 【整理・分析】 【まとめ・表現】	⑭2/3	再解釈と再構築２　フィードバックを参考に最終プレゼンへの準備
	⑮2/24	最終発表（６グループ） Ｇ１　日本の子どもの貧困　　Ｇ４　ジェンダー平等 Ｇ２　世界の子どもの貧困・教育系　　Ｇ５　安全な水とトイレを世界中に Ｇ３　世界の絶対的貧困　　Ｇ６　日本の子どもの貧困・ごはん系

＜各フェーズの 1.目標 2.具体的活動 3.活動の評価方法 4.検証 5.今後改善すべき点について＞

第 1 フェーズ：【課題の設定】

1. このフェーズでの目標

目標 1）生徒たちが、SDGs が身近な問題であり、自分たちの生活に結び付けていくことが大事だと大体説明できる。

目標 2）生徒たちが、SDGs の問題が社会でどのようなことが起こっているかを具体的な例を挙げて説明できる。

目標 3）生徒たちが、自分の関心のある社会的課題についてある程度説明できる。

目標 4）生徒たちが、協働するグループワークなどに積極的に参加し良い授業の雰囲気をつくることができ る。

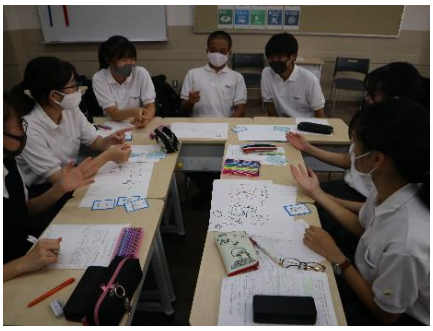
目標 5）生徒たちが、学びの記録ワークシートのねらいを理解して記入ができる。

2. 具体的な活動

① 9/9

「学びの記録」（資料２参照.）の記入方法の説明を通して、ここで大切にされる「学び」とは何かについて理解する。SDGs の基礎知識や考え方を習得するために、SDGs カードを用いて各 SDGs の個人ランキング作成後、グループで理由とともに共有し、その後改めてグループワークでランキングを再作成。それを裏付ける情報を検索した後、希望者はクラス内で内容を発表し、質疑応答をして情報収集における注意点を確認した。

② 9/16



はじめに、前回の学びの記録のフィードバック（以後、毎回行う）を通して他のメンバーの考え方を知る機会とした。続いて金沢工科大学が作成した SDGs カードゲーム「×（クロス）」を用いて SDGs の問題をより具体的に考える機会とした。ゲームという特質上、まだ慣れないメンバー同士も互いに意見を言い合いやすい雰囲気づくりができた。ゲーム内では、現実にぶつかり得るトレードオフという概念を学ぶことで、問題の複雑さについて理解を深めることができたとともに、SDGs が自分たちの生活と深く関わるものであることを学んだ。

③ 9/23

日本の貧困と教育に関する問題に関して現場で携われている講師（尼崎市理事能島裕介氏）を招き、実際の活動事例を学んだ。経済格差についての現状やその原因について様々な問いをクイズ形式で各々考えたり、ペアで相談したりしながらそれに答えるという形で講義をして頂いた。その後、日本における子どもの相対的貧困の原因についてグループワーク（マナボートと付箋を用いてグルーピング/ネーミング）を行った。できたボードの写真を撮り、ロイロを使用して全体で共有した。最後に、能島さんのお考えや実際の活動を、貧困の連鎖というキーワードを用いてご紹介頂いた。

④ 10/7

世界の SDGs 課題に具体的に取り組んでおられる講師（財団法人 PHD 協会事務局長 坂西卓郎氏）を招き、実際の活動事例を学んだ。海外における子供の貧困(絶対的貧困)や人種差別・性差別の問題について、現状についての様々なお話を聞くとともに、活動の中で抱いておられる坂西さんの想いについても知ることができた。グループワークでは、なぜ坂西さんが世界の問題に取り組んでおられるのかについて考えたり、本日までの学びを踏まえて現段階で自分が最も気になっていて関わってみたいと思っていることについて共有したりした。

3. 活動の評価方法

・①9/9 ②9/16 は体験授業のため､｢学びの記録｣以外に Classi の振り返りで感想や授業内容のまとめを書かせた。これらを受講メンバー選定の参考とした(資料３)。

・「学びの記録」については①から評価を開始。毎回授業後に回収し、次の授業のはじめに良いものを抽出して紹介するなどしてフィードバックを試みた。

・「学びの記録」のルーブリックは下の通り。

	新しい事実・知識の量/質とその整理	他者や自分の主張の量/質とその考察
A	新しい事実・知識の量/質が十分で、自分の観点を持ってしっかりと整理されている。	他者や自分の主張の量/質が十分であり、他者と自分の主張/事実・知識と主張とが有機的につながり、考察までに発展した記述が多く見られる。
B	新しい事実・知識の量/質がある程度あり、ある程度の情報のまとまりになっている。	他者や自分の主張の量/質がある程度あり、他者と自分の主張/事実・知識と主張とをある程度つなげて考察まで発展した記述が見られる。
C	新しい事実・知識の量/質が不十分で、内容の整理がなくそのままの羅列となっている。	他者や自分の主張の量/質が不十分で、考察が見られない。

4. 検証

目標の達成度・課題

・目標 1)2)について

この授業を受講するメンバーは、基本的に社会問題に関心がある者が多いような印象を受ける。しかし元は漠然としていた問題意識が、SDGs について自分ごとへの置き換え、国内外を含めた現場からの様々な具体的情報の獲得、興味のある問題や関連団体の調査・発表、メンバー同士での様々な話し合い等を通してより具体的な問題把握と興味関心の発見につながったことが、毎回記載する「学びの記録」の内容の深まりから読み取れる。

・目標 3)について

本来ならば昨年度よりも授業回数を増やし、ゲストスピーカーに関わりのあるテーマを昨年よりも広げたり、生徒たちが自分の興味のある社会的課題について幅広く深く吟味するための調査の時間を増やしたりする予定であった。しかし、コロナの流行により昨年度と同じ時期の開始となり、それが叶わなかった。取り組んだ事柄についてのある程度の説明は可能であるが、今後は可能であれば課題設定を充実させたい。

・目標 4)について

生徒たちは体験授業の期間中から全体の場で躊躇せずに自ら意見を発しており、ペアワークやグループワークともに、初対面のメンバーであったとしても積極的に意見交換をできていたことがわかる。学びの記録には、他のメンバーとの意見のやり取りの中で気づいた事柄についての記述が多くみられ、互いの学び合いの中で様々な思

考をしていた跡が見られる。男子の数が少ないこともあり、男女で自然に分かれて着席し、そのままペアワークも分かれてしまう場面が見られたため、自然に混ざって座れるようなこちらの工夫も必要であると感じた。

・目標 5)について

生徒たちは、当初は「学びの記録」の書き方になれず、うまく意見を書き切れていない者も散見されたが、各授業の最初に、前回の記録の良かったところや書き方の注意点について具体的に取り上げて説明したところ、どのメンバーも自らの気づきや考え方そのものの変化に敏感になり、一見抽象的な事柄についても的確に言葉で表現できるようになっていった。もちろん人によってまとめ方の差はあるものの、大切なのは自らの創造的な思考そのものであることへの気づきは得られているように思う。課題としては、話し合いの最中にも記録を書くことに意識が向いてしまう場面があることと、学びの記録を授業時間内に書き切ることの難しさがある。また、こちらの細目なフィードバックは、受講人数が少ない今年であれば可能であるが、評価に時間がかかるため、大人数を相手にする場合は難しくなるという問題点がある。

・まとめ

今年度は BASIC の授業は 2 年目ということもあり、昨年度の経験を活かしながら取り組むことができた。時間的な問題から、ゲストの分野を広げられなかったことと生徒個人の課題設定にかける時間を増やせなかったことが課題として残ってしまった。しかし、「学びの記録」については毎回詳細なフィードバックを行うことができ、生徒が他のメンバーの意見を知る機会を増やすことによって新たな意欲につなげるとともに、自らの思考を客観化することにもつながったのではないかと考えている。

5. 今後改善すべき点について

・来年度からは授業時数も増えるため、生徒が具体的に知る社会問題の幅を広げ、教育・貧困のテーマに偏らないように学びの機会を増やす。

・得られた情報を自分の中に落とし込んで課題設定をするところにもう少し時間をかけ、じっくりと自らの興味と向き合ったり、社会課題同士が複雑に関わり合っていることに具体的に気づいたりする機会を増やす。

（例えば夏休みを利用してニュースを調べて深く考えるような課題を設定するなど）

・「学びの記録」のフィードバックは良いところを褒めることが中心となりがちであるが、もう一段思考を深めてほしい部分についてもう少し具体的に伝えることができれば、苦手意識を持っている生徒の力を効率的に伸ばすことができるのではないかと考える。

第２フェーズ：【課題の設定】【情報の収集】【整理・分析】

1. このフェーズでの目標

目標 1）生徒たちが、自分の関心のある社会的課題についてある程度説明できる。

目標 2）生徒たちが、地域（ローカル）の実社会で活動されている方々やその団体の取組や課題をフィールド スタディ（FS）を通じて、語ることができる。

目標 3）生徒たちが、FS で用いる学びの手法を使って「観点と問い」を作成し、インタビューや聞き取りをすることができる。

目標 4）生徒たちが、社会との接点を自ら作り出す楽しさについて語ることができる。

目標 5）生徒たちが、FS の経験で得た学びを、アクションプランにつなげるイメージを持つことができる。

2. 具体的な活動

⑤　10/21

・事前に出されていた宿題は以下の通り。

「SDGs の中で自分の関心のあるテーマをしぼり、その課題解決に取り組んでいる団体の中で自分が FS で訪れたい団体２つを紹介し、その理由をまとめる。それらについて２分で発表を行うために、ロイロノートで発表資料を作る。また、発表資料ついて調べたことを学びの記録にまとめておく」

・上記宿題について、各自が２分の発表を行った。聴く側は「関心チャート」（資料５参照.）を用いて、 他者の関心と自分の関心とが重なる部分を探した。同じ関心をもつ者同士がお互いに声を掛け合い、グループを作成。結果、６グループが出来上がった。

⑥　10/28

・事前に出されていた宿題は以下の通り。

「グループとして訪れたい FS で団体２つ（関学から１時間ほどで行ける距離）を調べ、その理由をまとめる。それらについて２分間で発表を行うために、ロイロノートで発表資料を作る。」

・上記宿題について、各グループが２分間の発表を行った。聴く側は「フィールドスタディ先候補シート」を用いて、自分が FS で 訪れたい団体に投票を行った。

・最終的に FS 訪問先となった団体は以下の通り（敬称略、順不同）。

大阪ユニセフ協会 / 第３の居場所(日本財団)/ 晴れるや食堂 / UCC / UFJ 銀行/ 水道技術研究センター

⑦　11/11

生徒が FS という学びの手法について理解するために、インタビューや聞き取りを行う際に用いる「観点と問い」というフレームの概念について学びを深めた(資料６)。生徒たちは５分ほどのモデルスピーチを２回にわたって「観点と問い」がない場合とある場合とでメモを用いて聞き取り、ある場合の聞き取りやすさや内容の深まりをグループワークの中で実感した。良い聞き手とは、入念な下調べに基づいた予備知識を持っていて、事前に自分の中で聞きたいことが整理されている人であることを生徒と確認した。生徒は「学びの記録」を用いてこの活動を行った。

⑧　11/18

生徒たちは各グループに分かれ、訪問先に関して収集してきた知識を模造紙１枚にまとめると共に、授業⑦での学びを生かして「観点と問い決定シート」（資料７参照）を作成した。「観点と問い」についてはグループごとに教員に発表をし、その都度フィードバックやアドバイスをもらい、何度も修正を行った。

⑨　11/25

・課題として、「授業⑧中にまとめきれなかった訪問先に関してまとめた模造紙を完成させておく。」を出した。

・授業⑧に引き続き、「観点と問い決定シート」の内容を深める時間をとった。

・自分たちが担当する FS 以外で訪れる団体１つを挙手で決定した。(必ず１つはオンラインではなく実際の訪問を含む。また、希望者は何か所でも訪問可能とした。)

<u>フィールドスタディ実施</u>

・授業⑨で「観点と問い」を作成しきれなかったグループは空き時間に教員のチェックを繰り返し受けた。

・各グループに教員１名引率。オンラインも同様。WWL 選択授業を受講する２年や他の教員も参加可とした。

・集合時間/行き方/模造紙の内容/観点と問いについては、各グループがロイロノートを使って他の FS 参加メンバーに事前に伝達。

・訪問後はお礼状を郵送。

⑩　12/11

・以下の６つの観点に従って、生徒たちに FS で得た情報をロイロでまとめることを冬休みの宿題として指示した。

観点 1)フィールドスタディで再確認できたこと

（インターネットや著書を通じて既に知っていたことを直接現場で確認できたこと）

観点 2)フィールドスタディで新しく知った知識

観点 3)フィールドスタディだからこそ分かった現場の人たちの考え（想いや信念等）

観点 4)フィールドスタディだからこそ分かった現場の人たちが向き合っている課題

観点 5)フィールドスタディに参加する前に自分たちがもっていたイメージで参加したことによって変わったこと

観点 6)フィールドスタディ先の現場の人たちが向き合っている課題に対して，高校生である自分たちができること

・FS で学んだことからアクションプランを考えるきっかけとするために、関西学院大学国際学部の学生が福島での FS を基に起こしたアクションについて講義を行っていただいた。自分たちが経験で得た学びをどのように実践につなげるか、生徒たちは「学びの記録」に考えを記入した。

3．活動の評価方法

・⑤10/21 の「関心チャート」 ⑦11/11 の「学びの記録」を回収し、教師が内容を評価。

・「関心チャート」と「学びの記録」のルーブリック（フェーズ１と同様）

	新しい事実・知識の量/質とその整理	他者や自分の主張の量/質とその考察
A	新しい事実・知識の量/質が十分で、自分の観点を持ってしっかりと整理されている。	他者や自分の主張の量/質が十分であり、他者と自分の主張/事実・知識と主張とが有機的につながり、考察までに発展した記述が多く見られる。
B	新しい事実・知識の量/質がある程度あり、ある程度の情報のまとまりになっている。	他者や自分の主張の量/質がある程度あり、他者と自分の主張/事実・知識と主張とをある程度つなげて考察まで発展した記述が見られる。
C	新しい事実・知識の量/質が不十分で、内容の整理がなくそのままの羅列となっている。	他者や自分の主張の量/質が不十分で、考察が見られない。

４．検証

目標の達成度・課題

目標 1) 生徒たちが、自分の関心のある社会的課題についてある程度説明できる。

目標 2) 生徒たちが、地域（ローカル）の実社会で活動されている方々やその団体の取組や課題をフィールド スタディ（FS）を通じて、語ることができる。

目標 3) 生徒たちが、FS で用いる学びの手法を使って「観点と問い」を作成し、インタビューや聞き取りをすることができる。

目標 4) 生徒たちが、社会との接点を自ら作り出す楽しさについて語ることができる。
目標 5) 生徒たちが、FS の経験で得た学びを、アクションプランにつなげるイメージを持つことができる。

・目標 1) について、個人発表とグループ発表を通して、生徒たちは自分の関心のある社会的課題について調査し、周囲へ自らの思いとともに伝える機会を持つことができた。また、それに取り組む具体的な団体を調査し、選定していく上でも、再度自らの課題への関心の方向性を確認できたと考える。発表時には他の受講生や教員からの質問が多く寄せられたため、表面的な知識だけではなく、自らの考えを整理して一度自分の中に落とし込む必要があった。このことから、目標はおおむね達成されたと考える。しかしながら、準備の時間をさらに充実させることができれば、より自らの関心に近く、有用な情報を集めやすい団体を見つけることも可能であろうと思うし、それまで意識していなかった社会的課題に新たに気づくこともできたかもしれない。調査時間は十分にとる必要があることをここでも改めて感じた。
・目標 2)3)について授業⑦⑧⑨において、自ら発見した自分の自然な関心に、実際に社会で取り組んでおられる団体を探してその取り組みをまとめる模造紙の作成、その団体にインタビューを行うための「観点と問い」の作成、それらのまとめをポスター発表風に教員に説明するなどの活動を経て、概ね達成することができたと考える。また、単に訪問して話を単調に聞くのではなく、こちら側に確かな問題意識と調査したい事柄を明確にするための準備の中で、より訪問団体についての知識と自らの関心との接点について理解を深めることができた。これについては「学びの記録」の生徒自身記述から読み取ることができる。ただ、生徒たちが模造紙のまとめを仕上げるのに想像以上に時間がかかってしまい教員や全体の前で訪問先についての発表を行うことができなかったのが反省点である。訪問時には、用意していった問いはもちろん、その場で頂いた回答に対してもさらに深める質問をできており、訪問先の方々の思いまでしっかりと聞き出せていたグループが多かった。また、自分の担当ではない訪問先に行った生徒たちも、問いを準備するなど積極的にインタビューや聞き取りを行えていた。
・目標 4)について、今年度は事前に生徒自身から訪問先へ連絡することはしなかったが、訪問直前に手土産をどうやって渡そうかとあたふたしており、訪問時の挨拶から最後の感謝を伝えるときなど、学校生活の中では味わえない新鮮な緊張感を味わっている様子であった。また、インタビュー時の言葉の使い方や、訪問後の行動一つ一つの選択を、迷いながら考えていた。と同時に、それらを無事に終えられたときには安堵感に包まれており、社会との接点を自ら作り出す楽しさを感じ互いに共有していた様子が見て取れた。それらについて語る場面を具体的に設定することはなかったが、学びの記録や中間発表、最終発表の中でそれと受け止められる表現が散見されることから、ある程度達成できているのではないかと考える。ポートフォリオのルーブリックとして、それを確認できる明確な記述を用意しておいても良いのかもしれない。
・目標 5)については、グループによって大きな差が出たと考える。例えば子ども食堂を訪問したグループは、実際に目の前の子どもたちが遊ぶ道具や文房具が足りていないことを確認でき、なんとかしたいという自然な思いを抱いたため、訪問先の責任者の方とその場で必要な内容を相談し、学校全体を巻き込んで多くの寄付を集めることに成功した。しかし、オンライン訪問のグループはやはり実際に訪問したグループよりも相手の置かれている具体的状況のイメージがつかみにくいこともありアクションについてのイメージがややぼやけたものとなっていた。また、オンラインという状況に加えて UCC や UFJ などの大きな企業、あるいは水道技術センターなどは、インタビューで相手の状況や考え方を聞き出したり吸収したりすることに終始しがちで、具体的なアクションを考える段階になかなか至らなかったように思う。つまり、アクションプランを実際に練られたかという点では課題が多いが、アクションプランにつなげるイメージを持つという意味では、例えば授業⑩で大学生から具体的な話を聞く中で多くのヒントを得られたであろうことが、学びの記録から読み取れる。

・まとめ

【課題の設定】【情報の収集】【整理・分析】という観点からこの第２フェーズを整理する。 【課題の設定】については、フェーズ１からの引き続きで、自分の FS 先を決める授業⑤⑥を用いて行った。自分自身の興味から調査を始め、その調査に最適な訪問希望の団体を選定していったことで、自らの心の内に感じている SDGs の関心度に自然に合わせた訪問先を選定することができた。昨年度の課題であった、その訪問先を取り巻く社会的なニュースや知識を得るといった下調べの時間については、今年もコロナの影響により時間を増やすことがどうしても難しかった。来年度こそ、授業⑤⑥辺りの作業時間を増やして丁寧に行い、より自分たちの関心に沿った訪問先を見つけることができれば良いと考える。【情報の収集】について、社会で「思い」をもって活躍されている方々と直接に出会い、話を聞くことのできる FS は大変有効であったと考える。FS に向けては事前に、ただ無目的に話を聞くというのではなく、こちらの「聞き方」について学んでから臨んだため、訪問先について、情報をより丁寧に調べる動機付けとなった。生徒たちが主体的に自分たちで必要な知識や問いを収集し、アクションプランを練るに当たって自分たちなりの答えを求めて探求を進められたという点では、このフェーズ２における目標はおおむね達成できたと考える。

５．今後改善すべき点

・発表の技術的指導ついて丁寧に伝える機会を作ると良いと考える。
・個人やグループ発表の際、聞く側の生徒は、後で回収する「学びの記録」等では鋭い疑問点などを書けてはいるが、実際には手を挙げて質問をしていない場合が散見された。自信を持って挙手・発言していく経験をさらに重ねていく必要がある。
・今年度の受講生はのんびりとした生徒が多く、訪問先の調査、「観点と問い」の決定などに授業時間外でかなり時間を必要とした。前年度のスケジュールを参考にしながら予定を組んでいるが、学年や受講生徒によって作業のペースは異なるため、早めに生徒たちの特性をつかんで時間設定や声かけに工夫をする必要がある。時間が予定より多くかかってしまった結果、観点と問いについて、模造紙を使ってのクラス内共有の時間が取れなかった。作業に集中させるために「学びの記録」を書く機会を減らしたこともあるが、生徒の学びの変化を丁寧に把握するためには、これはあまり良いとは言えない。
・生徒からフィールドスタディ先への直接連絡については、メールを中心とするやり取りが多かったことや、コロナによる急な対応を迫られるなどの時間的余裕のなさ、あるいは生徒対応によって相手側に余分にかかる負担を考えた結果、今年は敢えて行わせなかった。生徒が戸惑いつつも直接に社会の方と連絡を取ること自体はとても大きな学びとなると考えるので、今後は可能な範囲で生徒に手続きをとらせる方策を考えたい。
・コロナの感染拡大期に実施したフィールドスタディであったため、実際の訪問をさせて頂くかどうか判断に迷うことがあった。受け入れて頂いたとしても、子ども食堂などは共に食事にあずかって良いものかどうか、最後まで心配が残った。
・コロナの感染拡大とともに普及したオンライン通信という手段により、今回は生徒が希望してきた団体が関東であったが（水道技術センター）容易につながることができた。実際の訪問に変えられない経験というのはあるものの、オンラインで、平常時よりも訪問場所の可能性が広がった。今後、事態が改善したとしても、オンライン訪問の可能性は残しておいても良いと考える。

第３フェーズ：【整理・分析】【まとめ・表現】

１．このフェーズでの目標

目標 1）生徒たちが、観点１～５に従って、FS 先で学んだことを内在化して、発表することができる。

目標 2）生徒たちが、観点１～５に従って、ロイロノートやパワーポイントを用いて発表することができる。

目標 3）生徒たちが、「社会を知る」「社会の中の自己を知る」という点について学んだ実感を得て、これから社会で起こしていく方向性を考えることができる。

目標 4）生徒たちが、この探究授業を通じて、学びに対する自分の意識の変化について言語化でき、学びの過程で生じた問題点についてどう克服しようとしたかを認知できる。

２．具体的な活動

⑪ 1/13

生徒たちは、翌週の中間発表に向けて、冬休みの宿題であった６つの観点で整理した FS のまとめを、以下の５つの観点にロイロノートにまとめた。

観点 1)FS 先の活動概要

観点 2)自分たちの観点と問い

観点 3)FS で直接確認できたこと（相手のリスポンス、直接見たこと）

観点 4)現場の人たちはどのような課題をどのように語っていたか/それを聞いてどう思ったか

観点 5)高校生である自分たちが当該テーマについてできること

・具体的にどのようなことならできそうか

・それが実現可能な根拠

⑫ 1/20

はじめに、中間発表時に用いる「生徒相互チェック表」（資料７参照）の使い方を説明した。このチェック表は、生徒がお互いに発表を評価するのが目的ではなく、その発表をどのように聞き手がとらえたかを教員がチェックする表であることが目的であることを説明した(資料８)。また、このチェック表を用いて教員が中間発表を評価する旨も伝えている。なお、このチェック表の観点は以下の通りである。

観点 1) FS 先を訪問するにあたって目的意識がはっきりしているかどうか。

観点 2）施設設立の目的や今抱えている問題点について理解することができているかどうか。

観点 3）次のステップに向けたアクションプランに関して適切なビジョンを持てているか。

その後、発表の際、気を付けることや心構えについて説明した。

・教室を２つに分け、６グループによる発表を行った。

・発表は１２分間、質疑応答は１０分間、ロイロノートを発表資料として使用。あ

・生徒たちは、「中間発表用 生徒相互チェック表」を用いて発表を聴いた。

グローバル探求 BASIC　中間報告会(1/20)　振り分け

	@ディスカッション１ 徳田	@第３プレゼン 泉川
	①15:15-15:40	
テーマ	G1： 日本の子どもの貧困チーム	G2： 世界の子どもの貧困・教育系
パネリスト	遠山、逸本	橋本、藤井
オーディエンス	G3、G5	G4、G6
	②15:45-16:10	
テーマ	G3： 世界の絶対的貧困	G4： ジェンダー平等
パネリスト	曽木、堀田、小竹	長田、大野
オーディエンス	G1、G5	G2、G6
	③16:15-16:40	
テーマ	G5： 安全な水とトイレを世界中に	G6： 日本の子どもの貧困・ごはん系
パネリスト	北内、宇野、加藤	細見、中井、松本
	G1、G3	G2、G4

○すべての発表を動画撮影します。
○次回の授業（1/27）では、他グループの発表を動画で見返しながら振り返り（再解釈・再構成）
　→自グループの発表動画を見ての振り返りは 2/3 までの課題
　→2/3 の授業では、各自で行った自グループの振り返りを持ち寄って、最終発表（2/24）の準備をします

⑬ 1/27

・ロイロノートの資料箱にアップされた中間発表動画を見ながら、「中間発表 振り返りシート【再解釈と再構築】」（資料９参照）を用いて、観点３つにフォーカスして発表を見直す活動を行った（評価するグループはこちらが指定・グループメンバーは同じ対象を評価）。ワークシートを埋めていきながら、それぞれの観点がどうだったか、自分の意見、グループの意見を共有していき、良い発表やそうでない発表の共通点などを明らかにしていくねらいであった。他グループ評価を行うのに想定以上の時間がかかってしまったが、どうしても意見の共有をしたかったため、時間を延長して行った。

・その後、自分たちが評価したグループに対する教員による「中間発表のフィードバックシート」を配布し、内容を確認。個人ワークで出た意見を共有し、自分たちの発表で生かせる点について話し合い、マナボードにまとめ、各グループ１分ずつ、希望者から前に出て発表した。最後に、自グループに対する教員からのフィードバックシートが返された。

・宿題として、ロイロノートにアップされている自分のグループの動画と教員による「中間発表の評価」を見ながら、「振り返りシート」を用いて自分のグループの発表を見直し、良い点や悪い点をワークシートに整理するよう伝えた。

⑭2/3

・宿題で記入してきた「中間発表 振り返りシート【再解釈と再構築】」を用いて、各グループで観点５つについて見直し、自分たちの発表で生かせる点について話し合った。

・ワークシートに基づいて、各グループでパワーポイントの作成を開始した。

・Classi のアンケート機能を用いて、この１年間の学びに対する以下の２つの質問を配信。同時にルーブリックも提示した。

設問 1 【意識の変化について】 他の班のプレゼンや先生方からのアドバイスに対して「ここまでを目指さないといけないのか！」「なるほど、思っていたのと違う！」と活動内容そのもの や、活動の目的に関して「はっ」とさせられたこと、考えさせられたことを書きましょう。

（４００字を目安に）

設問 2 【問題点の克服】 現状の問題点を把握した時に、自分なりの解決方法とはどのようなもの でしょうか。まずは、取り組みの中で「問題点」となっていることを挙げ､それに対して 自分がどのように工夫して克服しようとしたか、しているかを書きましょう。（４００字を目安に）

⑮ 2/24

・視聴覚教室にて、６グループによる発表を行った。

・発表は１２分間、質疑応答は１０分間、パワーポイントを発表資料として使用(資料１１)。

・2 年生必選 WWL3 科目受講生の中から 10 名ほど、質問者として参加した。

・生徒たちは、「最終発表用 生徒相互チェック表」を用いて発表を聴いた。中間発表時の観点は３つであったが、最終発表時は以下の５つの観点を用いてチェックが行われ、教員もこれに従い発表を評価した。

観点 1) FS 先を訪問するにあたって目的意識がはっきりしているかどうか。

観点 2) 施設設立の目的や今抱えている問題点について理解することができているかどうか。 観点 3) 次のステップに向けたアクションプランに関して適切なビジョンを持てているか。

観点 4) 視覚資料に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。

観点 5) 発表の仕方に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。

3. 活動の評価方法

■⑫の「中間発表 生徒相互チェック表」を回収し、教師が内容を採点した。

「中間発表 相互チェック表」の評価のルーブリック

	観点ごとのチェック/知識や考えの深まり	発表者のFS先の情報に対する自分の気づき
A	発表の内容に即した観点ごとの深い気づきや疑問が記述されている。	FS先に対する自分の考えと、発表の内容から得た情報とが、つながりを持った深い「気づき」として記述されている。
B	発表の内容に即した観点ごとの気づきや疑問が、やや短絡的、表層的である。	気づきや感想がやや短絡的、表層的である。
C	発表の内容に即した観点ごとの気づきや疑問があまり記述されておらず、短絡的、表層的である。記述の多くが発表の内容のみである。	気づきがあまり記述されておらず、気づきや感想が短絡的、表層的である。

■ ⑫の１０グループの中間発表を動画で見直し、以下のルーブリックで評価。また、それぞれの観点別にスライドごとにコメント、フィードバックの総括コメントも追記して返却した(資料１２)。

観点❶　FS先を訪問するにあたって、目的意識がはっきりとしているかどうか。	
A（６点）	どのような問題意識（きっかけ）でFS先を選定したのか、訪問の目的（何を知りたかったか）が明確である。
B（４点）	FS先についての情報は明確に調べてあるが、問題意識との関係や訪問の目的との関係が見えにくい。
C（２点）	FS先についての情報が調べてあるだけで、自分たちが何を解決しようとして訪問したのかに触れていない。

観点❷　施設設立の目的や今抱えている問題点について理解することができているかどうか。	
A（６点）	現場の人たちの持つ「課題」について、現場の人たちが具体的に「何を語ったか」が明確である。
B（４点）	現場の人たちが持つ「課題」について説明できているが、現場の人たちの「声」が見えにくい。
C（２点）	FS先の人たちの大変さについて訪問者として感想を述べているだけである。

観点❸　次のステップに向けたアクションプランに関して適切なビジョンを持てているか。	
A（６点）	当該テーマについて何ができるのかが具体的であり、それが実現可能であることを証明できている。
B（４点）	当該テーマについて何ができるのかが具体的に示さされているが、それが実現可能であることが証明できていない。
C（２点）	何ができるのかが抽象的であり、それが該当テーマとどう関連しているのかがはっきりしていない。

■授業⑭の後に、Classi のアンケートを配信し、以下のルーブリックで評価。

【意識の変化について】 他の班のプレゼンや先生方からのアドバイスに対して「ここまでを目指さないといけないのか！」「なるほど、思っていたのと違う！」と活動内容そのものや、活動の目的に関して「はっ」とさせられたこと、考えさせられたことを書きましょう。（４００字を目安に）	評価	【問題点の克服】 現状の問題点を把握した時に、自分なりの解決方法とはどのようなものでしょうか。まずは、取り組みの中で「問題点」となっていることを挙げ、それに対して自分がどのように工夫して克服しようとしたか、しているかを書きましょう。（４００字を目安に）
自分の思考の変化についてメタ的に分析することが出来ており、分析した内容が具体的に記述されている。	A(７点)	課題を解決していく上での「問題点」を的確に見つけ出せており、さらに、その「問題点」について自分なりの視点で具体的な対策を講じている。
自分の思考について分析できているが、思考の変化についてメタ的に捉えることが出来ておらず、直感的な内容が記述されている。	B(５点)	課題を解決していく上での「問題点」が「課題そのもの」の難易度に依存する内容しか見つけ出せておらず、その「問題点」の解決策が課題解決そのものと直結している。または、対策が具体的でない。
自分の思考について分析できておらず、内容が不明瞭。または、文字数が著しく足りていない。	C(３点)	課題を解決していくうえでの「問題点」を明らかにできておらず、対策が直感的なものに過ぎない。または、文字数が著しく足りない。

■⑮の「最終発表 生徒相互チェック表」を回収し、教師が内容を採点。

「最終発表 相互チェック表」のルーブリック

	観点ごとのチェック/知識や考えの深まり	発表者のFS先の情報に対する自分の気づき
A	発表の内容に即した観点ごとの深い気づきや疑問が記述されている。	FS先に対する自分の考えと、発表の内容から得た情報とが、つながりを持った深い「気づき」として記述されている。
B	発表の内容に即した観点ごとの気づきや疑問が、やや短絡的、表層的である。	気づきや感想がやや短絡的、表層的である。
C	発表の内容に即した観点ごとの気づきや疑問があまり記述されておらず、短絡的、表層的である。記述の多くが発表の内容のみである。	気づきがあまり記述されておらず、気づきや感想が短絡的、表層的である。

■⑮の１０グループの最終発表を動画で見直し、以下のルーブリックで評価。また、それぞれの観点別 （中間発表時の観点３つに、観点を２つ追加）にスライドごとにコメント、フィードバックの総括コメ ントも追記して、Classi のコンテンツボックスにアップ。

観点❶　FS先を訪問するにあたって、目的意識がはっきりとしているかどうか。	
A（６点）	どのような問題意識（きっかけ）でFS先を選定したのか、訪問の目的（何を知りたかったか）が明確である。
B（４点）	FS先についての情報は明確に調べてあるが、問題意識との関係や訪問の目的との関係が見えにくい。
C（２点）	FS先についての情報が調べてあるだけで、自分たちが何を解決しようとして訪問したのかに触れていない。

観点❷　施設設立の目的や今抱えている問題点について理解することができているかどうか。	
A （６点）	現場の人たちの持つ「課題」について、現場の人たちが具体的に「何を語ったか」が明確である。
B （４点）	現場の人たちが持つ「課題」について説明できているが、現場の人たちの「声」が見えにくい。
C （２点）	FS先の人たちの大変さについて訪問者として感想を述べているだけである。

観点❸　次のステップに向けたアクションプランに関して適切なビジョンを持てているか。	
A （6点）	当該テーマについて何ができるのかが具体的であり、それが実現可能であることを証明できている。
B （4点）	当該テーマについて何ができるのかが具体的に示されているが、それが実現できることが証明できていない。
C （2点）	何ができるのかが抽象的であり、それが該当テーマとどう関連しているのかがはっきりしていない。

観点❹　視覚資料に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。	
A （６点）	スライドの構成が導入、展開、結論と全体を通して論理的にまとめられており、文字のフォントやグラフ・図が効果的に用いられている。
B （４点）	スライドの構成において結論に向けての論理的な展開が見えづらく、グラフ・図の効果も十分に活かされているとは言えない。
C （２点）	スライドに情報が羅列されているだけで、結論とそれ以外の部分のスライドとの関連性が見えない。

観点❺　発表の仕方に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。	
A （６点）	発表者の声量や視線からこの課題に対する熱意が感じられる。
B （４点）	発表者の声量や視線がこの課題に対する熱意を十分に感じさせるものとは言えない。
C （２点）	情報は伝達できているが発表者の声量や視線に自信が感じられない。

4. 検証

■目標の達成度・課題

目標 1）生徒たちが、観点１～５に従って、FS 先で学んだことを内在化して、発表することができる。

目標 2) 生徒たちが、観点１～５に従って、ロイロノートやパワーポイントを用いて発表することができる。

目標 3) 生徒たちが、「社会を知る」「社会の中の自己を知る」という点について学んだ実感を得て、これから社会でアクションを起こしていく方向性を考えることができる。

目標 4) 生徒たちが、この探究授業を通じて、学びに対する自分の意識の変化について言語化でき、学びの過程で生じた問題点についてどう克服しようとしたかを認知できる。

・目標 1)について

観点１～３については、中間報告時にはやや不足を感じるグループが多かったように思う。特に、フィールドスタディありきで発表がスタートした者が多く、元々は自分たちの素朴な興味や問題意識から訪問先を選定してきたという大事な部分を忘れがちか、発表に組み込むことを躊躇しているグループが多かった。良い意味でフィールドスタディ先から受けたインパクトが大きかったとも言えるが、インタビューを行った方の意見に共感するあまり、訪問者＝主体である自分たちの思いが後回しで、正解を訪問先の方が持っていて答えを聞き出したかのような印象を与える発表が多かった。教員が中間報告後に詳細なフィードバックを行ったため、幾分か改善されたものの、質

疑応答の根拠として自分たちの意見に変わって訪問先の方の意見を例に挙げて説明するグループがあったことが気になる点として残った。また、今年度はコロナの影響により、直接訪問できないグループが６グループ中３グループであった。やはり直接訪問したグループとオンラインで話しただけのグループでは、観点２の訪問先の課題についての理解への深さについての差が多少生まれてしまったのではないかと思う。ある意味言葉だけの理解にとどまることが避けられず、理屈を中心にあれこれ吟味する場面が多くなり、現場の方の熱意の部分が伝わりづらいという欠点もあった。しかしながら、準備から発表に至るまでの全体の生徒の取り組みは十分で、中間から最終発表にかけて大幅に内容が改善されたグループもあり、全体としてフィールドスタディの内在化は十分になされていたと考える。

・目標２）について

中間報告の際には、まずは内容の整理に重点を置くために、ロイロノートという簡易のプレゼンテーションアプリを使い、簡単にスライドをまとめるよう促した。最終発表の際に初めてパワーポイントを使用するメンバーも少なからずいたが、多くの生徒が、個性を表現しつつ非常に分かりやすい工夫したスライドを作ることができており、評価にも現れている。独自に訪問先とそれを取り巻く社会を分析する手作りの図を導入したり、訪問先から受けた説明に適した内容を、画像をうまく駆使しながら表現したりすることができたグループが印象的であった。中にはグループ間でのパワーポイント資料の共有にて惑い、やや最終調整の時間が不足しているように見受けられたグループもあったため、技術的な指導はもう少し丁寧にする必要があったことはこちら側の反省点である。パワーポイントに盛り込む情報がやや多いグループもあったものの、いずれのグループも訪問先と自分たちの学びについてなんとか工夫して表現しようとする努力の跡が見られた。

・目標３）について

「社会を知る」という点においては、全員が十分に達成できたと感じる。それは具体的に訪問先について説明する発表の内容の丁寧さからも、最終発表に向けての Classi ポートフォリオの記述においても、あるいは他者の発表に対する相互評価のコメントの中にも、知識と興味の広がりを感じることができた。自らが深く学んでみたからこそ、広がった知識あるいはアンテナを使って他者を分析することにつながったと言える。「社会の中の自己を知る」という点については、やや人によっての開きがある。アクションを起こすべき自己としての発表を行ってはいるが、これはこちらが事前に評価の観点としてのアクションという方向性を示しているからだと断定できる。そういう意味で、生徒一人一人の自然に抱く思いとしての「社会の中の自己」について、我々は適切に評価する基準を持たないのではないかと考えた。目標の後半、「社会でアクションを起こしていく方向性」については、先述の通り、直接訪問したグループほど、そして、訪問団体自体のアクション先がより直接的な顔の見える対象であればあるほど明確に見えているという比例関係が見受けられる。中には、すでに校内で十分なアクションを行い、結果を得られているグループもあったという点においては、グループによっては十分に達せできたと言える。

・目標４）について

生徒が Classi のアンケートに記入する形で記録したポートフォリオ（資料１０参照）を読む限り、生徒たちの多くは、この授業で深めた学びを、客観的に認知しており、それらを言語化できていた。「授業を通じた自分の学びに対する意識の変化をメタ的に分析できていたかどうか」という設問１、「授業を通じて経験した問題点に対してどのように解決しようと試みたか」という問題解決能力に関わる設問２を用意して確認したところ、自分がどのように学びと向き合ってきたかについて、何を学んだかという知識面ではなく、どのように学んできたか、という学びの過程や深まりについて自分自身で把握できている点については、生徒たちのこれからのさらなる学びの広がりと深まりを期待させると共に、この授業自体がそのような学びを少しでも提供 できた結果ではないかと思われる。

・まとめ

【整理・分析】【まとめ・表現】という観点からこの第３フェーズを整理する。【整理・分析】【まとめ・表現】で期待する観点については事前に教員側はルーブリックで示していたものの、また生徒たち自身としても発表する内容や情報があったとしても、うまく自分たちの学びや考え を発信できなかったという印象である。授業時間外を

使ってパワーポイントの作成、話し合い、などをし なくてはならず、クラブ活動や遠距離の通学など、時間的制約が生徒の生活の中にもあったのではないか と推察する。 自分たち、他のグループの発表の動画を見直す活動は、【整理・分析】において大変有用であったと思 われる。生徒たちの振り返りシートを見ても、実に内省的、建設的なコメントが多く記載されていた。また、２回発表がある、というのは、フィードバックを受けて改善する余地が与えられるという点で、これも【整理・分析】する上で大変有用であったように思われる。【まとめ・表現】としては、中間/最終発表の内容と評価は、この授業そのものの大きな２つの目標：①「社会を知る」自分の周りの世界で何が起きているかについて生徒が語ることができる ②「社会の中の自己を知る」自分の周りの世界に、自分がどう関わっているか、接点を持っているかについて生徒が語ることができる。以上の点から判断するに、生徒たちがそれを概ね達成できた証拠ではないかと思われる。

5. 今後改善すべき点

・フェーズ３において、時間的制約が伴うものの、実際にアクションを起こす期間、機会があれば生徒たちの 探究の深まりが一層増すはずだということが昨年度の反省であった。今年は、子ども食堂を訪問した生徒が訪問時に現場の問題点（おもちゃや文房具が足りない）に対して自分たちにできる行動のイメージを抱き、即時アクション（寄付の募集）を行った。非常に計画的で現場の求めに応じた良いアクションであり、学校の生徒のみならず保護者からの協力も大いに得られ、想像以上の反響があった。担当した生徒たちはやりがいや自分たちの影響力についても実感することができ、非常に有意義であったと感じる。しかしながら、「想像以上に」寄付が集まってしまったことから、集まった全ての寄付品を送ることはできないため、未だに寄付先の見当たらない大量の物品が保管場所もなくロビーの隅に置かれたままになっているという状態である。予想以上のことまで予想した上で、最後までアクションをやりきってこそ学びであるので、アクションについては時間のない中ではあるが、生徒たちの熱を冷まさないままに BASIC の授業の中で現実的に行える配慮が必要である。

・中間報告後から最終発表に向けての改善点は、教員によるフィードバックシートに詳細に記述されているため、あとは生徒たちの自身の自助努力に期待し、任せてみたところがあった。しかしながら、グループの中には結局発表の直前になって準備を詰めていたところがあった。最終的に準備不十分で望むグループはなかったにせよ、ペース作りという意味において、あるいはより質の高い最終発表の授業外への発信という意味においても、中間から最終に書けては、もう１度くらい授業をはさんで具体的な改善のための確認作業をしておいた方が良かったかもしれないと感じた。

＜成績の算出方法について＞
テストを行わない探究授業ではあるが、大学進学のための資料として成績を算出せねばならなかった。以下 のように評価物を生徒たちの学びを２つに分類して評価し、配点調整を行い、１００点満点で成績を算出した。
１）生徒の授業内の学び/思考：４０点
２）生徒の成果物に関する学び/思考：６０点

成果物等の評価、あるいは成績をつける上での課題や今後の改善点としては以下の点が挙げられる。
・昨年度からの改善点としては、「学びの記録」や「相互評価」などのポートフォリオを伴う振り返りの成果物を必ず次の授業時に返却することができたことから、生徒たちは自らの思考の深まり・変化や学びの変化を即時的に感じることができたと考える。昨年の反省を生かし切れなかった点としては、フィールドスタディ後に FS に焦点を絞ったポートフォリオの記入である。
・しかしながら、1 つ 1 つの「学びの記録」を担当者で分担することはできないため、1 回分の記録は担当者が全てを評価することになる。今年のように受講人数が少ない場合は良いものの、受講生が多い場合は分担できない「学びの記録」の評価は非常に大変な作業となる。教員にとっても持続可能な評価のあり方を考える必要がある。
・中間報告後の振り返りについては最終につなげるという意味でタイミング良く取り組ませることができた。今年度は Classi のアンケートを使って、最終発表後にも全体の学びの振り返りを行うことができた。
・採点すべき評価物が多くあり、且つ教員としての時間的制約もあるため、授業担当者のみならず、このカリキュラムに関わる全ての教員（最大６人）で評価を行った。各評価におけるルーブリックは、できるだけシンプルな３段階としたが、担当者の段取りの問題で、昨年度行ったように、最初に一人が基準となる評価をまず行い、それに倣って別の教員が評価を行う手順を踏むということができなかった。そのため、採点者によって若干基準が揺らいだ部分があった点が反省である。また、BASIC の授業担当者のように、各グループのこれまでの経緯を全て知る評価者によるものと、当日発表を録画だけで観た教員との間の評価の深さのずれや、中間報告と最終発表で評価者が代わった場合の評価の難しさなどがあった。いずれにせよ、評価に関わる全員が発表全体を見られるわけではないため、基準を正確に合わせていく作業は今後も課題となるだろうと予想される。

＜グローバル探求 BASIC　資料＞

資料１：　年間シラバス

2020年度 WWLC グローバル探求-BASIC 年間学習指導案

2020.02.19

＜社会を知る・社会の中の自己を知る＞

		授業回数	日	担当者	フェーズ目標	学習目標	授業内容（大項目）	授業内容（小項目）		準備物	授業時間外学習	提出物	評価対象
							生徒募集						
2学期	第1フェーズ	①	9月9日	時任	・生徒たちがSDGsが身近な問題であると、自分たちの生活に結び付けていくということが大事だと大体理解できている。 ・具体的にSDGsの問題が社会でどんなことが起こっているかを知っている ・自分の関心がある程度はっきりしつつある ・協働する集団作り、授業の雰囲気をつくる ・学びの記録ワークシートのねらいや記入方法を理解している	・SDGsという言葉の意味を説明することができる ・SDGsの17のゴールについて説明することができる ・同じグループのメンバーが考えるSDGsの優先順位と自己が考える優先順位の相違点/共通点を説明することができる	ガイダンス、SDGs入門	0-15 15-30 30-45 45-60	アイスブレイク/学びの記録ワークシート記入方法説明 SDGsの自分の価値観からみた優先順位づけ ペアで優先順位づけ/順位づけの判断根拠検索	17SDGsのカード マナボード 優先順位シート	なし	学びの記録	学びの記録
		②	9月16日	西室		・SDGsの問題を「身近に起きていること」「自分ごと」として感じる ・トレードオフという概念を、身近なこととして理解する	SDGsカードゲーム？	0-15 15-30 30-45 45-60	アイスブレイク トレードオフ・SDGs概念・ゲーム説明 ゲーム、オリジナルカード作り	カードゲーム 白紙の紙 黄色、青色カード 色ペン 音楽・スピーカー	なし	学びの記録	学びの記録
		③	9月23日	能島		生徒が、リアルな人が来て、自分の頭の中の想像と現実社会を繋ぎ合わせる ・身近にあるSDGsの課題「日本における子どもの相対的貧困」について具体的に説明できる ・自分たちのまわりにもそのような課題が存在し、そのような課題の解決に実際に従事している先輩がいることを知る	１貧困　と　４教育に関してローカルな活動実践を聞く	0-15 15-30 30-45 45-60	アイスブレイク/能島レクチャー ワーク（貧困の原因）/付箋でグルーピング 能島レクチャー ワーク（学びの記録）	マナボード 付箋	テーマについて関心のある事柄のニュースをロイロで提出・共有	学びの記録	学びの記録
		④	10月7日	坂西		生徒が、リアルな人が来て、自分の頭の中の想像と現実社会を繋ぎ合わせる ・平和について知る、考える。 ・実際に現場で働いている人を知る	１６平和　に関してPHD協会の活動実践を聞く	0-15 15-30 30-45 45-60	アイスブレイク/坂西レクチャー ワーク（海外/日本の問題に取り組む意義/付箋でｸﾞﾙｰﾋﾟﾝｸﾞ 坂西レクチャー ワーク（学びの記録）	マナボード 付箋	・テーマについて関心のある事柄のニュースをロイロで提出/共有 ・発表資料（ロイロ）作成 SDGsの中で自分の関心のあるテーマをしぼる 行きたい場所の紹介 その理由を述べる →ロイロに提出（10/17〆） ・発表資料作成に関わる学びの記録ワークシート作成	学びの記録 発表資料（ロイロ）	学びの記録
			10月14日			中間試験のため休講							
	第2フェーズ	⑤	10月21日	徳田 泉川	・生徒がいくつかのSDGsに対する自分の関心を深める ・生徒が地域（ローカル）の実社会で活動されている方や組織の取り組みをフィールドスタディを通して主体的に知り、SDGsに関する理解を深める ・生徒がフィールドスタディにおける学びの手法を理解する ・生徒がフィールドスタディ先を自分のフレームでもって切り取った実感を肌で感じる ・生徒が社会との接点を自ら作り出す楽しさを知る	・生徒が、自身の関心を深め、その関心と関わる団体や人々について調査を行う ・生徒が地域（ローカル）において、様々なSDGs（貧困・教育・平和、その他？）の取り組みをしている団体や人々の活動を知る ・生徒がどの団体を訪れるかについて、グループで協働して意思決定、発表準備を行う	・個人発表 ・９つのグループ作り ・フィールドワーク先候補の選定	0-15 15-30 30-45 45-60	１人45秒の発表　（教員は評価/各発表後に短くﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ） 〃　（生徒間の評価） ９つのグループ(4～5人)作り（ﾌｨｰﾙﾄﾞが共通する生徒同士で） グループで行きたい団体を２つ選定/ロイロ発表資料作り	関心チャート	発表資料（ロイロ）作成 ・行きたい場所の紹介２つ ・その理由を述べる →ロイロに提出（10/24〆） →中休み・昼休みに小教室２つを空け、グループで話し合い	学びの記録 関心チャート 発表資料（ロイロ）	学びの記録
		⑥	10月28日	徳田 泉川		・生徒が、協働してフィールド先の発表を行う ・生徒が、他のグループの発表を聞き、他のフィールド先についての情報を得て、関心を深める	・グループ発表準備 ・グループ発表 ・投票	0-15 15-30 30-45 45-60	発表準備 各グループ２分間で発表（教員/生徒間評価、短くﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ 自分が参加したいグループ２つ（A～I)から投票、決定 （集計は教員で行い、後日Classroで発表）	フィールド先候補シート フィールド先投票用紙		フィールドワーク先候補シート	学びの記録
			11月4日			文化祭のため休講			教員がフィールドスタディのアポ取り				
		⑦	11月11日	時任		・生徒がフィールドスタディという学びの手法について理解する ・生徒が、フィールドスタディで話を聴く際の「観点」と「問い」について理解する ・生徒がフィールドスタディに向けて「観点」と「問い」を設定する	フィールドワークの手法について学ぶ	0-15 15-30 30-45 45-60	授業内容説明、「観点」「問い」を理解するワーク1/独自メ 「観点」と「問い」を理解するワーク2 /観点別メモ 訪問先についてネットで調べる 「観点」「問い」についての下調べ		（中休み、昼休みの話し合いの場所確保）	学びの記録	学びの記録
		⑧	11月18日	徳田 泉川		・生徒がフィールドスタディ先の取り組みなどについて収集し、知識、理解を深める ・生徒がフィールドスタディの訪問先に関する知識を模造紙にまとめる ・生徒がフィールドスタディに向けた「観点」と「問い」を決定する	グループワーク	0-15 15-30 30-45 45-60	授業内容説明、模造紙に訪問先に関する知識をまとめる 模造紙に訪問先に関する知識をまとめる 「観点」と「問い」の設定 続き（本来なら修正、再提出を試みたができず）	模造紙 色ペン 観点と問いﾜｰｸｼｰﾄ	・「観点」と「問い」の決定ワークシートを完成させる ・模造紙を完成させる	観点と問いシート	観点と問いシート
		⑨	11月25日	徳田 泉川		・生徒がフィールドスタディに向けた「観点」と「問い」を深める ・生徒が自分の行き先以外の訪問先を２つ決める ・生徒が教員と一緒に訪問先に電話をする日を決める	グループワーク	0-15 15-30 30-45 45-60	授業内容説明、「観点」「問い」を深める 「観点」と「問い」を深める 「観点」と「問い」を深める/行き先を決める 教員と訪問先に電話をする日程決め	模造紙 色ペン 観点と問いﾜｰｸｼｰﾄ		観点と問いシート	観点と問いシート
			11/28~12/3 FS			試験前日のため休講							
		⑩	12月11日	時任 (学生)		・生徒がフィールドスタディで得た情報を中間発表・最終発表に向けて整理する。 ・経験から得た学びを実践につなげるイメージを持つ	フィールドスタディのまとめ	0-15 15-30 30-45 45-60	情報の整理方法の説明、観点は６つ リフレクション 大学生による話題提供（経験で得た学びをどうつなげるのか 〃		次回までにロイロカードに以下の６つの観点をグループでまとめてくる①FSで再確認できたこと②FSで新しく知った知識③FSで分かった現場の人たちの考え④FSで分かった現場の人が抱える課題⑤FS前と変わったイメージ⑥FSの現場の課題に対して高校生ができること	学びの記録 発表資料（ロイロ）	学びの記録

		授業回数	日	担当者	フェーズ目標	学習目標	授業内容（大項目）	授業内容（小項目）		準備物	授業時間外学習	提出物	評価対象
3学期	第3フェーズ	⑪	1月13日	時任 徳田 泉川	・２学期のフィールドスタディで学んだことを内在化する ・以下の６つの観点について、フィールドスタディで得た学びを整理し、まとめ、自分たちが起こすアクションを考える段階までに発展させる ①フィールドスタディで再確認できたこと（インターネットや著書を通して既に知っていたことを直接現場で確認することができた） ②フィールドスタディで新しく知った知識 ③フィールドスタディだからこそ分かった現場の人たちの考え（想いや信念等） ④フィールドスタディだからこそ分かった現場の人たちが向き合っている課題 ⑤フィールドスタディに参加する前に自分たちがもっていたイメージで参加したことによって変わったこと ⑥フィールドスタディ先の現場の人たちが向き合っている課題に対して，高校生である自分たちができること ・生徒が自分たちの学びを発表する機会を得る ・発表をして得たフィードバックから、さらに学びを深める ・フィードバックでさらに深めた内容を発表する機会を得る ・最終的に、「社会を知る」「社会の中の自己を知る」という点について学んだ実感を得て、これから社会でアクションを起こしていく方向性を考え始める	・生徒が、６つの観点について発表を行うために情報を５つに整理する　①FS先の活動概要　②自分たちの観点と問い　③FSで直接確認できたこと　④現場の人たちはどのような課題をどのように語っていたか/それを聞いてどう思ったか⑤高校生である自分たちが当該テーマについてできること・具体的にどのようなことならできそうか/それが実現可能な根拠 ・生徒が、聞く側の観点について学ぶ（以下に記載）	発表準備	0-15 15-30 30-45 45-60	発表の概要紹介・中間報告のスケジュール発表 中間報告の５つの発表項目説明、情報のまとめの作業 作業 最後に発表相互評価（フィードバック）の観点を説明	・ロイロカード	・小教室１/２で中休み、昼休みを用いて発表準備	発表資料（ロイロ）	
		⑫	1月20日	徳田 泉川 西室		・生徒が、FSについて発表１２分質疑応答１０分を行う（ロイロ） （中身重視・最終プレゼンのための下書き的） ・生徒がフィードバックを以下の観点で行い、意見交換を行う ①FSについて概要/観点と問いを理解できたか　②現場の人たちがどのような課題をどのように語っていたかが明確に、「声」がリアルに説明されていたか ③高校生である自分たちが当該テーマについてできることは現実的なのか	中間報告（６グループ）	0-15 15-30 30-45 45-60	グループ３つによる発表 同上 グループ３つによる発表 同上	・３教室（第１ﾌﾞﾚ・第２ﾌﾞﾚ・第3ﾃﾞｨｽ） ・学びの記録（相互評価表）		発表資料（ロイロ） 相互評価表	相互評価表 教員評価表
		⑬	1月27日	徳田 泉川		・生徒が、動画で中間発表を見直し、グループで意見を共有し、教員の評価も参考にすることで、自分の発表に活かす学びとする	再解釈と再構築①	0-15 15-30 30-45 45-60	発表の概要紹介・動画を見ながらワークシート記入 動画を見ながらワークシート記入 動画を見ながらワークシート記入 意見を共有/まとめ	・中間発表の動画（Classi） ・ワークシート	・自グループの発表の振り返り（ワークシート）	振り返りシート	振り返りシート
		⑭	2月3日	徳田 泉川		・生徒が、動画で中間発表を見直し、グループで意見を共有し、教員の評価も参考にすることで、自分の発表に活かす学びとする	再解釈と再構築②	0-15 15-30 30-45 45-60	自グループの見直しをグループで共有 発表準備 同上 同上	英語メディア教室		振り返りシート	振り返りシート
			2月10日			入試前日のため休講							
			2月17日			入試前日のため休講							
		⑮	2月24日	徳田 泉川		※１４０分授業 ・生徒が、発表１２分質疑応答9分を行う（パワポ） ・生徒がフィードバックを行い、意見交換を行う	最終プレゼン	0-15 15-30 30-45 45-60 60-75 75-90 90-100	発表① 発表② 発表③ 発表④ 発表⑤	視聴覚教室		相互評価表 発表資料(パワポ)	相互評価表 教員評価表

資料２：「学びの記録」のサンプル

記録日＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

高等部グローバル探究 BASIC　学びの記録

＿＿＿年＿＿＿組＿＿＿番　氏名

本日の授業で知った新しい知識（事実）	他者や自分の考え・意見

（他）＝他者の考え・意見　（自）＝自分の考え・意見　（先）＝先生の考え・意見
(!)＝驚き　（?）＝疑問　（追）＝別途情報収集の必要あり　（参）＝参考図書等

資料３：生徒のポートフォリオ（第１フェーズ分）からの抜粋

①9/9

・一つ一つの問題の現状の正しい情報を詳しく知り、何が原因なのか、またその原因を解決するためにはどの様な解決策が必要となってくるのかを理解することです。何か一つの問題を解決するにしてもその問題が起こってしまっている原因は別にあるはずで、その原因となっている事を解決しようとしない限りは初めの問題が解決できるはずが無いからです。

・受動的に話を聞くのではなく、積極的に自分の意見を持った上で、他人の意見を受け入れる柔軟性が必要なのだと感じました。どのようにしたら、自分の主張が相手に響くように伝えられるかなどの方法をこれから身につけていきたいと思いました。また、世界には不自由な生活を強いられている人が沢山いることを何となくでしか知らなかったので、その事実と向き合っていきたいと思いました。

・最も大切だと思ったのは Try することです。理由は 2 つあります。一つ目は、僕は前で話すのが得意ではなく緊張してしまう方でそれを無くして、前で話すのを得意にしたいと思っているからです。2 つ目は最初に発表した 2 人がすごいと思ったからです。あれができるようになるには緊張しないことだけではなく早く調べて早く意見をまとめる能力が必要だと思います。そのためにもっと社会問題を知って Try していきたいです。

②9/16

・何かを達成するためには何かを犠牲にしなければならないという考え方。例えば部活に全てをかけて強くなったが、勉強がおろそかになり、成績が下がってしまったというような感じ。全ての問題は単独で存在しているのではなく、それぞれがいろんなところで繋がっている。SDGs では、「誰ひとり取り残さない」という考えを持って活動している。

・限られた中で最善策を生み出して解決していくことは大切だと思った。身近な問題にしろ、国際的な問題にしろ、トレードオフでは、一方で成功しても他の何かが犠牲になるとしている。だから、犠牲が少ない方法を取るのか、両方が半々になるような方法を取るのか考えるのは難しいけど、考えていかなければならないと思ったから。

・物事を平面的に捉えるのでは無く、立体的に捉えることで、様々な方面からの目線があり、解決策があることを意識する。そして、トレードオフを恐れて、お互いを抑制し合うのではなく、それぞれの分野が国境を越えて協力することで、トレードオフの問題を少しでも和らげることが出来るのではないかと思った。

③9/23

・目に見えない問題を解決していくことが積み重なりで、目に見える変化になると考えました。なので、表面上のことだけではなく、その奥にはどんな問題があるのか、ということを考えるのが最も大切だと感じます。今日学んだ貧困の子供は普通の人が普通に見ても気づけるものではなく、体のこと、勉強のこと、など探さないと見えないものでした。世界、日本にはこの貧困の子ども以外にも探さないと見えないものは沢山あると思うので、深く見て考えていきたいです。

・問題に対して一つずつ考え、解決していくことが大切だと感じました。自分は比較的裕福な家庭に生まれ、関西学院に通うことができています。しかし、能島さんがおっしゃっていたように、それはほとんどが親のおかげです。今の日本は 7 人に 1 人が貧困という中、自分は優利なスタートラインに立てたのです。そのスタートラインを平等にするために何か出来るか考えて一つずつ解決していこうとしている人がいると知り、そう思いました。

・目に見えない問題を解決していくことが積み重なり、目に見える変化になると考えた。表面上のことだけではなく、その奥にはどんな問題があるのか、ということを考えるのが最も大切だと感じた。今日学んだ貧困の子どもは普通の人が普通に見ても気づけるものではなく、体のこと、勉強のこと、など探さないと見えないものだった。世界、日本にはこの貧困の子ども以外にも目に見えない問題は沢山あるので、深く考えたい。

資料４：「学びの記録」の記入例

高等部グローバル探究　学びの記録

1 年 F 組 35 番 氏名 [redacted]

本日の授業で知った新しい知識（事実）	他者や自分の考え・意見
「思考を止めない」 日本の子どもの貧困について ・親の学歴により、習い事や教育サービスなどの利用格差が顕著になるのは小学校就学前。 → 子どもの思い関係ない状態で決まるから。 ・公立の小学校同士の間で学力格差が確認できるのは1年生から。 ↳ 地域で差があるから。 ・戦後教育格差は2000年頃から大きく変わっていない。 7人に1人の子どもが貧困。（クラスで5人（35人中）） 「絶対的貧困」… 生きるために最低限必要な「衣食住」が満たされていない状態。 「相対的貧困」… その社会においてほとんどの人が享受している「普通の生活」を送ることができない状態。 （表面的にわかりにくい!!） *外見からわかりにくい *母子家庭の貧困率が高い（60%） *虐待との相関率が高い 親貧困 → 連鎖する 不安定な就業 社会的排除 子どもの低学力・低学歴 教育格差 親の年収 高 / 低 B A C D 高学歴 子どもの年収 高 ・経済的に豊か＝学力高い ・日本は教育支出が低い。（自己負担になる）	なぜ？ (自) 習い事とかを親も小さいころからされていたから、同じように自分の子どもにもさせてあげたいと思う人とそうでない人がいる。 (他) 校区で貧困の格差がある。 (!) クラスのみんなは全員自分と同じように見えるのに、見えないところで貧困状態になっている。 (?) 日本って世界的に見ても貧困だと感じたことはあまりなかった（アフリカとかのイメージだった）けれど、母子家庭の貧困率が、日本（と韓国）だけおかしい。なんで？ なぜ子どもの貧困はなぜおこる？ (自) 社会全体で手助けをするサービスが少ない。 親が仕事につけない、所得が少ない。 親の離婚で母子家庭になる。（女性が働きにくい社会） (他) 親の育児放棄。失業。 親の病気。 (先) 若年出産、非行 失業、離婚 (!) 全部、親が関わっているじゃん!! (自) 子どもは1人で生きていけない（親に育ててもらう存在）だから親の貧困と子どもの貧困は同じになる。 (先) 私たちが関学に入れていることは、スタート地点がみんな同じわけではない。本当に実力だけで入学できたのか。経済とかも関係している。 (自) 貧困の人はどんな生活をしているのかもっと知りたい。みんながスタートラインがいっしょになるには、無料塾とかがもっと増えてCの部分の子が勉強できる環境をつくることが大切。もっと、社会のサポートがほしい。つくるべき。 (自) 夏休みにボランティア委員会の活動で貧困地域の学童保育みたいなのをしたけれど、その時、あまり貧困を感じなかった。今日、いろんなことを学んで、目に見えない貧困があることを知った。もっと人の助けになれることはないのか探したい。

（他）＝他者の考え・意見　（自）＝自分の考え・意見　（先）＝先生の考え・意見

（!）＝驚き　（?）＝疑問　（追）＝別途情報収集の必要あり　（参）＝参考図書等

資料４：「学びの記録」の記入例

高等部グローバル探究 BASIC 学びの記録

1 年 C 組 11 番 氏名 [redacted]

本日の授業で知った新しい知識（事実）	他者や自分の考え・意見
社会課題→ミャンマーやネパールにかける貧困や差別。 ○切手を集めたり、書きそんじはがきなどを集めたりすることで活動費にしたりしている。	(自) 自分では見逃してしまいそうな身の回りのもったいないと思う部分を存分に活用していてとても素晴しい効率的な考えだと思った。 ↓ 自分で発見出来るようになりたい。（アイデアを生み出すことで何かに役立つかも！） ↳ 日頃から周りを見る。→ 貧落としがあるかも。
○NGO相談員 →・国際協力について話す。 ・職業インターンなど…（全国に15団体も!!） ↓ 国際協力について質問が出来る。	(自) 無料で質問出来るのはすごくありがたいし、それによって国際協力について知ってくれる人が増えるかも！
・魚のつり方を教える→持続的に出来るように。 直接写えるのは△	(先) 何かをしてあげる、与えるよりも、現地の人たちで頑張って出来るようにサポートしてあげるのが大切。
○5秒に1人、つまり1分に12人の子供たちが亡くなっている。（4.8） （5歳未満）・肺炎・ゲリ ↓ 進歩 20年前は1分に20人の子供たちが亡くなっている。	(先) コロナの影響でさらに死者が増えてしまうかも…。 → お金がなくてstayhomeも出来ないので日雇いとかでかせぐしかない。→ コロナ感染につながるかも…。 ＋ 日本では治す事が出来るのに…。 ↳ (自) まだ医学が発展していないがために命を落とすのは本当に悲しいことだと思う。自分が普通には活している事がどれほど幸せな事なのか、改めて実感した。 ↳ この幸せを知らない子供たちがいる。→ 活動 ↳ 教えてあげたい。
○インドネシア、ネパール、スーダンなどの子供たちは1000人中60人くらいしか助からない。 ○南スーダン→4人1人くらいしか教育が受けられていない。	(先) 教育を受ける事が出来たとしても、環境が整っていない、出来る場所が限られている。 ↓ (自) 教育を受けさせてあげたいと思っても、初めに環境を作ることから始めなければどうすることも出来ない。 ↳ 電気やPCの他にも教科書や筆記用具など色々なものが必要となる。→ リサイクルなどでおぎなえるのではないか
○動物園に行くのもままならない。 ○ミャンマーの子供たちは「親に守られる権利」を選んだ。	(先) 親も生活環境などの事情でイライラしてしまい、虐待してしまうことがある。 ↳「親に守られる」という事をしらない子供もいる。 ↳ (自) 親が悪いけど、環境のせいでもある。→ 環境 教育
○勝手に職業を決められたり、無理やり結婚させられたりする。（ラリット→読み書きが出来ない。）	(先) 電車でどこかに行くにも文章が読めないがために出かける事が出来ない。
○国際協力は限ってないで、傷葉をぬる活動。	(先) 自分たちが世界に負担をかけないような生活をすれば良いのでは？→ 難しい…（大量消費）→ 活動によって補おう。

（他）＝他者の考え・意見　（自）＝自分の考え・意見　（先）＝先生の考え・意見

（!）＝驚き　（?）＝疑問　（追）＝別途情報収集の必要あり　（参）＝参考図書等

(先) 自分が出会った所、生きている所で国際協力をしていこう。
↳ 海外でつちかったものを日本でも生かす。

資料５：関心チャートの記入例

発表評価・関心発見シート　クラス C　番号 [redacted]

自分が興味あるテーマ	今回考えた訪問先	SDGsの枠組みでは、どれにあてはまるか？　あてはまると思うものをすべて選んでみよう。
こどもの教育	ユニセフの事務所	1貧困　2飢餓　3保健と福祉　④教育　5ジェンダー　6安全な水　7エネルギー　8働きがいも経済成長も　9産業と技術革新　10人や国の不平等　11まちづくり　2つくる責任つかう責任　13気候変動　14海の豊かさ　15陸の豊かさ　16平和と公正　17パートナーシップ

No.	クラス	番号	氏名	発表者の興味テーマ（SDGsの枠組みでは、どれにあてはまるか？ あてはまると思うものをすべて選んでみよう。）	発表の中で知った新しい知識（事実）	他者や自分の考え・意見（他）、（自）、（？）、（通）	もっと知りたいと思った部分
1	A	4	宇野　双葉	発表者が興味のあるテーマ［飢餓と安全な水］ 1 ② 3 4 5 ⑥ 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17	・先進国では多くの食べ物がしがある ・清潔な水で救われる命が多くある	(他)人がすむには生きることが大切 術生前で良い水を提供することが命を救うことにつながる	浄水場の建設はその費用は？
2	B	19	曽木　華子	発表者が興味のあるテーマ［貧困をなくそう］ 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17	・ネパールに元で住んでいた →生活環境の悪さと教育環境の悪さ	(他) オイクルジットという団体は寄付をしている。これは「魚をあげるのではなく「魚のつり方」を教えるに値するのではないかと思った	寄付をしてもその会社の環境が成り立っていなければいけないじゃないか
3	B	25	遠山　友里恵	発表者が興味のあるテーマ［貧困をなくそう］ ① 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17	・こどもの相対的貧困率は16.9%→多い！ ・相対的貧困→母子家庭 虐待 ・大阪こどもの貧困アクションプロジェクト	(他)貧困→ご飯を食べられない学校に行けないと思っていたが普通の生活が行えていないことが (自)塾や高い本を買ったりすることは良いこと	・どのようなこどもにターゲットがくばられている？ ・相対的貧困の子どもは分からないのでは？
4	C	2	池本　大翔	発表者が興味のあるテーマ［・貧困をなくそう］ ① 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17	・支援対象はひとり親 ひきこもり 以外1人が貧困→増えている 日本財団→こどもサポートプロジェクト	(他) 困っている子供に居場所を提供してあげたい (自) 子供の居場所づくりは大切だと思う	なぜ子供の貧困に興味をもったのか？
5	C	11	北内　李弥	発表者が興味のあるテーマ［安全な水とトイレを世界に］ 1 2 3 4 5 ⑥ 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17	・世界9億8500万人の人が水やトイレ× ・女性や子供が水をくみに行く ・汚染された水による民衆 ・トイレがないから学校に行けない	(他) 学校に行けなくなってしまうのは良くない ・海外旅行に来る人はどこの国の人が多いのか？	水道技術を教えても、その国で技術を実現することは難しい？
6	C	28	橋本　十織子	発表者が興味のあるテーマ［人や国の不平等をなくそう］ 1 2 3 4 5 6 7 8 9 ⑩ 11 12 13 14 15 16 17	最低賃金8万円と貧困の30億人の年収が同じ パナソニックのSDGs →電気の技術や技術の共有	(他) 努力で変えることのできない不平等があるのは良くないこと (自) 8万円はあまりにも多すぎる (他) 魚のつり方と与えるのをどちらも支援しているのが良い	その方法はどこから出てくる？ 電気が通っていない国は多くあるが、その全て解決するのは難しい
7	C	31	藤井　麗乃	発表者が興味のあるテーマ［　］ 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17			
				発表者が興味のあるテーマ			
8	D	7	大野　良輔	発表者が興味のあるテーマ［ジェンダー平等］ 1 2 3 4 ⑤ 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17	日本人の8.9%の人がLGBT 福水ハウス→同性のパートナーも結婚相手として認めて休暇などを認める	(他) 身近にLGBTの当事者がいる→もっと知りたい	LGBTである人の抱えをどこまで認めているのか？
9	D	13	小竹　悠輝	発表者が興味のあるテーマ［人や国の不平等をなくそう］ 1 2 3 4 5 6 7 8 9 ⑩ 11 12 13 14 15 16 17	世界で10人に1人が約213円以下で生活している 読み書き×→76億人 ジャイカ⇒貧困をサポート	(他) スタートラインが異なるのはおかしい 1つのことが解決できれば別のことにつながっていく。	ジャイカ ユアトレードは具体的にどのような活動？なぜこのテーマに？
10	D	33	松本　晃奈	発表者が興味のあるテーマ［相対的貧困］ ① 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17	・子ども食堂について →来年は子ども食堂の設立を考えている。 食べた後は遊んだり宿題をしたりして子どもの居場所になっている	(自) 安い価格でごはん、肉食べることができるのは良いこと	相対的貧困とは？
11	E	34	堀田　七菜	発表者が興味のあるテーマ［日本の貧困］ ① 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17	日本財団：子どもの居場所づくり 子ども食堂：地域の子どもに食べ物を。 →学生などでできなかったら地域づくりから	(他) 支援する団体がない？ 食べ物のバランス (自) 子どもの食をサポートする企業はおもしろい →しかし、つぶれてしまうなどの問題をどう解決する？	子ども食堂のできた歴史 財源。 子ども食堂の問題について。
12	E	42	吉田　莉乃香	発表者が興味のあるテーマ［　］ 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17			
13	F	35	細見　夏凜	発表者が興味のあるテーマ［貧困をなくそう］ ① 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17	日本の母親の就業率は84%と高いので貧困が多い ・ユニセフは貧困の撲滅をしている。	(他) メンタルケアが大切 →個人の責任にすり替えられがち	日本の母子家庭に対する支援 ・移動型ガスでも入りにくいのでは？
14	G	10	加藤　沙耶香	発表者が興味のあるテーマ［　］ ① 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17	・小学校の給食室のごみが一番多い。12kgのごはんが捨てられた ・カスゼロという団体は食べ残しをリサイクルしている	(他) 残量を減らしていくことが大切だと思った (自) 食べ残しという見方から全国について考えているのがいいと思った	小学生の食べ物に対する考え方 食べ残しを減らすための対策
15	H	27	中井　美佑	発表者が興味のあるテーマ［安全な水とトイレを世界に］ 1 2 3 4 5 ⑥ 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17	・6億3000万人の人が飲める水がない。 毎日806人の子どもが水の病気を受けて死んでいる。	(他)くみの負担を軽減に当てることができることができれば教育率も上がる	・ユネスコは具体的にどこにあって何をしているのか？
16	I	8	長田　健吾	発表者が興味のあるテーマ［ジェンダー平等］ 1 2 3 4 ⑤ 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17	・女性の方が大学に入学できない →同性の事件があった ネレ・男女平等推進を表す。 ・思いどう。女性が輝ける社会	(自) 女性が輝ける場所はもっと増えてほしい (他) 男女平等になったときの影響はあるのか？	女性はどのようにして輝けるのか？ 女性の活躍の場

資料６：「フィールドスタディに向けた観点と問いの設定」ワークシート

フィールドスタディに向けた“観点”と“問い”の設定

グループ：	訪問先：	メンバー：

訪問先について，インターネットや文献でわかっていること

自分達がヒアリングする時の“観点”

観点：私たちは,　　の観点からヒアリングを行う

ヒアリングをする際の“問い”（文末を必ず？にする）

１）

２）

３）

資料７：「中間発表用　生徒相互チェック表」

グローバル探求BASIC　中間発表会　学びの記録（相互評価表）　　月　日

組	番	氏名

※これは相手のプレゼンを評価することで、評価者みずからがどのような事に気が付いたのか、どのような事に疑問をもつことが出来たのか、を記録するためのシートです。

観点❶	FS先を訪問するにあたって、目的意識がはっきりとしているかどうか。	G（　　）	G（　　）
A	どのような問題意識（きっかけ）でFS先を選定したのか、訪問の目的（何を知りたかったか）が明確である。	評価【　　】 疑問に思ったこと・意見・アドバイス	評価【　　】 疑問に思ったこと・意見・アドバイス
B	FS先についての情報は明確に調べてあるが、問題意識との関係や訪問の目的との関係が見えにくい。		
C	FS先についての情報が調べてあるだけで、自分たちが何を解決しようとして訪問したのかに触れていない。		

観点❷	施設設立の目的や今抱えている問題点について理解することができているかどうか。	G（　　）	G（　　）
A	現場の人たちの持つ「課題」について、現場の人たちが具体的に「何を語ったか」（当事者の声）が明確である。	評価【　　】 疑問に思ったこと・意見・アドバイス	評価【　　】 疑問に思ったこと・意見・アドバイス
B	現場の人たちが持つ「課題」について説明できているが、現場の人たちの「何を語ったのか」（当事者の声）が見えにくい。		
C	FS先の人たちの大変さについて訪問者として感想を述べているだけである。		

観点❸	次のステップに向けたアクションプランに関して適切なビジョンを持てているか。	G（　　）	G（　　）
A	当該テーマについて何ができるのかが具体的であり、自分たちの資源を活用しそれが実現可能であることを証明できている。	評価【　　】 疑問に思ったこと・意見・アドバイス	評価【　　】 疑問に思ったこと・意見・アドバイス
B	当該テーマについて何ができるのかが具体的に示されているが、それが実現できることが証明できていない。		
C	何ができるのかが抽象的であり、それが該当テーマとどう関連しているのかがはっきりしていない。		

他の人が訪れたFS先は自分の想像していた通りの施設でしたか？現場の人たちの「課題」に思いもよらなかったリアリティを感じましたか？「気づいたこと」をまとめよう。

資料８：「中間発表用　生徒相互チェック表」記入例

グローバル探求BASIC　中間発表会　学びの記録（相互評価表）　1 月20日　C 組　31 番 [redacted]

※これは相手のプレゼンを評価することで、評価者みずからがどのような事に気が付いたのか、どのような事に疑問をもつことが出来たのか、を記録するためのシートです。

観点❶ FS先を訪問するにあたって、目的意識がはっきりとしているかどうか。		G（ 3 ）	G（ 4 ）
A	どのような問題意識（きっかけ）でFS先を選定したのか、訪問の目的（何を知りたかったか）が明確である。	評価【 A 】 疑問に思ったこと・意見・アドバイス ・もう少し企業の内容について述べてほしかった ・女性が大学に入りにくい現状がおかしいと私も思う	評価【 A 】 疑問に思ったこと・意見・アドバイス ・コロナ期間、家にいることでより苦しい思いをする人が増えていることに驚いた。 →ストレスのはけ口になってしまっている
B	FS先についての情報は明確に調べてあるが、問題意識との関係や訪問の目的との関係が見えにくい。		
C	FS先についての情報が調べてあるだけで、自分たちが何を解決しようとして訪問したのかに触れていない。		

観点❷ 施設設立の目的や今抱えている問題点について理解することができているかどうか。		G（ 3 ）	G（ 4 ）
A	現場の人たちの持つ「課題」について、現場の人たちが具体的に「何を語ったか」（当事者の声）が明確である。	評価【 A 】 疑問に思ったこと・意見・アドバイス ・日本には、海外から見たらありえない文化が多いということに驚いた。 「男子」「女」といった偏見は持っていないつもりでも、実は日常の中に偏見があった	評価【 A 】 疑問に思ったこと・意見・アドバイス ・コロナウイルスが大きな影響を与えていて大変なことしかないと思っていたけれど、それを前向きにとらえているのがすごいなと思った。
B	現場の人たちが持つ「課題」について説明できているが、現場の人たちの「何を語ったのか」（当事者の声）が見えにくい。		
C	FS先の人たちの大変さについて訪問者として感想を述べているだけである。		

観点❸ 次のステップに向けたアクションプランに関して適切なビジョンを持てているか。		G（ 3 ）	G（ 4 ）
A	当該テーマについて何ができるのかが具体的であり、それが実現可能であることを証明できている。	評価【 A 】 疑問に思ったこと・意見・アドバイス ・少し内容が抽象的すぎると思いました。 ・小さな環境から変えていくことが大切だということに気付けた。 ・私の母も偏見をもっているところがあるから注意していきたい。	評価【 A 】 疑問に思ったこと・意見・アドバイス ・実際にアクションを起こしているのがすごいなと思いました。 ・普段から食べ残しなどはしない方だけれど、その小さな食べ残しが貧困につながっていると知った。
B	当該テーマについて何ができるのかが具体的に示されているが、それが実現可能であることが証明できていない。		
C	何ができるのかが抽象的であり、それが該当テーマとどう関連しているのかがはっきりしていない。		

他の人が訪れたFS先は自分の想像していた通りの施設でしたか？現場の人たちの「課題」に思いもよらなかったリアリティを感じましたか？「気づいたこと」をまとめよう。

私は三菱UFJがそれほど男女平等に対して真剣に取り組んでいるとは思っていませんでした。男女の壁はいつのまにか日常にひそんでいて、私自身もいつのまにか、その壁に慣れてしまっていることに気づくと同時になくしていかなければならないなと思いました。私が日常の中で男女の壁と感じていたのは、女性専用車両や制服、仕事の募集などです。また、子ども食堂に関しては、自分が実際に行って感じたことより、グループのみなさんは多くのことに目を向けていたのだなと思い感心しました。子どもたちがコロナ禍で家にこもることで、困っている人たちがいることにもおどろきました。

資料９：「中間発表　振り返りシート【再解釈と再構築】」

１年（　　）組　（　　）番　名前（　　）　**自グループ用**

グローバル探求BASIC　中間発表　振り返りシート【再解釈と再構築】

動画のグループ名	

観点❶	FS先を訪問するにあたって、目的意識がはっきりとしているかどうか。
A	どのような問題意識（きっかけ）でFS先を選定したのか、訪問の目的（何を知りたかったか）が明確である。
B	FS先についての情報は明確に調べてあるが、問題意識との関係や訪問の目的との関係が見えにくい。
C	FS先についての情報が調べてあるだけで、自分たちが何を解決しようとして訪問したのかに触れていない。

□発表者の問題意識は何ですか？

□発表者の訪問の目的は何ですか？（観点と問い）

☆この２つは一致していると本当に納得できますか？「いいえ」の場合は、引っ掛かる点はどんな点ですか？

観点❷	施設設立の目的や今抱えている問題点について理解することができているかどうか。
A	現場の人たちの持つ「課題」について、現場の人たちが具体的に「何を語ったか」が明確である。
B	現場の人たちが持つ「課題」について説明できているが、現場の人たちの「声」が見えにくい。
C	FS先の人たちの大変さについて訪問者として感想を述べているだけである。

□施設設立の目的/目標/取組は何ですか？

□現場の人たちの具体的な問題点/課題は？

□現場の人たちのリアルな「声」はどんな「声」？

☆この３つの項目は、ストーリーとして分かりやすくつながっていますか？

「いいえ」の場合は、引っ掛かる点はどんな点ですか？

観点❸	次のステップに向けたアクションプランに関して適切なビジョンを持てているか。
A	当該テーマについて何ができるのかが具体的であり、自分たちの資源を活用しそれが実現可能であることを証明できている。
B	当該テーマについて何ができるのかが具体的に示されているが、それが実現できることが証明できていない。
C	何ができるのかが抽象的であり、それが該当テーマとどう関連しているのかがはっきりしていない。

□＜振り返り＞当該テーマ/問題意識/訪問目的

□提案内容（What/Who/Where/When/Why/Which+How）

☆この２つにつながりを感じますか？「いいえ」の場合は、引っ掛かる点はどんな点ですか？

☆どこを工夫すれば実現可能性はもっと上がる？

□グループのまとめ

☆発表のハイライト☆

□発表全体の中で、一番伝えたいことが伝わってきた場面、一番発表内容に魅力を感じた場面　/ どのような要素がそうさせていた？

場面
（分、内容）

要素

■発表全体の中で、一番工夫や改善が必要な場面、一番理解ができなかった場面　/ どのような要素がそうさせていた？

場面
（分、内容）

要素

観点❹　視覚資料に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。	
A	スライドの構成が導入、展開、結論と全体を通して論理的にまとめられており、文字のフォントやグラフ・図が効果的に用いられている。
B	スライドの構成において結論に向けての論理的な展開が見えづらく、グラフ・図の効果も十分に活かされているとは言えない。
C	スライドに情報が羅列されているだけで、結論とそれ以外の部分のスライドとの関連性が見えない。

□一番効果的だと思うスライドは何枚目？/どんな点が良い？

枚目

■工夫を必要とするスライドを２つ挙げよう/どう工夫する？

枚目	枚目

観点❺　発表の仕方に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。	
A	発表者の声量や視線からこの課題に対する熱意が感じられる。
B	発表者の声量や視線がこの課題に対する熱意を十分に感じさせるものとは言えない。
C	情報は伝達できているが発表者の声量や視線に自信が感じられない。

※自分の発表のみコメントしよう

■自分の発表の仕方について、工夫すべきところはどんな点？

資料１０：ポートフォリオ

設問１：【意識の変化について】
他の班のプレゼンや先生方からのアドバイスに対して「ここまでを目指さないといけないのか！」「なるほど、思っていたのと違う！」と活動内容そのものや、活動の目的に関して「はっ」とさせられたこと、考えさせられたことを書きましょう。（４００字を目安に）

・私は、wwlc の講習を受けていれば自然とプレゼンの能力や情報処理の能力が身につくのではないかと思っていました。また、今までは、授業外での学びについて興味を持っても、共有する相手が居なかったし、実際に行動を起こすまでに繋がっていませんでした。ですが、実際に参加しているうちに、自分の成長は、自分がどれだけこの講習を活かすことができるのかにかかっているとわかり、必修科目や上限が決まっている課題ではなく、自分が学んだことや興味のある事を探究する大変さを知ると同時に、その楽しさを知ることができました。wwlc の授業を受けていて一番実感したことは、いろいろな立場から複数人の意見を聞くことにより、学びが深まっていくことです。効率よく作業するために一人一人に役割分担する、というのではなく一つ一つ丁寧に価値観や考えをグループで共有していろいろな側面から見るという、一つの結論を出す為の過程を学び、身につけることができました。
・私は今まで、「教育が一番ではなく、SDGs の全ての問題について考えなければいけないと思うようになった」という結論を出して終わっていました。しかし、私たちの考えの変化をふまえた上で私たちに具体的に出来ること、また、私たちが元々問題視していた「教育」という問題について具体的な解決策を考えていかなければいけないということに気付かされました。先生のアドバイスには、あれ、ここ私たちが伝えたかったことと違う解釈で捉えられているな。という部分が多くありました。私たちが理解しているだけでは伝わっていないこともあります。聞いている人たちがどう感じるか、どんなことを疑問に思うか、ということを考える必要があることを知りました。また、他のグループの発表を受けて、高校生にできる具体的な策を考え、実行する事の難しさを改めて感じました。高校生というまだまだ自立できていない人間が、社会全体にどう影響を与えていくことができるか、考えていく必要があると思いました。

設問２：【問題点の克服】
現状の問題点を把握した時に、自分なりの解決方法とはどのようなものでしょうか。まずは、取り組みの中で「問題点」となっていることを挙げ、それに対して自分がどのように工夫して克服しようとしたか、しているかを書きましょう。（４００字を目安に）

・中間報告会をして問題点だと思ったことは３つあります。一つ目はなぜ「貧困」という問題に興味をもったのかというきっかけの部分が少なかったことです。少なかったというより、いきなり UCC の説明から入っていてなかったです。プレゼンの大きなつながりの一番大きな目標が「貧困改善」なのにきっかけを話さなかったことが原因で、「私たちができること」で話した「SDGs の認知度を高めること」が目標と感じられるプレゼンとなってしまっていました。だから、次はプレゼンの繋がりを考えて、きっかけ、目的を話す時間を増やしていきたいです。二つ目はグラフなどのデータの使い方です。データを見せて話すときに「なに参照か」「どこの国」のデータかを伝えられていなく、信憑性、わかりやすさにかけていました。だから次からはデータを詳しく説明し、手やポインターを使っていきたいです。三つ目は話し方です。前のプレゼンでは原稿を読んでいるだけで気持ちが全く伝わってなかったと思います。次からは伝えたいところを強調したりしていきたいです。遅れてすみません。
・「地域」という言葉の使い方について、「地域住民」というように明確にしようと思います。

自分たちが感じたことも具体的な例を挙げて伝えたいです。西さんの言葉が多く、それに共感ばかりしていたのでその点でもっと自分はこう感じたなどの表現を取り入れたいです。その他、現地の人に聞いた話も例を使って表すことで聴衆に理解してもらいやすくしようと思います。ただし、その例は簡潔にして長くなりすぎないように気をつけます。また、スライドの工夫をもっとしたいです。例えば、写真を増やして文字を減らし、人目見て分かるようにしたり、イラストで暖かな雰囲気を作り出したりしたいです。態度としては、話すときに前を向いてなるべく声が通るようにし、自分が話していない時の態度も気をつけたいです。

資料１１：最終発表パワーポイント資料（生徒のサンプル：日本のこどもの貧困　子ども食堂「晴れるや」訪問）

資料１２：教員による中間発表の評価/フィードバック（例）

グローバル探究ＢＡＳＩＣ　中間報告フィードバック

発表グループ：	発表タイトル： Ｇ４：　ジェンダー平等～UFJ
メンバー：[redacted]	

【各項目に対する評価とフィードバック】

観点❶　FS先を訪問するにあたって、目的意識がはっきりとしているかどうか。	
A	どのような問題意識（きっかけ）でFS先を選定したのか、訪問の目的（何を知りたかったか）が明確である。
Ⓑ	FS先についての情報は明確に調べてあるが、問題意識との関係や訪問の目的との関係が見えにくい。
C	FS先についての情報が調べてあるだけで、自分たちが何を解決しようとして訪問したのかに触れていない。

■3 枚目　冒頭の、「『ジェンダー平等をどのように実現するかを調べるために』UFJ に話をきいた」からは、発表者が具体的にどのような観点からジェンダーの問題を捉えようと思いフィールドスタディに参加したのかが分からない。特に何を知りたいのかという問題意識をより明確に。5 枚目のところに説明が入るがわかりにくい説明にとどまっている。

□3 枚目　ブルームバーグ平等指数など、UFJ が FS 先の実績をを裏付ける基準を紹介してことは聞いている側からすると非常にわかりやすい。

■3 枚目　「ブルームバーグ平等指数」というキーワードを先にいわないと、長い説明が何なのかがわかりにくい。MUFJ と UFJ の言葉の使い方も統一した方が良い。

□3 枚目　発表者が伝えるように、UFJ は実績もあり、たくさんの情報と経験を持っている。今回お話を伺えた矢島さんのような最先端で活躍されている方と繋がれたのは、発表者の訪問先の目のづけどころの鋭さの結果である。

■4 枚目　「観点と問いをいう前になぜジェンダー平等に興味を持ったのかを話すと」は、矢島さんとのやり取りの中で話したのか、聴衆に対して今話そうとしてるのかが不明確であり、同時に、医学系の大学の話が矢島さんの話なのか、発表者の話なのかが聞いている側には一瞬分からなくなる。（自分たちの興味のきっかけについては始めに持ってきた方がわかりやすいかもしれない）

□5 枚目　ジェンダー平等に興味を持ったきっかけとして、具体的なニュースをあげていることは問題点を示すことで聴衆に発表者の思いが伝わりやすい。

■5 枚目　「なぜこんなに女性が差別されなければならないのか」という疑問から、なぜ「平等の基準」という問題が設定されたのかがつながらない。また、ダイバーシティについて初めに一切触れずに途中で突然出てくることには違和感があるため、題名に含むのであれば初めに説明をしておく必要がある。

□5 枚目　「平等の基準」という観点は発表者が様々に考察した結果生まれた興味深いものであるが初めてこの言葉を聞く者にとっては少し想像しづらくもあるため、具体例を挙げてみると良いかもしれない。

■5 枚目　それぞれの「平等」の違いをどのようにまとめていくかを聞いてみたい…何を意味しているのかがよく分からない。

観点❷　施設設立の目的や今抱えている問題点について理解することができているかどうか。	
A	現場の人たちの持つ「課題」について、現場の人たちが具体的に「何を語ったか」が明確である。
B	現場の人たちが持つ「課題」について説明できているが、現場の人たちの「声」が見えにくい。
Ⓒ	FS先の人たちの大変さについて訪問者として感想を述べているだけである。

■6 枚目　①矢島さんから見て世界の企業、国の政策は完璧なのか？の質問に対する矢島さんの答えは、企業や政策について触れられていないので説得力がない。さらに、「完璧」とは何を意味するのかが不明確。②今の日本では声を上げやすい環境作りはできているのか。「何の声」なのかが不明確なため、育児介護休業法が出

てきたことは突然に感じる。セクハラ、DV、シングルマザーに対する話も出てきて一気に盛りだくさんなので、問題意識の低さの問題なのか、環境づくりの問題なのかが見えない。③この企業でのジェンダー平等を達成していく上でのゴールとは、数値的な目標のことを指すのか、それを達成した先にある企業のイメージ（矢島さんの思いとつながる部分という意味で大事）を指すのかが不明確。④同じく数値的な者であるならば、③の質問との違いは何なのかがわかりにくい。なぜ実際の数値目標を達成できていないのかについても聞き出すことができれば、ジェンダー問題へのさらなる理解につながる。

□7 枚目　身近なアニメを例に問題を示すことはわかりやすくて効果的である。

■7 枚目　アニメに見る日本の特徴について、なぜこの話が突然出てきたのか、文脈が見えにくい。また、ここで問題となっているテーマは何なのか？長男という設定についてであれば日本の家制度の問題。ダイバーシティの中でも、ドラえもん、クレヨンしんちゃんの問題の切り口が何なのか伝わっていない。単に「不思議な文化」でまとめているが　この矢島さんの説明を自分たちはどのように受け止めたのか。「～だそうです」は完全な引用表現である。

■8 枚目　全体的に、スライドの内容が前半部分の発表内容と一致していない。

■8 枚目　ジェンダーの問題からダイバーシティという考え方への内容の飛躍があり、聞いている側がついて行きづらい。また、「LGBT、女性男性というところの社会の組み合わせを考えた結果ダイバーシティとなっているらしい」のところは説明の意味が分からない（言葉の問題）。

■8 枚目　50 代、60 代が危険な偏見を持っているかもしれないと考えたことが唐突で、そのように考えた理由が分からない。（これは自分たちの考えなのか矢島さんの考えなのか？）また、発表者が「お父さんの世代」と、労働の場を男性に限定していることにジェンダーバイアスを感じた。さらに、長時間労働の発想を危険な偏見ととらえているのは誰であるのか。割合が多いのは確かだとする根拠が必要である。

観点❸　次のステップに向けたアクションプランに関して適切なビジョンを持てているか。	
A	当該テーマについて何ができるのかが具体的であり、それが実現可能であることを証明できている。
B	当該テーマについて何ができるのかが具体的に示されているが、それが実現可能であることが証明できていない。
Ⓒ	何ができるのかが抽象的であり、それが該当テーマとどう関連しているのかがはっきりしていない。

■8 枚目　自分たちにできることは 1 つしかないというが本当にそうなのか。矢島さんがそういったからそう考えているのではないか。大切なのは「女子だから、男子だから問い固定概念に気づいたときにやめていく」ことができるように、自分たちが、周りがそうなるようにどのように働きかけるのかではないか。一番早くジェンダー平等に近づくという矢島さんの意見について、発表者がどう考えるのかは伝わらない。

■9 枚目　「関西学院の枠」という言葉を使う意味がよく分からない。友達間であれば「関西学院の枠」ではないように聞き手は感じるし、個人から自然に広がるのならば「枠」を設定する意味は何か。（関西学院の中に、特に気になるジェンダーバイアスなどがあるのか？）また、自然と周りに広がっていくということは、自分たち個人が意識を変えればあとは何もしなくても大丈夫ということのようにとらえられる。

■9 枚目　きっかけ作りのための人権プログラムとあるが、それは自分たちのアクションではなく学校のカリキュラムである。ここで再度ダイバーシティという言葉が出てくるが、

■9 枚目　ジェンダーの問題にフォーカスして取り組んできた FS や発表内容から考えると、最後に「完璧な平等」（それがとても理想的なものであるとしても）を呼びかけるには発表や調査の内容が追いついていない。また、「みなさんで頑張っていきましょう」は、今回の発表の趣旨から考えると締めくくりとしては少しずれているように感じる。報告は全体に、あくまで自分たちを主体で、経験や学び、思いを伝えるものである。

【教員からのフィードバック統括】

文中でも記述しましたが、UFJ の矢島さんからは非常に幅広く的確な情報を収集できる機会であり、確かに

資料１２：教員による最終発表の評価/フィードバック（例）

グローバル探究ＢＡＳＩＣ　最終発表フィードバック

発表グループ：Ｇ２	発表タイトル：子どもたちと「学び」　大阪ユニセフ協会

【各項目に対する評価とフィードバック】

観点❶　FS先を訪問するにあたって、目的意識がはっきりとしているかどうか。	
A（６点）	どのような問題意識（きっかけ）でFS先を選定したのか、訪問の目的（何を知りたかったか）が明確である。
○B（４点）	FS先についての情報は明確に調べてあるが、問題意識との関係や訪問の目的との関係が見えにくい。
C（２点）	FS先についての情報が調べてあるだけで、自分たちが何を解決しようとして訪問したのかに触れていない。

□■２枚目　２人がテーマに関心をもつ入り口の部分は分かりました。ただ、WWLC で得た学びの「親の社会的地位が子どもの将来に影響する」「教育を受けられない子供たちが３億人」というのは具体的に何を背景とした知識、データなのかの説明がもう少し必要であると感じます。そのため、扱うテーマの深刻さがあまり伝わらないです。

□４枚目　ユニセフの組織図はいかにここが大きい団体かであるのはよくわかりました。

■４～６枚目　ユニセフの大枠の紹介があって最後の最後、「～ということからユニセフを選びました」とあります。ここまで１分４０秒かかっています。「私たちが選んだのはユニセフで、それは…」と冒頭部分でまずこれから説明することを一言述べてからの方が聴衆は安心して聴けます。

□７枚目　大阪ユニセフ協会を訪れた理由が分かりました。「教育と貧困」の活動は行われていないものの、出前授業をされているので「取り組まれている人たちの教育に関する知見を聞く」という訪問目的は、自分たちになりに妥協点を見つけながら、自分たちの関心と重なる場所を見つけた、というプロセスがよく分かりました。

□■８枚目～　「私たちができること」を最終的に二人が考えて提案するために、そこで働かれている人々の「教えることに対する思い」を調査しに行った、そうすることで「私たちができることに」について何かアイデアが生まれてくるのではないか、という流れはなんとなく理解できます。ただ、聴衆の理解のために、このストーリーをもっとはっきりと示しておく必があります。

また、問い２、問い３については二人の目的と合致していると思いますが、問い１の情報については、皆さんの「私たちができること」とどう関係しているのかが不明確です。

観点❷　施設設立の目的や今抱えている問題点について理解することができているかどうか。	
A（６点）	現場の人たちの持つ「課題」について、現場の人たちが具体的に「何を語ったか」が明確である。
○B（４点）	現場の人たちが持つ「課題」について説明できているが、現場の人たちの「声」が見えにくい。
C（２点）	FS先の人たちの大変さについて訪問者として感想を述べているだけである。

□12 枚目～　問１の答えであることを明確に項目ででも示してほしかったですが、答えははっきり得ることが出来ましたね。

□14 枚目　これも問２の答えであることを示してほしかったですが、「ささいなきっかけで意識が変わる」という発見は貴重な学びですね。

■15 枚目～　問３の答えにいくことなく、いきなり「現地の人の課題」を説明していますが、それはなぜです

か？問いに答えていく中で、あるいは問いに対する答えを総括する形で「現地の人の課題」を説明したほうが分かりやすいと思います。調査したからこそ分かったことですから、調査のまとめになりえると思います。要は、情報の提示の順番に工夫が必要だった、ということです。

■□17 枚目　問３の答えはどこにいってしまったのでしょうか。自分たちがアンケートをした目的と得た結果と、職員の人たちへの問いと、職員の人たちからの回答、が口頭でもスライドでも整理されていませんでした。ただ、職員の人たちが語ってくださって得られた結果の内容（分野を特定するのではなく、広い視野でもって関わる、また教育は全てに関わるから全てを同時に考えるという結論）については面白いと思います。

観点❸　次のステップに向けたアクションプランに関して適切なビジョンを持てているか。	
A（６点）	当該テーマについて何ができるのかが具体的であり、それが実現可能であることを証明できている。
B（４点）	当該テーマについて何ができるのかが具体的に示されているが、それが実現できることが証明できていない。
C（２点）	何ができるのかが抽象的であり、それが該当テーマとどう関連しているのかがはっきりしていない。

■　18 枚目　HR でのゲームというのは具体的（内容、時期など）にはどういうものですか？
海外派遣プログラムの学校側からの案内を増やす、ということに、２人はどのように関わるのですか？先生に何かを頼む、ということですか？具体的なものが見えません。

■□19 枚目～日本からの支援でできることについて、海外への物資寄付と、教科書作成挙げています。
他団体と連携することは良いと思いますが、それはどのような団体ですか？　識字率の問題を提示していますが、調査したこととこの関係はどのようなものでしょうか。また、教科書を英語で作成することについて、今海外などで使われているものではなく、自分たちで一から作るというのは相当な努力と時間が必要だと思いますが、そのあたりはどうなのでしょうか。具体的なプランとしては詰めないといけないことがかなりあると思いますが、内容が見えませんでした。

■　18 枚目と 19 枚目以降に提示されたアクションプランの関係が良く分かりません。１９枚目以降については単純に付け足したのか、識字率の問題や海外への物資寄付はユニセフを訪れたことによってどう生まれてきて、どの問題を解決しようとしているのかが不明確です。どちらかというと発表の流れの中では 18 枚目が流れに沿った解決になっています。ここのプランをもっと具体的に示せばよかったのだと思います。

観点❹　視覚資料に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。	
A（６点）	スライドの構成が導入、展開、結論と全体を通して論理的にまとめられており、文字のフォントやグラフ・図が効果的に用いられている。
B（４点）	スライドの構成において結論に向けての論理的な展開が見えづらく、グラフ・図の効果も十分に活かされているとは言えない。
C（２点）	スライドに情報が羅列されているだけで、結論とそれ以外の部分のスライドとの関連性が見えない。

□文章にしすぎず，見やすく簡潔にまとめられていたと思います。

▪自分たちが立てた問いと、それに対して自分たちが得た回答が対応するスライドであればよかったと思います。

観点❺　発表の仕方に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。	
A （6点）	発表者の声量や視線からこの課題に対する熱意が感じられる。
B （4点）	発表者の声量や視線がこの課題に対する熱意を十分に感じさせるものとは言えない。
C （2点）	情報は伝達できているが発表者の声量や視線に自信が感じられない。

■聴衆をみる時間が短かったように思います。もう少し iPad から顔をあげましょう。

□二人ともはきはきとしゃべっており、しっかり用意してきた、という気持ちはすごく伝わりました。

【教員からのフィードバック総括】

前回指摘をした内容から改善した部分がたくさんありました。問いの提示の仕方やユニセフの紹介、自分たちの関心からどうしてユニセフを訪れたのか、そしてどういう結果を得たのか、という一連の流れは、とてもよくなっていました。また、２人の話し方は大変明瞭です。これは大きな武器だと思います。

アクションプラン部分で求められていた大事な観点は、「具体性」「実現可能性」です。アイデア自体は良いものですが、それらを２人が形にしていくしっかりとした道筋が見えなかったのが残念でした。自分達だけでなく、他者も巻き込んでアクションをすることが多いです。となると、他者に納得してもらって協力してもらうには、「具体性」「実現可能性」は欠かせませんし、２人の「アツさ」も必要になってきます。２年生になって、さらに磨きをかけていってください。１年間、本当にお疲れ様でした！

【１学年全体プログラム　「ソーシャル探究」について】

全体の流れ
SDGs に関わる社会問題を学び（動画・インターネット)→自ら考え（ワークシート、iPad を使って情報収集)、→シェア（プレゼンテーション）

3 学期　全４回
HR（20 分)、コミュニケーション英語（２コマ)、3 月の登校日（1 時間）

① YouTube(SDGs)、ワークシート（HR 20 分）
② ワークシート続き、クラス内発表準備（コミュニケーション英語の授業）
③ クラス内発表（コミュニケーション英語の授業）
④ 3 月 10 日（水）全体発表会（9 グループ）
　WWLC 代表発表（2 グループ）

プログラム内容
3 学期に HR とコミュニケーション英語の授業時間に『ソーシャル探究』プログラムを行った。SDGs の 17 の目標の中から『地球温暖化』『水問題』『ジェンダー』等の社会問題をピックアップし、グループで iPad を使用しながら情報を収集し、各クラスでプレゼンを行い、各クラスの代表グループが全体会でプレゼンテーションを行った。

■「ソーシャル探究」授業を通して様々な成果を感じることができた。まず、本授業を進めていく中で、「グローバル探究 BASIC」受講生のレベルの高さ、もしくは探究授業の可能性を大きく感じた。自分たちが学んできたことを誰かに伝えるという作業は、自らの学びを振り返り、さらに深める意味でも大きな意味を持つ作業であることを再認識した。次に、生徒たちの社会問題に対する意識の高さである。今回、学年全体を対象とする上で、探究授業の初学者でもわかるように、取り組みやすさ、入りやすさを非常に気にしながら授業を作ったが、実際にやってみると、もっとやりたかったという意見を多く聞くことができた。今年は、HR の時間が他のプログラムと重なったこともあり、時間的な余裕がなかったが、より多くの時間をかけて取り組むことの必要性を感じた。自ら学び、それを伝える中で、新たな疑問を持ちさらにリサーチすることが探究授業の効果であり、その成果を大きく感じた。アクティビティの中にグループワークを取り入れることで、より多くの生徒たちがプログラムに積極的に参加することができた。また、ICT 技術を活用することによって、より幅広い活動が可能となった。

関西学院高等部１年　３学期　WWLC 学年全体プログラム

ソーシャル探究ワークシート

組　　番　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

Ⅰ．ロイロカードで配信されている「ソーシャルイシュー集」を読んで、自分が一番興味のあるソーシャルイシュー（社会問題）を選んで、〇をしよう！

	「食品ロス」とは？
	「食料自給率」とは？
	「再生可能エネルギー」とは？
	「安定したエネルギーの供給」とは？
	「温暖化現象」とは？
	「異常気象」とは？

Ⅱ．そのソーシャルイシューにあなたが興味を持ったのはなぜですか？その理由を書いてみよう！

Ⅲ．興味の持ったソーシャルイシューに関する記事の中で、一番気になったこと、関心をもった部分を記事の中から抜き出してみよう！

Ⅳ．興味を持ったソーシャルイシューは、今後その問題がより深刻になった場合、あなたやあなたの周りにどのような影響を与えるでしょうか？その問題が今後もっとも深刻な状況に陥ったと仮定して、自分の生活にどんな影響が出るか、予想されるものをすべて書いてみよう！

Ⅴ． SDGs の掲げる 17 の目標の中で興味のあるソーシャルイシューを３つ挙げてみよう！
SDGs の１７のどの項目に当てはまるかも考えよう。（複数回答可）

SDGs 番号（複数回答可）	ソーシャルイシュー(食の欧米化、パリ協定、オイルショックなど)

Ⅵ． iPad を使って、上記のソーシャルイシューから一つピックアップし、その問題に関連する具体的な内容を
調べてみよう！（グループ）

Ⅶ. iPad を使って、上記の問題に関連する最近のニュース記事を２つ探してみよう！（グループ）

タイトル： URL：
タイトル： URL：

Ⅷ． 上記のソーシャルイシューについて、その問題を解決するプランを、次の条件でそれぞれ考えてみよう！
（グループ）

もし、お金や労働力等、一切の限界がないとすると、どのような解決策がありますか？
もし、高等部全体でそのソーシャルイシューに取り組むとすると、どんな解決策がありますか？
あなたが明日からすぐできる解決策は、どんなものがありますか？

お試し版

目標2 飢餓をゼロに

キーワード 2-1 「食品ロス」

「食品ロス」とは？

捨てられた食品のうち，食べられる部分が残っているもののこと。世界全体で毎年約13億トンもの食品ロスが発生しており，食料の偏在や環境への負荷，経済悪化への影響が問題視されている。

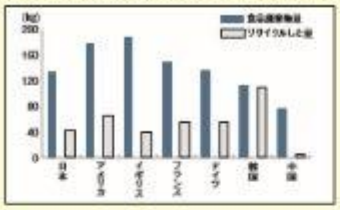
600万トンを超す，食べ物のムダづかい

Qちゃんは日本でどのくらい食品ロスが出ているか知っている？**年間で約646万トン**も出ているんだって！**国民一人あたり，年間50kgも食べられるものを捨てている**みたいだよ。言われてみると，賞味期限が切れてしまったお菓子とか，傷んでしまった野菜をたくさん捨てている気がするよ。

その話，この間ニュースでやっていたよ。**食品ロスの半分は家庭から出ている**んだって。でも，無理に賞味期限が切れたものを食べるわけにもいかないし，どうすればいいんだろうね。それに，残りの半分は企業から出ているんでしょ。どんなタイミングで食品ロスが出ているんだろう。

コンビニやスーパーは売れ残った食べ物を捨てているけど，これも食品ロスなのかな。作る過程でも，作り損なった商品は捨ててしまっていると思う。でも，**品質や安全には代えられない**し…。どうやって対策すればよいんだろう…。

2015年度 国別の食品廃棄物量・リサイクル量



※農林水産省「海外における食品廃棄物等の発生及び再生利用等の状況」をもとに作成

Tちゃん，左の図を見て。こんなグラフがあったんだけど，食品廃棄物を出している国が多いみたい。でも，その分たくさんリサイクルしている国があるね。**食べ物のリサイクルって，どうやって行っているのだろう**。たくさんリサイクルしている国は，リサイクルのルールや仕方が違うのかな。

料理をするのにガスや電気が欠かせないように，食べ物を作るにはたくさんのエネルギーが必要じゃ。ゴミとして廃棄する際も，適切に処理しないと有害な物質を生み出してしまうことがあるから，コストをかけてきちんと処理しないといけないのじゃ。このように，食品ロスは環境にも経済にも悪影響を与えているのじゃ。また，日本はたくさんの食べ物を海外からの輸入に頼っておる。わざわざ外国から大量に輸入してきて，それを捨ててしまっているのだとしたら，問題だと思わんかな。

調べるとさらに広がる！ 関連キーワード：食品廃棄物／食品リサイクル法／賞味期限・消費期限／フードバンク／ドギーバッグ

興味のタネ（課題になりそうなこと）：気になる用語やトピック，内容を自由に記入しよう。

「リサーチガイド集」で調べてみよう！

お試し版

目標2 飢餓をゼロに

キーワード 2-2 「食料自給率」

「食料自給率」とは？

食料自給率は，国内で消費される食料をどれだけ国産でまかなえているかを表す指標。日本の食料自給率は先進国の中でも低く，多くの食品を外国からの輸入に頼っているのが現状だ。

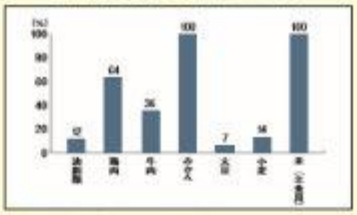
納豆は国産でも，大豆は外国産？

ねぇQちゃん，日本の食料自給率が低いって話，聞いたことある？食料自給率って，国産の食べ物をたくさん食べれば上がるんでしょ。じゃあさ，みんなが**国産の食材だけを食べれば簡単に上がる**ってことなんだよね。どうなのかな。

うーん，それだと外国でしか作っていない食べ物は食べられないよ。日本で作っている食べ物も，そんなにたくさんあるのかな。**足りないから，外国から輸入している**んでしょ。無理に国内の食材だけを使うことにしたとして，本当にお腹いっぱい食べられるのかな。

今調べてみたら，大豆や食用油はほとんどが外国産みたい。でも，国内にも大豆の名産地があるし，納豆は大豆の加工品だよね。なんで納豆は国産品が多いのに，大豆は外国産が中心なんだろう。**昔からなじみのあるものなんだし，国内でたくさん作っていてもおかしくない**と思ったんだけど。なんでこんなに食料自給率が低いのかな。

品目別の食料自給率（2017年）



※農林水産省「日本の食料自給率」をもとに作成

品目によって，食料自給率が高い，低い理由があるんだろうね。日本はすでにたくさんの食べ物をほかの国から輸入しているけど，それってほかの国の農業にも大きな影響を与えているってことだよね。それも考えないと。ところで，**食料自給率はどのくらいが理想なんだろう**。ほかの国はどうしているのかな。

日本の食料自給率は，カロリーをベースにした計算で約38%。一方で，カナダは264%，オーストラリアは223%と，日本の何倍もの自給率を誇る国だってあるんじゃな。ところで，食料自給率には「生産額」をベースにした計算方法もある。この計算方法だと，カナダは121%，オーストラリアは128%，日本は65%となる。日本の食料自給率がグンと上がって，ずいぶん差が縮まるのう。なぜ二つも計算方法があるんじゃろう。それに，なぜ全然違った数字が出てくるんじゃろうなぁ。

調べるとさらに広がる！ 関連キーワード：カロリーベース／生産額ベース／食の欧米化／フードマイレージ／食料安全保障

興味のタネ（課題になりそうなこと）：気になる用語やトピック，内容を自由に記入しよう。

「リサーチガイド集」で調べてみよう！

目標7 エネルギーをみんなに，そしてクリーンに

お試し版

キーワード 7-1 「再生可能エネルギー」

「再生可能エネルギー」とは？

石油・石炭などの「いつかなくなる」エネルギーに対して，太陽光，水力，風力，地熱など自然界に常に存在する「なくならない」エネルギーのこと。利用時に二酸化炭素を出さないという特徴もある。

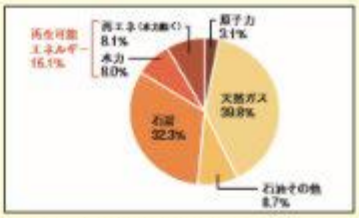
発電電力量が6分の1の暮らしを想像しよう

へえ～，「再生可能エネルギー」って，いくら発電しても資源がなくならないんだ。すごいな。どんどん導入しようよ。全部の建物の屋根に太陽光発電装置をつけたり，空き地に風力発電装置をつくったりしたら，日本の発電電力量をそっくりまかなえたりして。

そんなにうまくいくかな。そもそも装置を全部につけるのは無理だよ。それに太陽光発電装置は雨や曇りの日は役に立たないだろうし，風力発電装置だって風のない日は動かないでしょ。

あっ，日本の発電電力量の内訳データを見つけたよ。**再生可能エネルギーは，水力発電を入れて16.1%，全体の約6分の1**か。これはほかの国と比べて高いのかな，低いのかな。日本の電気を全部まかなうには，発電電力量を6倍にする必要があるということだね。
逆にもし今すぐ，**再生可能エネルギーだけで暮らさなきゃいけないとしたら，どんな生活にすれば実現可能**だと思う？

発電電力量に占める割合（2017年）

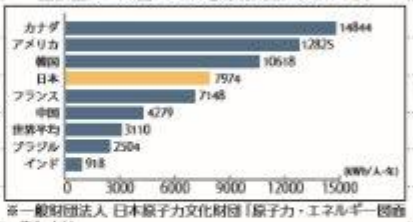


※資源エネルギー庁「なっとく！再生可能エネルギー」より

テレビ，スマートフォン，照明，エアコン…，何から節約すればいいんだろう。
いや，でも，電気を使う量を現状の6分の1にしなきゃいけないんだから，そんな身近な努力だけじゃ限界があるよね。大きく電力消費量を減らすには…うーん，日本の電力って，何に使われてるんだ？

そもそも，日本人が持続可能な生活をするには，どれくらいの電力を使うのが適切なんじゃろうか。一人あたりの電力消費量を見てみると，日本は主要国の中では4番目。世界全体の電力の4%を消費しておる。消費量が多い国と少ない国には，使い方や発電方法にどんな違いがあるんじゃろうな。

主要国の一人当たりの電力消費量（2016年）



※一般財団法人 日本原子力文化財団『原子力・エネルギー図面集』より

調べるとさらに広がる！ 関連キーワード

パイオマス／発電コスト／固定価格買い取り制度（FIT）／パリ協定

興味のタネ（課題になりそうなこと）

気になる用語やトピック，内容を自由に記入しよう。

「リサーチガイド集」で調べてみよう！

目標7 エネルギーをみんなに，そしてクリーンに

お試し版

キーワード 7-2 「安定したエネルギーの供給」

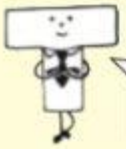
「安定したエネルギーの供給」とは？

人々が日常生活や経済活動を滞りなく行うために，十分なエネルギーが途切れずに供給される状態。必要なエネルギーは国や環境によって異なる。日本の場合は電気，ガス，ガソリン，灯油など。

日本は停電に何時間まで耐えられる？

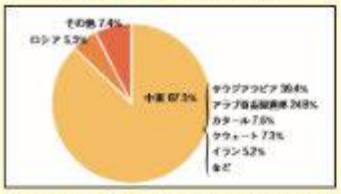
昨日の停電はびっくりしたね。スマートフォンはつながったから，インターネットで調べたらこの辺りだけの停電だってわかったけど，もし何かの事情で**日本全域が1時間停電したら，どんな影響が出るだろう。**考えてみると，生活って24時間365日，電気が供給されることを前提に成り立ってるよね。

そうだね。もし何かの事情で電気が使えなくなったら，それ以外のエネルギー，例えばガスやガソリン，石油だけで生活を成り立たせることってできるんだろうか。やっぱり電気が一番大事なのかな。



電気にしても，それ以外のエネルギーにしても供給が止まったら，きっとそれぞれ困ることが出てくると思うよ。常に使えるためには原料を確保しておかないといけないね。電気の原料って，今のところほとんどが石油や石炭とかの地下資源なんでしょ。ガスも地下資源だよね。石油はいつかなくなるって聞いたけど，いつまでもつのかな。

日本の原油輸入先（2017年度）



※一般財団法人 日本原子力文化財団「原子力・エネルギー図面集」より

確か，日本ではそういう資源はほとんど採れなくて，輸入してるんだよね。
左図によると，原油はほとんど中東の国・地域から輸入してる。そもそも遠いから輸送も大変だろうし，原油以外の資源も含めて，**エネルギーの供給が途絶えないような対策**ってされてるのかな。

世界のエネルギー事情に目を向けてみるとどうじゃろう。エネルギーは足りるんじゃろうか。もし不足しそうなら，エネルギー源の開発が必要じゃ。それでも足りないときは各国にうまく配分せんといかん。どうやって決めたらよかろうなぁ。自分の国にどれくらいエネルギーがあれば，「足りている」と言えるんじゃろう。

調べるとさらに広がる！ 関連キーワード：エネルギー自給率／オイルショック／国際エネルギー機関（IEA）／エネルギーミックス

興味のタネ（課題になりそうなこと）：気になる用語やトピック，内容を自由に記入しよう。

お試し版

目標13 気候変動に具体的な対策を

キーワード 13-1 「温暖化現象」

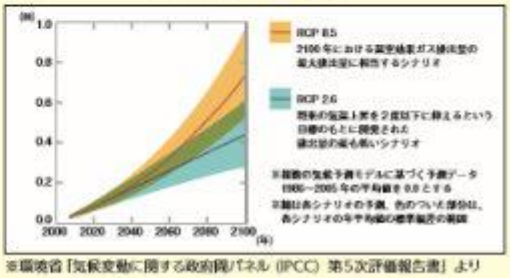
「温暖化現象」とは

世界の平均気温は1880～2012年の期間で0.85度上昇している。1900年代半ば以降の温暖化は，工業化等に伴う二酸化炭素濃度の増加によるものであることがほぼ確実で，早急な対策が求められている。

温暖化現象が南の国を沈める？

温暖化現象が及ぼす影響の一つに，「海面の上昇」があると聞いたから調べてみたよ。
この予測によれば，**悲観的なシナリオだと60～80年後には最大82センチ，温暖化対策がうまくいった場合のシナリオでも25センチ以上，海面が上昇する**んだって。標高が低い場所は，水没してしまうかもしれないよね。日本は大丈夫なのかな。

世界の海面水位の上昇予測



※環境省「気候変動に関する政府間パネル（IPCC）第5次評価報告書」より

うん，日本も心配だけど，南太平洋の島国であるキリバスやツバルはもっと差し迫っているらしい。**海面の上昇が進んだら人が住めなくなる恐れがあるから，住民の移住を考えている**と聞いたことがあるよ。そうなったときの受け入れを表明した国もあるんだって。

国が沈むかもしれないなんて本当に大変なことだよ。二酸化炭素を排出してきた先進国の一員として，温暖化現象を食い止めるために自分でできる範囲のことをやろうと思うよ。

同じ気持ちだよ。でもさ，これだけスケールの大きな問題だよ。関心を持つ一部の人が個人レベルで取り組むことに，どこまで温暖化現象を防ぐ効果があるんだろうか，とも思ってしまうんだ。二酸化炭素の排出量を一気に減らせるようなよい対策，ないのかな。

温暖化対策が難しい理由の一つは，二酸化炭素排出量の減少と経済成長が簡単には両立しないからじゃ。この両立をめざそうと各国は工夫を重ねている。政治の面では，例えば「炭素税」という，化石燃料に課税する方法がある。日本でもこれに近い「地球温暖化対策のための税」が導入されておるな。科学技術の面では，「CCS」という二酸化炭素を地中に埋める技術が日本を含め世界で試みられておる。これらの効果，メリット・デメリットはどんなものじゃろう。ほかにも効果的な対策はないかな。

調べるとさらに広がる！ 関連キーワード：IPCC（気候変動に関する政府間パネル）／パリ協定／環境難民／環境税／CCS・CCUS

興味のタネ（課題になりそうなこと）：気になる用語やトピック，内容を自由に記入しよう。

お試し版

目標13 気候変動に具体的な対策を

キーワード 13-2 「異常気象」

「異常気象」とは

気象庁は「過去30年の気候に対して著しい偏りを示した天候」，世界気象機関は「平均気温や降水量が平年より著しく偏り，その偏差が25年以上に１回しか起こらない程度の大きさの現象」と定義している。

異常気象が「異常」でなくなる？

すごい雨だね。A県で今の時期にこんなに雨が降るのは20年ぶりなんだってさ。
このところ「○年ぶりの異常気象」なんてニュースをよく聞くから，気象庁のホームページで調べてみたんだ。異常気象っていうくらいだから珍しいのかと思っていたら，**日本でも世界でも毎月何件も発生している**みたいで，ちょっと驚いたよ。「異常」といえなくなっているのかな。

2018年に起きた異常気象（抜粋）

モンゴル南西部～中国北西部	低温（1，9，12月）
北日本～中国北西部	高温（3～8月）
東日本～西日本	大雨（6～7月）
インド	大雨（6～9月）
ヨーロッパ中部及びその周辺	少雨（2，5～11月）
米国北東部～南部	多雨（2，5，8～12月）
オーストラリア南東部	干ばつ（1～9月）

※気象庁「世界の年ごとの異常気象（2018年）」より

それは異常気象が増えているってことなんだろうか。過去の発生件数と比べてみたいね。数だけではなくて，「異常」の種類や度合いについても，昔と比べてどうなのか気になるよ。もし件数が増えていて，度合いも深刻になっているとしたら，人間の活動のせいなのかな。

どうだろう。気象って様々な条件が複雑に絡んでいるし，地球の歴史に比べたら数十年なんてごく短い期間だから，簡単に「○○が原因」「過去に例がない深刻さ」と結論づけるのは難しいと思うよ。ただ，**こうした気候変動に地球温暖化が関係していると考える専門家は多いみたいだ。**

原因が特定できないとすると，予測は難しいのかな。
いずれにせよ，異常気象によって被害も出ているわけでしょ。原因がすぐにわからないとしても，対策はしておきたいよね。日本や世界ではどんな対策がなされているんだろう。

国連によると，1978～1997年の気候変動による経済損失額は約100兆円だったのに対し，1998～2017年は約252兆円と，約1.5倍になったそうじゃ。損失額が大きい気候災害はどんな種類のもので，損失額が増えた理由はなんじゃろうか。また，同じくらいの台風，同じくらいの暑さでも，場所によって被害の大きさは異なると考えられる。何が違いを生むのじゃろう。

調べるとさらに広がる！ 関連キーワード：ブロッキング現象／テレコネクション／ヒートアイランド現象／気象災害／異常気象分析検討会

興味のタネ（課題になりそうなこと）：気になる用語やトピック，内容を自由に記入しよう。

「リサーチガイド集」で調べてみよう！

【研究内容２の具体的な内容とその評価】
＜探究型カリキュラムの開発のために＞

科目	AI 活用	学年	2	単位	2
活動の目標	１．AI 活用人材を育成する ２．AI を活用して、SDGs の各課題を解決する手法を学ぶ				
教材	自作プリント・学びの記録シート・iPad (Classi / ロイロノート)				
留意点	１．AI に関するプログラミングや理論等を学ぶだけではなく、それらをどのように活用して社会的課題を解決するかという活用の点に重点を置いて進めるように教員は留意する。				

＜スケジュール＞
・休校期間はオンラインによる解説と課題配信のみ。
　オンライン授業期間は 40 分授業。通常授業期間は、45 分間×2 コマ。

休校期間フェーズ 「導入」 ・「AI を活用する」ことへの導入 【課題の設定】	課題 1 ｸｰﾙ	スタディサプリ「講義動画」にある「WWL オンラインコンテンツ」AI 活用入門講座第 1 回から第 5 回を視聴し、問題に解答してください。
	課題 2 ｸｰﾙ	スタディサプリ「講義動画」にある「WWL オンラインコンテンツ」AI 活用入門講座第 6 回から第 10 回を視聴し、問題に解答してください。
	課題 3 ｸｰﾙ	スタディサプリ「講義動画」にある「WWL オンラインコンテンツ」AI 活用入門講座について、各自自分が担当である回（全員が 10 回のうちの 1 回を担当）の内容をロイロノートのカード数枚にまとめ提出してください。カードの枚数は自由だが、各自 2 分間で発表できるようにまとめること。
第 1 フェーズ 「知る」 ・AI が社会の中でどのように活用されているかの具体例を知る ・グループワークやルーブリックについて知る 【課題の設定】 【情報の収集】 【整理・分析】	① 5/15	・ガイダンス：担当者あいさつ、授業のテーマ/ねらいの解説 ・「AI とコロナ」をキーワードに、コロナ感染症対策としてどのように AI が使われているかを調べる個人ワーク
	② 5/22	・ルーブリックについての説明 ・コロナ感染症対策としての AI 活用事例を 2 人 1 組でお互いにプレゼンテーションし、相互評価をするペアワーク
	③ 5/29	・コロナ感染症対策としての AI 活用事例について、5 人程度のグループ内でプレゼンテーションを評価しあうグループワーク ・コロナ感染症対策としての AI 活用事例の共通点を探す個人ワーク
	④ 6/5	・コロナ感染症対策としての AI 活用事例について、「店舗」「医療」「創薬」等のテーマごとに 9 つの班に分かれ、それぞれの活用事例についてまとめたプレゼンテーションの準備
	⑤ 6/12	・オンライン上でコロナ感染症対策としての AI 活用事例についてのグループプレゼンテーション①
	⑥ 6/25	・コロナ感染症対策としての AI 活用事例についてのグループプレゼンテーション）②
	⑦ 7/2	・コロナ感染症対策としての AI 活用事例についてのグループプレゼンテ

		ーション③
	⑧ 7/9	・AI とは何かについて、関西学院大学理工学部大学院生井手敦也先生の講義
	⑨ 7/16	・AI を用いた起業について、関西学院高等部国際交流アドバイザー五十嵐駿太先生の講義
第２フェーズ: AI の中身について知る ・AI のプログラミングについて知る ・AI を使ったビジネスの実例について知る 【課題の設定】 【情報の収集】 【整理・分析】	⑩ 9/3	・プレゼンテーションの手法について、関西学院大学高等教育推進センター時任隼平准教授の講義
	⑪ 9/10	・SDGs の各トピックについて、AI を利用してどのような解決ができるかグループワーク
	⑫ 9/17	・スタディサプリ「講義動画」にある「WWL オンラインコンテンツ」AI 活用入門講座について、その概要をまとめたグループプレゼンテーションの準備
	⑬ 10/1	・関西学院大学理工学部巳波弘佳教授にオンラインで参加していただき、スタディサプリ「講義動画」にある「WWL オンラインコンテンツ」AI 活用入門講座について、その概要をまとめたグループプレゼンテーション
	⑭ 10/8	・関西学院大学理工学部巳波弘佳研究室の方々にオンラインで参加していただき、AI プログラミングの実習①
	⑮ 10/22	・関西学院大学理工学部巳波弘佳研究室の方々にオンラインで参加していただき、AI プログラミングの実習②
	⑯ 10/29	・関西学院大学理工学部巳波弘佳研究室の方々にオンラインで参加していただき、AI プログラミングの実習③
	⑰ 11/19	・AI を用いた IT コンサルティングの実例について、株式会社アクセンチュアの藤井篤之さんの講義
	⑱ 11/26	・AI を用いた製品開発の実例について、新明和工業株式会社を訪問して講義
第３フェーズ：AI を使う社会的課題に対して、AI を利用してその解決を図る手段について考える 【課題の設定】 【情報の収集】 【整理・分析】 【まとめ・表現】	冬休みの課題	・生活上の困りごと（社会的課題）を AI を使って解決する製品のアイデアシート作成個人ワーク
	⑲ 1/14	・生活上の困りごと（社会的課題）を AI を使って解決する製品のアイデアシートプレゼンテーション（個人ワーク）
	⑳ 1/21	・テーマごとに 9 つのグループに分け、各グループで社会的課題を AI を使って解決する製品のアイデアシート作成ワーク
	㉑ 1/28	・テーマごとに 9 つのグループに分け、各グループで社会的課題を AI を使って解決する製品のアイデアシート作成ワーク続き
	㉒ 2/4	・関西学院大学理工学部巳波弘佳教授に参加していただき、社会的課題を AI を使って解決する製品のアイデアシートグループプレゼンテーションおよびブラッシュアップ
	㉓ 2/15	・社会的課題を AI を使って解決する製品のポスターグループプレゼンテーション
	㉔ 2/25	・WWLC３科目合同授業　ポスタープレゼンテーションコンテスト「各科目からの提言『平和構築の提言』

＜各フェーズの 1.目標 2.具体的活動 3.活動の評価方法 4.検証 5.今後改善すべき点について＞

休校期間フェーズ：【 導入 】

１．このフェーズでの目標

目標 1) AI とはどのようなものか、社会の中でどのように活用されているのかについて興味関心をもつ。

２．具体的な活動

① 第 1 クール：4/17(金)～4/23(木)

・授業のオリエンテーションとして、授業の進め方や評価方法、WWLC 関連授業の意義についてオンラインで伝えた。また、今後配信する課題について、説明とグループ分けを行った。

・以下の課題を配信した。

「スタディサプリ「講義動画」にある「WWL オンラインコンテンツ」AI 活用入門講座第 1 回から第 5 回を視聴し、問題に解答する。」

② 第 2 クール：4/24(金)～4/28(火)

・以下の課題を配信した。

「スタディサプリ「講義動画」にある「WWL オンラインコンテンツ」AI 活用入門講座第 6 回から第 10 回を視聴し、問題に解答する。」

③ 第 3 クール：4/29(水)～

・以下の課題を配信した。

「20 日のガイダンスで行った分担（オンラインで分担決定が無理であれば、校内グループで各自の担当を配信）に従い、各自自分が担当である回（全員が 10 回のうちの 1 回を担当）の内容をロイロノートのカード数枚にまとめ提出する。カードの枚数は自由だが、各自 2 分間で発表できるようにまとめること。

授業再開後に、発表を行う。」

3. 活動の評価方法

- このフェーズでの評価は、学校再開後の課題発表プレゼンテーションで評価するものとし、ここでは評価を行っていない。

4. 検証

- 目標の達成度・課題

・目標 1)について

対面での授業ができず、zoom によるオンライン説明のみでの課題となったが、生徒たちの発表を聞く限り、自分たちの様々な場所に AI が使われていること、思っているよりも身近な機器に AI が使われていることを気づいた模様である。AI というと、非常に難しく未来の技術と考えがちであるが、自分たちのすぐ近くまでもう来ているということにまず気づいてもらいたいと感じていたので、その点は達成されたと思うが、オンラインということもそこからディスカッション等でそれぞれの考えを深めていけず、ただ知るだけに終わってしまった部分は課題として残る。

5. 今後改善すべき点

・AI について学ぶことができる映像ソフトやホームページ等、可能であればオンラインでできるものを含めて、対面授業にこだわらず AI に触れるツールを準備しておく。

・「知る」行為の後には、発表もしくはディカッションの回をできるだけ早く入れて、その知った内容、知識をさらに深める授業構成で行う。

第 1 フェーズ：【 知る 】

1．このフェーズでの目標

目標 1) 新型コロナウィルス対策として、どのように AI が課題解決に利用されているか知る

目標 2) ルーブリックをもとにした、評価の手法について知る

目標 3) AI の歴史、AI とは何か、AI はどのように研究されているのかを知り、自分の言葉で説明できるようになる

2．具体的な活動

① 5/15(金)：zoom を用いた個人ワーク「AI による新型コロナウィルス対策活用法」

・新型コロナウィルスの感染拡大が続く社会の中で、AI が新型コロナウィルス対策にどのように使われているかをリサーチする個人ワークを行った。

・各自で新型コロナウィルス対策に利用されている AI 活用法を 5 つ調べ、ロイロノートにまとめて提出させた。最後に提出されたロイロノートのカードを全体共有し、次回授業でその中で最も興味あるものについてプレゼンテーションしてもらうことを伝えて授業を終えた。

② 5/22(金)：zoom を用いたペアワーク「AI による新型コロナウィルス対策活用法」

・まず、今回の「新型コロナ対策 AI 活用事例」プレゼンテーションのルーブリックを配信し、ルーブリックをもとに評価を行うことを説明した。そののち、各自が作成したプレゼンテーションについて自分自身でルーブリックをもとに自己評価を行った。

・その後、zoom のブレイクアウト機能を用いて、2 人 1 組となり互いにプレゼンテーションを行い、ルーブリックをもとに相互評価を行った。

・最後に自己評価、他者評価を比較して、ルーブリック評価を意識したプレゼンテーション作りについて教員が解説を行い、各自のプレゼンテーションのブラッシュアップ、およびブラッシュアップされたプレゼンテーション動画を撮影して提出するよう指示した。

③ 5/29(金)：zoom を用いたグループワーク「AI による新型コロナウィルス対策活用法」

・類似した AI の利用法をプレゼンテーションしている 9 つのグループ（各グループ 3 名～5 名）をこちらから提示し、それぞれの発表動画を視聴し、ルーブリックをもとに相互評価を行った。また、それぞれのグループ内で、AI の利用法にどのような共通点があるかを考えるワークを行った。

・最後に、今回のプレゼンテーションを作成していく中でどのような気づきがあったか、classi のアンケート機能を用いて振り返りを提出させた。

④ 6/5(金)：zoom を用いたグループワーク「AI による新型コロナウィルス対策活用法」

・前回の個人プレゼンテーション動画について、教員よりフィードバックを行った。

・AI と創薬、AI による店舗支援等、AI を用いた新型コロナ対策を 6 つのテーマ 9 つの班に分け、それぞれのテーマにおいて AI がどのように新型コロナ対策として活用されているかをプレゼンテーションにまとめる課題を指示し、次回以降の発表に向けて各グループで準備の時間とした。

⑤ 6/12(金)：zoom を用いたグループワーク「AI による新型コロナウィルス対策活用法」

・9 つの班のうち、3 つの班がオンライン上でプレゼンテーションを発表した。それぞれの発表について、生徒同士の評価も行い、その後は残り 6 つの班が発表に向けての準備の時間とした。

⑥ 6/25(木)

・1 時間目は WWLC3 科目合同授業として、各科目の説明、評価の方法、学びの記録の書き方についてオリエンテーションを行った。

・2 時間目はプレゼンテーション「AI による新型コロナウィルス対策活用法」の続きとして、2 つの班が発表を行った。

⑦ 7/2(木)

・残り 4 つの班について、プレゼンテーション「AI による新型コロナウィルス対策活用法」の発表を行った。

・また最後に、今回のグループプレゼンテーションを作成していく中でどのような気づきがあったか、classi のアンケート機能を用いて振り返りを提出させた。

⑧ 7/9(木)

・AI とはどのようなもので、現在どのように研究開発が進められているのか、専門家の視点からお話を聞く機会を持った。実際に AI の研究を行っている関西学院大学大学院理工学研究科より井手敦也さんをお招きし、「AI とは何か」というテーマでご講演をいただき、2 時間目はその講演をもとに 4 人程度のグループに分かれて自分たちの言葉で「AI とは何か」を説明する文章を作成するワークを行った。最後に学びの記録をまとめ提出させた。

⑨ 7/16(木)

・前回に引き続き、AI とは何かのテーマのもと、AI を使った教育分野で起業をされている五十嵐駿太さんをお招きし、AI を使った教育事業の企業に至る経緯やその特許技術等について講演を伺った。最後に学びの記録をまとめ提出させた。

3．活動の評価方法

ルーブリックについては、以下のものを使用した。

●個人ワークプレゼンテーション「興味ある AI 利用法」評価ルーブリック

	AIが解決しようとしている社会的課題について、明確に解説されているか？	課題解決のためのAI利用について、そのメリットとデメリットが明確か。	発表の仕方として、十分に工夫がされているか？
A	AIが解決しようとする社会的課題について、その内容や背景を含め、明確に解説されている	AI利用についてのメリット・デメリットが明確に説明されている	発表者の声量やカードの記載等から、発表者のその課題解決に向けての熱意が感じられる
B	AIが解決しようとする社会的課題について、その内容については触れられているが、AIを利用することでどのように解決するのかが明確ではない。	AI利用についてのメリット、もしくはデメリットのどちらかのみしか明確ではない	発表者の声量やカードの記載等から、発表者のその課題解決に向けての熱意が感じられない。
C	AIが解決しようとする社会的課題について、明確ではない。	AI利用についてのメリット・デメリットが明確ではない	情報は伝達されているのみで、発表者の声量やカードの記載に自信が感じられない。

●個人ワークプレゼンテーション「興味ある AI 利用法」で気づいたこと評価ルーブリック

	他者からの評価を聞き「興味あるAI利用法」についての発表動画をブラッシュアップするという作業において、「自分ではうまくできていると思っていたが、他者からの指摘で初めて気づいた点」など、自分一人だけでは気づけなかった点を含む今回の作業で学んだことを400字程度で書きなさい。
A	今回の作業で学んだことが明確に書かれており、さらにそれが、どのような経験や気づきから学べたのかが論理的に説明なされている。
B	今回の作業で学んだことは書けているが、それが、どのような経験や気づきから学べたのかが具体的に書けていない。もしくは、それらの因果関係が論理的に書かれていない。
C	今回の作業で学んだことを明確に書けていない。もしくは、文字数が著しく不足している。

●グループワークプレゼンテーション「興味ある AI 利用法」評価ルーブリック

	それぞれのテーマにおいて、AIの利用法が複数個、わかりやすく、かつ聞いている者が興味を持つように説明できているか？	それぞれのテーマにおいて、説明されているAIの利用法にはどのような共通点があり、その利用法によって人々はどのような利益を享受しているか？	グループでの発表の仕方として、十分に工夫がされているか？
A	それぞれのテーマにおいて、AIの利用法が複数個、明確に説明されており、興味関心を掻き立てられるような説明であった。	そのテーマについて、AI利用法にどのような共通点があるか、人々はどのような利益を享受しているのかは説明されており、またそれらには自分が今まで知らなかったことも含まれているなど、新しい発見が得られる。	発表の方法（原稿や資料）や発表者の声から、発表のテーマについてみんなに知ってもらいたいという意欲が感じられ、グループ全員で取り組んでいるという努力が感じられる。
B	それぞれのテーマにおいて、AIの利用法が複数個、明確に説明されているが、興味を持つような説明ではない。	そのテーマについて、AI利用法にどのような共通点があるか、人々はどのような利益を享受しているのかは説明されているが、基本的なことが多く、誰でも知っているような内容が多い。	発表の方法（原稿や資料）や発表者の声から、発表のテーマについてみんなに知ってもらいたいという意欲は感じられるが、グループ全員で取り組んでいる雰囲気が感じられない。
C	それぞれのテーマにおいて、AIの利用法が複数個説明されてはいるが、明確ではなく、また興味を持つような説明もされていない。	そのテーマについて、AI利用法にどのような共通点があるか、人々はどのような利益を享受しているのか、明確に説明されていない。	発表の方法（原稿や資料）や発表者の声から、発表のテーマについてみんなに知ってもらいたいという意欲が感じられない。

●グループワークプレゼンテーション「興味ある AI 利用法」で気づいたこと評価ルーブリック

	②今回のグループ発表「新型コロナウィルスに対するAI利用」において「他者と協力しながら作業していく中で学んだこと」を具体的な事例や体験を含んで400字程度で書きなさい。
A	今回の作業で学んだことが明確に書かれており、さらにそれが、どのような経験や気づきから学べたのかが論理的に説明なされている。
B	今回の作業で学んだことは書けているが、それが、どのような経験や気づきから学べたのかが具体的に書けていない。もしくは、それらの因果関係が論理的に書かれていない。
C	今回の作業で学んだことを明確に書けていない。もしくは、文字数が著しく不足している。

●「学びの記録」評価ルーブリック

	知識/技術	または　意見/考察
A	自分の観点を持って自分なりに内容を処理、記述している。 情報が整理されている。	知識と知識/意見/考察が有機的につながる記述がみられる。 深い洞察とクリエィティブな広がりがみられる。
B	内容がそのまま羅列されている。ある程度の情報のまとまりは見られるものの、あまり整理されていない。	多くが短絡的・表層的な感想や意見、疑問にとどまっている。
C	情報の量/質が不十分である。	感想や意見、疑問の量/質が不十分である。

４．検証

- 目標の達成度・課題

目標 1)生徒からの発表を聞く限り、新型コロナ対策としての AI 利用は本当に多くあり、生徒たちも様々なリサーチ結果を発表してくれた。新型コロナという今までに全くなかった問題に対してこの短期間でこれだけの利用がされていることの意味を十分理解してほしいと教員側からは投げかけを行った。一方、オンライン授業の中での活動であったため、十分ディスカッションする時間やしっかりとリサーチする時間がなく、インターネットに適当なワードを入れてその検索結果を安易に報告するというプレゼンテーションも散見された。新型

コロナウィルスの感染が拡大し、なかなか学校の外に出ていくことが難しい中、インターネット等を使ったリサーチの方法についてもさらに学びを深める必要があったように思う。

目標 2)ルーブリックをもとにした評価方法については、十分に理解できたように感じるし、ルーブリックをしっかりと頭に入れながらプレゼンテーションを作成していく姿も垣間見られた。今後は、ルーブリックをどのタイミングで開示するのか、どの程度の具体性をもったルーブリックにするか等、ルーブリック側のレベル向上を意識していきたい。

目標 3)1 学期の最後のまとめとして、AI とは何かを自分の言葉で説明できるようになるを目標として、講師をお招きし、お話を伺ったが、この点についてはなかなか難しかったように思う。講師もおっしゃっていたように、一般市民にとっての AI、研究者にとっての AI、技術者にとっての AI といった感じで AI とは何か？をくくることは非常に難しく、だからこそその難しさをまずは正確に理解することを目標としていたが、生徒の間にも若干の混乱が見られた。2 学期以降、また別の角度から AI を学んでいく中で、自分でまとめていってもらいたい。

5．今後改善すべき点について

・AI を知るための授業として、専門家をお招きしたり、映像教材を見せたりといったそのツールと時期について、十分な検討が必要である。

・探究授業の核の 1 つである調べるという活動の手法や、それぞれの手法のメリットデメリットについてはしっかりとしたレクチャーをすべきである。

第２フェーズ：【　AI の中身について知る　】

1．このフェーズでの目標

目標 1) AI 活用人材とはどのような人材なのかを理解する

目標 2) 実際の企業において、AI がどのように活用されているのかを理解する

2．具体的な活動

① 9/3(木)

・1 学期の授業内容について振り返り、4 名程度のグループで 1 学期の授業で最も印象に残っているものについてディスカッションを行い、どのような意見が出たかについて全体に共有した。

・1 学期授業の振り返りアンケートの中で、1 学期に何回か行ったプレゼンテーションの手法について学びたいという声があったため、その時間をもった。関西学院大学高等教育支援センターの時任隼平准教授をお招きし、プレゼンテーションの手法やプレゼンテーションを作成する際に重要な事柄について講義を伺った。最後に学びの記録をまとめ提出させた。

② 9/10(木)

・AI を活用して SDGs の諸問題をどのように解決していくか、その基礎を学ぶグループワークを行った。

・まず、個人ワークとして、SDGs17 つのテーマの中から興味あるテーマを選んで、各テーマに関連するトピックを 10 個以上調べて書き出した。

・次に、最近の AI 活用事例トピックを調べて 10 個以上書き出した。
・4 名程度のグループに分かれ、どのようなトピックが書かれているか、紹介しながら模造紙に貼っていく。このとき、同じものは重ねるようにする。そして、模造紙に貼られたトピックを関連性の深いものを集めて、キーワードをつけてまとめることを行った。
・次に、各トピック群から、その課題解決のための AI 活用アイデアを考える。このとき、多少のこじつけや強引さは OK とし、グループで柔軟に否定せずに考えることを注意する。
・最後に全員でどのような意見が出たか共有した。

③ 9/17(木)

・11 名程度の 3 つのグループに分かれ、1 学期に視聴したスタディサプリ「講義動画」にある「WWL オンラインコンテンツ」AI 活用入門講座第 1 回～第 10 回について、それぞれ担当を決め、10 回分を解説するようなプレゼンテーションを作成するワークを行った。
・グループでプレゼンテーションを作成する時間を長めに取り、教員は机間巡視しながら適宜アドバイスを行った。

④ 10/1(木)

・グループプレゼンテーション「AI 活用入門講座」について、3 つのグループが順番に用意してきた発表を行った。また、今回はこのプレゼンテーションのもとになっているスタディサプリ「講義動画」にある「WWL オンラインコンテンツ」AI 活用入門講座にもご出演されている関西学院大学理工学部巳波弘佳教授にオンラインで授業にご参加いただき、3 つの発表についてご講評を頂いたのち、AI 活用人材とは何か、なぜ AI 活用人材が必要になるのかについて講義を伺った。
・また最後に、今回のグループプレゼンテーションを作成していく中でどのような気づきがあったか、classi のアンケート機能を用いて振り返りを提出させた

⑤ 10/8(木)・⑥ 10/22(木)・⑦ 10/29(木)

・英語メディア教室を使用し、3 週 6 コマ連続で AI のプログラミング実習を行った。関西学院大学理工学部巳波弘佳教授の研究室の皆さんにオンラインでご参加いただき、インストラクションムービーを見ながら、IBM の Watson を用いた AI プログラミングについて学んだ。3 回を通して、AI を用いた画像認識アプリ、チャットボットアプリの作成を行い、最後に LINE を用いたテーマパークにおける案内チャットボットの作成を行い、ほぼすべての生徒が完成させることができた。
・また最後に、今回のプログラミング実習でどのような気づきがあったか、classi のアンケート機能を用いて振り返りを提出させた

⑧ 11/19(木)

・アクセンチュア株式会社より藤井篤之さんをお迎えし、様々な企業で実際に行われている AI を利用した企業コンサルテーションについて講義を伺った。

・講義をもとに、学校の困りごとを「画像解析」「自然言語処理」「自動専業」「データ予測」の 4 分野の AI を利用して解決する AI ソリューションを考えるグループワークを行った。最後に学びの記録をまとめ提出させた。

⑨ 11/26(木)

・新明和工業株式会社を訪問し、AI を用いたごみ処理車の技術や空港のボーディングブリッジについて、その開発の苦労や今後の AI の可能性について講義を伺った。実際の企業の技術者から現場のお話を聞ける機会は非常に珍しく、貴重な講義となった。最後に学びの記録をまとめ提出させた。

3．活動の評価方法

ルーブリックについて、以下を使用した。

●グループワークプレゼンテーション「AI 活用入門講座」評価ルーブリック

	AI活用人材について、その説明がされているか。	AIとは何かについて説明がされているか。	SDGsの解決に向けて、AIをどのように活用することが可能かについて説明されているか。	視覚資料に関してプレゼンテーションに適した工夫がなされているか。	発表の仕方に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。	プレゼンテーションの時間は適切か？
A	AI活用人材について、その説明やその重要性・必要性について論理的にしっかりと説明されている。	AIとは何か、わかりやすく具体的に説明がされている。	SDGsの解決に向けて、AIをどのように活用することが可能かについて、データ等を用いながら実現可能性の高い内容が説得力を持って説明されている。	スライドの構成が導入、展開、結論と全体を通して論理的にまとめられており、文字のフォントやグラフ・図が効果的に用いられている。	発表者の声量や視線からこのプレゼンテーションに対する熱意が感じられる。	18分間プラスマイナス30秒でプレゼンテーションが行われている。
B	AI活用人材については説明されているが、その重要性・必要性については明快に説明がなされていない。	AIとは何か説明されているが、わかりにくく具体的ではない。	SDGsの解決に向けて、AIをどのように活用することが可能かについて説明はされているが、使用しているデータ等に説得力がない、もしくは不十分である。	スライドの構成において結論に向けての論理的な展開が見えづらく、グラフ・図の効果も十分に活かされているとは言えない。	発表者の声量や視線がこのプレゼンテーションに対する熱意を十分に感じさせるものとは言えない。	18分間プラスマイナス1分未満でプレゼンテーションが行われている。
C	AI活用人材については説明がされていない、もしくは説明が不十分である。	AIとは何か説明されていない、もしくは説明が不十分である。	SDGsの解決に向けて、AIをどのように活用することが可能かについて説明が不十分である、もしくは非現実的な議論に終始している。	スライドに情報が羅列されているだけで、結論とそれ以外の部分のスライドとの関連性が見えない。	情報は伝達できているが発表者の声量や視線に自信が感じられない。	18分間プラスマイナス1分以上でプレゼンテーションが行われている。

●グループワークプレゼンテーション「AI 活用入門講座」で気づいたこと評価ルーブリック

	今回のグループ発表「AI活用入門講座」において 「今回のプレゼンテーションの準備を通して学んだこと」を具体的な事例や体験を含んで400字程度で書きなさい。
A	今回のプレゼンテーションの準備を通して学んだことが明確に書かれており、さらにそれが、どのような経験や気づきから学べたのかが論理的に説明なされている。
B	今回のプレゼンテーションの準備を通して学んだことは書けているが、それが、どのような経験や気づきから学べたのかが具体的に書けていない。もしくは、それらの因果関係が論理的に書かれていない。
C	今回のプレゼンテーションの準備を通して学んだことを明確に書けていない。もしくは、文字数が著しく不足している。

●プログラミング実習で気づいたこと評価ルーブリック

	①今回のプログラミング実習を通して学んだことを具体的な事例や体験を含んで400字程度で書きなさい。 ②今回のプログラミング実習を通して学んだことを具体的な事例や体験を含んで400字程度で書きなさい。
A	今回のプログラミング実習を通して学んだことが明確に書かれており、さらにそれが、どのような経験や気づきから学べたのかが論理的に説明なされている。
B	今回のプログラミング実習を通して学んだことは書けているが、それが、どのような経験や気づきから学べたのかが具体的に書けていない。もしくは、それらの因果関係が論理的に書かれていない。
C	今回のプログラミング実習を通して学んだことを明確に書けていない。もしくは、文字数が著しく不足している。

●「学びの記録」評価ルーブリック

	知識/技術	または　意見/考察
A	自分の観点を持って自分なりに内容を処理、記述している。 情報が整理されている。	知識と知識/意見/考察が有機的につながる記述がみられる。 深い洞察とクリエィティブな広がりがみられる。
B	内容がそのまま羅列されている。ある程度の情報のまとまりは見られるものの、あまり整理されていない。	多くが短絡的・表層的な感想や意見、疑問にとどまっている。
C	情報の量/質が不十分である。	感想や意見、疑問の量/質が不十分である。

４．検証

● 目標の達成度・課題

目標 1)「AI 活用人材」については、1 学期からずっと話してきている事柄であり、今回のプレゼンテーションを聞く限りでもよく理解できていたと思う。一方、当初予定していた企業訪問等が難しくなる中で、AI を技術的に考察する時間がプログラミング実習程度しか持つことができず、さらにそのプログラミング実習においても初めてプログラミングする生徒も多数いたため、ある程度プログラミングができる生徒への対応ができていなかった点が反省である。

目標 2)2 学期は 2 つの企業の方から実際にお話を聞くことができた。特に、新明和工業株式会社については訪問し、現場の技術者からお話を伺えたことは、生徒にとっても大きな学びであったように思う。学びの記録を見る限り、特に技術者の方のお話になった「AI は万能ではない。」といった AI に関するデメリットを聞けたことは生徒にとっても驚きであったようだ。

５．今後改善すべき点について

・様々な企業、団体に訪問することは学校では聞けないお話を聞くだけでなく、挨拶やマナーといった様々なことを学ぶ機会であり、今後はもっと増やしていきたい。

・プログラミング実習においては、特にその習熟度の高い生徒が独自に学んでいけるようなプラットフォームを用意する必要がある。

第３フェーズ：【　AI を使う　】

１．このフェーズでの目標

目標 1) SDGs の課題等、社会の中にある課題を AI で解決する手法をまなぶ。

２．具体的な活動

○ 冬休みの課題：12/10(木)～1/13(水)

・2 学期に学んだ「学校の困りごと AI ソリューションマップ」をもとに、下記の冬休みの課題を課した。

提出物①：自分が解決したい身近にある困りごと、もしくは SDGs の課題について、付箋にありったけアイデアを書き出しグルーピングしたものを紙に貼り付ける。

提出物②：提出物①のグルーピングしたポイントと、AI の４つの機能（画像解析・自然言語処理・自動制御・

データ予測）を掛け合わせて表（チャート）を作成し、各枠に最低１つずつ具体的なサービスアイデアを付箋に書いて貼り付ける。
提出物③：提出物②の中から、自分が「これ！」と思うものを３つピックアップして、
以下の観点でチャートを作成する。
　①自分の中での順位
　②誰のための AI？
　③どんな課題を解決する AI？
　④AI 導入後のインパクト
　⑤実現性
　⑥使用する AI 技術
　⑦類似サービスの有無
提出物④：提出物③を元に、「製品企画シート」を作成する。シートには、以下の４項目をできるだけ詳しく書くこと。
　①AI の名称（自分オリジナルの名前に！）
　②何系の AI を使うのか
　③AI ができること
　④AI によって解決されること
①　1/14(木)
・3 学期の授業スケジュール等についてオリエンテーションを行った。特に、3 学期は 2 学期までにインプットしたことを、次はアウトプットしていけるように、AI を使って問題を解決できるようなプランの企画立案を行っていきたい旨を説明した。
・その後、冬休みの課題である「AI 製品企画シート」についての個人プレゼンテーションを順番に行った。また生徒たちは互いに他者評価を付ける形でそれぞれの発表を聞いた。

②　1/21(木)
・前回のプレゼンテーションで発表されたテーマを、AI と教育、AI と生活等、9 つのテーマに分けて、各チーム 3 名～5 名の 9 チームに分けた。
・そのうえで、各チームが設定した社会の中の課題 1 つに対して AI を利用して解決する方法（製品企画）を考えるグループワークを行った。それらのアイデアは、アイデアシートおよびポスターにまとめるという形で作業を行った。

・また、今回は関西学院大学理工学部巳波弘佳教授および巳波研究室の学生にも classi に参加していただき、オンライン上でも考えたアイデアのブラッシュアップができる状態を整えた。
③　1/28(木)
・前回の続きとして、今回はまずアイデアシートの完成をさせることに力を置いた。教員は順次机間巡視しながら、チームにアドバイスを行った。改題解決までに一貫したストーリーがあるか、その課題を解決することでどのくらいのインパクトがあるかという点に留意しながら、アドバイスを行った。
④　2/4(木)
・今回の授業では、関西学院大学理工学部巳波弘佳教授にご参加いただき、完成したアイデアシートを使って

1 班ごとに巳波先生の前でプレゼンテーションを行った。また、発表を待つ班、発表を終わった班には巳波研究室の学生からアドバイスをうけながらポスターを完成させる時間とした。

⑤ 2/15(木)

・完成したポスターをもとに、9 つの班がプレゼンテーションを行った。評価は教員の他、生徒同士も他者評価を行った。結果、AI を使った学校授業受講の支援システム、AI を使った焼き肉店の支援システムが優秀と認められ、翌週の WWLC3 科目合同授業でプレゼンテーションを行うこととなった。

⑥ 2/25(木)

・WWLC3 科目それぞれから「平和構築のための提言」というテーマで合計４つのプレゼンテーションを行った。審査員として浅野考平関西国際大学副学長、坂西卓郎 PHD 協会事務局長、時任隼平関西学院大学高等教育支援センター准教授をお招きし、1 年間のまとめとなるプレゼンテーションを行った。AI 活用の 2 チームは選ばれることはなかったが、1 年間の学びをしっかりと発表することができた。

３．活動の評価方法

ルーブリックについて、以下を使用した。

●冬休みの課題「AI 製品企画シート」評価ルーブリック

	提出物①について、十分な数のアイデア（付箋）適切にグルーピングされている。	提出物②について、十分な数のサービスアイデアが検討されている	提出物③のチャートについて、各観点について十分に検討・リサーチがされている	提出物④について、実現可能性も高く、オリジナリティのある製品企画シートが複数提出されている。
A	アイデアが30個以上検討されており、適切にグルーピングされている。	指示が守られた形で、十分な数のサービスアイデアが検討されている	各観点について、しっかりとイメージしながら検討することができており、疑似サービス等もしっかりとリサーチされている	提出された製品企画シートにおいて、 ・実現可能性が高い ・オリジナリティがある ・3つ提出されてる のうち、3点とも十分評価できる
B	アイデアの数が十分ではない、またはグルーピングが甘い。	指示は守られている形であるが、サービスアイデアの数が十分ではない。	各観点について、しっかりとリサーチされているが、まだまだイメージができておらず受益者の設定や課題の解決への見通しが甘い部分が着られる。	提出された製品企画シートにおいて、 ・実現可能性が高い ・オリジナリティがある ・3つ提出されてる のうち、3点のいずれかは十分評価できる
C	アイデアの数が十分ではない、かつグルーピングが甘い。	指示が守られておらず、チャートとして曖昧な状態である。	各観点について、しっかりとリサーチされておらず、チャート全体として考えが甘く、見通しが立っていない	提出された製品企画シートにおいて、 ・実現可能性が高い ・オリジナリティがある ・3つ提出されてる のうち、3点のいずれもが十分評価できるレベはない

●グループポスタープレゼンテーション「AI 製品企画」評価ルーブリック

	課題（困りごと）からその解決までの道筋がわかりやすく具体的かつ明確に示されているか。	設定した課題を解決した際のインパクトは、十分に大きいといえるか。	使用されているAIがただの理想の未来ではなく、既存のAIプログラムの組み合わせとして具体的に考えられているか	使用されているポスターがわかりやすく、効果的にプレゼンテーションに用いられているか	発表の仕方に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。
A	課題からその解決までの道筋が、非常に具体的かつ明確に説明されている	設定された課題が社会的にも大きな問題として認識されており、解決した際のインパクトも非常に大きい	使用されているAIについて、どのように既存のAIを組み合わせているのか明確に語られており、実現可能性も高い	ポスターが非常にわかりやすく作られており、プレゼンテーションの中でも効果的に使用され、説明内容の理解を助ける働きをしている	発表者の声量や視線からこのプレゼンテーションに対する熱意が感じられる。
B	課題からその解決までの道筋が語られてはいるが、具体的かつ明確とは言えず疑問が残る部分がある	設定された課題が社会的に大きな問題として十分に認識されておらず、解決した際のインパクトも弱い	使用されているAIについて、どのような既存のAIを組み合わせているのかは語られているが、それらをどのように組み合わせるのか不明確であり、実現可能性も高いとは言えない	ポスターはわかりやすく作られているが、効果的にプレゼンテーションで使用されているとは言えず、説明内容を補助しているとは言えない	発表者の声量や視線がこのプレゼンテーションに対する熱意を十分に感じさせるものとは言えない。
C	課題からその解決までの道筋に論理の飛躍等があり、不明な部分が多い	設定された課題が個人の域を出ておらず、解決した際のインパクトも非常に弱い	使用されているAIについて、どのような既存のAIを組み合わせたのか語られておらず、未来のマシンの域を出ていない。	ポスターにわかりにくい部分、もしくは完成度の低い部分が残っている	情報は伝達できているが発表者の声量や視線に自信が感じられない。

●グループポスタープレゼンテーション「AI 製品企画」で気づいたこと評価ルーブリック

	今回のポスタープレゼンテーションにおいて、「今回のプレゼンテーションの準備を通して学んだこと」を具体的な事例や体験を含んで400字程度で書きなさい。
A	今回のプレゼンテーションの準備を通して学んだことが明確に書かれており、さらにそれが、どのような経験や気づきから学べたのかが論理的に説明なされている。
B	今回のプレゼンテーションの準備を通して学んだことは書けているが、それが、どのような経験や気づきから学べたのかが具体的に書けていない。もしくは、それらの因果関係が論理的に書かれていない。
C	今回のプレゼンテーションの準備を通して学んだことを明確に書けていない。もしくは、文字数が著しく不足している。

●その他、プレゼンテーションについては生徒同士の相互評価を行い、生徒評価の高かった生徒には加点を行っている。

4．検証

● 目標の達成度・課題

目標 1)3 学期は、冬休みの課題をスタートとして、学んできた AI をどう使うか。どのように利用するかの 1 点にしぼって学習を進めてきた。その過程において、関西学院大学理工学部の巳波弘佳教授および巳波研究室の皆さんにご支援いただいたことは非常に大きかった。ただ、AI を使うのではなく、実現可能なのか？既存の AI を組み合わせればそれができるのか？コスト的にそもそも AI を利用する意味はあるのか？といった様々な視点からの助言をいただき、生徒たちはかなり悩みながら最後のプレゼンテーションを作っていたことは、目標がよく達成されたであろうことを物語っているように思う。AI は万能ではなく、使わない方がいいこともあることを、AI を学ぶものだからこそまずは知ってほしい。一方、本来はそこから実際にその AI を作成し、検証するという段階に進むべきであるが、その時間が取れなかったことが残念である。

5．今後改善すべき点について

・ここまで様々なディスカッションやプレゼンテーションを課題としてやってきたわけであるが、最後に大きなプレゼンテーションをじっくりと時間をかけ大学の先生や先輩にもご協力を得ながらディスカッションを繰り返せたことは非常に大きいように思う。限られた時間の中で、急いでしまうのはなく、ポイントポイントでは生徒ととことんまで準備に時間を費やすことは探究授業として不可欠であるように感じた。この点は今後、しっかりと意識していきたい。

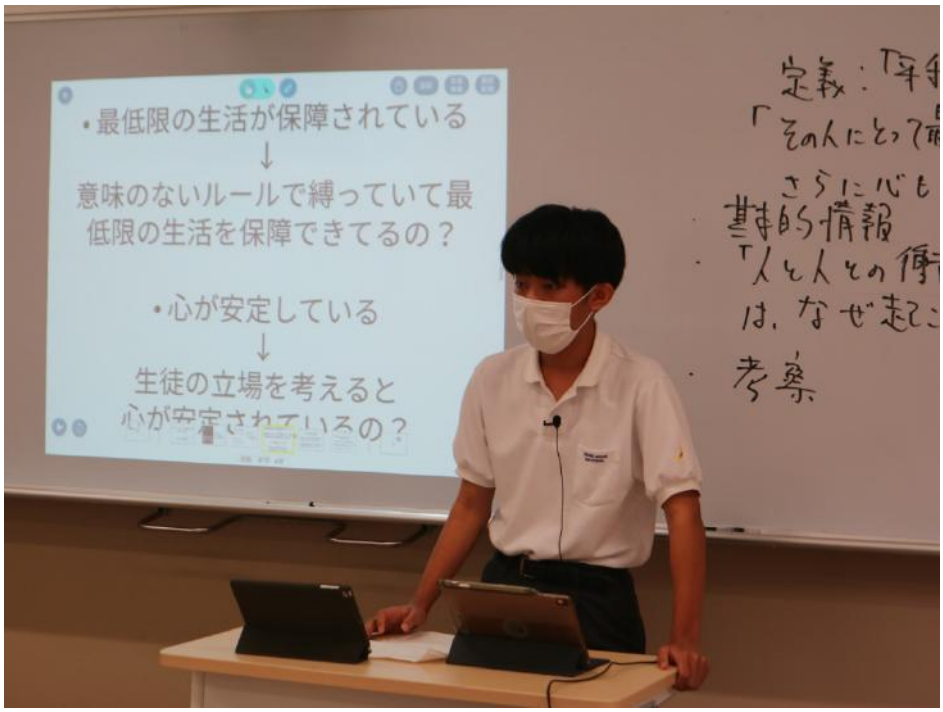
科目	ハンズオンラーニング	学年	2	単位	2
活動の目標	２．広い意味での「平和」に関わる社会的課題について、自分の言葉で語ることが出来るようになる。 ２．「戦争」「エネルギー問題」という平和に深く関わる社会的課題について、自分事してとらえ、ローカルな視点で語ることができる。 ３．上記１，２についての課題を解決するアクションを起こすことができる。もしくはアクションの内容を考え、計画することができる。				
教材	自作プリント・学びの記録シート・参考資料（資料１） iPad (Classi / ロイロノート)・ビデオカメラ・マイク				
留意点	１．生徒たちが自分で決めて主体的に活動する場面をできるだけ多く作れるよう教員は留意する。 ２．各生徒の活動に対する評価のフィードバックは、できるだけ活動後すぐに与えるよう教員は留意する。				

＜スケジュール＞

・授業時間：８０～９０分（オンラインフェーズ時のみ４０分）

休校期間中課題 「導入」 ・「知る」ことへの導入	課題１ 第１ｸｰﾙ 4/17~4/23	「平和」と「便利」について、言葉の定義を自分で考えてください。 それぞれ１枚ずつのカードにまとめてください。辞書や百科事典の編集者になったつもりで、定義（もしくは意味）を自分の言葉で文章化することが目的です。複数考えられる場合は、箇条書きでも構いません（例：①～。②～。…）。 ◎1 枚１分程度で発表できる内容にまとめてください。（学校再開後、発表予定）
	課題２ 第２ｸｰﾙ 4/24~4/28	課題 a）各自で考えた「平和」と「便利」の定義に、自分の生活をあてはめて考えたときの具体例を加えてください。皆さんが考えた「平和」と「便利」という語の定義を少し具体的にする作業として、２つの語の定義に「自分の生活に当てはめたときの具体的な例」を書き加えてください。各語に複数の定義がある人が多くいますが、どれか１つの定義だけを選んでくれて構いません（複数に書いてくれてももちろん可）。第１クールで提出したカードに上書きする形で、再度提出してください。 課題 b）現代における「人と人との衝突（戦争を含む）」の事例を２つまとめてください。 ・自分が生まれた日から現在までの期間を「現代」の対象とします。 ・事例は２つ調べ、それぞれ１枚ずつのカードにまとめてください。 ・誰と誰（何と何）が何について争っているのかを明らかにしてください。 ・事態が終結したのか、継続しているのかを明らかにしてください。終結した場合、どのような終結となったかを説明してください。 ◎1 枚２分程度で発表できる内容にまとめてください。（学校再開後、発表予定）
【課題の設定】	課題３ 第３ｸｰﾙ 4/30~5/6	課題 c）資料を参考に、現在日本で利用されている様々な発電方法のメリットとデメリットをまとめる。 注：配布資料に掲載されている発電方法以外にも、現在日本では利用されているはずです。調べてください。１つの発電方法につき、１枚のカードにまとめること。 ◎1 枚１分程度で発表できる内容にまとめてください。（学校再開後、発表予定）
オンラインフェーズ 「知る」	①5/11	・ガイダンス：担当者あいさつ、授業のテーマ/ねらいの解説 ・「平和」の定義の再構築（ペアワーク）

・社会課題を自分事にするという目標を知る ・授業のテーマを知る ・協働する友人たちを知る ・グループワークを知る 【課題の設定】	②5/18	・「便利」の定義の再構築（ペアワーク）
	③5/25	・「平和」「便利」の定義の再構築（５人グループディスカッション）
	④6/1	・抽象概念/具象概念の解説 ・授業のテーマ/ねらいの再導入 ・「平和」「便利」の定義の再構築（５人グループディスカッション）
	⑤6/8	・定義を用いた事例の考察：問題提起から主張まで（５人グループディスカッション）
第１フェーズ 「知る」 ・今後自分たちが掘り下げていくテーマ（戦争・エネルギー）のことを知る。 ・協働する友人たちのことを知る ・グループワークを知る 【課題の設定】	⑥6/25	・授業ガイダンス【３科目合同】 授業ガイダンス：目標、身につけてほしい力、評価方法、学びの記録の書き方 ・前回の「考察」課題のフィードバック
	⑦7/2	・「平和」「便利」の定義作成（１０人グループディスカッション） ・プレゼンテーション
	⑧7/9	・「平和」「便利」の定義作成（全員でのディスカッション） ・「平和」「エネルギー」グループ分け ・各グループの課題発表 ＜平和グループ＞ なぜ「人と人との衝突（戦争を含む）」は起こるのか、休校期間課題で各自で調べた現代における「人と人との衝突（戦争を含む）」の事例を１つ紹介し、自分たちで作った「平和の定義」を用いながら、考察をしなさい。 ＜エネルギーグループ＞ 電気が作られる方法の割合を「電源構成」または「エネルギーミックス」と言います。あなたは「兵庫県が１年間に必要とする電力のエネルギーミックスをデザインする仕事」を引き受けました。休校期間課題で各自で調べて「発電方法まとめ」を基に、あなたが考える兵庫県のエネルギーミックスをデザインし、プレゼンテーションを行いなさい。
	⑨7/16	・グループ内で発表、学びを整理 ・グループ間で共有 ・夏休み課題発表 ＜平和グループ＞夏休みには、８月６日、９日、１５日と、日本や日本人が深く関わった第二次世界大戦について、ニュースや新聞など、様々なメディアを通して考えるきっ

<table>
<tr><td></td><td></td><td colspan="2">かけがあります。第二次世界大戦に関わる歴史的事実、体験談、インタビュー、物語、なんでも構いません。この夏に新しく自分が得たそれらの知識の中で、最も自分の感情が動かされたものを発表してください。そして、それはどのような感情だったのか、またどのようにしてその感情が生まれたのかも説明してください。
＜エネルギーグループ＞
1 学期最後の授業で、皆で理想のエネルギーバランスを決定しました（原子力 10・火力 10・バイオマス 15・地熱 23・水力 13・風力 13・太陽光 13・その他 8）。
皆の理想と、現実に発電している関西電力や東京電力のエネルギーバランスとを比較し、なぜ「皆の理想」と「現実」が異なるのかを考察し、発表してください。
 
</td></tr>
<tr><td rowspan="6">第２フェーズ:
「探る」
a）平和グループ
・西宮、関学と戦争の関わりを探る
・平和に対して自分たちは何ができるかを探る
・教室の外に出て探る

b）エネルギーグループ
・原子力に関して自分たちの疑問点がどこにあるかを探る。
・原子力と自分達の日常生活の接地点を探る。

【課題の設定】</td><td></td><td>a）平和グループ</td><td>b）エネルギーグループ</td></tr>
<tr><td>⑩9/3</td><td>・夏休み課題のプレゼンテーション３分
・ディスカッション「自分たちが、それぞれのテーマに対して何を知るべきか、何をするべきか、何ができるか」</td><td>・夏休み課題のプレゼンテーション３分
・ディスカッション「自分たちが、それぞれのテーマに対して何を知るべきか、何をするべきか、何ができるか」</td></tr>
<tr><td>⑪9/10</td><td>・上記ディスカッションの継続
・戦争に関するリサーチ（資料、ニュース、施設など）</td><td>・前回の発表より、「違い」を説明する発表の仕方、データの示し方について講義を行う。
・原子力に関するマインドマップを整理し、共有する。</td></tr>
<tr><td>⑫9/17</td><td>・リサーチのまとめ（西宮・関学グループ）
・まとめのグループ間共有</td><td>・マインドマップを整理していく。単語の羅列ではなく、「問い」の形で意味のまとまりを整理していく。</td></tr>
<tr><td>⑬10/1</td><td>・西宮市平和資料館訪問</td><td>・マインドマップをまとまりごとにグループに分かれて調べ学習。</td></tr>
<tr><td>⑭10/8</td><td colspan="2">合同授業
・４回分の授業のまとめ「どのようなことを学び、考えたのか」</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td rowspan="3">【情報の収集】
【整理・分析】</td><td></td><td colspan="2">・上記についてグループ発表（１０分）質疑応答（５分)、グループ間共有

 </td></tr>
<tr><td>⑮10/22</td><td>・ディスカッション継続とリサーチ（関学の歴史について）
・AR アプリ「マチアルキ」紹介、試用
・次回訪問先でのインタビューまとめ
 </td><td>・前回発表のふりかえり。全体を俯瞰して発表を仕切るリーダーがいなかったことへの反省。
・マインドマップをグループごとに分かれて進めていくには、同様にリーダーが必要。役割分担を再編成。</td></tr>
<tr><td>⑯10/29</td><td>・関西学院の奉安庫を訪問
・編纂史室の担当者にインタビュー</td><td>・26 日に関西原子力懇談会と関西電力の出前授業を提案。
・出前授業に向けて授業の内容を計画し、出前授業の役割分担を作成。
・現在のワーキンググループの進捗状況の</td></tr>
</table>

			整理。
	⑰11/19	・ディスカッション（AR スポットの確定、役割分担、活動の目的の明確化） ・班別（コンテンツ班、マップ班）ディスカッション	・26 日の出前授業の準備。 ・タイムスケジュールの整理。 ・コンテンツの確認。 ・当日の役割分担の確認。 ・発表の予行演習、スライドの整理。 ・質問項目の吟味。
	⑱11/26	・班別ディスカッションの内容の共有 ・班別ディスカッション継続	関西原子力懇談会、関西電力による出前授業。
第３フェーズ 「共有する」 a) 平和グループ ・印刷会社と共有する ・作成過程を友人、家族などと共有する ・学びを地図/AR を通して教室の外の人たちと共有する b) エネルギーグループ ・原子力発電に関してクリティカルシンキングを共有する。 ・原子力に関する知識を得た自分達がアウトプッ	⑲1/14	・コンテンツ班：AR コンテンツ作成（AR 設定、写真撮影、リサーチなど） ・マップ班：マップデザイン等検討（AR の使い方、QR コード、デザイン等） ・印刷会社との交渉 	・インプットする段階から次の段階の模索。自分達からアウトプットする段階へ移行させる。 ・インプットしたことを基に、自分達が何をすることで何を生み出すことができるのか、個人で計画立案を試みる。
	⑳1/21	前回授業継続	・前回個人で立案した計画を発表。互いに質疑応答する。 ・出前授業を受けて、原発を肯定する見方しかできていないことを指摘。原発推進と

トする方法を模索、共有する。			反原発との摩擦をクリティカルシンキングできていないことを次の課題とする。
【情報の収集】 【整理・分析】 【まとめ・表現】	㉑1/28	・第１校正チェック ・班別ワーク継続 ・印刷会社との交渉	・クリティカルシンキングを目標に計画立案のやり直し。 ・反原発の活動団体について調査。
	㉒2/4	・ユーザーリポート作成 / 朱書き入れ ・班別ワーク継続 ・印刷会社との交渉 	・反原発と政治の関りに目を向ける。 ・政権とマニフェスト、政策と原子力の活用について、時事問題を精査する。 ・関西原子力懇談会との zoom ミーティングを提案。質問項目を整理する。
	㉓2/15	・第２校正チェック ・ユーザーリポート/朱書き共有 ・班別ワーク継続 ・印刷会社との交渉	関西原子力懇談会と zoom ミーティングを行う。原子力と政策との関係や、反原発団体についての情報を集める。
	㉔2/25	WWLC３科目合同授業　ポスタープレゼンテーションコンテスト 「各科目からの提言『平和構築の提言』 	

＜各フェーズの 1.目標 2.具体的活動 3.活動の評価方法 4.検証 5.今後改善すべき点について＞

休校期間フェーズ：【課題の設定】

1. このフェーズでの目標

目標 1) 生徒たちが、授業の大テーマ「平和」「人権」（中テーマ「戦争」「エネルギー問題」）について、自分なりの定義を語ることができる

目標 2) 生徒たちが、「戦争」「エネルギー問題」について調べて、知識を得ることができる

2. 具体的な活動

- 第１クール：4/17(金)～4/23(木)

・音声を吹き込んだロイロカードをスライドにして、この授業の担当者や授業目標、扱う大テーマ「平和」「人権」と中テーマの「戦争」「エネルギー問題」について紹介。

・以下の課題を配信。

「平和」と「便利」について、言葉の定義を自分で考えてください。

それぞれ１枚ずつのカードにまとめてください。辞書や百科事典の編集者になったつもりで、定義（もしくは意味）を自分の言葉で文章化することが目的です。複数考えられる場合は、箇条書きでも構いません（例：①～。②～。…）。

◎1 枚 1 分程度で発表できる内容にまとめてください。

- 第２クール：4/24(金)～4/28(火)

・以下の２つの課題を配信。

課題①　各自で考えた「平和」と「便利」の定義に、自分の生活をあてはめて考えたときの具体例を加えてください。

皆さんが考えた「平和」と「便利」という語の定義を少し具体的にする作業として、２つの語の定義に「自分の生活に当てはめたときの具体的な例」を書き加えてください。各語に複数の定義がある人が多くいますが、どれか１つの定義だけを選んでくれて構いません（複数に書いてくれてももちろん可）。第１クールで提出したカードに上書きする形で、再度提出してください。

課題②　現代における「人と人との衝突（戦争を含む）」の事例を２つまとめてください。

・自分が生まれた日から現在までの期間を「現代」の対象とします。

・事例は２つ調べ、それぞれ１枚ずつのカードにまとめてください。

・誰と誰（何と何）が何について争っているのかを明らかにしてください。

・事態が終結したのか、継続しているのかを明らかにしてください。終結した場合、どのような終結となったかを説明してください。

◎1 枚２分程度で発表できる内容にまとめてください。

- 第３クール：4/30(木)～5/6(水)

・以下の課題を、資料と共に配信。

資料を参考に、現在日本で利用されている様々な発電方法のメリットとデメリットをまとめる。

注：配布資料に掲載されている発電方法以外にも、現在日本では利用されているはずです。調べてください。

１つの発電方法につき、１枚のカードにまとめること。

◎1 枚 1 分程度で発表できる内容にまとめてください。

3. 活動の評価方法

- 休校期間の課題については、提出したか否かのみで評価した。

4. 検証

- 目標の達成度・課題

・課題１、２、３については、直接口頭で説明することもできなかったため、あくまで授業に入る前のブレインストーミングと位置づけ、ルーブリックを提示することもせず、自由に取り組ませた。

・全員全ての課題について提出締切を守って提出した。

＜目標 1)2)について＞

・課題１、課題２、課題３の生徒の実際の取り組みを見る限り、概ねテーマについて考えを始めるきっかけを与えることができたのではないかと考える（資料２、３、４参照）。

・ロイロノートを用いて、写真やイラストを使いながら表にまとめるなど、個々に工夫が見られた。

・ロイロノートの提出箱を「回答共有する」に設定することで、互いに課題内容を見ることができた。そのことでオンライン課題であっても調べたことをクラスメート間で共有することができたのは大きかったと思われる。

5. 今後改善すべき点について

・ブレインストーミングをさせることだけではなく、反転授業的にこちらで用意した資料を事前に読ませて取り組ませる課題も提供することで、次のフェーズのスタート時点である程度の知識を持たせることはできたかもしれない。

・課題の評価をすることができたかもしれないが、やはりルーブリックの説明や授業のガイダンスをせずに評価することにはためらいがある。そのあたりが悩ましい。

オンライン授業期間フェーズ：知る【課題の設定】

1. このフェーズでの目標

目標 1) 「平和」「便利」という抽象概念を、具体的に自分事として捉えることが出来る

目標 2) ペアやグループでの協働を通して、他者と納得する抽象概念の定義を構築・共有することが出来る

目標 3) いつかのアイデア（定義）の共通点・相違点を見つけながら、１つに集約する際の判断軸や経緯を説明することが出来る

目標 4) 自分の定義の変化について、説明することが出来る

目標 5) 自分たちが考えていた定義を用いて、事例を考察することが出来る

2. 具体的な活動

① 5/11

・休校期間課題中の課題１・２「平和・便利の定義作り」の趣旨説明。

・抽象概念と具体概念、またそれを語る際の「主語」の在り方について説明。この具体概念こそ、この授業が大切にしたい「社会問題を自分事として語る」ことであることを伝える。

・以下のペア活動のルーブリックを提示。

・Zoom のブレイクアウトセッションを用い、ペアで１０分間にわたり「2 人の『平和』の定義を再構築する」活動を行った。ロイロノートで作った定義を提出させた(資料５)

② 5/18

・前回の課題のフィードバック。

・再度、この課題の趣旨説明。

・以下のペア活動のルーブリックを提示。

・Zoom のブレイクアウトセッションを用い、ペアで１５分間にわたり「2 人の『便利』の定義を再構築する」活動を行った。紙に定義を書かせロイロで提出をさせた。

③ 5/25

・前回の課題のフィードバック。

・具体概念は主語が明確でなければならないことが多いが、その具体的概念を考えることが「自分事として考える」ことであることを再度説明。

・以下のグループ活動のルーブリックを提示。

Zoom のブレイクアウトセッションを用い、５人×４グループ（「平和」「便利」各２グループ）で２０分間にわたり、各ペアが前回までに作った定義をグループで１つに再構築し、加えて具体的概念を５つ挙げることを課題として指示。また、どのようにして各ペアの定義を１つに集約したかの説明文（３０秒程度で発表できる内容の量）も加えることを指示。

・以下のポートフォリオ活動のルーブリックを指示。

【協働することに対する意識の変化について】

５人で１つの定義を作り出すという協働作業において、「こうやればうまくいくのか」「ここはもっとこうしたほうが良かったかも」「この人のこういう働きが助け/妨げになった」など、協働することに対して自分が気付いた、発見したことなどを含む自分の意識の変化について書きましょう（４００文字程度で）。

④ 6/1

・前回の課題（活動・ポートフォリオ）についてのフィードバック。

・5/25 の課題が上手くできていなかったので、再度同様のグループワーク課題を指示。

・今回のグループワークについては評価をせず。（下のポートフォリオ活動に代えた。）

・以下のポートフォリオ活動のルーブリックを指示。

【協働することを通して感じた自分の「定義づけ（平和・便利）」の変化について】

５人で１つの定義を作り出すという協働作業を通して、自分が気付いた、発見したことなどを含む自分の「定義づけ（平和・便利）」の変化について書きましょう（４００文字程度で）。

⑤ 6/8

・ポートフォリオについてのフィードバック。

・Zoom のブレイクアウトセッションを用いて「事例（新型コロナウィルスに関わるある家族の事例）の考察」を行った。自分たちが作った定義を用いて、５人×４グループ（前回のグループが混ざるようにグループ編成）で２０分間で行うように指示。テーマとしては「新型コロナウィルスとある家族の事例」の文を読み、「問題提起」をし、何らかの「主張」を４００文字程度委で行うように指示。

【事例研究の考察について】

6 月 8 日（月）の授業で配信された事例に対して、平和と便利の定義を切り口に考察を行ってください。平和と便利についてそれぞれ問題提起をしても構わないし、両方を使って包括的な問題提起をしても構いません。自分なりの主張を導き出してください。（400 字程度で）

３．活動の評価方法

- 活動のルーブリック

① 5/11 ペア活動：「平和」の定義の再構築

	「平和」という抽象概念と具象概念の定義	ペアとの協働作業（時間内課題）
A	・「平和」を抽象的な概念として定義づけることができる。 また、それに対応して、「平和」の具体例を挙げることができる。 ・抽象的な事象を卑近な事柄として豊かに表現できる	時間内(10分)に、ランダムに作られたペアで協働して課題を遂行できる
B	・「平和」を抽象的な概念として定義づけることができる。 また、その定義にある程度対応して「平和」の具体例を挙げることができる。 ・抽象的な事象を卑近な事柄としてある程度表現できる。	
C	・「平和」を抽象的な概念として定義づけることができない。 また、その定義に対応して「平和」の具体例を挙げることができない。 ・抽象的な事象を卑近な事柄として表現できない。	時間内(10分)に、ランダムに作られたペアで協働して課題を遂行できない

② 5/18 ペア活動：「便利」の定義の再構築

	「便利」という抽象概念と具象概念の定義	ペアとの協働作業（時間内課題）
A	・「便利」を抽象的な概念として定義づけることができる。 また、それに対応して、「便利」の具体例を挙げることができる。 ・抽象的な事象を卑近な事柄として豊かに表現できる	時間内(15分)に、ランダムに作られたペアで協働して課題を遂行できる
B	・「便利」を抽象的な概念として定義づけることができる。 また、その定義にある程度対応して「便利」の具体例を挙げることができる。 ・抽象的な事象を卑近な事柄としてある程度表現できる。	
C	・「便利」を抽象的な概念として定義づけることができない。 また、その定義に対応して「便利」の具体例を挙げることができない。 ・抽象的な事象を卑近な事柄として表現できない。	時間内(15分)に、ランダムに作られたペアで協働して課題を遂行できない

③ 5/25 グループ活動：「平和」「便利」の定義の再構築

	①「平和」「便利」の抽象概念と具象概念		②「平和」「便利」の抽象概念のまとめ方の説明	③グループワーク
	「平和」「便利」という抽象概念と具象概念の定義の関係性	豊かな具象概念（その数）	数ある抽象概念の定義から、共通点・相違点（軸）を見出し、1つの定義にまとめる	グループでの協働作業（時間内課題）
A	「平和」「便利」を抽象的な概念として定義づけ、それに対応した「平和」「便利」の具体例を挙げることができる。	抽象的概念に対応した具象概念を5個挙げることができる	数ある抽象概念の定義から、ある共通点・相違点（軸）を見出し、1つの定義にまとめていった経緯や判断軸の説明が大変明確であり、説得力がある。	時間内(20分)に、ランダムに作られたグループで協働して課題を遂行できる
B	「平和」「便利」を抽象的な概念として定義づけ、それにある程度対応した「平和」「便利」の具体例を挙げることができる。	抽象的概念に対応した具象概念を3～4個挙げることができる	数ある抽象概念の定義から、ある共通点・相違点（軸）を見出し、1つの定義にまとめていった経緯や判断軸の説明がある程度明確であり、説得力がある。	
C	「平和」「便利」を抽象的な概念として定義づけ、それにある程度対応した「平和」「便利」の具体例を挙げることができる。	抽象的概念に対応した具象概念を0～2個挙げることができる	数ある抽象概念の定義から、ある共通点・相違点（軸）を見出し、1つの定義にまとめていった経緯や判断軸の説明が不明確で、説得力がない。	時間内(20分)に、ランダムに作られたグループで協働して課題を遂行できない

③ 5/25 ポートフォリオ「協働することに対する意識の変化」について（４００文字）

評価	【協働することに対する意識の変化について】 ５人で１つの定義を作り出すという協働作業において、「こうやればうまくいくのか」「ここはもっとこうしたほうが良かったかも」「この人のこういう働きが助け/妨げになった」など、協働することに対して自分が気付いた、発見したことなどを含む自分の意識の変化について書きましょう（４００文字程度で）。
A	自分の思考の変化について客観的に分析することが出来ており、分析した内容が具体的に記述されている。
B	自分の思考について分析できているが、思考の変化について客観的に捉えることが出来ておらず、直感的な内容が記述されている。
C	自分の思考について分析できておらず、内容が不明瞭。または、文字数が著しく足りていない。

④ 6/1 ポートフォリオ：「協働を通して感じた自分の定義の変化」

評価	【協働することを通して感じた自分の「定義づけ（平和・便利）」の変化について】 ５人で１つの定義を作り出すという協働作業を通して、自分が気付いた、発見したことなどを含む自分の「定義づけ（平和・便利）」の変化について書きましょう（４００文字程度で）。
A	自分の思考の変化について客観的に分析することが出来ており、分析した内容が具体的に記述されている。
B	自分の思考について分析できているが、思考の変化について客観的に捉えることが出来ておらず、直感的な内容が記述されている。
C	自分の思考について分析できておらず、内容が不明瞭。または、文字数が著しく足りていない。

⑤ 6/8 ポートフォリオ：「事例考察：問題提起をし、主張を述べる」

評価	【事例研究の考察について】6月8日（月）の授業で配信された事例に対して、平和と便利の定義を切り口に考察を行ってください。平和と便利についてそれぞれ問題提起をしても構わないし、両方を使って包括的な問題提起をしても構いません。自分なりの主張を導き出してください。（400字程度で）
A	事例を基に問題提起と主張ができている。問題提起に対して主張が対応している。
B	事例を基に記述ができているが、問題提起と主張が揃っていない。もしくは、問題提起に対応した主張ができていない。
C	事例を基に記述ができておらず、内容が不明瞭。または、文字数が著しく足りていない。

４．検証

- 目標の達成度・課題

・オンラインでしか出会っていない友人たちと、まだ慣れていない Zoom を用いたディスカッションを行うことには、それなりの難しさが伴うことを生徒、担当教員は実感した。また、ルーブリックを用いた課題、フィードバックについては初めてこの授業で導入したが、オンラインでは実際に生徒たちの理解を確認しながら進めることが困難であったので、生徒に安心させて課題に取り組んでもらう配慮が必要であった。

・しかしながら、「平和」「便利」という概念の定義を考えるワークは次第に生徒たちも慣れていくことができ、回数ごとに内容にも大きく改善が見られた。

・また、オンラインを通じた「協働作業」についての意識の変化について、４００文字のポートフォリオ課題を課した。その内容を見ると、生徒たちはオンラインならではの難しさと、それでもうまくやっていく工夫についての気づきや学びを記すものが多く見られたのは収穫であった。オンラインだからこそ気づいた日常の会話でも大切にしないといけないことがあるということをほとんどの生徒が記していた（資料６）。

＜目標 1) 2)について＞

・5/11 と 5/18 の活動を比較すると、それぞれのグループにおいて大きな改善が見られた（資料５、７参照）。オンラインに少しずつ慣れたこと、また 5/11 のフィードバックを 5/18 の課題の直前に与えたことで、生徒たちにも課題内容がはっきりしたと思われる。

＜目標 3) 4) 5)について＞

・3)については複雑な課題になると、オンラインでは直接伝わりにくく生徒の反応も伺えないために、互いに思ったような成果を得ることができない（資料８）。

・4)については４００文字のポートフォリオ課題を課した。内容を見る限り、概ね自分の言葉で定義がどのように変化していったかを論述できていた（資料９）。

・5)については 3)同様、内容について不十分なものが多く見られた。

５．今後改善すべき点について

・Zoom のブレイクアウトセッションを用いる際には、十分にアイスブレイクをする時間と、議論を深めるだけの時間を確保することに今後は留意したい。

・複雑な課題、あるいは初めて用いるルーブリックなどについては、オンラインの説明では不十分なことが多いので、配慮を持って行う。

第１フェーズ：知る【課題の設定】

１．このフェーズでの目標

目標 1) 今後自分たちが掘り下げていくテーマ（戦争・エネルギー）のことについて、少し語ることが出来る。

２．具体的な活動

⑥ 6/25

・３科目合同授業ガイダンスを突通じて、授業の目標、学びの記録の書き方など授業の概観を理解する

⑦ 7/2

・「平和」「便利」の定義を、１０人グループで１つ作り上げる

⑧ 7/9

・クラス全体で「平和」「便利」の定義を作り上げるために、前回の授業のグループがプレゼンテーションを行い、それについて全員でディスカッションを行う。

・平和グループ、エネルギーグループに分かれ、それぞれの発表課題の準備を行う。発表課題は以下の通り。

＜平和グループ＞
なぜ「人と人との衝突（戦争を含む）」は起こるのか、休校期間課題に各自で調べた現代における「人と人との衝突（戦争を含む）」の事例を１つ紹介し、自分たちで作った「平和の定義」を用いながら、考察をしなさい。
＜エネルギーグループ＞
電気が作られる方法の割合を「電源構成」または「エネルギーミックス」と言います。あなたは「兵庫県が１年間に必要とする電力のエネルギーミックスをデザインする仕事」を引き受けました。休校期間課題に各自で調べて「発電方法まとめ」を基に、あなたが考える兵庫県のエネルギーミックスをデザインし、プレゼンテーションを行いなさい。

⑨ 7/16
・各グループにおいて発表、学びを共有。

３．活動の評価方法
- 活動のルーブリック

⑨ 7/16 発表

「平和」グループの発表課題のルーブリック

	情報	考察	視覚資料に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。	発表の仕方に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。	時間
A	課題で必要とされた情報を全て述べている。	事例を基に、問題提起に対する説明ができている。また、定義をしっかりと用いている。	スライドの構成が導入、展開、結論と全体を通して論理的にまとめられており、文字のフォントやグラフ・図が効果的に用いられている。	発表者の声量や視線からこの課題に対する熱意が感じられる。	設定された時間の+-３０秒で発表を行った。
B	課題で必要とされた情報をある程度述べている。	事例を基に記述ができているが、問題提起に対する説明があまり対応していない。また、定義をあまり用いていない。	スライドの構成において結論に向けての論理的な展開が見えづらく、グラフ・図の効果も十分に活かされているとは言えない。	発表者の声量や視線がこの課題に対する熱意を十分に感じさせるものとは言えない。	設定された時間の+-３０秒で発表を行うことが出来なかった。
C	課題で必要とされた情報の言及が不十分である。	事例を基に記述ができておらず、問題提起と説明がそろっていない。また、定義を用いていない。	スライドに情報が羅列されているだけで、結論とそれ以外の部分のスライドとの関連性が見えない。	情報は伝達できているが発表者の声量や視線に自信が感じられない。	

「エネルギー問題」グループの発表課題のルーブリック

	情報	説明	視覚資料に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。	発表の仕方に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。	時間
A	課題で必要とされた情報を全て述べている。	発電方法に定めた割合に対して、全ての発電方法について説明が十分にできている。	スライドの構成が導入、展開、結論と全体を通して論理的にまとめられており、文字のフォントやグラフ・図が効果的に用いられている。	発表者の声量や視線からこの課題に対する熱意が感じられる。	設定された時間の+-３０秒で発表を行った。
B	課題で必要とされた情報をある程度述べている。	発電方法に定めた割合に対して、全ての発電方法について取り上げるものの、説明があまりできていない。	スライドの構成において結論に向けての論理的な展開が見えづらく、グラフ・図の効果も十分に活かされているとは言えない。	発表者の声量や視線がこの課題に対する熱意を十分に感じさせるものとは言えない。	設定された時間の+-３０秒で発表を行うことが出来なかった。
C	課題で必要とされた情報の言及が不十分である。	発電方法に定めた割合に対して、全ての発電方法について取り上げて説明ができていない。	スライドに情報が羅列されているだけで、結論とそれ以外の部分のスライドとの関連性が見えない。	情報は伝達できているが発表者の声量や視線に自信が感じられない。	

４．検証

- 目標の達成度・課題

・両グループとも、バラエティに富んだ発表が展開された（資料１０）。

・テーマが大きいために、「焦点をしぼる」という作業を通じてもっとテーマを具体的に、身近なものに感じさせるような考察をすることが求められていたものの、それを行う生徒がそれほど多くはなかった。ただ、生徒たちがルーブリックの項目を少しずつ意識しながら、自分たちの発表を客観的に捉えるようになったことは進歩であるように感じた。

・ただ、知識の深さ、広さ、という点については、文献調査や資料の読み込みに十分な時間が取れなかったために、不十分であると言わざるを得ない。・「知る」というのが授業の主眼ではあったが、十分に当該テーマについて自由に調べさせる時間が少なかったことは大きな反省点である。

５．今後改善すべき点について

・コロナのためにスケジュールを大幅に変更することを余儀なくされたのが理由ではあるが、【課題設定】のために知識を得るという点については、もっとその時間を増やさなくてはならないと感じる。

第２フェーズ「探る」:【課題設定】【情報の収集】【整理・分析】

１．目標

a）平和グループ	b）エネルギーグループ
1）自分たちが平和・戦争というテーマに対して何を知り、何をすべきか、何ができるかについて考察し、実践することが出来る。 2）教室の外と積極的に関わりをもつことが出来る。 3）平和・戦争というテーマを自分ごとして語ることができる	1）自分たちが便利というテーマに対して何を知り、何をすべきか、何ができるかについて考察し、実践することが出来る。 2）教室の外と積極的に関わりをもつことが出来る。 3）原子力の未知による漠然とした不安や恐怖に対して、学ぶことによって原子力の問題を卑近なものとする。

２．具体的活動

a）平和グループ	b）エネルギーグループ
⑩ 9/3	
・夏休みの課題の発表 夏休みには、８月６日、９日、１５日と、日本や日本人が深く関わった第二次世界大戦について、ニュースや新聞など、様々なメディアを通して考えるきっかけがあります。第二次世界大戦に関わる歴史的事実、体験談、インタビュー、物語、なんでも構いません。この夏に新しく自分が得たそれらの知識の中で、最も自分の感情が動かされたものを発表してください。そして、それはどのような感情だったのか、またどのようにしてその感情が生まれたのかも説明してください。 ・自分たちが平和・戦争というテーマに対して何を知り、何をすべきか、何ができるかについてのディスカッション	・夏休みの課題の発表 1 学期最後の授業で、皆で理想のエネルギーバランスを決定しました（原子力 10・火力 10・バイオマス 15・地熱 23・水力 13・風力 13・太陽光 13・その他 8）。 皆の理想と、現実に発電している関西電力や東京電力のエネルギーバランスとを比較し、なぜ「皆の理想」と「現実」が異なるのかを考察し、発表してください。 ・自分たちがエネルギーミックスに対して何を知り、何をすべきか、何ができるかについてのディスカッション

<table>
<tr><td colspan="2">⑪ 9/10</td></tr>
<tr><td>・9/3 のディスカッションの継続
・戦争について深く知るためのリサーチ（ニュース、資料、施設など）</td><td>・前回の発表より「違い」を説明する発表の仕方、データの示し方について講義を行う。
・原子力に関するマインドマップを整理し、共有する。</td></tr>
<tr><td colspan="2">⑫ 9/17</td></tr>
<tr><td>・マナぼーどなどを用いて、リサーチの内容をまとめ、共有。
・西宮グループと関学グループに分かれて情報を整理し、授業の終わりで互いにまとめた内容を発表。</td><td>・生徒自身が板書してマインドマップを整理していく。単語の羅列ではなく、「問い」の形で言語化する。思いつくままの箇条書きではなく、共通項を見出してカテゴライズする。</td></tr>
<tr><td colspan="2">⑬ 10/1</td></tr>
<tr><td>・西宮市平和資料館を訪問
上ケ原からバス→甲東園駅から電車→夙川駅下車→現地
・現地解散</td><td>・9/17 のマインドマップを、カテゴリーごとにグループに分かれて調べ学習を行う。</td></tr>
<tr><td colspan="2">⑭ 10/8</td></tr>
<tr><td colspan="2">今までの４回にわたる授業において、各グループが「どのようなことを学び、考えたのか」について、内容をまとめ、もう一方のグループに対して報告という形で発表
・４０分の発表準備時間
・各グループ１０分間で発表、５分間の質疑応答。</td></tr>
<tr><td colspan="2">⑮ 10/22</td></tr>
<tr><td>・前回の発表のフィードバックを返却
・AR アプリ「マチアルキ」を紹介、試用。
・次回の授業で訪問する関西学院内にある「奉安庫」について、案内してくださる担当者にインタビューする内容をまとめる。</td><td>・前回発表のフィードバックを返却し、振り返りを行う。全体を俯瞰して準備から発表の一連を仕切るリーダーがいなかったことを反省する。
・マインドマップをグループごとに分かれて進めていくには、同様にリーダーが必要であることに気づく。役割分担を再編成する。</td></tr>
<tr><td colspan="2">⑯ 10/29</td></tr>
<tr><td>・関西学院の奉安庫を訪問し、案内してくださる担当者から講義を受け、またこちらから準備した質問をする。</td><td>・11/26 に関西原子力懇談会と関西電力の出前授業を提案する。
・出前授業に向けて授業の内容を計画し、出前授業の役割分担を作成する
・現在のワーキンググループの進捗状況を共有する。</td></tr>
<tr><td colspan="2">⑰ 11/19</td></tr>
</table>

以下のことについてディスカッション 1) AR スポットの確定 ・内容の選定　＜関学＋西宮＋その他＞ ・情報の媒体（文字・写真・動画）の選定 2) 役割分担 ・リーダー/副リーダー ・各 AR スポットの担当者 ・マップ作製者 3) 誰にどのように呼びかけるか/アピールするか ・この活動の目的の明確化	26 日の出前授業の準備 ・タイムスケジュールの整理。 ・コンテンツの確認。 ・当日の役割分担の確認。 ・発表の予行演習、スライドの整理。 ・質問項目の吟味。
⑱ 11/26	
・コンテンツ班、マップ班に分かれ、それぞれにどのような AR マップを作っていくかについて整理、発表することで AR マップの方向性を確定	関西原子力懇談会、関西電力による出前授業。それぞれ 1 名ずつが来校し、スライドを用いてプレゼンテーションが行われる。

３．活動の評価方法

＜平和グループ＞

- 活動のルーブリック

⑩ 9/3 夏休み発表課題

「平和」グループ　夏休み課題　ルーブリック

	知識	経緯	視覚資料に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。	発表の仕方に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。	時間
A	課題で必要とされた自分が得た「知識」について、明確に説明している	「知識」と関わる感情について、またそれが生まれた経緯について、明確に説明している	スライドの構成が導入、展開、結論と全体を通して論理的にまとめられており、文字のフォントやグラフ・図が効果的に用いられている。	発表者の声量や視線からこの課題に対する熱意が感じられる。	設定された時間の+-１５秒で発表を行った。
B	課題で必要とされた自分が得た「知識」について、ある程度説明している。	「知識」と関わる感情について、またそれが生まれた経緯について、ある程度説明している	スライドの構成において結論に向けての論理的な展開が見えづらく、グラフ・図の効果も十分に活かされているとは言えない。	発表者の声量や視線がこの課題に対する熱意を十分に感じさせるものとは言えない。	設定された時間の+-１５秒で発表を行うことが出来なかった。
C	課題で必要とされた自分が得た「知識」について、説明が不十分である。	「知識」と関わる感情について、またそれが生まれた経緯について、説明が不十分である。	スライドに情報が羅列されているだけで、結論とそれ以外の部分のスライドとの関連性が見えない。	情報は伝達できているが発表者の声量や視線に自信が感じられない。	

⑩ 9/3, ⑪ 9/10, ⑯ 10/29, ⑱ 11/26 学びの記録

	知識/技術	意見/考察
A	自分の観点を持って自分なりに内容を処理、記述している。情報が整理されている。	知識と知識/意見/考察が有機的につながる記述がみられる。深い洞察とクリエィティブな広がりがみられる。
B	内容がそのまま羅列されている。ある程度の情報のまとまりは見られるものの、あまり整理されていない。	多くが短絡的・表層的な感想や意見、疑問にとどまっている。
C	情報の量/質が不十分である。	感想や意見、疑問の量/質が不十分である。

⑫ 9/17 戦争についての調べ学習

	【戦争についての調べ課題】A4サイズ　9/17提出分	
	新しい事実・知識の量/質	新しい事実・知識の整理
A	量/質が十分である	自分の観点を持って、事実・知識がしっかりと整理されている
B	量/質がある程度ある	事実・知識が、ある程度の情報のまとまりになっている
C	量/質が不十分である。	事実・知識が整理されておらず、そのままの羅列となっている

⑬ 10/1 西宮市平和資料館訪問

	【西宮市平和資料館】学びの記録	
	新しい事実・知識の量/質	考察
A	量/質が十分である	他者と自分の主張/事実・知識と主張とが有機的につながり、考察までに発展した記述が多くみられる
B	量/質がある程度ある	他者と自分の主張/事実・知識と主張とがある程度つながっており、考察までに発展した記述がいくらかみられる
C	量/質が不十分である。	考察がみられない

⑭ 10/8 合同授業　グループ発表

	中間テスト前　グループ発表ルーブリック			
	学びの経緯	情報の量と質	情報の伝え方	発表の仕方に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。
A	3、4回分の授業の経緯が簡潔にまとめられている。	発表の内容に即した量と質が十分である	発表の内容が効果的に伝えられている	発表者の声量や視線からこの課題に対する熱意が感じられる。
B	3、4回分の授業の経緯がある程度まとめられている。	発表の内容に即した量と質がある程度十分である	発表の内容がある程度効果的に伝えられている	発表者の声量や視線がこの課題に対する熱意を十分に感じさせるものとは言えない。
C	3、4回分の授業の経緯がまとめられていない。	発表の内容に即した量と質が不十分である	発表の内容が効果的に伝えられていない	情報は伝達できているが発表者の声量や視線に自信が感じられない。

⑭ 10/8 ポートフォリオ課題

	ポートフォリオ「４回分の授業での学びを８００～１０００字でまとめなさい」
	【４回分の授業のまとめ】 グループに分かれての４回分の授業での学びについて、経緯をふまえながら簡潔にまとめなさい。
A	４回分の授業の学びについて、しっかりと経緯をふまえて簡潔にまとめて記述している。
B	４回分の授業の学びについて、ある程度経緯をふまえて簡潔にまとめて記述している。
C	４回分の授業の学びについて、経緯をふまえて簡潔にまとめられていない。

⑰ 11/19 ポートフォリオ課題

	【11/19 ポートフォリオ課題】 「平和」にグループディスカッションを進めていく上で、自分が果たそうと思った役割、実際に果たした役割について考察しなさい。４００字程度で論じなさい。	
	考察	文字数
A	「平和」の定義と自分の役割とが有機的につながり、考察までに発展した記述が多くみられる	４００字程度におさまっている。
B	「平和」の定義と自分の役割とがつながり、考察までに発展した記述がある程度みられる	
C	「平和」の定義と自分の役割とがあまりつながっておらず、考察までに発展した記述があまり見られない	４００字程度におさまっていない。

＜エネルギーグループ＞

- 活動のルーブリック

⑩ 9/3 夏休み発表課題

「エネルギー」グループ　夏休み課題　ルーブリック

	知識	比較	視覚資料に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。	発表の仕方に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。	時間
A	課題で必要とされた自分が得た「知識」について、明確に説明している	何と何を比較することによって、何が分かったのか、明確に説明している	スライドの構成が導入、展開、結論と全体を通して論理的にまとめられており、文字のフォントやグラフ・図が効果的に用いられている。	発表者の声量や視線からこの課題に対する熱意が感じられる。	設定された時間の+-１５秒で発表を行った。
B	課題で必要とされた自分が得た「知識」について、ある程度説明している。	何と何を比較することによって、何が分かったのか、ある程度説明している	スライドの構成において結論に向けての論理的な展開が見えづらく、グラフ・図の効果も十分に活かされているとは言えない。	発表者の声量や視線がこの課題に対する熱意を十分に感じさせるものとは言えない。	設定された時間の+-１５秒で発表を行うことが出来なかった。
C	課題で必要とされた自分が得た「知識」について、説明が不十分である。	何と何を比較することによって、何が分かったのか、説明が不十分である。	スライドに情報が羅列されているだけで、結論とそれ以外の部分のスライドとの関連性が見えない。	情報は伝達できているが発表者の声量や視線に自信が感じられない。	

⑩ 9/3, ⑪ 9/10, ⑫ 9/17, ⑬ 10/1, ⑭ 10/8, ⑯ 10/29, ⑱ 11/26 学びの記録

	知識/技術	意見/考察
A	自分の観点を持って自分なりに内容を処理、記述している。 情報が整理されている。	知識と知識/意見/考察が有機的につながる記述がみられる。 深い洞察とクリエィティブな広がりがみられる。
B	内容がそのまま羅列されている。ある程度の情報のまとまりは見られるものの、あまり整理されていない。	多くが短絡的・表層的な感想や意見、疑問にとどまっている。
C	情報の量/質が不十分である。	感想や意見、疑問の量/質が不十分である。

⑭ 10/8 合同授業　グループ発表

中間テスト前　グループ発表ルーブリック

	学びの経緯	情報の量と質	情報の伝え方	発表の仕方に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。
A	3、4回分の授業の経緯が簡潔にまとめられている。	発表の内容に即した量と質が十分である	発表の内容が効果的に伝えられている	発表者の声量や視線からこの課題に対する熱意が感じられる。
B	3、4回分の授業の経緯がある程度まとめられている。	発表の内容に即した量と質がある程度十分である	発表の内容がある程度効果的に伝えられている	発表者の声量や視線がこの課題に対する熱意を十分に感じさせるものとは言えない。
C	3、4回分の授業の経緯がまとめられていない。	発表の内容に即した量と質が不十分である	発表の内容が効果的に伝えられていない	情報は伝達できているが発表者の声量や視線に自信が感じられない。

⑭ 10/8 ポートフォリオ課題

ポートフォリオ「４回分の授業での学びを８００～１０００字でまとめなさい」

	【４回分の授業のまとめ】 グループに分かれての４回分の授業での学びについて、経緯をふまえながら簡潔にまとめなさい。
A	４回分の授業の学びについて、しっかりと経緯をふまえて簡潔にまとめて記述している。
B	４回分の授業の学びについて、ある程度経緯をふまえて簡潔にまとめて記述している。
C	４回分の授業の学びについて、経緯をふまえて簡潔にまとめられていない。

⑰ 11/19 ポートフォリオ課題

	【11/19 ポートフォリオ課題】 「平和」にグループディスカッションを進めていく上で、自分が果たそうと思った役割、実際に果たした役割について考察しなさい。４００字程度で論じなさい。	
	考察	文字数
A	「平和」の定義と自分の役割とが有機的につながり、考察までに発展した記述が多くみられる	４００字程度におさまっている。
B	「平和」の定義と自分の役割とがつながり、考察までに発展した記述がある程度みられる	
C	「平和」の定義と自分の役割とがあまりつながっておらず、考察までに発展した記述があまり見られない	４００字程度におさまっていない。

４．検証

a) 平和グループ	b) エネルギーグループ
２学期をかけて、平和という大きな抽象的な概念を、西宮、戦争というローカルな視点で語ることの重要性、平和構築は自分事の社会的課題である、という感覚を生徒たちはつかんだことが一番の大きな学びであった。どのようなアクションが起こせるのか、についても、生徒たちは「平和を自分たちの世代も伝えていかないといけない」という使命に気づく中で、AR ウォーキングマップという結論にたどり着き、具体的に動き出す３学期に向けて方向性を確認することもできた。 ＜目標 1) 3) について＞ 1)3)については、⑭10/8 のポートフォリオ課題の中の生徒の記述の多くに見られるように（資料１１）、戦争がどんどん自分事になっていっている様子がよく分かる。AR マップをどのように作っていくか、というディスカッションについても、役割分担や内容決めなど自分たちで主体的に議論を進めていく姿がたびたび見られた（資料１２）。自分たちが平和を構築するためにできることがあることに気づいてからは、生徒たちがより積極的に授業に関わろうとする姿勢を顕著に感じることができた。 ＜目標 2)について＞ 新型コロナウィルス感染拡大のために当初予定した場所に訪れることはかなわなかったが、それでも地元にある資料館や、学内にある戦跡の存在に生徒たちが気づき、実際に訪れることが出来た。訪問をするだけでなく、学院の担当者の方とも生徒たちはつながりを持つことができ、学びが一層広がる経験を積むことができた。教室内に留まらない学びのフィールドの楽しさを生徒たちは感じることが出来たのではないかと思われる。	「便利」な世の中を維持するために世界中で不可避な課題となっているエネルギー問題に目を向けることを出発点とし、2 学期をかけて原子力への学びを深めることが主な学びとなった。 自分達の理想のエネルギーミックスと、現在の日本のエネルギーミックスとを比較させることで、その間にある原子力の平和利用（商業利用）へと自然な流れで学びの関心を向けることができた。原子力に対する疑問を整理し、調べ、議論した後に、専門家の講義を受けることで、自分達の疑問と調査が体系的に整理されていくことを経験することができた。 ＜目標 1) 3) について＞ 1) 3)については、たとえば、⑫ 9/17 のマインドマップ作成に見られるように、ただ漠然と原子力を忌避していた段階から、未知による嫌悪と、知識に裏付けられた危機感とが区別されていった。思いつきの羅列ではなく、体系的に小さな疑問を整理することで、教員が教示をすることなく、調べ学習の枠組みが作り上げられていく様子が見られた。また、そうやって自分達で作り上げた枠組みだからこそ、カテゴリーに分けられた疑問点に対して、答えを導き出すことに積極的であり、且つ、自分達が引き受けたカテゴリーに対して納得の行く答えを掴むことに責任感を感じている様子であった。そうした活動の中で、一つの疑問が解決したところから新たな疑問が派生し、自然と探求型学習のループが出来上がり、それに気が付いて再度マインドマップを整理しようと自発的に提案する生徒も見られた。 こうして整理された疑問点について、文献等を中心とした調べ学習だけでは到達できない点について、出前授業を行うことによって、それぞれの生徒の中で、単発の理解が体系的に整理され、原子力に対する一つの大きな理解として構築されていく感覚に、感嘆の声を漏らす様子が多々見受けられた。 ＜目標 2)について＞ 新型コロナウィルス感染拡大のために当初予定した関西電力関連施設に見学に赴くことが叶わず、資料を収集して調べ学習をすることには大変苦戦していた様子であった。最終的には、出前授業を行うことで、浮かんだ疑問と閃きを、その時にやり取りする機会に恵ま

	れたため、能動的な学びのやりがいや、パフォーマンスの高さを実感することができた。また、散々調べ学習をした上で、専門分野の第一線で活躍されている専門家と関わりを持つことで、権威から受動的に知識を享受するコミュニケーションではなく、あくまで自分達の目線でコミュニケーションをすることができた。出前授業のデザインから生徒主体で取り組ませたこともその一端を担ったものと思われる。

５．今後改善すべき点について

a）平和グループ	b）エネルギーグループ
・【課題の設定】から【情報の収集】、【整理・分析】に至るまで、教員の思う方向にどの程度誘導するかについての葛藤が常についてまわった２学期であった。ARマップアプリなど、教員が手に入れた情報を生徒に渡すことも果たして良いことなのか、いまだに答えが出ないでいる。 ・作業、活動内容が異なる生徒が同じグループにいる中で、不公平にならないように成績を算出する難しさも感じた。評価ルーブリックの内容は変えても、課題の数や評価の割合はそろえるなど、ティームティーチングをする教員と相談を密にしながら、配慮をしていく必要性がある。 ・ルーブリックは常に課題を指示する際に提示した。生徒たちは何が求められているか明確になるが、教員が定めた枠を超えるような創造性あふれる活動の足かせになっているのではないか、という懸念もある。ルーブリックをどのタイミングで提示するかについては議論の余地があるように感じる。	・【課題の設定】から【情報の収集】、【整理・分析】に至るまで、教員の思う方向にどの程度誘導するかについての葛藤が常についてまわった２学期であった。マインドマップ作成では、教員主導で行うと 2 時間の授業で十分教示できることに 3 倍の時間をかけた。それでも、誤解や思い込みによって傾く議論については口を挟みつつ、である。課題の達成感を感じている様子は十分に見受けられ、また苦労して作成したことから、実際にそれを用いて調べ学習をする際には、責任感や使命感を持って取り組む様子が見られたことは良いが、やはり授業のテンポとは反比例してしまう。 ・作業、活動内容が異なる生徒が同じグループにいる中で、不公平にならないように成績を算出する難しさも感じた。評価ルーブリックの内容は変えても、課題の数や評価の割合はそろえるなど、ティームティーチングをする教員と相談を密にしながら、配慮をしていく必要性がある。 ・ルーブリックは常に課題を指示する際に提示した。生徒たちは何が求められているか明確になるが、教員が定めた枠を超えるような創造性あふれる活動の足かせになっているのではないか、という懸念もある。ルーブリックをどのタイミングで提示するかについては議論の余地があるように感じる。

第３フェーズ「共有する」:【情報の収集】【整理・分析】【まとめ・表現】

１．目標

a）平和グループ	b）エネルギーグループ
目標 1）様々な教室の外の人との関わりの中で、モノを作り上げることが出来る。 目標 2）成果物を通して、学びを教室の外の人たちと共有することが出来る。	目標 1）原子力発電に関してクリティカルシンキングを共有できる。 目標 2）原子力に関する知識を得た自分達がアウトプットする方法を模索、共有できる。

２．具体的活動

a）平和グループ	b）エネルギーグループ
⑲ 1/14	
・マチアルキアプリを実際に使ってみて、どのようにコンテンツをアップするのかを体験してみる。 ・コンテンツ班、マップ班に分かれ、それぞれコンテンツの内容とマップのデザインなどを検討する。 ・マップの印刷会社との交渉を始める	・インプットする段階から次の段階の模索。自分達からアウトプットする段階へ移行する。 ・インプットしたことを基に、自分達が何をすることで何を生み出すことができるのか、個人で計画立案を試みる。
⑳ 1/21	
・コンテンツ作成とマップデザイン検討を継続。 ・コンテンツ班は実際にキャンパスに出て、AR が動作するかの確認を行う	・前回個人で立案した計画を発表。互いに質疑応答 ・出前授業を受けて、原発肯定派の見方に偏っていることに気づき、原発推進と反原発との摩擦をクリティカルシンキングできていないことを次の課題とする。
㉑ 1/28	
・コンテンツ作成とマップデザイン検討を継続。 ・マップの第１校正のチェック。 ・AR コンテンツの原稿をチェック。 ・編纂史室に写真提供の依頼。 ・印刷会社との交渉継続。	・クリティカルシンキングを目標に計画立案をやり直す。 ・反原発の活動団体について調査する。
㉒ 2/4	
・コンテンツ作成とマップデザイン検討を継続。 ・自分の友人、周りの大人に実際にマップを見てもらって意見をもらい、マップの問題点、改善点を探っていくユーザーレポートの作成。 ・印刷会社との交渉継続。	・反原発と政治の関りに目を向ける。 ・政権とマニフェスト、政策と原子力の活用について、時事問題を精査する。 ・関西原子力懇談会との zoom ミーティングを提案。質問項目を整理する。
㉓ 2/15	
・コンテンツ作成とマップデザイン検討を継続。 ・各自が作成したユーザーレポートをクラスで共有。どれを採用するかのディスカッション。 ・マップの第２校正のチェック ・印刷会社との交渉継続。	関西原子力懇談会と zoom ミーティングを行う。原子力と政策との関係や、反原発団体についての情報を集める。
㉔ 2/25	
WWLC３科目合同授業　「各科目からの提言　『平和構築の提言』」　実施・参加	

３．活動の評価方法

＜平和グループ＞

- 活動のルーブリック

⑲ 1/14 マチアルキアプリの試用

	【1/14(木) マチアルキ試しアップ】 インターネット上のマチアルキに、ARマップ用の写真と原稿をアップすることが出来る ・ARポイント「この場所」「この画像」を１つずつ用いて２つをアップ 　その際、コンテンツ名を「自分の名前１・具体的場所名」「自分の名前２・具体的場所名」にする ・上記ポイントに「テキスト＋写真」「動画」（どんなものでも構いません）を１つずつアップする	
	ARポイント１	ARポイント２
A	上記条件で全てアップできた	上記条件で全てアップできた
B	条件が１つ以上満たせなかったがアップはできた	条件が１つ以上満たせなかったがアップはできた
C	アップできなかった	アップできなかった

⑳ 1/21, ㉑ 1/28, ㉓ 2/15　AR コンテンツ作成・AR マップ作成

	【1/28・2/4ARコンテンツ作成：参考】 ARマップに、戦争の情報を、文字・写真・動画で記載する。	
	知識・情報	工夫・オリジナリティ
A	地図上にある戦争に関わる情報よりも豊かな知識・情報が、多くARマップに記載されている	参加者に対して単なる知識・情報伝達に留まらない、興味・関心を高める豊かな工夫・オリジナリティがある。
B	地図上にある戦争に関わる情報と同程度の知識・情報がARマップに記載されている。	参加者に対して単なる知識・情報伝達に留まらない、興味・関心を高める工夫・オリジナリティがある。
C	地図上にある戦争に関わる情報ほどの知識・情報がARマップに記載されていない。	参加者に対して単なる知識・情報伝達に留まっている。

	【1/28・2/4　地図全体の作成：参考】 ARの使い方などのARコンテンツ以外の基本的情報、デザイン	
	基本的情報	デザイン
A	参加者がARウォーキングマップに参加しやすくするための基本的情報の記載に、十分に工夫を凝らしている。	参加者の興味・関心を引くために、デザインに十分に工夫を凝らしている。
B	参加者がARウォーキングマップに参加しやすくするための基本的情報が、記載されている。	参加者の興味・関心を引くために、デザインに工夫が見られる。
C	参加者がARウォーキングマップに参加しやすくするための基本的情報があまり記載されていない。	参加者の興味・関心を引くための、デザインに工夫が見られない。

㉒ 2/4 ユーザーリポート

	【KG PEACE MAPユーザーレポート】 友人と大人に、実際にKG PEACE MAPの原版に触れてもらって意見を得ることで、原版の問題点や解決策を探る		
	他者からの意見	問題点	解決策
A	友人、大人からのユーザーとしての意見が、量、質ともに豊かに表現されている。	他者からの意見を基にした、地図の問題点が的確に記されている。	他者からの意見、そこから生まれた問題点に対して、具体的かつ実現可能な解決策が十分に提案されている。
B	友人、大人からのユーザーとしての意見が、量、質ある程度表現されている。	他者からの意見を基にした、地図の問題点がある程度記されている。	他者からの意見、そこから生まれた問題点に対して、具体的かつ実現可能な解決策がある程度提案されている。
C	友人、大人からのユーザーとしての意見が、量、質ともにあまり表現されていない。	他者からの意見を基にした、地図の問題点があまり記されている。	他者からの意見、そこから生まれた問題点に対して、具体的かつ実現可能な解決策があまり提案されていない。

＜平和グループ＞

- 活動のルーブリック

⑳ 1/21「生産する」アイデア作り

	【1/21(木)「生産する」アイデアを作る】 これまでの学びを活かして、自分達から何かを「生産する」アイデアを立案する。「何を生む」ために、「何をする」のか明記すること。具体的に実現可能な計画を立てること。（コロナのことは度外視して構わない。）	
	何を生むために何をするのか	具体性
A	『何を生むために何をするのか』という点について、行動とそれに伴う結果の結びつきが明らかである。	実現するにあたった十分に具体的に計画が練られている。
B	『何を生むために何をするのか』という点について、行動とそれに伴う結果の結びつきが曖昧である。	実現するにあたって計画に具体性が足りない。
C	『何を生むために何をするのか』という点について、行動とそれに伴う結果の結びつきが不成立である。	実現するにあたって計画に具体性がない。

㉑ 1/28, ㉒ 2/4, ㉓ 2/15 学びの記録

	知識/技術	意見/考察
A	自分の観点を持って自分なりに内容を処理、記述している。 情報が整理されている。	知識と知識/意見/考察が有機的につながる記述がみられる。 深い洞察とクリエィティブな広がりがみられる。
B	内容がそのまま羅列されている。ある程度の情報のまとまりは見られるものの、あまり整理されていない。	多くが短絡的・表層的な感想や意見、疑問にとどまっている。
C	情報の量/質が不十分である。	感想や意見、疑問の量/質が不十分である。

４．検証

a）平和グループ	b）エネルギーグループ
最終的に、何度も校正を重ねて１つの AR マップを作成することが出来、また AR コンテンツも作動することが確認できた。地図については 3/31 に納品されることになり、４月からいよいよ様々なところで地図と活動を広げていく準備が整った。 ＜目標 1)について＞ ・印刷会社とは生徒たちが交渉を何度も重ね、アイデアをもらいながら印刷物としての質を上げることができた（資料１３）。 ・編纂史室などの協力を得て、また友人、家族などの助言も参考（資料１４）にするなど、自分たちの意見だけでなく、教室外との関わりを持ちながら作成することが出来た。さらには、編纂史室の人にインタビューをする動画をコンテンツにするなど、AR 自体にさらなる広がりを持たせる取り組みも見られた。 ＜目標 2)について＞ ・成果物である地図が納品されるのが 3/31 となったため、今年度中に学びを教室外の人たちと共有することはできなかった。 ・２０２１年度の４月以降には、全校生徒に対して、またこの活動に関心を持ってくださった大学の法学部のゼミにおいて、また将来的には中学部や初等部、関西学院の広報などにもこの活動を知ってもらい、平和構築を広げていきたいと考えている。	2 学期に出前授業で終わってしまったため、原発推進に一気に傾いてしまった意識を揺り戻し、改めてクリティカルシンキングすることとなった。原発反対の活動や政権との関りを調べることで、原発が自分達の生活に単純にエネルギーを生み出す手段の 1 つではなく、様々な関りを持っていることを学ぶ段階に入った。 ＜目標 1)について＞ ・HP や YouTube を通して、原子力に反対する運動について情報を収集することができた（資料１５）。 ・反原発団体の後援から、原子力と政権との関りが浮き彫りとなり、生徒の中でこれまで社会科の授業で学習した内容と知識の連関が生まれた。 ＜目標 1)について＞ ・2 学期に出前授業でお世話になった関西原子力懇談会と zoom ミーティングの機会を持ち、2 学期の出前授業の内容に加えて、反原発の観点から懇談する機会を設けることができた。2 学期の出前授業の内容ではなく、3 学期に反原発団体について情報を収集する中で、改めて浮上した質問を行うことができた。これにより、2021 年度に反原発の立場の有識者や団体に関わるところから学びを展開する見通しを立てることができた。

５．今後改善すべき点について

a）平和グループ	b）エネルギーグループ
・１年だけの活動に終わらせるのではなく、AR マップやコンテンツを持続的に運営する（内容のアップデート、アプリの契約、管理者など）ための方策を検討しなくてはならない。	・反原発に関して、政治的な繋がりをどこまで授業として取り上げるかについて苦慮した。手放しに調べ学習をさせる危険性すら感じた。政治的なイデオロギーが関わる内容については、もっとシミュレーションを重ねて授業に臨む必要性を感じた。

＜成績算出方法について＞
テストを行わない探究授業ではあるが、必修選択授業という正課の科目であるため、他の WWLC 科目である AI 活用科目、グローバルスタディ科目と共通して、以下のように成績を算出する運びとなった。

生徒の成果物に関する学び / 思考 ＝① 成果物（プレゼンテーション、レポートなど）　　：４０～６０％ 生徒の授業内の学び / 思考 ＝② 学びの記録　＋　③ 振り返り（ポートフォリオ）　　：４０～６０％ 合計：１００％

これに従った各学期におけるハンズオンラーニングの成績の割合は以下の通りである。

１学期

① 成果物：６０％

・定義作成　ペア２回、グループ１回

・個人発表１回

② 学びの記録：２５％

・５回

③ ポートフォリオ：１５％

・３回

２学期

① 成果物：４０％

・個人発表１回

・グループ発表１回

② 学びの記録：３０％

・７回

③ ポートフォリオ：３０％

・２回

３学期

① 成果物：６０％（平和グループ）

・ユーザーレポート

・AR トライアル

・マップデザイン　/　AR コンテンツ

② 学びの記録：６０％（エネルギーグループ）

・３回

・立案シート

③ ポートフォリオ：４０％

・１回

２グループに分かれて活動をすることが多かったために、成績の基準となるものが実質的に異なる場面も多かったが、昨年度のグローバル探究 BASIC の反省を基に、以下の点に留意をしながら成績算出を行うことで、特に問題が起きることもなく、生徒、教員の双方が納得のできる成績を生徒に提示できることが出来た。

・担当者間で常に課題の内容、ルーブリックの確認を行った。

・各評価におけるルーブリックをできるだけシンプルな３段階とし、A を５点、B を３点、C を１点と統一した。
・評価が分かれるような課題については、２人で同じルーブリックを用いて合議の上採点を行った。
・どのような課題においても徹底してルーブリックは課題の指示と同時に提示をし、生徒たちに課題の目標を明確にした。
・フィードバックについては、単に ABC をつけるだけでなく、全体へのコメント、個人へのコメントを個別に書いて丁寧に返却することを心がけた。また実際に返却する際には単に返却するだけでなく、口頭でも良かった点や改善点などの説明を添えた。
・またそのフィードバックは、次の課題に生徒が活かすことが出来るように、極力次の授業までに返却することを心がけた。
・ポートフォリオ課題については、一連の活動の区切りごとに実施することが出来た。生徒にとっては、自分の取り組みを振り返る良い機会になったと思われる。

＜全体のまとめ＞
以下に、ハンズオンラーニング授業全体の活動目標を再度記す。
１．広い意味での「平和」に関わる社会的課題について、自分の言葉で語ることが出来るようになる。
２．「戦争」「エネルギー問題」という平和に深く関わる社会的課題について、自分事してとらえ、ローカルな視点で語ることができる。
３．上記１，２についての課題を解決するアクションを起こすことができる。もしくはアクションの内容を考え、計画することができる。

目標１、２、３について、両グループにおいて概ね達成できたのではないかと考える。平和グループは自分たちだからこそ語ることのできる関学と戦争の関わりについて調べ、編纂史室や印刷会社などの教室外からの学びを得ながら AR ウォーキングマップというツールを作り上げることで、平和な社会の大切さを教室外に訴えかけるアクションに結びつけていった。エネルギーグループは自分たちのコンセントの先でどのように電力が供給されているのか、それを関西電力や関西原子力懇談会から直接学ぶことで、将来のあるべきエネルギー政策へと考えを発展させた。具体的なアクションまでには至らなかったが、反原発グループの意見も積極的に聞くべきであるということに気付き、改めてインタビューを行おうとするなど、主体的な行動が見られた。いずれにしても、両グループとも教室外とつながりを持ちながら、自分たちの足元の問題として SDGs、平和の課題を解決しようとする試みを、最終年度となる来年度に向けた良いスタートを切ることが出来た。コロナ禍において活動が制限され、休校などに伴い大幅な予定変更に見舞われたものの、今の自分たちにできることに着目して授業を展開することが出来た。生徒の最終課題のポートフォリオ（資料１６）にもあるように、授業で学んだこと、身につけた力が授業外でも活かされていることを生徒たちも実感してくれているようである。

来年度は、この１年間の学びをさらに深め、具体的なアクションを起こし、その過程の中で新たな課題を発見するといった、探究サイクルの学びを生徒、教員が共に経験することができればと考えている。

【資料１：参考資料】

平和グループ

＜「西宮市と戦争」関連＞

・「西宮の歴史」　西宮市教育委員会

・「西宮の歴史と文化」　西宮市立郷土資料館

・「町名の話：西宮の歴史と文化」　山下忠雄

・「遥かなる母校：西宮高女の太平洋戦争」西宮高女の戦争を記録する会

・「西宮現代史第３巻」西宮現代史編集委員会

・「目で見る　西宮の１００年　西宮市全域」　堀内冷

＜「関西学院と戦争」関連＞

・「関西学院１００年史　資料編Ⅰ・通史編Ⅰ・通史編Ⅱ」　関西学院１００年史編纂事業委員会

・「関西学院史　紀要　第２４号」　関西学院　学院史編纂室

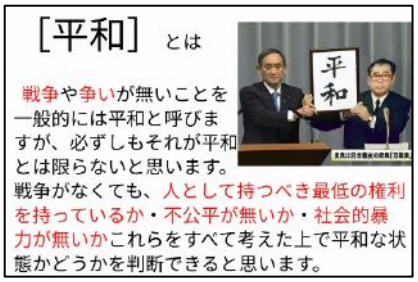
・「歴史の中の上ケ原　西宮市上ケ原、古墳から震災まで」　中村直人

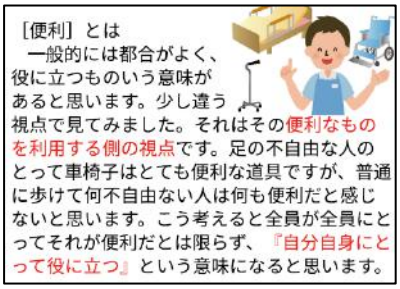
・「関西学院の１３０年」　関西学院大学博物館

・「関西学院の１００年」　創立１００周年記念事業委員会　記念出版専門委員会

・「関西学院高中部１００年史」関西学院高中部

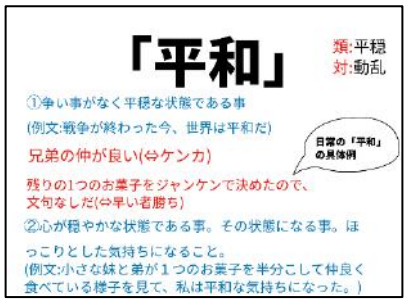
【資料２：オンライン課題１の例】

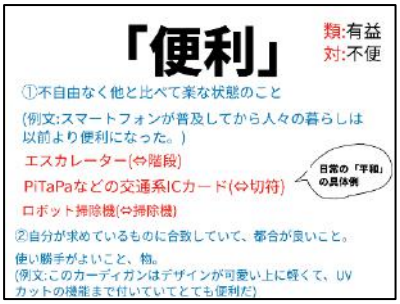




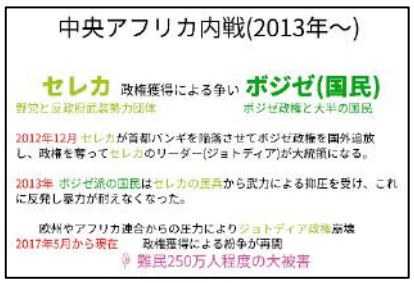
【資料３：オンライン課題２a) b)の例】

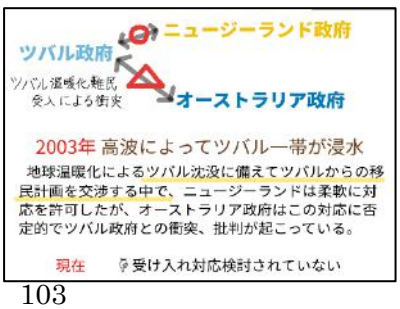
a)



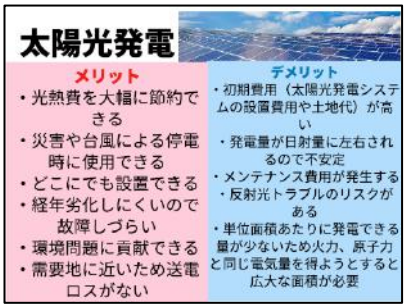


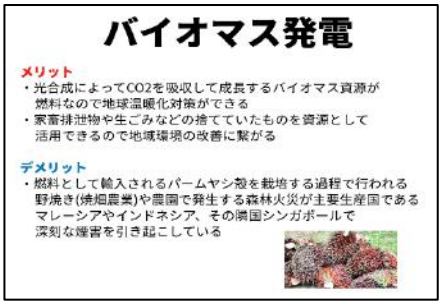
b)

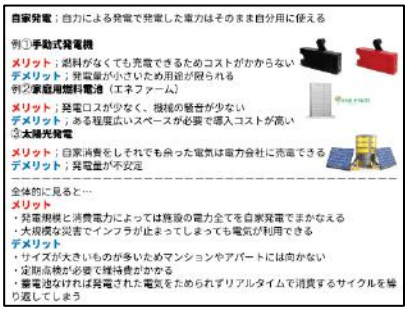




【資料４：オンライン課題３の例】







【資料５：「平和」定義の再構築】

平和の抽象と具体

抽象　　定義
　安全に生活できること。

具体
　安心出来る生活を努力して作り上げていくもの。

抽象と具体が同じ内容を示しています。抽象的な説明を「安全な生活」とするならば、その具体例としては、二人が安全な生活だと判断する、実際の生活に見られる様子を例に挙げないと、具体例を挙げたことにはなりません。

[redacted]

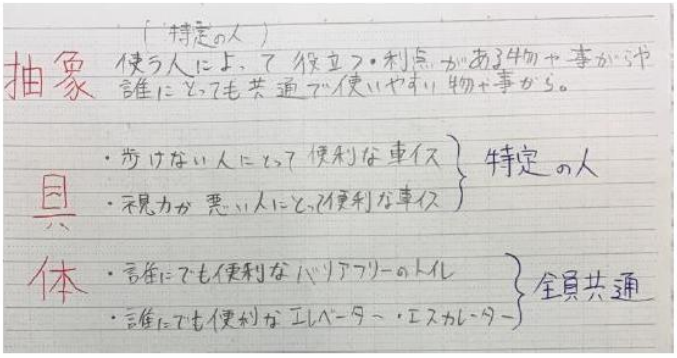
[redacted]

	「便利」という抽象概念と具象概念の定義	ペアとの協働作業（時間内課題）
A	・「便利」を抽象的な概念として定義づけることができる。 また、それに対応して、「便利」の具体例を挙げることができる。 ・抽象的な事象を卑近な事柄として豊かに表現できる	時間内(15分)に、ランダムに作られたペアで協働して課題を遂行できる　A
B	・「便利」を抽象的な概念として定義づけることができる。 また、その定義にある程度対応して「便利」の具体例を挙げることができる　B ・抽象的な事象を卑近な事柄としてある程度表現できる。	
C	・「便利」を抽象的な概念として定義づけることができない。 また、その定義に対応して「便利」の具体例を挙げることができない。 ・抽象的な事象を卑近な事柄として表現できない。	時間内(15分)に、ランダムに作られたペアで協働して課題を遂行できない

【資料６：ポートフォリオ課題 ＜協働することに対する意識の変化について＞の例】
５人で１つの定義を作り出すという 5/25(月)の協働作業において、「こうやればうまくいくのか」「ここはもっとこうしたほうが良かったかも」「この人の（自分の）こういう働きが助け /妨げになった」など、協働することに対して自分が気付いた、発見したことなどを含む自分の意識の変化について書きましょう（４００文字程度で）。

今回は今までよりも人数が多くみんなの意見をまとめるのに時間がかかってしまいました。画面越しでの交流となるので話し出すタイミングを見計らなければならなかったり微妙なニュアンスを伝えることが難しいなと感じました。グループ一人一人がきちんと意見を出し合えたものの意見交換の難しさによってみんな様子を伺いすぎて話し出すまでが長かったのでもう少し積極的に意見を交換し合っても良かったかなと思います。
また、自分が意見を述べているときに画面越しだとちゃんと声が届いているか、聞いてくれているか不安になるけど相槌を打ってくれたり画面越しでも顔を上げて聞いてくれたりして何かしらの反応を返してくれていたのでとても話しやすかったです。なので、みんなが積極的に話し合いに参加できるようにするためにもきちんと反応することは大事だと思います。○○さんが最初に話し始めてくれたり意見のまとめ方を考えてくれたりして話し合いを円滑に進めてくれたのでありがたかったです。

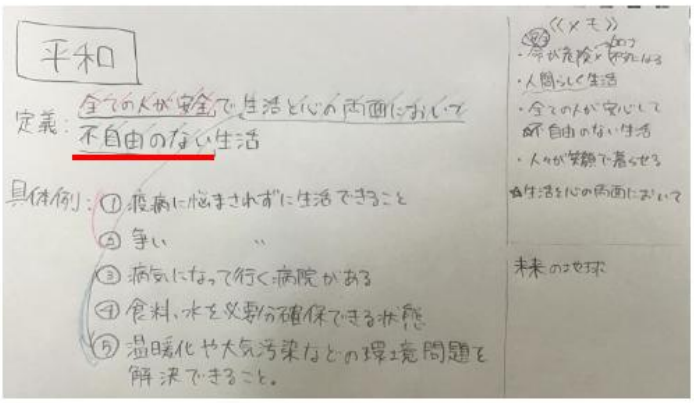
【資料７：「便利」定義の再構築】



[redacted]

	「便利」という抽象概念と具象概念の定義	ペアとの協働作業（時間内課題）
A	・「便利」を抽象的な概念として定義づけることができる。 また、それに対応して、「便利」の具体例を挙げることができる。 ・抽象的な事象を卑近な事柄として豊かに表現できる A	時間内(15分)に、ランダムに作られたペアで協働して課題を遂行できる A
B	・「便利」を抽象的な概念として定義づけることができる。 また、その定義にある程度対応して「便利」の具体例を挙げることができる。 ・抽象的な事象を卑近な事柄としてある程度表現できる。	
C	・「便利」を抽象的な概念として定義づけることができない。 また、その定義に対応して「便利」の具体例を挙げることができない。 ・抽象的な事象を卑近な事柄として表現できない。	時間内(15分)に、ランダムに作られたペアで協働して課題を遂行できない

【資料８：「平和」「便利」定義の５人グループによる再構築】



・定義と具体例の対応は隙がなくできているように思います。では、1つ質問です。下線部はなぜ敢えて「～がない」の形を取っているのですか？「自由な生活」ではだめですか？この2つの表現の比較は行いましたか？？

[redacted]

①「平和」「便利」の抽象概念と具象概念		②「平和」「便利」の抽象概念のまとめ方の説明	③グループワーク
「平和」「便利」という抽象概念と具象概念の定義の関係性	豊かな具象概念（その数）	数ある抽象概念の定義から、共通点・相違点（軸）を見出し、1つの定義にまとめる	グループでの協働作業（時間内課題）
「平和」「便利」を抽象的な概念として定義づけ、それに対応した「平和」「便利」の具体例を挙げることができる。	抽象的概念に対応した具象概念を5個挙げることができる	数ある抽象概念の定義から、ある共通点・相違点（軸）を見出し、1つの定義にまとめていった経緯や判断軸の説明が大変明確であり、説得力がある。	時間内(20分)に、ランダムに作られたグループで協働して課題を遂行できる
「平和」「便利」を抽象的な概念として定義づけ、それにある程度対応した「平和」「便利」の具体例を挙げることができる。	抽象的概念に対応した具象概念を3～4個挙げることができる	数ある抽象概念の定義から、ある共通点・相違点（軸）を見出し、1つの定義にまとめていった経緯や判断軸の説明がある程度明確であり、説得力がある。	
「平和」「便利」を抽象的な概念として定義づけ、それにある程度対応した「平和」「便利」の具体例を挙げることができる。	抽象的概念に対応した具象概念を0～2個挙げることができる	数ある抽象概念の定義から、ある共通点・相違点（軸）を見出し、1つの定義にまとめていった経緯や判断軸の説明が不明確で、説得力がない。	時間内(20分)に、ランダムに作られたグループで協働して課題を遂行できない

【資料９：ポートフォリオ課題 ＜協働することを通して感じた自分の「定義づけ（平和・便利）の変化について＞】

５人で１つの定義を作り出すという 6/1(月)の協働作業を通して、自分が気付いた、発見したことなどを含む自分の「定義づけ（平和・便利）」の変化について書きましょう（４００文字程度で）。

まず自分 １人で考えた平和の定義は、「生活と心の両面において豊かであること」であり、便利とは違い、平和は人の心を温めるという事柄が必要不可欠であると考えていた 。けれども、この定義から世界という枠の中で、具体例に当てはめられるものは存在しないと思っていた。次にペアで平和の定義を出す課題では、心が豊かであることを抽象化した○○君の「安心」という言葉を足して、前回の自分の定義をそのまま提出した。ただ前回は考え出せなかった具体例について、●●君が病院を挙げてくれたことをきっかけに、病院を含む公共施設ならば生活環境の良さと安心の ２条件が生かされることに気付け、身近で誰もが理解できる定義として、２条件の重要性をより主張することができた 。そして ５人のグループワークで は、自分達の「安心できる、生活と心の両面において」という表現に加えて、制限のない笑顔でいられる状態を言語化した「不自由のない」を「豊かである」の代わりとして用いて定義を完成させた。 「～ない」という表現の指摘はみんなで共有していたが、時間内に他に置き換えられる言葉を考えられず、そのまま提出した。結果的には １ 人で考えていた、生活環境の良好と人の心の温もり・思いやりがあるという ２ つが、平和には欠かせないという案が最後のグループワークまで変わらず定義としてなされた 。発見した事としては、前回の感想と同様、具体例は身近な物事から想像してみること、そしてもう １つ「不・未・非・無」という字は、事柄を簡潔にかつ丁寧に説明できるものではなく、またこれらの字を使わなくても肯定的な用語で十分に相手に伝えられるということを学んだ。

【資料１０：平和グループ　発表テーマ一覧】

誰と誰の争い	何について争っているか	なぜ人と人との衝突は起こるのか
ツバル vs オーストラリア	移住	平和を持続させようとして、自分たちの価値観で物事を進めていこうとするから
クリントン vs トランプ	互いの印象	人は、自分の思い通りに物事が進まないと人にあたってしまうから
北朝鮮 vs 韓国	早く領土を統一したい/軍港	その人にとっての最低限の生活が達成されると、たとえ他の人から奪ってでもさらに良い生活を望むから （向上心、競争心、欲）
カダフィ大佐 vs アラブ諸国民 GNA vs LNA	民主化 天然資源/NATO の分断/宗教	意見の食い違いや自信の利益のためなら武力行使をしてでも手に入れたいという考え方から
アサド政権 vs 反政府軍	解放	自分の求める形（最低限の生活の保障や心の安定）に近づけるために互いに傷つけ合うような争いをする
池川議員 vs 教育長 生徒 vs 学校	学校の規則	既存のルールに対してその人にとって不都合な点がある 他者の立場で物事を考えられなかった
香港行政府 vs 香港市民	逃亡犯条例改正案の撤廃	求めるものが噛み合わない人たちのどちらかが、相手の考えに逆らっていても、無理やり自分の考えを押し通そうとするから
黒人 vs 白人	命	固定概念（奴隷制度撤廃以後も黒人差別は無くならず、ずっと心の奥底にはあったから）
日本政府 vs 沖縄県民・知事	米軍施設の建設	平和のレベルに差があることに不満を持つから
越後製菓 vs　サトウ	特許権	最低限の生活の保障が他人から奪われ、保障が保障されなくなるから
ﾌﾗﾝｸﾐｭﾗｰ vs ﾃﾞｨﾝｸｽ	商標	人と人は、利益を追い求め、自分自身の立場を守るため

【資料１１：ポートフォリオ課題＜４回分の授業のまとめ＞】

グループに分かれての４回分の授業での学びについて、経緯をふまえながら簡潔にまとめなさい。８００～１０００字でまとめなさい。

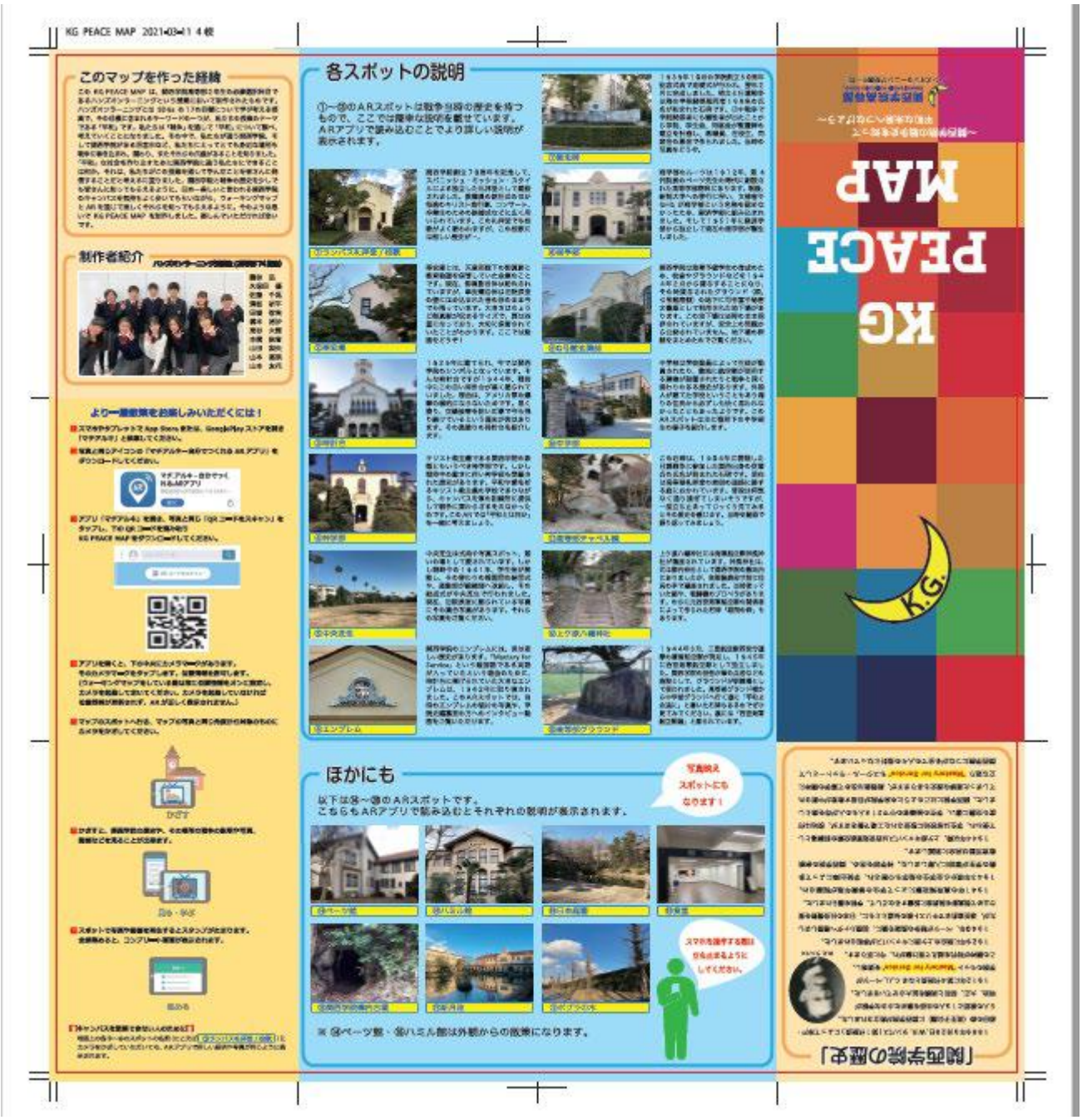
平和グループは夏休み・9/3 から 10/1 の間で戦争について調べてきました。 9/3 には夏休みの課題として出されていた、第二次世界大戦に関する事実で最も心を動かされたものについて１人ずつ発表しました。戦争を題材にした作品をもとに発表してくれた人や、インターネットや新聞記 事から取り上げた体験談をもとに発表してくれた人がいました。そのなかでも山本さんのお祖母さんからのお話は戦争を身近に感じる きっかけ になり、私たちの学びに繋がりました。そして私たちは戦争に対して何を知るべきか・するべきか・できるかの３つを考えていくことになりました。何をするべきか、という点において、戦争のことを伝えていくべきだとなりました。 しかし私たちは知識不足で人に伝えられるほどの知識量ではないので、もっと情報を集めて戦争についての知識を多くしようとなりました。そのため 9/10 にはみんなで情報収集をしました。そこで『火垂るの墓』の舞台が兵庫県だった・関西学院にも戦争の痕跡が残っているなど、私たちが思っていた以上に戦争は身近なものであるということに衝撃を受けました。また、西宮平和資料館の存在を知り、10/1 に行くことが 決まりました 。この授業を通して、私たちは戦争に対して何ができるかという点において、戦争をローカルな視点で伝えていくことができると考えました。そして関西学院と西宮をローカルな視点の例と

してあげ、2 グループに分かれて 9/17 にグループごとに発表をしました。関西学院グループは戦時中の関西学院についてや、実際に関西学院にある西宮海軍航空隊跡を見に行った感想を発表してくれました。西宮グループは資料館に行くにあたっての下調べ、西宮で起きた空襲の回数・場所・被 害について発表してくれました。この情報収集と発表を通して、改めて知識不足を痛感しました。10/1 には西宮平和資料館に行きました。主に戦争中の人々の思い・どのように後世に伝えていくかの 2 つを考えながら学びを深めました。戦争中は政府に軍人として戦いに出るのは名誉なことだと思い込まされるなど、軍人の思いが蔑ろにされているということが展示物から生々しく感じられました。また、戦争を悲しいことという事実だけで終わらせないように伝えていくことが大切だと考えました。これらの授業を通して 私たちはどのように伝えるのかをもっとしっかり考えていかなければならないと思いました。世間の人々の今の戦争に対する意識などを知ってから、今までの授業で学んだ戦争に対する意識が変わったきっかけやローカルな視点で考えていくことを活用し、考えていくべきだと思いました 。

【資料１２：ポートフォリオ課題＜AR マップのディスカッション＞】
「平和」にグループディスカッションを進めていく上で、自分が果たそうと思った役割、実際に果たした役割について考察しなさい。４００字程度で論じなさい。

私は今回の AR マップ作りのディスカッションでは司会役になる人を予想していたため、意見を出す役割にまわろうと思っていました。結果、話しあいが円滑に進んだのでよかったです。平和に話しあいを進める上で司会役を決めることは重要ということがわかりました。平和の定義でいう心の安定は自分がどの立場にいるのか、はっきりすることで得られると思うからです。また、どんな意見交換の場でもそうだと思います。しかし、私は意見を出すだけの役割では不利になると思いました。なぜなら、司会役が、話し合いをどの方向に進めるか決めるからです。司会が持っていきたい方向があればそっちに持っていけるから、司会役をだれにするかという争いが起こる場面もあるのかなと思いました。重要なことは司会の人が公平で、偏っていないことだと思います。そうして、私のような意見を出す立場の人は最低限、意見が聞いてもらえ、平和が守られるのだと思います。また、司会をそういった目線で選ばないといけないと思いました。

【資料１３：AR マップのデザイン（校了前の校正）】



～平和希望の散策～

KG PEACE MAP

散策オススメルート➡

関西学院に隠された知られざる戦時中の暗い過去を携える箇所を中心に、約20ヶ所をスポットとして選定しました。そのスポットを訪れることによって歴史的事実を知り、より一層、平和への思いを寄せていただければ幸いです。全景スポットのみを周るお気軽ショートコース、それに加え、関西学院のよく知るキャンパス内でぜひ足を運んでいただきたいスポットを例せてめぐるキャンパス満喫コースの２つをご用意しました。さあ、このマップを片手に平和という視点でキャンパスを散策してみませんか。

お気軽ショートコース

関西学院の戦争関史の跡を気軽に散策いただける約 1.8km のコースです。

所要時間　約１時間

キャンパス満喫コース

満喫度のルートは約 2.5 キロでアップダウンの激しいルートとなっております。
戦争を見て今に残るこの上ケ原キャンパスのあらゆる名所を散策するコースです。
絶景スポットでの写真撮影も忘れなく！

所要時間　約１時間 40 分

KG PEACE MAP ～関西学院の戦争史を知って平和な未来へつなげよう～

ARとは？

日本語で「拡張現実」といい、私たちがいる現実空間に写真や、動画をＣＧなどデジタル技術を使い、あたかも目の前にあるかのように表示する技術です。

上ケ原八幡神社

日本庭園

エンブレム

関西学院構内古墳

パニル館

中央芝生

神学部

時計台

ベーツ館

西宮

高等部グラウンド

総合館

中学部

ポプラの木

G号館玄関前

高等部チャペル棟

時計台

東月池

聖支援

ランバス記念礼拝堂／校歌

【資料１４：ユーザーレポート】

【KG PEACE MAP ユーザーレポート】

2年 [redacted]

ユーザー名		地図を見てもらった感じ、AR を少し見てもらった後のユーザーの意見	ユーザーの意見から浮かび上がってくる地図・AR の問題点	自分が提案する解決策
友人	[redacted]さん さん	**良いところ** ・地図上に番号や繋がる線があってわかりやすい。 ・表紙、裏表紙になるところのデザインがいい。 ・散策ルートの紹介が誰が見てもわかりやすい。(関学生じゃなくてもわかりやすい) ・建物の説明に写真がついていて読み手への配慮がうかがえる。(関学は入り組んでるからとても助かる配慮だと思う) ・地図が見やすく、わかりやすい。 ・オススメルートが紹介されているのがいい。 **悪いところ** ・オススメルート入門編の各スポットを結ぶ矢印がバラバラでわかりにくい。 ・説明の文の量が多く、読むのが面倒だと感じる。 ・隙間がなくて読みにくい。 ・ARアプリの説明がもう少し詳しくないと使い方がいまいちよくわからない。 **アドバイス** ・オススメルート挑戦編の10.から11.を繋ぐ矢印はたくさんじゃなくて１つの長いのでもいいかも？	・オススメルートの各スポットを結ぶ矢印がバラバラだと見る人にわかりにくい。 →誰が見てもわかりやすいようにするべき！ ・・説明の文の量が多かったり、隙間なく小さい文字が並んでいると読むのが面倒だと読み手に感じさせてしまう。 →知って考えるきっかけにしてもらえるようにしたいから、文章を見て読む気、知ろうと思う気持ちを失わせてはいけない！ ・ARアプリの説明が不十分で使い方がいまいちよくわからない。 →誰でも簡単に楽しく知識を得てもらいたいから、誰が見てもわかるように詳しく説明するべき！	・矢印の向きを揃える。 ・説明の量を長くても4～5行程度で収まるくらいにする。 ・1行1行の間に小さめのフォントサイズで改行を入れて少しだけ行間を作る。 ・ARアプリの説明をイラストではなく、実際の画面の画像を付けてもっと詳しく、１つ１つの工程を説明する。(わからなくなった時も見直せる)
大人	母	**良いところ** ・各スポットの名前のところが色がついていて見やすい。 ・散策オススメルートのところのKG PEACE MAPのKGと校章が目を引く。 ・地図上に番号や繋がる線があってわかりやすい。 ・地図のところに写真があって実際に見ながら探せるためわかりやすい。 **悪いところ** ・表紙のKG PEACE MAPが背景がカラフルで少し見えづらい。 ・各スポットの説明の文が長い+多いため読みづらい。 ・ARがちゃんとできるのか(読み込めるのかなど)心配。 ・オススメルート入門編の各スポットを結ぶ矢印がバラバラでわかりにくい。 ・オススメルートのところのGOALの文字のOALが後ろと色が似ていて見えにくい。 **アドバイス** ・黄色が関学のイメージにぴったりだから表紙のKGも黄色にするといいかも。	・表紙の背景がカラフルだからKG PEACE MAPの文字が少し見えづらい。 →目を引くデザインなのはいいけど、それで読みにくくなるのは修正するべき！ ・各スポットの説明の文が長い+文字数が多いため読みづらい。 →友人の方と同様に読み手の学びたい欲を失わせてはいけない！ARメインなので、地図にたくさん情報を詰め込まなくてもいい！ ・ARが誰がやってもちゃんと読み込めるようにしなければならない。 →せっかくやってくれた人に不快感を与えないようにしなければならない！ ・オススメルートの各スポットを結ぶ矢印がバラバラだと見る人にわかりにくい。 →友人の方と同様に一目見てわかるようにするべき！ ・オススメルートのところのGOALの文字のOALなど、背景や周りの色と文字の色が同系色になっているところが見えにくい。 →色づかいのせいでわかりやすい書き込みが見えにくくなるのはもったいない！	・KG PEACE MAPの文字の周りを縁取りする。(周りに使っていない暗い色がいいかも。黒とか) ・友人の方と同様。地図にはあくまで読み手に知りたいと思わせる導入部分のみ記載する形にして、より詳しい説明などはARに全てうまくまとめて載せる。 ・ARアプリがうまく機能するかをスポットのAR完成、登録後に一度みんなでそれぞれのスポットを回って確かめる。→もしうまくいかなかった場合は、改善点を考えもう一度登録し直す。 ・友人の方と同様。矢印の向きを揃える。 ・オススメルートの各スポットの名前のところは左にある散策オススメルートの説明文と同じ薄めの水色+黒い文字のような差がはっきりしている色に、GOALの文字は全て赤にする。もしくは縁取り、文字のところだけ背景をつけるなどの工夫をする。

【資料１５：「生産する」アイデア作り】

取り組み

・GoogleアンケートをSNSで広めて取る。
(原発の知識、原発に対する意見 など)

・反(脱)原発の団体の方とお話をする。交流の意。
オンラインを利用したり、イベントに参加したり、ホームページで問い合わせたりする。
(今まで私たちが学んできたこと、今の考えを伝える。)
(どういう気持ち、経緯、知識量で活動を行なっているかなどを聞く。)
(関西よつ葉連絡会、PEACE BOAT など)

【資料１６：ポートフォリオ課題　＜最終課題＞】
3 学期の中で最も印象に残っている「学び」を 1 つ選んで、２０００字以内で報告してください。
①「印象に残っている」とは以下のようなことを指します。：閃いた 楽しかった 苦労した 不思議だった …などなど。
②学び：単語や事物のみを端的に示すのではなく、学びの経緯を示すこと。
③報告：その学びが今後どのような有機的な広がりを見せることが考えられるか、展望を述べなさい。

＜生徒 A＞
私たちハンズオンの平和グループは、1 年間「平和」について学び、それを AR ウォーキングマップという形にするということを行ってきました。
色々な活動をしてきた 1 年間、特に 3 学期の学びの中で、印象に残っている学びは、AR ウォーキングマップのコンテンツに載せる情報を集めて伝える時のまとめ方です。自分たちですら、この授業を通して初めて気づくことが出来た、「平和」を前向きな意味で身近に捉えてもらう、という観点は、AR ウォーキングマップを作る際にとても重要になるポイントだという事を平和グループのメンバーは共通して感じているだろうと私は捉えています。しかし、インターネットや書籍に載っているたくさんの情報を集め抜き出してまとめ、自分たちが考えた、「平和」を前向きな意味で身近に捉えてもらう、という観点を持ちながら資料を作成することはとても苦労する作業でした。それは、いくら必要な情報や資料を集めても、自分たちの伝え方次第で、良くも悪くも
見てくださる方の感じ方・捉え方が変わってくると思ったからです。そのため、パワーポイントでの資料作成はかなり気を使いました。それこそパワーポイントは、アニメーション・ナレーションの有無、タイミング、文字の大きさ・配置など、様々な伝え方ができるため、使い方次第で様々な捉え方になります。例えば、黒い背景のスライドに小さい文字が並んでいるような導入の仕方だったら、暗い話題を想像し、あまり読む気が起こらない人も多いと思いますが、反対にポップなスライドで音楽が流れ始めるような導入の仕方だったら、見てみようという気持ちになる人が多いと思います。
しかし、先程書いたように、「平和」を前向きな意味で身近に捉えてもらう、という観点を取り入れて伝えたかったため、暗い話題やテンポで導入の部分を作ってしまうと深刻そうに見え、見てくださる側からしたら見る気が起こりにくいと考えました。そのため、明るめの背景色にしたりアニメーションを入れてポップに見せたりと、見て下さる側の視点で資料を作っていきました。作成した資料は親や友達にも見てもらい、改善点などのアドバイスを貰うなど、前向きな意味での「平和」の身近さ、というものを客観的にわかりやすく他者に伝えられるように心がけました。
私は、今回で得た学びを今後生きていく上で欠かすことができない学びだと感じています。それは、大学や就職先でのプレゼンなどでもプレゼン先の方の感じ方・捉え方を意識しながら、資料を作成するような場面はたくさんあると思うからです。自分なりの独自の観点や視点を持ちつつ、情報を集めまとめて客観的にわかりやすくことは今回の学びに繋がります。今までハンズオンや他の授業で行ったプレゼンで作成したパワーポイントなどの資料は、自分が伝えたい情報を入れて自分が見やすい構成を作って提出し、主観的でした。しかし、この学びを通して、そのような作成することが見てくださる側にとってのベストではないという事に気付かされました。そのため、プレゼンやマップに掲載する資料は、相手のことを考え客観的に配置・構成しつつ、自分なりの観点も組み込めているように作成することが見てくださる側にとってのベストなのではないかというような考え方に変わりました。
私はいま、WWLC のイベントの 1 つであり、2021 年 8 月までの長期運営になる、International Online Meeting(IOM)の実行委員をしていて、その中でも広報を担当しています。ポスターやインスタなどを活用してイベントに対して興味をもってもらう、IOM 広報の仕事では、内容を紹介するための必要な情報を用意し

つつ、ポスターに載せる自分たちの考えを短文で説明する紹介文・案内文などを考えることがよくあります。その資料作成などは、今回得た学びを生かす絶好の機会だと感じています。そのため、今回得た学びのように、自分なりの観点を持ちつつ少しでも興味を持ってもらえるような客観的な資料を作成し、わかりやすいように伝えることに努力をしながら、自分の伝えたいことも伝えられるようなポスターや資料を作っていきたいです。そして、これを第 1 歩として、その繰り返しを経て、この学びを自分の中に定着させ、今後生きていく上で、資料をわかりやすく客観的に構成・配置すること、自分の伝えたい内容を伝えられるようになることの 2 点を両立して、
当たり前のように実現できるようになることは、ここからまだまだ努力し学んでいく必要があるポイントだと私は考えています。

＜生徒 B＞
一年間で一番印象に残っている学びは毎週のグループ学習・グループでの学びです。他の選択科目では味わうことのできない、このハンズオンラーニングならではのグループ学習では、社会に出た時や就職した時に必ず必要になっていく話し合いの力や、説明する力を少しでも習得できると思います。僕がこのグループ学習を一番印象に残っている学びにしたのには理由があります。質問してその説明を聞くことによって得る学びは、とても受動的なものでもしかしたら聞くだけで終わるかもしれません。ですが、このグループ学習で学びを得るためには、自発的な能力や積極性が必要だということです。自分の体験談からではありますが、僕は最初、グループ学習での発言は全くせずその場にいるただの参加者でした。そうなると先ほど言った通り受動的に耳から聞くだけで終わってしまっていました。しかし自分の仕事や役割が分かっていき少しながらも発言をしたり提案する事で、ハンズオンラーニングの授業が終わった後、学びや疑問、問題点で頭がパンクしそうなくらいになっていました。こうした経験から、この授業を選んだからにはただ参加者として時間を過ごすのはもったいないので、大げさに言えば主催者として活動していきたいと思いました。これが一番印象に残った学びになった経緯です。
そしてそのグループ学習の中で一番印象に残ったことは自分達でホワイトボードに学び調べる順番を樹形図にしてまとめたことです。ここではそれぞれの意見や考えがぶつかることや何回も何回も修正を重ねる作業、また樹形図なので書けと言われればいくらでもかけてしまい、とても深いところまで掘り下げてしまうこともありました。この作業には、各々の意見が聞け自分との違いや新しい学びがいつもより多く見受けられました。そこからより明確に他者に伝わりやすくする作業では各々が色を使ったり図を使ったりまとめ方にそれぞれの色が出ておりいろいろな工夫が施されており見ている方も楽しく見られるのだろうと感じました。またこのホワイトボードにまとめる作業の中でも特に印象的だったのが先ほど伝えましたが、修正の作業です。最初は膨大な量の調べることがホワイトボードに記されていました。僕たちは、そもそもそのワードを理解していないのにその後につながることを深く掘り下げてしまうという悪い癖があるのでホワイトボードにぎっしり字が敷き詰められていました。そしてしらみつぶしに深く掘り下げすぎているワードを修正していくのですが、その作業にも なぜ・どうして の理由や意図が必要でみんなの合意が必要です。これも納得のいく理由を説明する力が必要だし今までの学びが大切になっています。このように一つ一つの作業に見えても、全てはつながっているというのもこのグループ学習（学び）の楽しさの一つなのだと思い、印象に残っていることにこのことを取り上げました。
僕が今説明した学びは、その次の日からでも活かせると思います。具体的に言うと、クラス単位・部活単位のグループでの話し合いや、大学生活・社会に出た時の会議に繋がりを見せると思います。このような場で、自分が発言する・提案する・主張するには根拠が必要でただただ意見を述べるだけでは通るはずがありません、ましてや相手にすらされないと思います。この、根拠を含めた上での説明力・発言力を高め社会で活躍していくために今、グループ学習が必要になってくると思います。自分は文系の道に進もうと思っているのでこのよ

うな話す力は必ず求められると思っています。ここでもし、完璧に自分の主張を、根拠を含めてできたとしたら自分へのチャンスも多くなってくると思うし、そのチャンスを掴むことだってできると思います。この、ハンズオンラーニングでしか学ぶことでできないグループ学習を今の高校生のうちからすることによって、あとあと大きく響きつながっていくと思いました。これが、僕の言う学び（グループ学習）が今後に有機的にどのように広がっていくかの展望です。一年間お疲れ様でした。

科目	グローバルスタディ	学年	2	単位	2	※受講人数は 14 名
活動の目標	１．世界とのつながりの中で社会的課題をとらえる ２．社会的課題を自分事としてとらえ、主体的に問題解決を図るための分析力や実践的な力をつける					
教材	学びの記録シート iPad (Classi / ロイロノート)					
留意点	１．教員側からの知識の詰込みはせず、生徒側の気づきや創造力を中心に展開していく。 ２．問題について、情報のリソースや意見の主語に留意して考える。					

＜スケジュール＞

・休校期間はスライドや課題配信のみ。オンライン授業期間中は 40 分間(含：休憩)。

通常登校では 45 分×２コマ。

休校期間フェーズ 目標：コロナウィルスの影響を事例に、グローバルな視点で社会をとらえ、分析する。あるいは、改めてグローバル化について考察する。 ［課題配信・提出のみ］ 【現状分析】	第１クール：4/17(金)～4/23(木) ①これからの時代を生きていく上で、将来どのような力が求められているか。また、その中にあって自分の力をどこで生かしたいと思うかについて、自分の特性や興味関心に着目して考える。 ②「グローバル化」とは何かについて、ネットを使ってのリサーチはせず、今までの自身の学びから（２分程度の発表を想定した内容・分量で）答える。
	第２クール：4/24(金)～4/28(火) 新型コロナウィルス問題について、「グローバル化」をキーワードにエッセイを書く（３分程度の発表を想定した形式、分量で）

オンライン授業フェーズ 目標：個人・グループで行う様々なワークを通して、問題の多面的・重層的な理解が出来るようになる。 ［1 回 40 分］ 【情報の収集】 【思考の整理・分析】	① 5/12	「豊かな社会」に大切なことワーク：Zoom による個人・グループ活動
	② 5/19	「豊かさ」についての考えの整理、定義づけ：Zoom による個人活動
	③ 5/26	・「豊かさ」について様々に抱いた疑問や意見を共有 ：Zoom によるグループ活動 ・「豊かさ」を実現するために自分に出来ることについて考察 ：Zoom による個人・グループ活動 ・グレタ＝トゥーンベリさんについて知っていることを出し合う ：Zoom、全体活動
	④ 6/2	前回課題の内容(グレタさんについての調査)を共有・議論 ：Zoom によるグループ活動
	⑤ 6/9	グレタさんについての言説の分類作業、共有 ：Zoom によるグループ活動

通常登校フェーズ 目標：複雑な問題理解を整理し、フィリピンとのオンラインディスカッションを通じて、異なる価値観の人たちと	① 6/25	・WWLC 合同ガイダンス ・グループでグレタ＝トゥーンベリについての分析を深める
	② 7/2	フィリピンとのオンラインディスカッションに向けて ・英語でのディスカッションについての技法を理解する ・グループ(2 グループ)で話題や役割の決定、英語スクリプトの作成作業

の議論で学びの内容を深める。 ［45 分×2］ 【国際的コミュニケーション、まとめと表現】	③ 7/9	フィリピンとのオンラインディスカッション(2 グループ)
	④ 7/16	1 学期の学びの振り返りプレゼンテーション(各自)

2 学期第 **1** フェーズ 目標：問題を「知る」過程に重点を置く。温暖化問題の構造を把握するとともに、解決のための行動に必要な姿勢を学ぶ ［45 分×2］ 【情報の収集】 【思考の整理・分析】	① 9/3	授業の進め方・評価に関するオリエンテーション ・ワーク:ヒートアイランド現象に関する新聞記事を事例に、学びの記録の演習に取り組み、生徒間で結果を共有 ・教員からのレクチャー
	② 9/10	夏休み課題(温暖化対策に取り組む企業/ｽﾀｰﾄｱｯﾌﾟ/NGO のリサーチ) ・ワーク:課題を生徒間で共有し、企業/スタートアップ/NGO の特性をまとめる ・教員からのレクチャー
	③ 9/17	相互授業 ・温暖化に関する相互授業のチーム分けとテーマ設定(温暖化について 4 回の授業で学ぶ前提で、生徒を 4 グループに分け、それぞれが担当するテーマを設定する)
	④ 10/1	相互授業　準備
	⑤10/8	相互授業 1 回目(各 40 分) ・「地球温暖化のメカニズムと人間による活動」 ・「温暖化による自然への影響」
	⑥10/22	相互授業 2 回目(各 40 分) ・「温暖化の経済的・政治的影響」 ・「地球温暖化の解決策」
2 学期第 **2** フェーズ 目標：問題を知り、そこから課題解決のヒントを見つけ出し、具体化していく過程について学ぶ ［45 分×2］ 【情報の収集】 【思考の整理・分析】 【課題を自分事としてとらえる・自身の意識との結合】	⑦10/29	相互授業振り返り ・ワーク:相互授業について、事前のテーマ設定と授業内容の相違などについて共有 フィリピンの NGO への環境対策提案に向けて ・課題の説明と、事前に必要な情報を得るためのインタビュー内容をまとめる
	⑧11/19	フィリピンとのオンラインディスカッション ・フィリピンの NGO の状況についての情報収集
	⑨11/26	2 学期の学びの振り返りプレゼンテーション(各自)

3 学期フェーズ 【課題を自分事としてとらえる・自身の意識との結合】 【具体的な計画の策定と実	① 1/14	・フィリピンの NGO への提案について協議 ・自身の問題意識に基づいた解決策(以下、マイアクション)についてチーム編成と企画書作成
	② 1/21	・フィリピンの NGO への提案について準備

行】 ［45 分×2］		・企画書について教員からのレクチャー ・レクチャーを受けて、マイアクションの企画書ブラッシュアップ
	③ 1/28	・WWLC 3 科目合同成果発表中間報告とディスカッション ・フィリピンの NGO に環境対策を提案するオンラインセッション
	④ 2/4	・マイアクションの中間報告とディスカッション
	⑤2/15	・マイアクション実施計画発表
	⑥2/25	・WWLC 3 科目合同成果発表

＜各フェーズの 1.目標 2.具体的活動 3.活動の評価方法 4.検証 5.今後改善すべき点について＞

休校期間フェーズ：【現状分析】

1. このフェーズでの目標

目標 1）これからの時代を生きていく上で、将来どのような力が求められているか。また、その中にあって自分の力をどこで生かしたいと思うかについて、自分の特性や興味関心に着目して考える。

目標 2）コロナウィルスの影響を強く受けている時だからこそ、グローバルな視点で現在の状況をとらえ、分析することで、改めてグローバル化について考察する。その際、自身のこれまでの学びとのつながりに気付く。

2. 具体的な活動

① 第１クール：4/17(金)～4/23(木)

・こちらが生徒に伝えたい内容について(担当者の紹介やそれぞれの背景・授業への思い等)、ロイロカードをスライドにして送信。対面に代わるガイダンスを行った。

・以下の課題を配信。(ロイロノートの提出箱へ提出させた)

> ①これからの時代を生きていく上で、将来どのような力が求められているか。また、その中にあって自分の力をどこで生かしたいと思うかについて、自分の特性や興味関心に着目考える。
>
> ②「グローバル化」とは何かについて、ネットを使ってのリサーチはせず、今までの自身の学びから（２分程度の発表を想定した内容・分量で）答える。

② 第２クール：4/24(金)～4/28(火)

・以下の課題を配信。

> 新型コロナウィルス問題について、「グローバル化」をキーワードにエッセイを書く（３分程度の発表を想定した形式、分量で）

3. 活動の評価方法

ルーブリックについては以下のものを使用。

①第１クール課題【休校中】

①みなさんがこれからの時代を生きていく上で、将来どのような力が求められていると思いますか。自分の特性や興味関心に着目して答えなさい。	
将来活かしたい自分の力について、自分の特性や興味関心に着目して、求められている力と合わせて十分に考察されている。	
将来活かしたい自分の力について、求められている力についての考察は書けているが、自分の特性や興味関心への着目が不足している。	
自分の特性・興味関心や社会の中でそれをどのように生かしたいかについての考察が不十分である。	
②「グローバル化」とは何かについて、ネットを使ってのリサーチはせず、今までの自身の学びから(2分程度の発表を想定した内容・分量で)答えなさい。	
今までの自身の学びをもとに、「グローバル化」について、メリットとデメリット、立場の違いなど多くの側面から考えられている	
今までの自身の学びをもとに、「グローバル化」について、世界の一体化という側面でとられられている。	
「グローバル化」について、表面的な考察に留まっている、あるいは根拠となる自身の学びも不十分である	

②第２クール課題【休校中】

今回の新型コロナウィルス問題について、“グローバル化”をキーワードにエッセイを書く(3分程度の発表を想定した形式・分量で)
十分な根拠を示しながら自分なりに深く鋭い洞察ができており、明確に主張できている。
調べた情報がそのまま羅列されている。内容は整理されているが、自身の考えの記述が不十分である。
情報収集の量や質についても、自身の考えの提示も不十分である。

4. 検証

新型コロナウィルスによる休校という異例の事態において、休校中は、未だ顔の見えない(教員生徒共に)相手に対してこちらが一方的にメッセージを配信するという非同期型の課題配信型であったため、生徒側の受け止め方についてこちらが知ることが非常に難しかった。しかし、このような事態は我々が現在置かれている状況を分析するに

おいてはリアルで身に迫ることであり、分析するに値する価値を有している。生徒は自宅で自分なりにではあるが、自らを客観化するという重要な取り組みを行えたと考える。

5. 今後改善すべき点について

今後、このような非同期型の課題配信を行うことはないと思われるが(少なくとも同期型授業を展開することが予想されるため)、あらかじめ課題の評価ポイントについてもう少し説明を加えておく必要があったと考える。

オンライン授業フェーズ：【情報の収集／思考の整理・分析】

1. このフェーズでの目標

目標 1）個人で「豊かさ」について、具体的な項目を見ながら自分事として条件を深く考える。

目標 2）自らの考えについて、理由を合わせて初対面の相手に的確に説明し、相手の意見への理解も深める。

目標 3）互いの意見をコミュニケーションによってすり合わせ、納得のいく意見に落とし込む。

目標 4）「豊かさ」について、個人で自分の思考を分析・整理するとともに、定義として文章化する。

目標 5）自らの定義と他者との定義の違いについて、その根拠の違いや様々な疑問点について有意義な意見交換をし、自らの考えを深める。

目標 6）グレタ＝トゥーンベリについて知っていることを確認し、「行動すること」について考察する。

目標 7）「豊かさ」について考えた結果残る「もやもや」した感情について考察する。

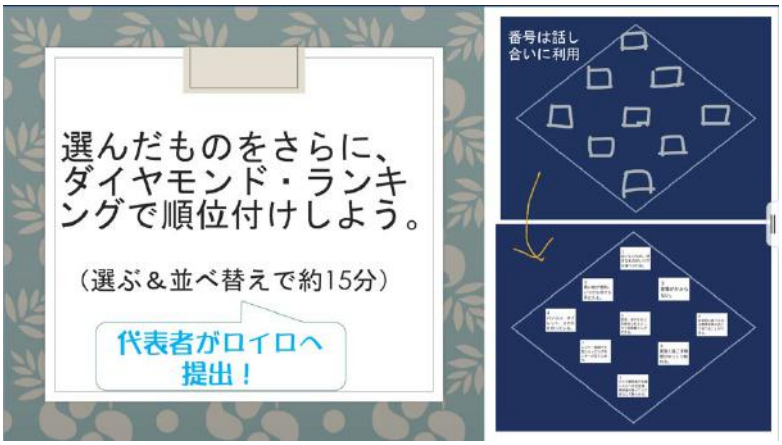
目標 8）7 人の多い人数で議論を重ねて経験することで、コミュニケーション能力、分析力、積極性を身につける。

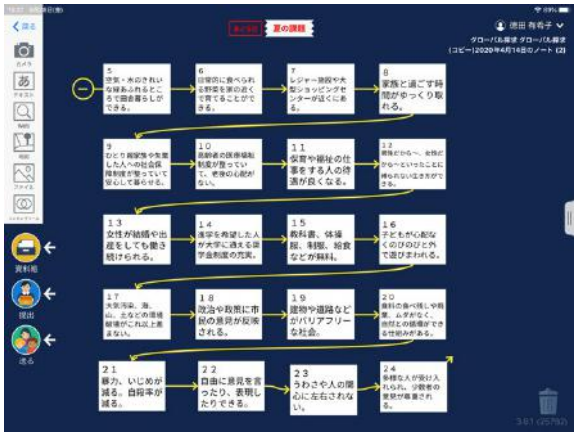
目標 9）議論することについての手法や注意点を理解し、実行できるようになる。

2. 具体的な活動

① 5/12 【「豊かな社会」に大切なことワーク】：Zoom による個人・グループ活動

DEAR(開発教育協会)のワークショップ教材「『豊かな社会』に大切なこと」を、対面ではなくオンライン上でできるように形式をアレンジして取り組ませた。主にロイロノートで豊かさの条件カードを配信し、自分にとって「豊かな社会について大切なこと」の条件カードを選んで並べた後に、グループでも同じく大切だと思うカードを選び、ダイヤモンドランキングで順位付けをした。教員は適宜ブレイクアウトルームに入って進行状況を確認。生徒の話し合いでは資料を参照する必要があったため、顔を見ずに音声のみで進めた。作業後、各グループで結果について理由も添えて代表者が発表。その後送付した本時の振り返りシートに考えたことや学んだことを記入、ロイロノートにて提出させた。





※また、以下の課題を配信した。

高齢者やマイノリティ、難民など、いくつか提示する「私」とは異なる立場を 2 つ選んでランキングし、本時のワークと比較して気づいたことをまとめる（次週までにロイロで提出）

② 5/19　【「豊かさ」についての考えの整理、定義づけ】：Zoom による個人活動
まず個人で「豊かさとは何か」についての定義づけ作業を行うための手法として、ロイロノートのシンキングツール内にあるクマデチャートの使い方を、具体例を使用しながら説明した。その後、個人で自分の考えを整理し、多面的な「豊かさ」という言葉の多面的な意味を自分なりに分析・整理した。その分析を用いて「豊かさ」についての自らの考えを 250 文字程度でロイロカードに記述した。その際、定義と共に定義づけの理由（根拠となる自身の経験やこれまでの学び）を加えるとともに、1 分間スピーチを作成するイメージで取り組ませた。（予定していた個人発表は時間の関係上行うことが出来なかった）
※また、以下の課題を配信した。

①（発表に代えて）他のメンバーが提出した定義付けのカードを見て、特に印象に残ったこと（含：疑問に思ったこと）を挙げ、それに対して質問するという想定で質問を 2 つ考える。（事実確認ではなく本質的な質問を） ②自分自身の定義について、自分の知識以外の根拠を補足する。具体的にはニュースや社会問題について調査し、それが自分の定義とどのように関係するのかについて説明する。（具体的に書こう）

③ 5/26　【「豊かさ」について様々に抱いた疑問や意見を共有／「豊かさ」を実現するために自分に出来ることについて考察／グレタ＝トゥーンベリについて知っていることを出し合う】：全て Zoom による活動
まずは ZOOM で少し多い 7 人という人数でブレイクアウトセッションを行い、前回課題について、疑問点や意見を交換しあった。教員は必要に応じて議論を導いた。その後、個人で「豊かさを実現するために自分に出来ること」について個人でイメージをし、次は 4 人×２G、3 人×２G で議論した。その際、①先ほど個人で考えた「自分に出来ること」の共有と、②「自分たちに出来ること」を考えた感想の共有をするよう促した。②については、ここではあくまで「感想」の共有をするのであって政策や解決策、答えを探すものではないことを伝えた。各グループで感想について発表をした後、前回課題の中である生徒の意見「『豊かさ』は範囲が広すぎる。社会全体を見た時と個人を見た時の『豊かさ』は関わり合ってはいるが別物だ。焦点を絞って考えるべきでは？」を取り上げ、このモヤモヤこそが大事であることを伝えた。
ここから次なる展開として、グレタ＝トゥーンベリの写真を示し、彼女について知っていることを挙げさせ、次回へつなげた。

※また、以下の課題を配信した。

①グレタさんは、メディアではどのように取り上げられていますか（世間一般、コメンテーター、評論家などの意見を集めてみよう。コメントや言説を１人２つか３つ（出典を明記）） ②あなた自身は彼女についてどう思いますか（ロイロカードで提出、分量は各自） ※本時の振り返りシートも配信。

④ 6/2　【前回課題の内容(グレタさんについての調査)を共有・議論】：Zoom によるグループ活動
前回までに考えてきた「豊かさ」についてのモヤモヤから気づいたこと（例：社会全体と個人との関わりや違

い、心の豊かさと経済的豊かさの違い、個人に出来ることと国に出来ることの違いなど）について整理し、ゴールは異なれど、立場や価値観、アプローチ方法が異なることがまさにグローバル社会であることを伝えた。また、グレタさんを通しての、グローバル社会で行動することの意味・意義、これからの考察ポイントについて一度整理した。生徒の活動としては、再び 7 人×２G で前回課題の内容を互いにシェアし、どのような問題が存在するのか、また、自分自身はグレタさんを度の王に考えるのかについて理由を添えてディスカッションに臨んだ。(教員は適宜話し合いへのアドバイス）一度時間を区切った後、再び同じテーマで 7 人グループのメンバーを変えて 2 回目のディスカッションに臨んだ。

※本時は課題なし

⑤ 6/9　【グレタさんについての言説の分類作業、共有】：Zoom によるグループ活動

来月予定している 1 学期の肝ともいえるフィリピンとのオンラインディスカッションに向けて、本番での話し合いテーマの確認（テーマ A：日本でのグレタさんについての評価やとらえられ方［グループで］／B グレタさんに対する自分自身の考え［個人］）をした。そして、ディスカッションへ向けた準備課題と評価ポイントについて説明した。これまの生徒のディスカッションの様子を通して、議論の進め方に改善が必要と考えたため、ここで授業担当者それぞれの経験などを踏まえて議論に際しての具体的な注意点や、「オープンクエスチョン」について解説をした。その後、前々回の課題の中で収集したグレタさんに対する評価・言説を(肯定否定を問わず)カード化し、（全員に対して）ロイロで送った。続いて、送られた全員のカードを使って 4 人×２G、3 人×２G でカテゴリー化し、タイトルを付けた。(作業にはロイロノートのシンキングツールを使用)ワークの最期にグループで整理・作成したシンキングカードを 1 枚提出箱に提出し、各グループ約 1 分ずつ発表、教員がコメントをした（特に行動の「主体」を確認することについて）

※また、以下の課題を配信した。

※本時の振り返り グレタさんをめぐる議論を社会的に分析するレポート グレタさん関する議論には、どのような背景や論点があるのか。グレタさんはこれまでと何が違うのか、日本と外国との違い、グレタさんは世界の何を変えたのかなどについて （1500 字以内で、iPad のワープロアプリ Pages で作成して提出、次回授業時までに提出）

3．活動の評価方法

ルーブリックについては以下のものを使用。

①オンライン１回目

「豊かな社会に必要なこと」グループワーク振り返り
GWの経験を自らの新たな学びにつなげている。
GWの経験について単なる感想の記述にとどまっている。
「豊かさ」個人課題：　①～⑦の立場から2つ選んで再度ランキングをし、本時のワークと比較して気づいたことをまとめる。
授業中のグループワークと課題の個人ワークとの関連付けができており、全体を通して深い洞察と気づきが見られる。
個人ワークを通した気づきが見られるが、授業中のグループワークと課題の個人ワークとの関連付けが不十分である。
個人ワークを通した気づきも、授業中のグループワークと課題の個人ワークとの関連付けも不十分である。

②オンライン２回目

「豊かさとは何か」についての定義づけ (250文字程度)
「豊かさ」についての定義づけの言葉の使い方や根拠が明確で、ワークでの学びを踏まえて深い考察ができており、定義全体の文章の一貫性もある。
「豊かさ」についての定義づけの言葉の使い方や根拠が不十分あるいは、定義全体としての文章のまとまりや一貫性に欠ける。
「豊かさ」についての定義づけの言葉の根拠が不明確で、文章としての一貫性に欠けている。
①他のメンバーの定義づけを聞いて特に印象に残ったこと(含：疑問)をあげ、それに対して質問する想定で質問を2つ考える。(本質的質問を)
他のメンバーの定義に対して、疑問点がはっきりとしており、事実確認というよりは本質的な質問が出来ている。
他のメンバーの定義に対する疑問がはっきりとしているが、質問内容が事実確認にとどまっている。
他のメンバーの定義に対する疑問がはっきりとしておらず、質問内容も事実確認にとどまっている。
②今日、自分自身の「豊かさ」の定義について、自分の知識以外の根拠を補足する(ニュースや社会問題)。 それが自分の定義とどのように関係するのかについて説明する。
調査したニュースや社会問題が根拠として挙げるのに質・量ともに十分であり、自分の定義とどう関わるのかについての説明も具体的かつ十分である
調査したニュースや社会問題が根拠として挙げるのに質・量ともに十分だが、自分の定義とどう関わるのかについての説明がやや不十分である。
調査したニュースや社会問題が根拠として挙げるのに質・量ともに不十分であり、自分の定義とどう関わるのかについての説明も不十分である。

③オンライン３回目

「私が考える豊かさの定義」ワーク(もやもやのぶつけ合い・答え合い・自分に出来ることイメージ)＆ディスカッション振り返り(自分たちに出来ること)感想
GWの経験を自らの新たな学びにつなげている。
GWの経験について単なる感想の記述にとどまっている。

課題① グレタさんは、メディアではどのように取り上げられていますか？
収集した情報が、質・量ともに十分であり、彼女についてのコメントや言説の全体像がよく分かる。
収集した情報が、質あるいは量が、彼女についてのコメントや言説の全体像を理解する上ではやや不足している。
収集した情報が、質・量ともに不十分であり、彼女についてのコメントや言説の全体像についても不明確である。
課題② あなた自身は彼女についてどう思いますか？
自分なりの観点を持って集めた情報についての客観的分析と深い洞察ができておりし、根拠をもって自分の意見を表現できている。
根拠を持って自分の意見を伝えられているが、内容や感想に近く、集めた情報についての自分なりの客観的分析の意見としている印象を受ける。
自分なりの意見が十分に伝わらず、集めた情報の根拠も不明確である。

④オンライン５回目

「グレタさんにまつわる言説についてグループでカードの分類」授業の振り返り
GWの経験を自らの新たな学びにつなげている。
GWの経験について単なる感想の記述にとどまっている。

⑤グレタさんをめぐる議論を社会的に分析するレポート

収集した根拠となる情報への理解・整理ができており、グレタをめぐる議論の背景や論点が明確で(構造的分析)、問題を多面的に理解できている。
収集した根拠となる情報への理解・整理ができているが、グレタをめぐる問題の構造的分析・多面的理解が不十分である。
収集した根拠となる情報への理解・整理が不十分で、グレタをめぐる議論の背景や論点が不明確で問題の理解が不十分である。

4．検証

＜全体的な感想＞

新型コロナウィルスの収束が見られない自粛期間中であったが、ZOOM を使用してある程度参加者の顔を見ることが出来、相互のやり取りが可能となる同期型授業が開始された。探究型とはいえ、まだ互いに実際に対面したことのない生徒同士の議論やグループでの資料の共有方法については心理的にも技術的にも難しいところがあった。また、何よりも授業時間が通常は 45 分×2 コマのところが 40 分のみであったため、毎回授業時間が不足するという事態に陥り、しばしば延長することとなった。しかもコロナの状況は予測不可能であり、1 学期として何回授業を行えるのかも分からない中での展開であった。このような難しい状況ではあったが、限られた時間内で教師側は何を選択すべきか、こちらの問いかけは的確であったのか等について、絶えず精査する必要があったため、授業の質というものについて考えを深める機会となった。生徒たちも、ぎこちなさはあるものの、熱心に議論に参加しようとする姿勢が見られ、少しずつではあるがメンバー同士が打ち解け合い、話しやすい雰囲気を作り始めていることを感じた。

＜目標の達成度・課題＞

・目標 1～3 についてはおおむね達成できたいたように感じる。どの生徒も、自分事として「豊かさ」を熟考し、オンライン上であるにせよしっかりと各自の意見を理由と共に述べられていた。また、自分の意見を他者に押し付けるのではなく、互いの違いの中に見られる隠された思考の共通点に気付くこともできており、コミュニケーションの重要性や豊かさについて感想で述べている者もいた。互いに調整する力については十分にワークの中で発揮し、重要性に気付き、意識的に伸ばそうと努められていたことは評価に値する。

・目標 4 の「豊かさ」の定義については、ここまでの議論を踏まえることが出来ないまま、根拠を示せずにあいまいな表現で述べる者がいた。定義づけの際の注意点など、こちらがもう少し事前に導くことはできたかもしれない。

・目標 7 のモヤモヤについては、熟考した結果として生徒自身から出てきたものであり、すべてに答えがあってクリアになるわけではない点については、多くの者が理解でき、その正体を考えるべく続く課題にも積極的に取り組めていたように感じた。

・目標 5 と 8 について、互いの定義についての意見交換辺りからは、7 人とグループの人数を増やしたこともあり、議論の進め方にためらいを見せる場面が度々見られた。司会者など、あらかじめ決めておく必要があったとこちらも反省するところであるが、ためらいの中でこそあえて勇気を出して議論を率いるリーダーシップにも今後期待したい。事後の反省の中では、もう少し積極的になるべきであったなどの反省もあったことから考えると、ためらい自体にも意味があったと考えることもできる。その後、議論の手法について解説したが、目標 9 にはすぐに到達することは難しいと考える。しかし、「オープンクエスチョン」を大切にするということについてはこれからも継続して大切にしてほしい。

・目標 6 のグレタ＝トゥーンベリを通して「行動すること」についての考察は、オンラインのフェーズではまだそこまで落とし込むことはできなかったようだが、通常登校フェーズにおいて最終的にはかなり深まったように思う。

5．今後改善すべき点について

限られた時間内での議論にあてる時間配分について、想定よりも長くかかる場合が多かった。十分に議論が出来るように適当な時間を設定する必要がある。また、そのために、さらに質の良い問いかけを用意する必要がある。生徒から挙がった意見としては、4 人を超える人数での議論はしづらいという点や、必要があって多い人数で取り組む場合は、司会等の役割を決めるよう指示しておくべきである。また、ほぼ毎回配信する課題については、休校期間中と同様、あらかじめ課題の評価ポイントについてもう少し説明を加えておく必要があったと考える。

(ルーブリックをあらかじめ示すかどうかは、課題に取り組む生徒がそれに意識的に誘導されてしまうおそれがあるため議論の余地はあるものの)もう少し細目にフィードバックをすることで自身の改善点を次回に活かせるように導いていく必要があった。

※課題：次週までにディスカッションのテーマ A と B の英語スクリプトの作成をしてくる

通常登校フェーズ：【国際的コミュニケーション、まとめと表現】

1. このフェーズでの目標

目標 1）課題として自ら収集した情報のアウトプットとグループでの分類作業(オンライン・対面の両方)を通して、グレタ＝トゥーンベリをめぐる議論を構造的に分析し、視野を広げる。

目標 2）フィリピンとのオンラインディスカッションに向けて、英語科教員の指導のもと、英語ディスカッションについての技法を学び、実践する。

目標 3）グループのメンバー同士で協力しながら、役割を決めたり英語スクリプトを作ったりしてディスカッションに向けての準備を進める。

目標 4）英語を使って自分の考えを明確に相手に伝える。

目標 5）フィリピン側の意見や質問を正確に理解し、日本と状況を比較しながら新たな問いや意見を持ち、積極的に相手に伝える。

目標 6）自らのコミュニケーション力(英語力のみならず表現力、積極性も含む)の現在視点を確認し、新たな目標を設定する。

目標 7）自らの 1 学期の学びについて客観化・整理したものを他者に分かりやすく伝える。

目標 8）他のメンバーの学びの振り返りを聞きながら 3 つの観点において評価し、必要なアドバイスを行う。また、その作業を通して自らについても再び客観化・分析して 2 学期の目標へつなげる。

2. 具体的な活動

① 6/25 【WWLC 合同ガイダンス／グループでグレタ＝トゥーンベリについての分析を深める】：対面授業

受講者同士、あるいは教員と受講者が対面できたのは今年度初めてのことであったので、WWL 必修選択の 3 教科が合同で集まり、改めてこの授業の目指すところや学びの特性について説明を受け、その後各授業に分かれた。本時も 4 人×２G、3 人×２G のグループワークから始まった。前回課題であり、1 学期評価の多くを占めるレポートをもとに、自らの調査・整理したグレタさんに対する評価・言説についてグループで出し合ってさらに理解を深めた。この時、合同ガイダンスで紹介された「学びの記録」に実際に記入しながらディスカッションを進めた。

※課題は特に出さないが、フィリピンとのディスカッションに向けて、各自でグレタの分析やグレタについての自分の意見について考えを深めておくよう指示。

② 7/2 【フィリピンとのオンラインディスカッションに向けた準備】

前回書いた「学びの記録」についてフィードバックをし、他のメンバーの良い例を参照しながら書き方やポイントについて学んだ。その後、次週のオンラインディスカッション本番に向けたグループ分けをし、ネイティブの英語科教員によって、英語をディスカッションするに際して必要な基本的表現や主張を個性するための技法について学んだ。オンラインでもテーマを相手に分かりやすく伝える手段としてのヌーボードを使用しながら、グループで分担を決めたり、実際に主張内容を英語化する作業に入った。最後に、次週までに行う生徒間の作業へのアドバイスとディスカッションテーマについて再度確認をした。

テーマ①A： 日本でのグレタさんについての評価やとらえられ方［グループで］

②B： グレタさんに対する自分自身の考え［個人］

③ 7/9 【フィリピンとのオンラインディスカッション(7 人×2 グループ)】

早めに集合した生徒たちは各自、ヌーボードや英語スクリプトの確認をし、グループごとに発表手順の最終打ち合わせをした。パソコンには各々ログインをし、ZOOM で各アカウントにログイン。フィリピンの若い NGO スタッフ 2 名が 1 グループに 1 人入り、ファシリテーターとしてディスカッションをリードしてもらった。互いに簡単な自己紹介を終えた後、用意してきたテーマ A についての各自のまとめの発表に続いてフィリピンスタッフの投げかける問いかけをきっかけにフリーディスカッションへと移行した。休憩後、テーマ B についても、まずは 1 人 1 人の意見を述べた後に同じようにフリーディスカッションへ移った。最期に教員が簡単な講評を行い、次週に向けた 1 学期のまとめについて説明した。

※以下の課題を伝えた。

「1 学期の学びとこれからの学び」
1 学期の授業①「豊かさ」に関する内容／②グレタさんに関する内容／③フィリピンとのオンラインディスカッション を題材として、これから自身がどのようなことを学んで、どのような力をつけていきたいかをまとめる。字数制限は特にないが、1 人 3 分間のスピーチをするイメージで。iPad ないしパソコンのワープロアプリを使用。注意点：参考、根拠にしたウェブサイトも明示、または添付する／出来る限り具体的に書く／社会的な事柄や自身のこれまでの学びや経験との接点も意識する。※1 学期全体の「学びの記録」を発表するイメージで。次週の発表後にロイロで提出する。

④7/16 【1学期の学びの振り返りプレゼンテーション】

発表時間(1人3分＋あれば質問＋相互チェック表記入2分)について確認。相互チェックポイントは内容・論理や展開・発表の仕方の3点。発表者に対するアドバイスや評価できる点について文章で記入した。（後にフィードバックした）発表後、1学期の振り返りと簡単な講評をし、2学期に取り組んでみたいことを募集。夏休みにオンラインで催されるフィリピンスタディツアーの広告。夏休みの課題について説明した。

※夏休みの課題は以下の通り。

> 温暖化に特化して解決に取り組んでいるスタートアップ企業や環境NGOを2つ調べ、彼らのアクションの動機・思いに着目して自分なりに考察する(自分のこれまでの経験等と結び付けて)。
> 分量は各自判断。ロイロノートで2学期最初の授業時までに提出。

3. 活動の評価方法

ルーブリックについては以下のものを使用。

①6/25の授業で記入した「学びの記録」

	知識/技術	意見/考察
A	自分の観点を持って自分なりに内容を処理、記述している。 情報が整理されている。	知識と知識/意見/考察が有機的につながる記述がみられる。 深い洞察とクリエィティブな広がりがみられる。
B	内容がそのまま羅列されている。ある程度の情報のまとまりは見られるものの、あまり整理されていない。	多くが短絡的・表層的な感想や意見、疑問にとどまっている。
C	情報の量/質が不十分である。	感想や意見、疑問の量/質が不十分である。

②フィリピンとのオンラインディスカッション・定型パート（あらかじめ決まった内容の発表・ABあわせて）

原稿を準備しており、かつしっかり読み込んであり、アイコンタクトや身振り手振りなども交えて伝えられている
原稿を準備しており、かつしっかり読み込んであり、原稿を見ることが少なく、スムーズに話せている
原稿は準備しているが、読み込みが浅く、原稿を見ながら読むことが多い、または抑揚のない棒読み

③フィリピンとのオンラインディスカッション・フリーディスカッションパート(AB合わせて)

自分から質問ができ、相手からの返答を受け、それに再度返すことができた（双方向のコミュニケーション）
自分から質問ができたが、その返答を受けるだけで、一方的に話すだけに留まっていた（一方通行のコミュニケーション）
全く自発的に話せなかった。

④「1 学期の学びとこれからの学び」(含：プレゼンテーション)

	内容について	論理・展開	発表の仕方について
A	知識と知識・知識と経験・知識と考察等のつながりがみられ、深い洞察とクリエイティブな広がりがみられる。	①「豊かさ」、②グレタ、③オンラインディスカッションの3つの学びの関連性が見られ、かつ1学期全体の学びから新たな学びへの自然な展開が	事前準備が十分であり、非常に堂々とした態度で、資料にあまり頼らずに発表できている。
B	学びの内容が自らの中で客観化できており、抽象的な概念の獲得が出来ている。	①「豊かさ」、②グレタ、③オンラインディスカッションの3つの学びの関連性が見られる。	発表の声が明瞭で、資料を見ながらであれば積極的な姿勢で発表に臨むことが出来る。
C	授業内容の言及、あるいは短絡的・表層的な意見や感想・疑問にとどまっている。	①「豊かさ」、②グレタ、③オンラインディスカッションの3つの学びの関連性が見られない。	発表の声がよく聴き取れず、視線も下がりがちで加減で消極的な印象を受ける。

※生徒に記入させた相互チェック表にはこの下に以下の 2 項目を追加した。

・アドバイス(自分だったらここをこうする、など)

・1 学期の学びの姿勢を通して評価できる点

4. 検証　＜目標の達成度・課題＞

・目標 1 について、グレタ＝トゥーンベリをめぐる議論を構造的な分析はやや難しいテーマであったかもしれない。日本国内の彼女自身のパーソナリティに関わるようなややゴシップ的な情報収集に留まるケースが見られ、広い視野でのとらえ方が少なく、評価の分類まで進めることは難しかった。このような社会的評価の分析については、時間が許すならば他の具体例を挙げながら示すことが出来ればよかった。

・目標 2～6 については、元々持っている英語力が影響することを避けられなかった。準備したスクリプトを伝える際にも、伝える相手をしっかりと見て話す等、言葉だけではなくしっかりと「伝える」ことが出来るものは少ないと感じた。また、相手の話の聴き方についても、反応が薄く恐らく相手側からすると受け取り方が分かりづらかったように思う。一度返ってきた会話のボールを返すことのできる生徒はさらに少なく、日本人の実践的英会話の経験の少なさを改めて感じ、可能な限りこのような機会を増やしたと感じた。しかし、全体として生徒の取り組みは熱心であり、たどたどしくても勇気をもって発言する者もいた。何より、自分のコミュニケーション力の現状を実体験としてつかむことが出来たことは、次なる学びへの大きな刺激となったようで意義深いものであった。また、発表に至るまでのグループでの協力的な姿勢や、プレゼンのために学校の中でアンケートを行うなど、積極的なアクションにつなげていた者がいた。

・目標 6、7 について、英語のみならず、内容は良くても人に伝えるプレゼンテーション能力を伸ばす余地のある生徒が多くいた。自分の思いを大切にし、相手をしっかりと見据えて堂々と伝えることに慣れてほしいと感じた。今後もプレゼンテーションの機会を作っていきたい。

・目標 8 について、他のメンバーに対する評価では、昨年度の BASIC メンバーを中心に、良く分析できており、生徒の中では抑えるべきポイントが頭で理解できていることを感じた。まとめの中で、授業を受ける前で温暖化への意識の変化や多様性を知ることの大切さ、行動することへの意欲を見せた者が多くいたことはこの授業の 1 学期の成果を感じさせるものであった。

5. 今後改善すべき点

・生徒への課題のポイントの明確な提示(ポイントの強調)と即時的フィードバックを行い、次の課題への取り組みに活かせるようにする。元来持っている力だけではなく、授業の中で養われた力を測れるようにする。
そのために、比較的分かりやすい学びの客観化材料として「学びの記録」を多用していく。

・情報の収集の仕方や問題の分析の仕方についても学べる機会を用意する。

・引き続き温暖化をテーマとしつつも、生徒が自然に抱いた問題意識やアクションへの熱意を活かせるような環境や機会を提供する。

・1 学期を通してそろそろ具体的なアクションをしたいという生徒が何名かいる。3 年時までの連続の中で展開する授業であるため、アクションは 3 年時に、というこちらの計画があるものの、生徒の積極的な思いを実現させる方法がないかを模索する。

・1 年時に BASIC を受講した生徒とそうでない生徒の間の考察力や表現力の圧倒的な差を少しでも埋められるように工夫する。

・評価方法についての見直し

ルーブリックをあらかじめ公表するかどうか。(事前に公表すると、評価ありきでそれに引きずられてしまう恐れがある)。平均点の縛りがあり、ペーパーテストもない中、相対評価をせざるを得ないため、どうしても(昨年度の BASIC 等の)過去の経験や元来持ち合わせている思考力や表現力の開きのまま点数化されてしまう。小人数であることも重なり、成績の分布が正規ではなく低いものが極端に低くついてしまい、生徒の中にも不満が残る形となった。この点について、WWL 全体の問題として考えていく必要がある。

2 学期フェーズ：【情報の収集】【思考の整理・分析】【課題を自分事としてとらえる・自身の意識との結合】

1.目標

目標 1)グローバルスタディとしての最終的な目標である問題解決のための行動・実践の前段階として、「知る」過程に重点的に取り組む。自ら学ぶことで問題の広がりや他の問題との関連に気づく。

目標 2)問題の構造を知ることで、各自の問題意識を明確に見いだし、解決・改善の糸口とする。

目標 3)実際の問題解決の行動・実践について学ぶ機会を通じ、問題解決のために必要な姿勢や意識について学ぶ

2.具体的な活動

①9/3

・1 学期の授業を踏まえ、授業の目標や評価方法について再度説明を加えた。

・その具体例として、ヒートアイランド現象に関する新聞記事の分析を題材に、学びの記録を作成する演習を行った。それをグループで共有し、情報の整理、着眼点や発想、考察の深さなどについて生徒が相互に学ぶ機会を提供した。

②9/10

・夏休みの課題で取り組んだ、環境対策を行っている企業・スタートアップ・NGO に関するリサーチをグループで共有し、企業・スタートアップ・NGO という主体の特徴についてまとめるワークを行った。

・その後、非常勤の五十嵐先生から、起業の経験をベースに、各主体の強みや弱点についてレクチャーを実施。

③9/17

・温暖化問題を「知る」過程の中核として、生徒による相互授業を行うことを説明した。計 4 回・各 35 分で温暖化問題を知るという枠組み・前提を示し、以下の通り、問題の切り分け・組み立てやチーム編成を生徒に行わせた。

・温暖化について個人で考えたテーマを全員で 4 つに絞る
・4 つのテーマ文脈のなかで順番に並べる
・どのテーマに取り組むか担当を決める

④10/1

・相互授業の準備(高校での教育実習で用いられる授業指導案の様式や評価基準を示し、授業とプレゼンの違いを意識させた。)

⑤10/8

・相互授業 1 回目として、2 チームが授業を実施。(「地球温暖化のメカニズムと人間による活動」、「温暖化による自然への影響」)

⑥10/22

・相互授業 1 回目として、2 チームが授業を実施。（「温暖化の経済的・政治的影響」、「地球温暖化の解決策」）

⑦10/29

・相互授業を終え、もともとのテーマ設定と実際の内容との違いや授業方法等について生徒相互で振り返りを実施。

・次のプログラムとして、フィリピンの NGO・LOOB への環境対策アクションの提案を説明。2 グループに分かれ、LOOB に現状を知る目的でインタビューするという前提で準備させる。

⑧11/19

・実際に LOOB と zoom セッションを実施。こちら側からのインタビューに応じてもらうかたちで所在地イロイロ市や NGO のことを知る想定をしていたが、事前の打ち合わせがうまくいかなかったためか、相手側がプレゼンテーションを準備してくれており、そのプレゼンテーションを聞くかたちになった。

⑨11/26

・2 学期を振り返っての発表　これまでの学びから得たこと、自身の疑問や関心、これから学びたいこと、それに対する考察を 1 人 3 分にまとめて発表する

・2 学期振り返りを受けて、実際に実践してみたい内容を発表

・冬休みの課題について説明（LOOB への提案を各自で考える）

3.活動の評価方法

評価は、①授業内容の区切りごとに計 5 回の学びの記録、②夏休み課題、③相互授業のグループ評価・個人評価・振り返り、④最終発表を総合した。

①学びの記録については、3 科目共通の評価ルーブリックを引き続き使用。

②夏休み課題についての評価ルーブリック

A	リサーチに対して、想いや動機と自身の経験とを深く・強く結びつけられている
B	リサーチに対して、想いや動機と自身の経験とが結びつけられているが、考察が表面的な内容にとどまっている 自身の経験との結びつきは弱いが、深い考察ができている
C	リサーチに対する表面的・短絡的な感想にとどまっている

③相互授業のグループ評価は、関西学院大学が教育実習で使用している評価シートを参考に、教材研究/生徒の活動/導入/まとめ方/時間配分/指導案の視点で 3 段階の評価を総合。個人評価については以下の評価ルーブリックを使用。

相互授業	作業シート	A B C	作業の緻密さ、根拠（出典や参考資料）の程度など総合的に
	個人評価 （パフォーマンス）	A B C	簡潔さ、メリハリ、声の大小や高低、速さ、間の取り方、熱意、落ち着き、アイコンタクトなど総合的に
	質疑	A B	質問が的確で、本質的な内容に踏み込めている 表面的な質問にとどまる
相互授業 振り返り	手法について	A B C	相互授業という方法に対して、学びの本質やプロセスに考察ができている 相互授業という方法に対して、技術的な感想・考察ができている 相互授業という方法について、
	温暖化についての学び	A B C	温暖化について、新たな学びを得て、さらに新たな問題意識や疑問、考察などに広げられている 温暖化について、新たな学びが得られている 温暖化についての具体的な学びに対して、表面的・短絡的な感想にとどまっている
	今後の学び	A B C	今後の学びに向けて、具体的に根拠を示し、新しい問題意識や視点が得られている 今後の学びに向けて、新しい視点や問題意識が得られている 今後の学びに向けて、表面的・短絡的な意識にとどまっている

④最終発表では以下の評価ルーブリックを使用。

最終発表	パフォーマンス	A B	しっかり準備ができており、語りかける強さが感じられる しっかり準備ができているが、原稿を読む傾向が強く、語りかける力は弱い
	学びの次元	A B	温暖化の学びを通じて、本質的な問題意識や学びの過程に関して学びが深められている 温暖化に関して学びが深められている
	学びの深さ	A B C	新たな学びを得て、さらに新たな問題意識や疑問、考察などに広げられている 新たな学びや問題意識が得られている 表面的・短絡的な感想にとどまっている

4.検証

＜全体を通じて＞

この 2 学期が初の本格的な実施となった。1 学期の導入的な内容を受けての 2 学期は、「行動する」前提としての「知る」ことを大きなテーマとした。そもそもの目的は、問題解決のための行動・実践を軽薄なものとしない、行動・実践自体が目的化しないようにするためで、2 年間というスパンを活かし、2 年生の 1 年間を「知る」過程に重点を置いた。問題の構造を知ることではじめて自身が問題と感じるポイントが明確になり、自身のなかで改善・解決するヒントやこだわりが見つかるのではないかという仮説に立っての計画である。題材は引き続き温暖化とし、少しずつ具体的な内容へと近づけて知識を増やしていくと同時に、後につながる「行動・実践」に関する学びも取り入れていく時期とした。結果的に、後述の通り、「知る」過程を通じて生徒個人の関心の広がりが見られ、行動・実践に向けた姿勢とあわせて、効果的な学びが達成できた。

一方で、1 学期を終えての課題あるいは 2 学期に変更した点として、成績評価が挙げられる。本校では成績評価において平均点を一定の幅に揃える規定を運用している。しかし、単位認定や大学推薦条件となる評価と比べ、生徒の感覚と実際の評価との間にずれが生じた。点数という客観的な指標が出るペーパーテストではなく、毎回の学びの記録やレポートは、生徒にとってしっかり取り組んだ感覚になりやすい。ただ、探究学習においては考察の視点や深さ、言語化の領域も含め生徒の個人差が顕著になりやすく、どうしても相対的な評価になる。特に、昨年度にグローバル探究 Basic を受講して探究学習に慣れている生徒との差は大きく、それを経験していない生徒は、想定以上に成績評価が低いと不満を感じる傾向が強かった。同時に、平均点ありきの相対的な評価という構造上、高評価の生徒も評価が低いと感じる傾向が強かった。それを受け、探究学習に限り平均点の基準を変更するよう学内で調整し、できる限り生徒の努力を反映できるような仕組みには変更できた。探究学習による生徒の満足度はそれなりに高く、成長の幅も大きいものの、成績評価というシビアな面は、生徒のモチベーションに関わる大きな課題となることを実感した。

＜目標の達成度・課題＞

目標 1)グローバルスタディとしての最終的な目標である問題解決のための行動・実践の前段階として、「知る」過程に重点的に取り組む。自ら学ぶことで問題の広がりや他の問題との関連に気づく。

目標 2)問題の構造を知ることで、各自の問題意識を明確に見いだし、解決・改善の糸口とする。

上記 2 つの目標について、「知る」過程については、生徒にとって相互授業が大きなインパクトを与えた。生徒に問題の切り分けから一任することで、温暖化の全体像を掴ませると同時に、互いに教えるという経験を通じての深い理解を意図していた。生徒は、プレゼンテーションと異なり聴く側の活動を意識して組み立てることで、伝える内容をより深く理解し、また「伝える」ことの意義について考えるよい機会となった。結果的に、問題の切り分け方と実際の授業内容が一致しなかったケースもあったが、それらは事後の振り返りにおいて生徒どうしで指摘し合い、課題して受け止めることもできた。相互授業を通じての生徒の反応として最も大きかったものは、温暖化は大きな問題のはずなのに、これまで体系的に学ぶ機会が少なかったという実感が挙げられる。

この学びを経て、2 学期の最終発表において、生徒はそれぞれの関心をある程度明確化することができた。その具体的な内容としては、教育の重要性やメディアによる報道の影響、社会運動を巻き起こしている個人・いわゆるインフルエンサーの存在、環境対策と経済活動の両立を図る企業の在り方などで、温暖化という入口から、問題意識が多岐に広がる結果となった。これは、探究型の学びとして今学期の最も大きな成果といえる。

目標 3)実際の問題解決の行動・実践について学ぶ機会を通じ、問題解決のために必要な姿勢や意識について学ぶ

温暖化の理解を深めると同時に、夏休み課題(企業/スタートアップ/NGO について考える)をきっかけに「行動・実践」の領域にも学びを広げていった。様々な主体による環境対策についてのリサーチに、民間企業で実際に企画立ち上げに携わった五十嵐氏の経験を活かしたレクチャーを加え、それぞれの主体の特徴(身動きの軽さ、規模、財

政)を理解するのと同時に、問題に取り組む際には独自の熱意やこだわり、思いが重要になること学ぶ機会をとした。生徒にとっては、仕事や収入、やり甲斐といった点において現実的な話題が多く、自分事として関心を持った生徒が多かった。この点は、教員も常に意識するようにしたことで、以降の授業にも引き続きいい効果をもたらした。

5. 今後改善すべき点

先述の通り、評価の枠組みは生徒にとって現実的な関心事であり、教員側としても説明責任の果たせる評価ルーブリックなどの仕組みを構築することが急務である。現在、学びの記録の蓄積、成果物、プレゼンテーションなどのパフォーマンスの 3 つの要素を大きな評価対象としているが、この科目では、学びの記録を除いて、評価ルーブリックを事前に公表していない。評価ルーブリックを公表することで、どうしても評価を意識してルーブリックに引きずられた記述になることを危惧してのことである。もっとも、事後にはルーブリックを公表しており、その基準には主観的なものが多いものの、成果物作成やパフォーマンスの機会を重ねることで、徐々に生徒も評価のポイントは掴んでいくであろうし、それは成長といえると考えている。

そのなかで、本科目としては「グローバル」の要素を象徴する外国人とのディスカッションをどう評価にも活かせるかがポイントとなる。各学期に 1 回オンラインでフィリピンの NGO スタッフとディスカッションを行ったが、その際の評価対象として、ディスカッションそのものを対象とすることは難しく、事前に準備したプレゼンテーション等に留まった。英語力のために双方向のコミュニケーションそのものが難しい、グループディスカッションのため個人評価も難しいなどもあるが、本来であればディスカッションにおける積極性や議論の深さなどを評価対象として組み込んでいくべきではある。今後は、その評価の仕組みを優先して考えていきたい。この授業の下敷きとして、SGH(スーパーグローバルハイスクール)で実施していた通信型 PBL 授業では、大学生がアシスタントとして生徒の活動に加わり、アドバイスと同時に生徒の行動記録や評価にも関わってくれており、そのシステムはディスカッション評価のヒントとなるはずである。

そして、今年度の最も大きな課題は、授業の主導権という点である。探究学習において、進行の枠組みや主導権を生徒か教員かどちらが持つのかという問題は大きなポイントである。この科目においては、温暖化という課題設定から、宿題やワーク、授業の内容まで教員が設定して進行してきた。その点では探究学習としてそぐわないかもしれないが、時間が限られていることや教員の負担を考えて効果を最大化できることも大切な視点である。この科目では、題材を温暖化としたものの、そのテーマ自体が大きなもので、生徒個人が持った問題意識は多岐に及んだ。その点においては、探究学習らしさを保持できたとは考える。また、今後はより行動・実践に振った展開としていく予定であり、探究学習としての広がりは、今後の展開で担保していきたい。また、今年度より実施した生徒の気質(コンピテンシー)診断ツール・Ai GROW の結果なども参考にしつつ、生徒の成長につながる探究学習の枠組みについて考えていきたい。

3 学期フェーズ【課題を自分事としてとらえる・自身の意識との結合】【具体的な計画の策定と実行】

1.目標

目標 1)「知る」過程で芽生えた問題意識を、具体的な実践へと発展させる。

目標 2)問題の存在する地域や社会の状況・環境に即した解決策を考える。

目標 3)思いを実現するために適切な手段や方法を選択できる。

目標 4)同時に複数の作業に取り組む、マルチタスクに慣熟する。

2.具体的な活動

①1/14

・3 学期最後の回に、WWL の 3 科目合同で実施する成果発表の代表メンバーを決め、この授業全体の成果を発表するにあたり、その内容を詰めていくスケジュールを発表する。

・Ⅴ限はフィリピンの NGO への提案について、チームで夏休み課題を共有してまとめる。
・Ⅵ限は 2 学期末にとりまとめた、取り組みたいアクションを 3 ないし 4 つに絞り込み、取り組むチームを決める。結果的に、メインテーマとして、植樹・高校生とのオンラインセッションと小学校への出前授業・環境対策に実際に取り組んだ様子の動画配信の 3 チームができた。今後の予定を説明し、チームとして最初の企画書作成に取り組ませる。

②1/21
・Ⅴ限はフィリピンの NGO への提案について準備
・Ⅵ限は企画書についてレクチャーを実施。よい企画書に求められる要素について知る。

③1/28
・Ⅴ限は WWL 3 科目合同成果発表で発表するメンバーが内容の中間発表を行った。その後、他の生徒からの意見も集約した。
・Ⅵ限は、フィリピンの NGO スタッフと zoom によるオンラインセッションを実施。自分たちで考えた環境対策をプレゼンテーションする。1 つのグループは、徳島上勝町のゴミゼロの取り組み紹介と新たなフェアトレード商品の開発、SNS での広報を、もう 1 つのグループは地域の高校を巻き込んだフリーマーケット、オンラインでの啓発活動を提案した。

④2/4
・マイアクションについて各チームが中間発表を行った。各チームの発表の後、質疑応答の時間を持ち、生徒どうしで質問や指摘、アドバイスをし合い、企画のブラッシュアップを図った。

⑤2/15
・マイアクションの実施計画を発表。各チームの発表の後、質疑応答の時間を持ち、生徒どうしで質問や指摘、アドバイスをし合い、企画のブラッシュアップを図った。各チームは、その内容も受けて企画を整え、これ以降に実行段階に移す。

⑥2/25
・WWL の 3 科目合同成果発表を実施。3 科目を代表する 4 チームが、各科目の学びを「平和構築の方法」というテーマで提案に結びつけて発表。本授業のメンバー4 名は、「平和」というキーワードに、これまでの授業(豊かさ、グレタ・トゥーンベリさん、温暖化の知識、フィリピンの NGO とのディスカッション)から得た学びを結びつけ、少しでも多くの人に行動してもらうことを訴えかけた。結果として、4 チームのなかで最優秀に選ばれた。

3.活動の評価方法

評価は、①計 4 回の学びの記録、②冬休み課題、③ドキュメント映画を観ての感想・考察、④マイアクション中間発表・最終発表時の質疑、⑤フィリピンの NGO への提案についてのチーム評価、⑥マイアクション企画書(一次・最終)のチーム評価を総合した。

①学びの記録の評価については、1,2 学期と学びの記録の評価を続けての改善点として、評価の視点に新たに「問題意識・視点・発想・着眼点」を追加した。いわゆる「目の付け所」といえるもので、従来の考察の深さと切り分けることで、生徒の考察・学びを評価しやすいようにした。

	新しい知識	問題意識・視点・発想・着眼点	考察の深さ
A	自分の観点を持って内容を処理、記述できている。 情報が工夫されて整理されている。 独自に多くの新たな情報を得られている。	問題意識や視点・着眼点が、取り組んだテーマにとどまらず、独自の発想・創造性や知識も関連付けて、ほかの領域や分野に広がっている。	知識と知識/意見/考察が体系的につながる記述がみられる。問題点に対して、深く理解できており、様々な立場の見方を踏まえて深く洞察できている。
B	内容がそのまま羅列されている。ある程度の情報のまとまりは見られるものの、あまり整理されていない。	問題意識や視点・着眼点が、取り組んだテーマにとどまらず、ほかの領域や分野に及んでいる。	多くが短絡的・表層的な感想や意見・疑問にとどまっている。
C	情報の量/質が不十分である。		感想や意見、疑問の質/量が不十分である。

②冬休み課題についての評価ルーブリック

	実現可能性	緻密さ・説得力・根拠
A	LOOBを中心に考えられており、実現可能性が高い	費用面や他方面への影響など、多くの視点から組み立てられている
B	影響力は小さいかもしれないが、個人レベルで実施できる	新たな情報を加え、計画や効果が説明されている
C	政策レベルや予算規模が大きく、すぐに実現しにくい	構想や計画にとどまる

③ドキュメント映画を観ての感想・考察についての評価ルーブリック

	視点・目の付け所・問題意識	考察の深さ
A	関心が、アクションの実践に関することに及んでいる	自身のこれまでの学びや新しい知識とあわせて深く考察できている
B	関心が、他の領域の問題にも及んでいる	問題を自分事としてとらえ、考察できている
C	関心が、児童労働や教育、カカオ栽培など直接的な問題に留まっている	表面的な感想に留まっている

④マイアクション中間発表・最終発表時の質疑については、回数と質問の内容で加点した。質問の内容に関しては、B:マイアクションの具体的な計画に関する表面的な質問、事実確認の質問/A:マイアクションに関する本質的(前提や考え方)な質問や指摘という基準で分けた。

⑤フィリピンの NGO への提案プレゼンテーションのチーム評価で使用した評価ルーブリック

	実現可能性	学びとのつながり	説得力・緻密さ
A	双方にとって魅力のある企画として計画されている	これまでの学びで得られたことをさらに発展させ、自分事として計画できている	時間や人的資源、効果や懸念点など多くの側面から考えられている
B	基本的な要素は整っており、実現可能なレベルにある	これまでの学びで得たことを組み入れて計画できている	順序立てて論理的に計画されている データや事例によって計画が裏付けられている
C	目的、ターゲット、費用面など多くの要素が漠然としている	一般的な発想や知識によって計画されている	内容が整理されておらず、あくまで計画の域を出ない

⑥マイアクション企画書(一次・最終)のチーム評価で使用した評価ルーブリック

	思い	ゴール	内容の緻密さ	計画性
A	企画の全体に渡って、思いが意識されている	この企画の実践によって達成されるゴールが、問題や現状の分析とともに明確に描けている	計画の効果や影響について多くの側面から考えられている	時間や人的資源も含めて的確に計画されている
B	問題を自分事として捉えられている	この企画の実践によって達成されるゴールが描かれているが、漠然としたものにとどまっている	データや事例によって計画が裏付けられている	順序立てて論理的に計画されている
C	一般的な問題の理解にとどまっている	この企画の実践によって達成されるゴールが描けていない	計画の域を出ない	計画が整理されていない

4.検証

＜全体的な感想＞

この学期は、2 年生の「知る」過程と 3 年生の「行動・実践する」過程をつなぐ時期と位置づけ、生徒の活動を活発化させた。

2 月 15 日の各チーム最終計画発表後、2 つの計画が実行された。高校生とのオンラインディスカッションと小学校への出前授業を企画したチームは、小さいことからでも、できる限り早くから行動してほしいという思いを実現すべく、3/12(金)に関西学院初等部 6 年生への出前授業を、3/14(日)に zoom でのオンラインディスカッションを実施した。初等部出前授業については、担当チームのメンバーを中心に、他チームのメンバー(授業参加者全員)も加わって 3 クラス同時に、温暖化に関する知識、クイズ形式での対策の意識付け、児童によるディスカッションなどを実施した。

もうひとつのチームは、フィリピンの NGO とのディスカッションで得た、「ひとりの大きな一歩より、多くの人の小さな一歩」という思いを実現すべく、自らが環境対策のムーブメントに取り組んだ様子を動画配信する計画を進めている。具体的には、Vegan の食事を取り入れることと、Zero Waste というゴミを極力出さないライフスタイルの紹介で、その際にも、普段通りの生活で出るゴミの量と、Zero Waste を意識してからのゴミの量を比較するなど工夫をしている。

そして、この学期のポイントとして挙げられるのは、WWL の 3 科目合同で行った成果発表である。「具体的な平和構築の方法」を提案するという課題に対して、生徒は「平和」という語句にまず向き合うことから始め、これまでの学びの振り返りを積み重ねていった。「平和」の定義づけや発表の展開については、発表を担当した 4 名だけでなく、多くの生徒の知見を基に成り立っており、全員で作り上げた発表だったといえる。

以上のマイアクションの計画と成果発表において特筆すべきは、生徒の質問力や指摘のレベルの高さである。マイアクションの詳細への質問に留まらず、それがどう問題解決につながるのか、あるいはそもそも問題解決になるのかといった本質的な質問まで踏み込んだ質問・指摘が多かった。合同成果発表についても、まず「平和」の定義づけが必要という指摘、論の組み立てそのものや前提に関する質問や指摘が多くなされ、まさに生徒どうしで計画が磨かれていったところに、生徒の成長が感じられた。

＜目標の達成度・課題＞

目標 1)「知る」過程で芽生えた問題意識を、具体的な実践へと発展させる。

目標 3)思いを実現するために適切な手段や方法を選択できる。

「知る」過程と「行動・実践」の過程をつなぐこの段階で最も重視したことは、「最初の思いをいかに大切にするか」である。どうしても実践は生徒にとって楽しいものになり、その細部の調整や実行の技術的な問題に労力が割かれ、その成果(数など)に意識が向かいがちになる。そのように行動・実践が目的化しないようにすることに最大限配慮した。2 学期の企画書についてのレクチャーでも触れた「思い」の大切さを常に意識させ、その行動・実践が本当にその「思い」を実現させられるのか、実践ありきになっていないかを問いかけ続けたが、先述の生徒どうしでの質疑でも、その意識は根付いていた。たとえば、動画作成においても、そのムーブメントがどう温暖化に関与するのかは説明しないといけないという意識を持ってくれているなど、計画の時点では、生徒はしっかりと「思い」を計画に発展させられ、その目標は達成できた。

ただし、実際の実践では思うようにいかないことも多く、その都度調整や変更が必要になる。そして、むしろそこから得られる学びが大きい。たとえば、小学校への出前授業では小学 6 年生の反応や知識は生徒の想像以上だったようで、生徒にとって手応えは大きかった。その組み立ては、生徒自身が行った 2 学期の相互授業が下敷きになっているが、聴く側の活動をどこまで意識できたか、聴く側の状況をどれだけ踏まえられたかなどの点において、まだまだ足らない点はあった。直後の近隣の高校生に呼びかけたオンラインディスカッションは、結局一般の高校生は 2 名のみの参加という結果になった。数を集めることが目標ではなく、その 2 名の高校生からは貴重な生の声も聞けた。結果的に大きなトラブルなく運営でき、失敗ということではなかったが、生徒にはすっきりしないもやもやした感覚が残った。

植樹に取り組むチームは、唯一実行段階に移せていないが、物理的・資金的な問題だけでなく、一般の生徒をどう巻き込めるか、その計画がそもそも温暖化対策なのかという課題で難航している。分かりやすい行動・実践は容易だが、「思い」を反映させるという点において、なんとか乗り越えていってほしい局面である。

大切なのは、その課題をしっかりと認識し、次の改善へつなげていく過程である。いわゆる PDCA サイクルといわれるものであるが、新学期には改めて実践の振り返りの機会を持つことにしている。そこで整理された課題や意識が、さらに磨かれた計画になっていくはずである。目標 2 については今後も継続して取り組まなければならず、特に今後詳細に磨かれていくであろう計画の全ての段階において、最初の「思い」を貫くことをより一層求めていきたい。

目標 2)問題の存在する地域や社会の状況・環境に即した解決策を考える。

2 学期から継続して取り組んだ、フィリピンの NGO に具体的な環境対策を提案するという課題は、実際に行ったことのない地域が抱える問題を扱い、生徒にとって確かに難しいものであった。こちらとしては、フィリピンの自然環境や都市化の状況、経済情勢などをイメージしての提案を描いていたが、無理があったのは確かである。それでも、フィリピンの NGO のスタッフは快く生徒の提案を聞き、コメントをして下さった。一部には、新たにリサーチした情報を基に、「思い」を持って提案を考えた生徒がいたり、温暖化だけでなくフィリピンが直面する貧困問題にも注目した生徒がいたりと、少しずつではあるが目標は浸透している。

また、この目標は、小学校の児童に関する事前のリサーチ(例えば、温暖化についてはどんな授業を実際に受けて

きたのかなど)や本校生徒の巻き込み方(以前に実施したアンケートで、温暖化に対する危機感や対策の必要性について意識が低いという結果が出ていた)など、相手に即した対策を考えるという面でも必要な視点といえる。今学期は主に企画書の作成に留まっており、具体的な計画に移っていく今後が、本格的な目標達成の時期となる。

目標 4)同時に複数の作業に取り組む、マルチタスクに慣熟する。

高校 3 年生を控えた時期ということで、意図的に複数の課題に同時に取り組むよう設定した。生徒は少なくともフィリピンの NGO への提案とマイアクションの 2 つに取り組んでいたが、多い生徒ではほかに 3 科目合同成果発表や探究甲子園、IOM(本校が中心となって企画する海外の高校生とのオンラインディスカッション)の企画なども取り組んでいた。学年末の時期でもあり、他の教科の課題やクラブ活動とも重なって負担になっていたことは確かであるが、ほとんどの生徒はそれを乗り越え、各課題に取り組めていた。

ただ、各課題の情報を生徒自身が整理できていたかどうかについては課題が残る。教員は生徒の学びを可視化する手段として学びの記録を用いている。当初は学びの記録をスキャンしてデータを各個人に紐付けていく想定をしており、学びの記録は 1 枚の紙で運用している。しかし、マルチタスクを進めていくと、学びの記録の付け方や提出時期の設定が曖昧になり、どうしても内容が混同されることが増えた。生徒にとっても情報の整理がつかなくなっている可能性は高く、学びの記録の形態や提出時期の設定などを見直す必要がある。

5. 今後改善すべき点

この授業は、授業の内容だけでなく評価においても手探りの状態で進めている。教員も各授業に 2 名が充てられ、構成・進行・評価に当たっている。評価の難しさ(生徒の実感と平均点設定による不満)については 2 学期に対策を講じた通りである。本校としても新しい時代に適応した教育を目指すにあたり、WWL 科目には力を入れており、どうしても生徒の活動は多めになりがちである。特に答えのない問いに取り組むことが多く、1 年次のグローバル探究 Basic を受講しているかどうか、グローバルな課題にどれだけ関心があるか、考えたことを言語化するスキルの程度などにより、取り組みを可視化した際に差が出やすい傾向にある。2 学期の相互授業など、実際のパフォーマンスについては多くの生徒が積極的に取り組んでいたが、今学期の企画立案に際しては、生徒間で「思い」の温度差が分かりやすくなり、一部の生徒は学びの記録でも明らかに考察が浅くなっている傾向が見られた。非常に積極的に取り組む生徒もいるなかで、その差は拡大してしまう可能性が高く、特にメンバーが変わることなく 2 年目も続いていく授業の特性も考えれば、今後の影響は大きい。また、生徒個人は積極的・意識的に取り組んでいるものの、他のメンバーの状況のためチームがうまく機能していない状況も見受けられ、積極的に取り組み、成果を上げていく生徒の一方で、モチベーションが下がっている生徒も出てきて、二極化が始まっているように見受けられ、今後はきめ細やかなサポートが必要になると感じている。

研究内容１・２総括　グローバルな社会を探究するためのカリキュラム開発
～活動システムの観点から捉える探究活動と今後の効果検証に向けて～

関西学院大学　高等教育推進センター准教授
カリキュラムアドバイザー　時任隼平

ここでは、本事業において 2020 年度に展開されたグローバル探究 BASIC とグローバル探究を支える教員集団による協働活動を（１）活動システム（エンゲストローム 1999）の観点から捉え、その特徴について考察する。また、（２）授業者によるブレインストーミング結果を踏まえた学びの検証内容について考察する。

（１）活動システムの観点から捉えるグローバル探究 BASIC とグローバル探究の実践

新型コロナウィルス感染拡大防止の観点から様々な制限がある中、2020 年度はグローバル探究 BASIC とグローバル探究の実践をオンライン活動と対面活動を組み合わせる形で１年間継続して行われた。特筆すべき点は、両実践の成果において、単に活動を続けるだけでなく教員同士が協働する仕組みが構築される傾向にある点である。具体的な事例として「学校のカリキュラムや学習目標に適応したシラバスの作成」「ルーブリック等を活用した観点別評価の実践」「生徒が主体となった学びの場の実践」の３つを事例に考察する。

グローバル探究 BASIC とグローバル探究の授業は指定の教科書が存在せず、教育活動の到達目標設定や教育内容・方法については活動に取り組む教員が自分たちで話し合い設定する必要がある。そのため、必然的にその構造は複雑になりがちである。そこで、ここでは２つの実践をエンゲストローム（1999）の活動システムの概念を援用して考察する（図１）。活動システムは人間の行為や実践を主体・対象・媒介物・ルール・コミュニティ・分業の観点から分析する枠組みを意味する（山住・エンゲストローム　2008）。

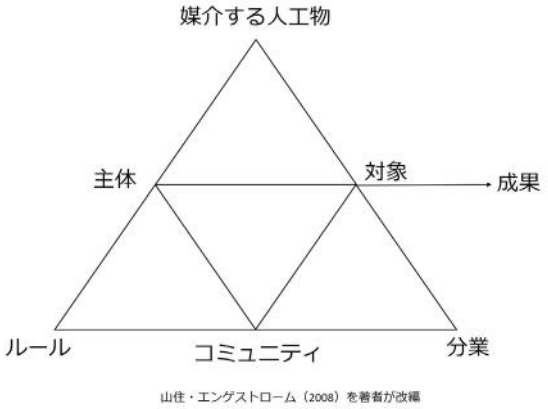


図１　活動システム

教育活動であるグローバル探究 BASIC とグローバル探究の活動の主体は生徒であるが、ここでは教育活動を支える教員集団を行為の主体に置き、考察する。生徒の学びを支える教員は、「生徒が何のために学ぶのか」を示す「対象」の設定をする必要がある。本事例において特徴的な点は、学校の教育目標と実践の到達目標を対応させたシラバスが教員によって作成され、共有されていることである。これは、活動の成果がオープンエンドになり、生徒の学びを具体的に把握することが困難な状態に陥りやすい探究活動においては、重要な工夫であるといえる。到達目標や教育内容、教育方法について記載されたシラバスを学校の教育目標と照らし合わせて言語化することで、複数の教員が関わる活動集団の中で共有・議論が行いやすくなると考えられる。実際に、年度がかわり担当者が変更になったグローバル探究 BASIC において、昨年度と同様の実践が実現できたている。このように、探究活動を行う上でシラバスを使って教育目標を明確に言語化したことが、研究内容１・２の特筆すべき工夫の１つだと考えることができる。

２つめの特筆すべき工夫は、教育活動を展開する際に「ルーブリック等を活用した観点別評価」が複数回行われていたことである。本報告書においては、複数の教員が共通のルーブリックを使用し、一貫した観点と規準・基準に基づき生徒の学びを深めるためのフィードバックを行っていることが確認できる。つまり、探究的な学びを促進するための媒介物としてルーブリックを開発し、活用したことが本事例において重要な点であるといえる。

３つめの特筆すべき工夫は、グローバル探究 BASIC とグローバル探究の活動システムを支える土台としてコミュニティを生成し、生徒との交流の場を設けたことである。本事例では SDGs 生徒オンライン交流会や「国際オン

ライン会議」を実践し他校の生徒との交流の場を設けたり、WWＬ連携校教員オンライン交流会を行ったりするなど、学外の人材を招き入れることで活動を支えるコミュニティを形成している。こうした工夫を行うことにより、学校内の生徒・教職員だけで学びを育むのではなく、学外の世界との交流を通した World Wide な実践・学びに繋がったと考えられる。

以上のように、本実践を活動システムの観点から捉えると、（１）対象を明確にするためのシラバス作成、（２）一貫した観点・規準・規準からフィードバックするためのルーブリックの開発・活用、（３）生徒の学びを拡げるためのコミュニティ形成の重要な工夫が埋め込まれていると考えられる。上記３点以外にも、この活動を支える教員集団内の分業体制や組織として実践するためのルールなど、様々な工夫によって複雑な実践は成り立っていると考えられる。

（２）実践者へのヒアリング結果とそれを踏まえた学びの検証

本実践における生徒の学びをより多面的に捉えるために、予め設定された教育目標による直接評価（成績）のみならず、質問紙等を用いた間接評価も必要になる。そこで、授業に関わる教員による「本事業における生徒の学びを捉えるための観点」についてブレインストーミングを行った。その結果、態度、心理、汎用的能力、習得したい能力、関連性、その他の計６カテゴリーの項目に整理することができた。これらの項目は、教員が日々の実践で生徒に身に付けて欲しい力の中で、直接評価では具体的な実情を可視化することが困難な内容を含んでいると考えることができる。今後はこれらの項目について検証していくことが課題である。

表１　ブレインストーミングで出た内容の分類結果

観点	内容
態度	失敗を恐れない積極性 ・授業に意義を感じているのか ・わからない時に諦めるのかどうか ・授業を楽しんでやっているのか ・外発的な動機付けでやっているのか内発的なのか ・授業外の関わり：授業時間外に取り組む時は嫌だからやっているのか本意でやっているのか
心理	・チーム内のストレスの感じ方の違い ・探究型の作業に対するストレス耐性が上がっているのか下がっているのか（好きなことをやるだけの人間になるのか） ・授業時間外にやることのストレス
汎用的能力	・タスクスケジュールの力 ・質問する力 ・時間の使い方
習得したい能力	・違う意見同士から新しいアイデアを生む，A，B から C を生む力 ・学びの記録を書くことはどういう力につながっているのか ・定義づけや根本的な話を考えることができる力 ・授業を通してどのような力をつけようとしているのか
関連性	・BASIC 経験の有無とその他の授業の満足度 ・部活動参加有無と WWL 授業の満足度の関連性
その他	・教員に何を期待しているのか ・生徒自身が授業の主導権を持つことをどこまで求めているのか ・定められた時間までに自分たちで問題の本質がわかって自分たちで困難を乗り越え力

参考文献

Y.エンゲストローム（1999)拡張による学習－活動理論からのアプローチ．山住勝広・他６名翻訳（1999） Learning by Expanding-An activity theoretical approach to developmental research-.新潮社

山住勝広・ユーリア・エンゲストローム（2008）ノットワーキング－学び合う人間活動の創造へ―．新曜社

コンピテンシーの成長を定量化することによる
WWL 関連科目の教育効果の可視化と検証について

1. 調査設計

本検証を行うにあたり、まずは以下の内容で調査設計を行った。

※使用した IGS 社によるテスト Ai-GROW については、以下の URL を参考にされたい。https://www.aigrow.jp/

項目	内容
目的	（1）コンピテンシーの成長を定量化することによる各種教育効果の可視化 （2）WWLコンソーシアム構築支援事業 “AI活用 for SDGs” 「地球と人類に貢献する平和構築のための学び」の効果検証
対象者	（1）関西学院高等部１年生：388名 ・WWL参加の生徒：15名、WWL不参加の生徒（統制群）：373名 （2）関西学院高等部２年生：380名 ・昨年度WWLBASIC参加の生徒：34名、WWL不参加の生徒（統制群）：346名 ・AI活用：34名、グローバルスタディ：14名、ハンズオン：20名、その他：312名
受検日	（1）事前受検：令和元年５月～７月（２年生のみ） （2）事後受検：令和元年12月
計測内容	コンピテンシー：以下の20項目 ・認知系：課題設定、論理的思考、疑う力、創造性 ・自己系：個人的実行力、自己効力、耐性、決断力 ・他者系：表現力、共感・傾聴力、柔軟性、影響力の行使 ・コミュニティ系：地球市民 ・その他：主体性、協働性、リーダーシップ、イノベーション、批判的思考力、創造的思考力、協働的思考力
計測方法	Institution for a Global Society 株式会社が開発した「Ai GROW」を用いた潜在的な気質診断とコンピテンシー評価（360度評価）のスコアを基に調査 ・気質診断：iATを用いた Big 5（内向性⇔外向性、保守性⇔開放性、繊細性⇔平穏性、独立性⇔協調性、自律性⇔自由性）診断

2. １年生の受検結果

１年生に関しては、「グローバル探究 BASIC（表中では『G 探究 BASIC』）」受講者と不参加生徒について比較分析を行った。

【結果のサマリー】

（１）認知系コンピテンシー（課題設定、論理的思考、疑う力、創造性）

・４つのコンピテンシー全て WWL 参加生徒の方が不参加の生徒より最小値、平均値、中央値が高い。

・疑う力以外、WWL 不参加の生徒の方が能力の分布が狭く、バラつきが小さい。

・課題設定、論理的思考、疑う力は WWL に参加した生徒の方が不参加の生徒より最小値、平均値、中央値が極めて高い。

（２）自己系コンピテンシー（個人的実行力、自己効力、耐性、決断力）

・４つのコンピテンシー全て WWL 参加生徒の方が不参加の生徒より最小値、平均値、中央値が高い。

・４つのコンピテンシー全て WWL に参加した生徒の方が不参加の生徒より最小値が極めて高い。

・４つのコンピテンシー全て WWL 不参加の生徒の方が能力の分布が狭く、バラつきが小さい。

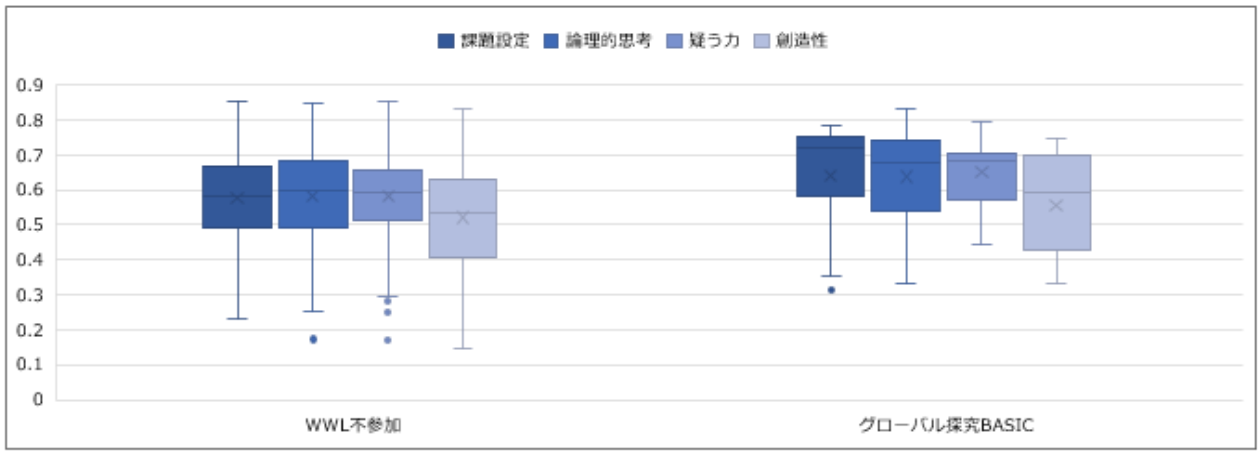
・自己効力、決断力は WWL に参加した生徒の方が不参加の生徒より特にスコアが高い。

（３）他者系コンピテンシー（表現力、共感・傾聴力、柔軟性、影響力の行使）
・４つのコンピテンシー全て WWL 参加生徒の方が不参加の生徒より最小値、平均値、中央値が高い。
・４つのコンピテンシー全て WWL に参加した生徒の方が不参加の生徒より最小値が極めて高い。
・共感・傾聴力以外、WWL 不参加の生徒の方が能力の分布が狭く、バラつきが小さい。
・表現力、影響力の行使は WWL に参加した生徒の方が不参加の生徒より特にスコアが高い。

（４）コミュニティ系コンピテンシー（地球市民）
・WWL に参加した生徒の方が不参加の生徒より最小値、平均値、中央値が極めて高い。
・WWL に参加した生徒の方が能力の分布が狭く、バラつきが小さい。

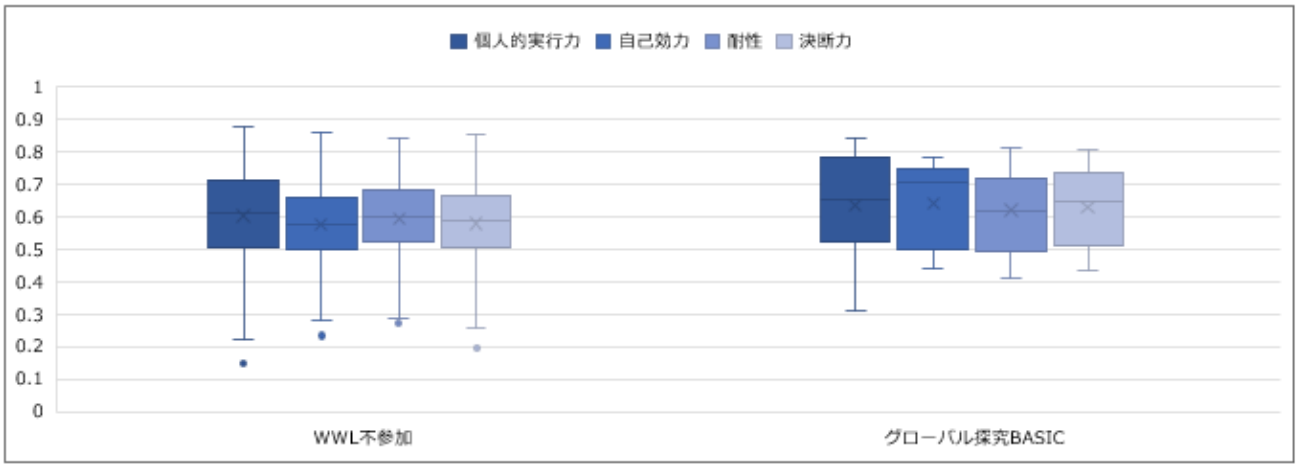
（５）その他のコンピテンシー（主体性・協働性・リーダーシップ・イノベーション、３つの思考力）
・全て WWL に参加した生徒の方が不参加の生徒より最小値、平均値、中央値が高い。
・全て WWL に参加した生徒の方が不参加の生徒より最小値が極めて高い。
・協働性、リーダーシップ、批判的思考力は WWL 参加生徒の方が不参加の生徒より特にスコアが高い。
・WWL に参加した生徒の方が能力の分布が狭く、バラつきが小さい。

【各コンピテンシー計測結果の基本統計量】
(1) 認知系コンピテンシー



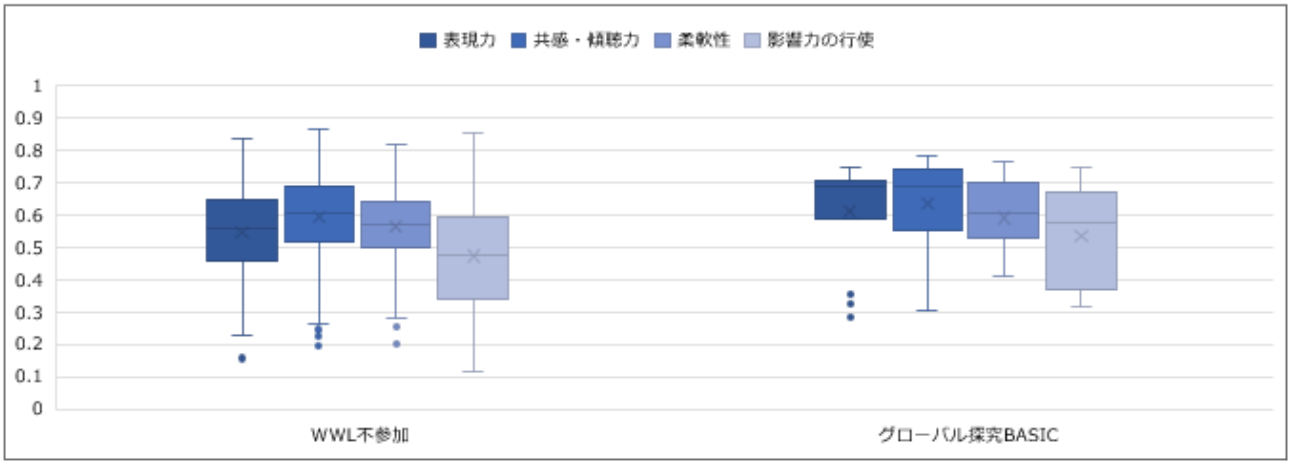
	課題設定		論理的思考		疑う力		創造性	
分類	WWL不参加	G探究BASIC	WWL不参加	G探究BASIC	WWL不参加	G探究BASIC	WWL不参加	G探究BASIC
n数	373	15	373	15	373	15	373	15
平均値	0.579	**0.641**	0.583	**0.639**	0.581	**0.651**	0.522	0.556
標準偏差	0.123	0.150	0.128	0.144	0.111	0.100	0.143	0.138
最小値	0.233	**0.316**	0.173	**0.330**	0.171	**0.445**	0.148	**0.330**
中央値	0.585	**0.721**	0.598	**0.679**	0.591	**0.685**	0.537	0.594
最大値	0.852	0.782	0.850	0.832	0.852	0.794	0.830	0.746

(2) 自己系コンピテンシー



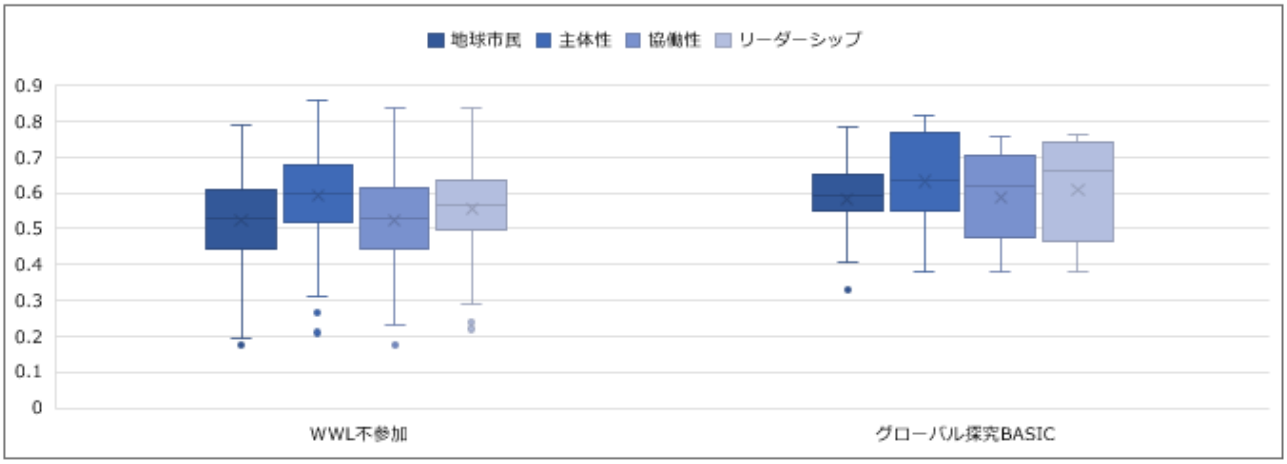
	個人的実行力		自己効力		耐性		決断力	
分類	WWL不参加	G探究BASIC	WWL不参加	G探究BASIC	WWL不参加	G探究BASIC	WWL不参加	G探究BASIC
n数	373	15	373	15	373	15	373	15
平均値	0.603	0.636	0.575	**0.641**	0.595	0.621	0.579	**0.630**
標準偏差	0.136	0.168	0.116	0.125	0.110	0.121	0.118	0.126
最小値	0.148	**0.313**	0.234	**0.439**	0.270	**0.411**	0.197	**0.432**
中央値	0.614	0.652	0.579	**0.709**	0.602	0.619	0.591	**0.648**
最大値	0.876	0.842	0.860	0.783	0.845	0.815	0.856	0.806

(3) 他者系コンピテンシー



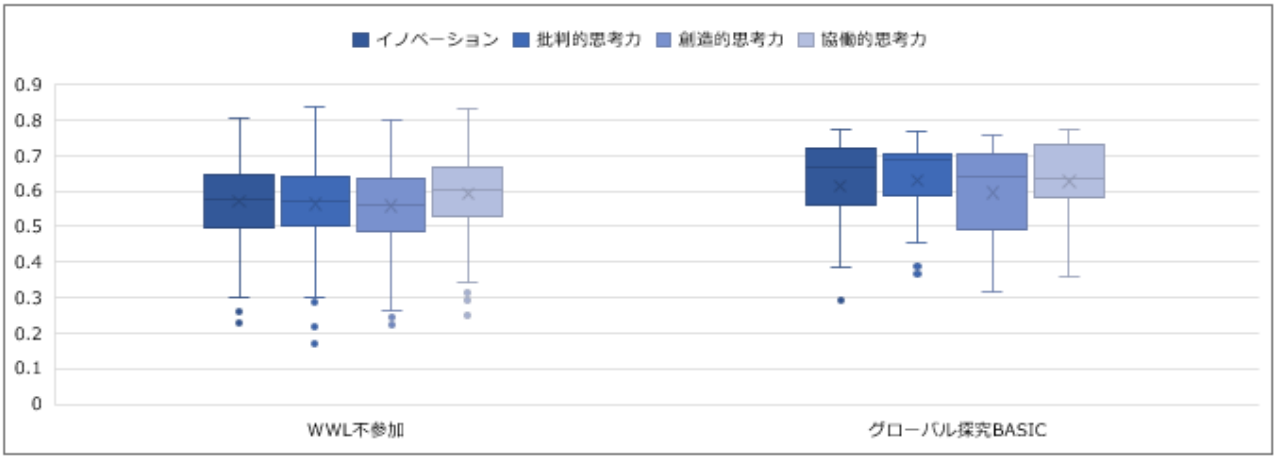
	表現力		共感・傾聴力		柔軟性		影響力の行使	
分類	WWL不参加	G探究BASIC	WWL不参加	G探究BASIC	WWL不参加	G探究BASIC	WWL不参加	G探究BASIC
n数	373	15	373	15	373	15	373	15
平均値	0.547	**0.612**	0.595	0.635	0.566	0.591	0.473	**0.535**
標準偏差	0.130	0.153	0.135	0.130	0.108	0.130	0.164	0.147
最小値	0.157	**0.285**	0.195	**0.306**	0.200	**0.266**	0.116	**0.315**
中央値	0.560	**0.689**	0.605	**0.690**	0.572	0.608	0.478	**0.578**
最大値	0.837	0.746	0.864	0.783	0.817	0.765	0.854	0.746

(4) コミュニティ系コンピテンシー



	地球市民		主体性		協働性		リーダーシップ	
分類	WWL不参加	G探究BASIC	WWL不参加	G探究BASIC	WWL不参加	G探究BASIC	WWL不参加	G探究BASIC
n数	373	15	373	15	373	15	373	15
平均値	0.522	**0.581**	0.591	0.633	0.524	**0.588**	0.558	0.611
標準偏差	0.122	0.107	0.117	0.141	0.124	0.129	0.110	0.129
最小値	0.175	**0.330**	0.211	**0.379**	0.175	**0.379**	0.221	**0.383**
中央値	0.527	**0.594**	0.601	0.636	0.529	**0.620**	0.566	**0.660**
最大値	0.789	0.783	0.857	0.818	0.836	0.759	0.837	0.763

(5) その他のコンピテンシー



	イノベーション		批判的思考力		創造的思考力		協働的思考力	
分類	WWL不参加	G探究BASIC	WWL不参加	G探究BASIC	WWL不参加	G探究BASIC	WWL不参加	G探究BASIC
n数	373	15	373	15	373	15	373	15
平均値	0.572	0.616	0.564	**0.632**	0.558	0.595	0.595	0.628
標準偏差	0.100	0.133	0.108	0.124	0.112	0.120	0.106	0.118
最小値	0.230	**0.291**	0.171	**0.365**	0.222	**0.318**	0.252	**0.359**
中央値	0.578	**0.667**	0.570	**0.688**	0.562	**0.639**	0.606	0.634
最大値	0.806	0.774	0.839	0.770	0.802	0.759	0.832	0.771

3. 2 年生の受検結果

2 年生に関しては、各計測項目について、今年度新設した「グローバル探究 A・AI 活用」「グローバル探究 B・ハンズオンラーニング」「グローバル探究 C・グローバルスタディ（以下グローバル S)」毎の比較を行った。

【結果のサマリー】

（１）認知系コンピテンシー（課題設定、論理的思考、疑う力、創造性）

・「AI 活用」の生徒は、課題設定、論理的思考、疑う力が大きく成長した。

・「グローバル S」の生徒は、創造性が大きく成長した。最小値がネガティブな変化を示しているのは外れ値の生徒による影響（以下、同様)。課題設定、論理的思考の最小値は他に比べ最も向上した。

・「ハンズオン」の生徒は、論理的思考、創造性が大きく成長。また、最小値は４つのコンピテンシー全て他に比べ特に成長した。

（２）自己系コンピテンシー（個人的実行力、自己効力、耐性、決断力）

・「AI 活用」の生徒は、個人的実行力、自己効力、耐性が大きく成長した。

・「グローバル S」の生徒は、４つのコンピテンシー全てで中央値が大きく向上した。

・「ハンズオン」の生徒は、４つのコンピテンシー全て大きく成長。特に最小値は他に比べ最も向上した。

（３）他者系コンピテンシー（表現力、共感・傾聴力、柔軟性、影響力の行使）

・「AI 活用」の生徒は、表現力、共感・傾聴力、影響力の行使が大きく成長した。

・「グローバル S」の生徒は、表現力、影響力の行使が大きく成長。特に影響力の行使は他に比べ最も成長した。

・「ハンズオン」の生徒は、表現力、影響力の行使が大きく成長。特に最小値は他に比べ最も向上した。

（４）コミュニティ系コンピテンシー（地球市民）

・「AI 活用」の生徒は、最大値を含めて成長。特に上位層に大きな成長が認められる。

・「グローバル S」の生徒は、平均値、中央値、平均値、最大値は他に比べ最も向上した。

・「ハンズオン」の生徒は、最大値は下がったものの最小値が大幅に向上。特に下位層に大きな成長が認められる。

（５）その他のコンピテンシー（主体性・協働性・リーダーシップ・イノベーション、３つの思考力）

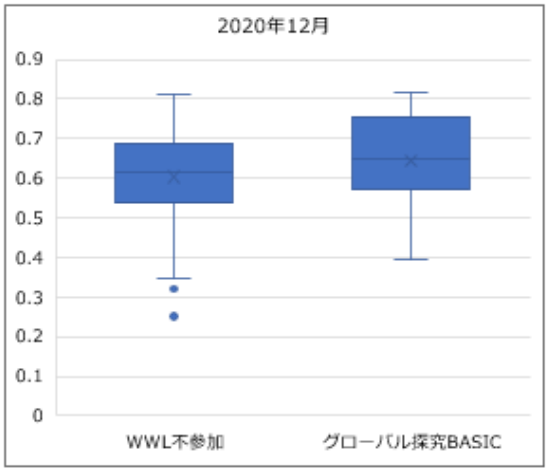
・「AI 活用」の生徒は、主体性、協働性、リーダーシップ、批判的・協働的思考力が大きく成長した。

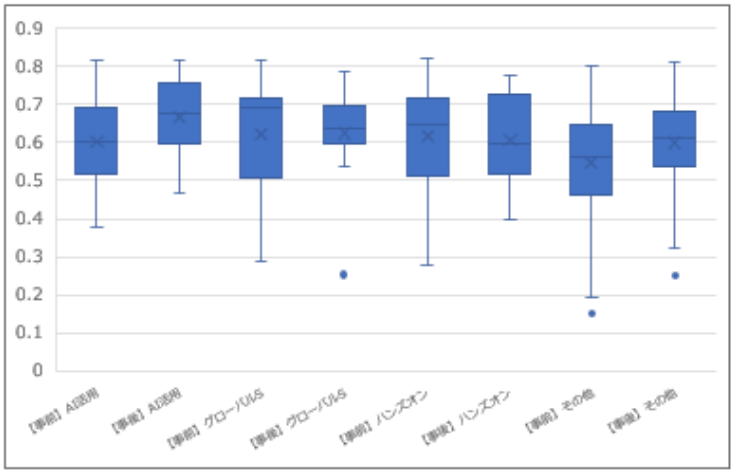
・「グローバル S」の生徒は、協働性、創造的思考力が大きく成長。主体性、協働的思考力以外の能力は他に比べ中央値が最も向上した。

・「ハンズオン」の生徒は、協働性、批判的思考力が大きく成長。特に最小値は他に比べ最も向上しているだけでなく、批判的思考力の成長が際立つ。

【各コンピテンシー計測結果の基本統計量】

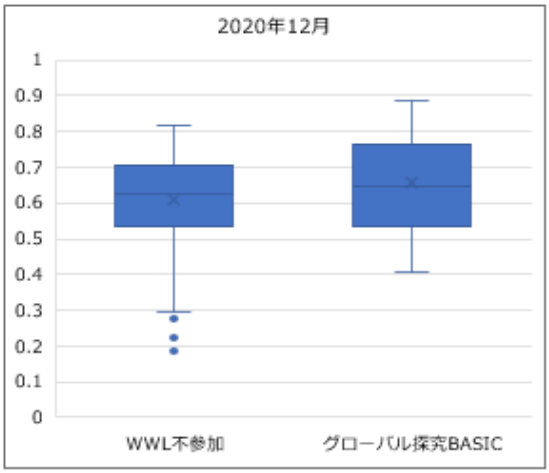
(1) 課題設定（認知系コンピテンシー）

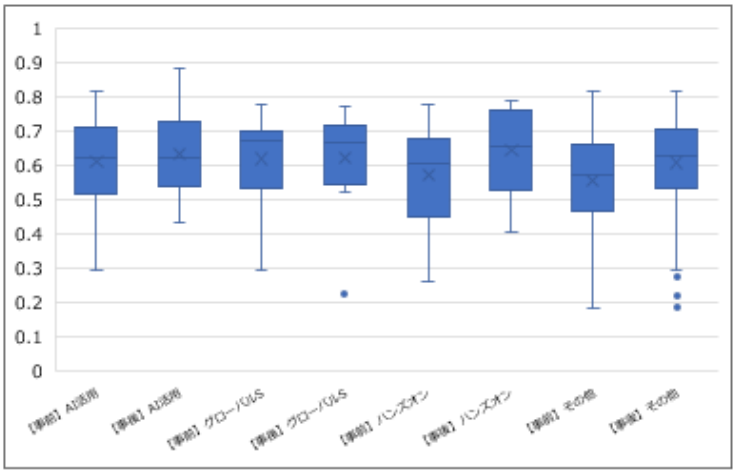




分類	AI活用			グローバルS			ハンズオン			その他		
n数	34			14			20			312		
受検時期	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率
平均値	0.601	0.665	0.065	0.621	0.624	0.004	0.618	0.608	-0.009	0.547	0.599	0.053
標準偏差	0.115	0.097	-0.018	0.143	0.124	-0.019	0.143	0.111	-0.032	0.129	0.108	-0.022
最小値	0.376	0.468	0.092	0.290	0.253	-0.036	0.276	0.397	0.121	0.150	0.251	0.102
中央値	0.600	0.676	0.076	0.690	0.635	-0.056	0.648	0.596	-0.053	0.562	0.613	0.051
最大値	0.815	0.817	0.002	0.816	0.788	-0.028	0.824	0.779	-0.045	0.803	0.813	0.010

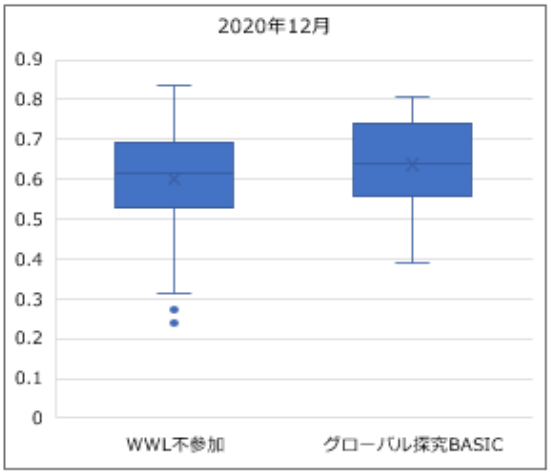
(2) 論理的思考（認知系コンピテンシー）

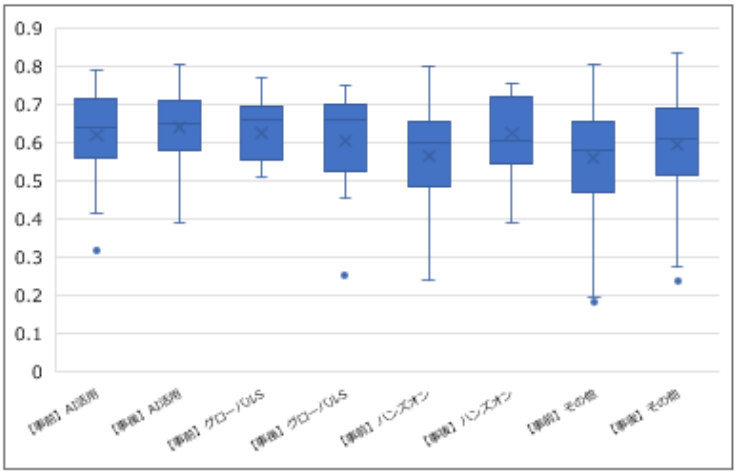




分類	AI活用			グローバルS			ハンズオン			その他		
n数	34			14			20			312		
受検時期	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率
平均値	0.613	0.635	0.022	0.620	0.623	0.002	0.572	0.647	0.075	0.556	0.609	0.052
標準偏差	0.127	0.118	-0.010	0.122	0.137	0.015	0.148	0.118	-0.029	0.133	0.123	-0.010
最小値	0.294	0.432	0.138	0.298	0.225	-0.073	0.261	0.408	0.148	0.185	0.186	0.001
中央値	0.624	0.622	-0.002	0.673	0.666	-0.007	0.608	0.658	0.050	0.570	0.627	0.057
最大値	0.817	0.887	0.070	0.776	0.774	-0.002	0.781	0.790	0.009	0.817	0.817	0.000

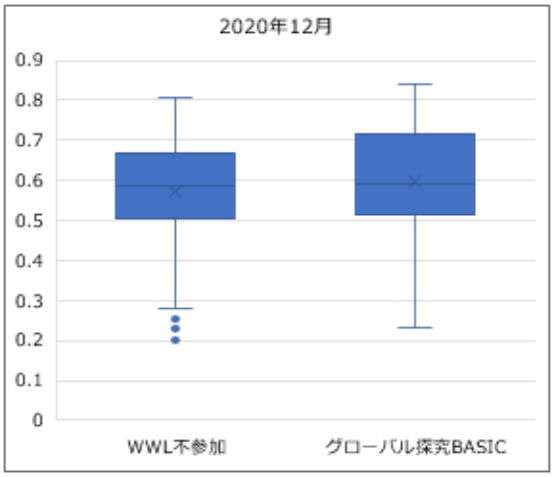
(3) 疑う力（認知系コンピテンシー）

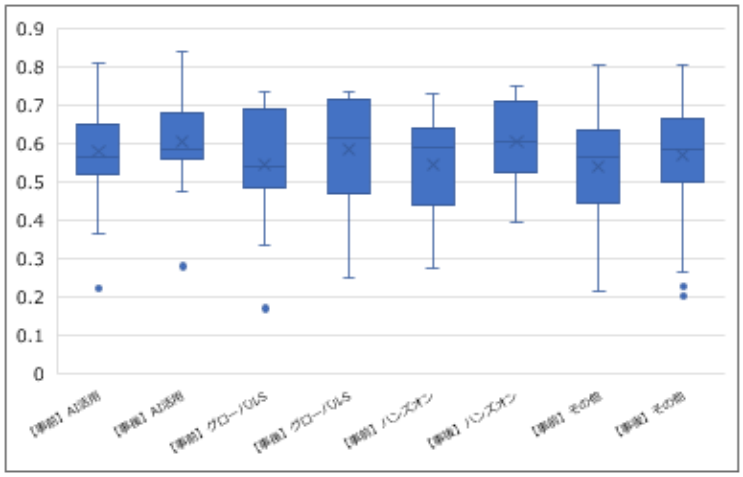




分類	AI活用			グローバルS			ハンズオン			その他		
n数	34			14			20			312		
受検時期	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率
平均値	0.620	0.640	0.020	0.625	0.604	-0.021	0.567	0.626	0.059	0.560	0.597	0.037
標準偏差	0.113	0.090	-0.023	0.114	0.131	0.016	0.126	0.099	-0.027	0.128	0.114	-0.014
最小値	0.318	0.393	0.075	0.330	0.253	-0.077	0.240	0.392	0.152	0.185	0.239	0.054
中央値	0.640	0.650	0.009	0.662	0.662	0.000	0.599	0.604	0.006	0.581	0.613	0.033
最大値	0.789	0.806	0.017	0.773	0.750	-0.023	0.802	0.757	-0.045	0.805	0.835	0.030

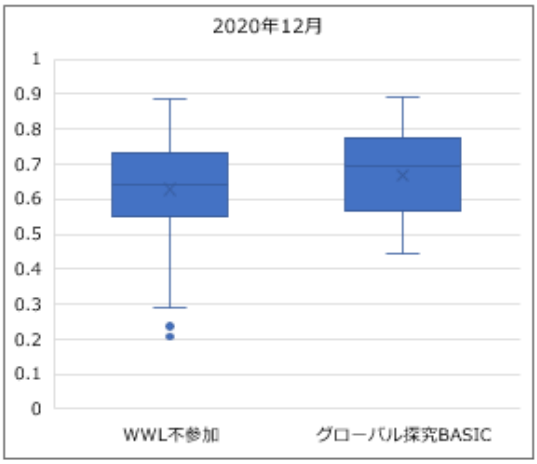
(4) 創造性（認知系コンピテンシー）

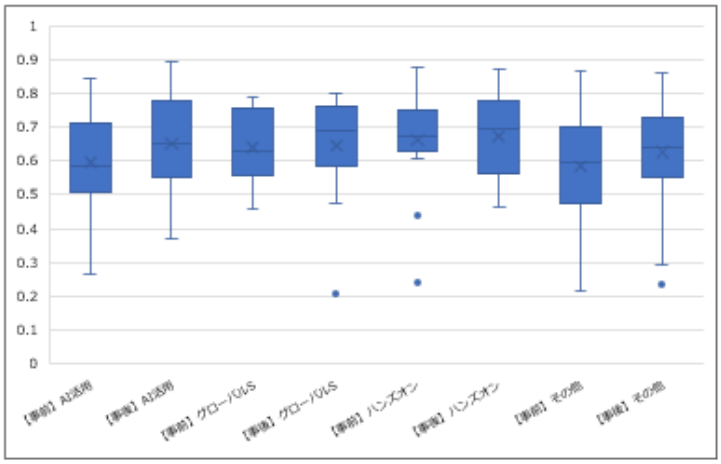




分類	AI活用			グローバルS			ハンズオン			その他		
n数	34			14			20			312		
受検時期	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率
平均値	0.581	0.605	0.024	0.547	0.585	0.038	0.545	0.604	0.059	0.542	0.569	0.028
標準偏差	0.120	0.124	0.005	0.155	0.138	-0.017	0.129	0.102	-0.027	0.131	0.126	-0.006
最小値	0.223	0.233	0.010	0.171	0.253	0.082	0.276	0.396	0.120	0.160	0.202	0.042
中央値	0.565	0.585	0.020	0.541	0.618	0.077	0.590	0.607	0.016	0.566	0.586	0.020
最大値	0.810	0.839	0.029	0.738	0.739	0.001	0.731	0.752	0.021	0.807	0.804	-0.003

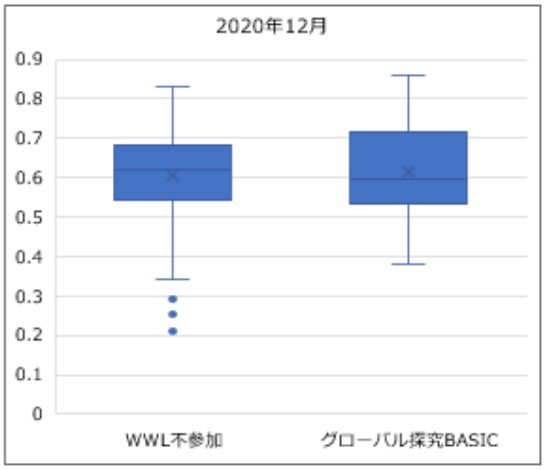
(5) 個人的実行力（自己系コンピテンシー）

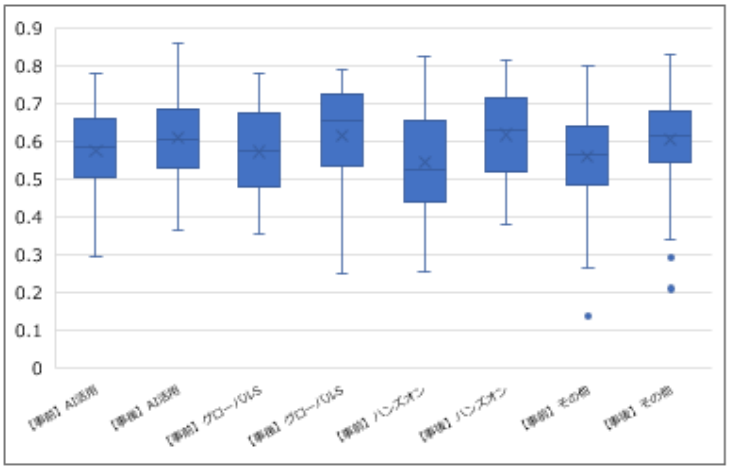




分類	AI活用			グローバルS			ハンズオン			その他		
n数	34			14			20			312		
受検時期	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率
平均値	0.597	0.650	0.053	0.640	0.645	0.005	0.661	0.674	0.012	0.583	0.627	0.044
標準偏差	0.143	0.135	-0.008	0.102	0.152	0.050	0.145	0.114	-0.031	0.142	0.128	-0.014
最小値	0.266	0.370	0.104	0.458	0.205	-0.253	0.243	0.465	0.222	0.213	0.237	0.024
中央値	0.586	0.650	0.063	0.630	0.690	0.061	0.671	0.695	0.025	0.598	0.642	0.044
最大値	0.842	0.892	0.050	0.788	0.801	0.013	0.875	0.869	-0.006	0.869	0.858	-0.011

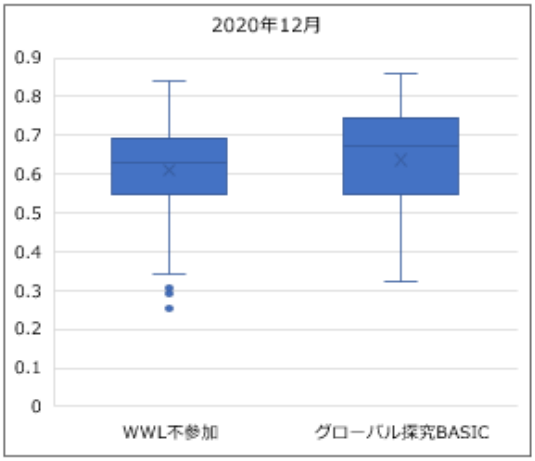
(6) 自己効力（自己系コンピテンシー）

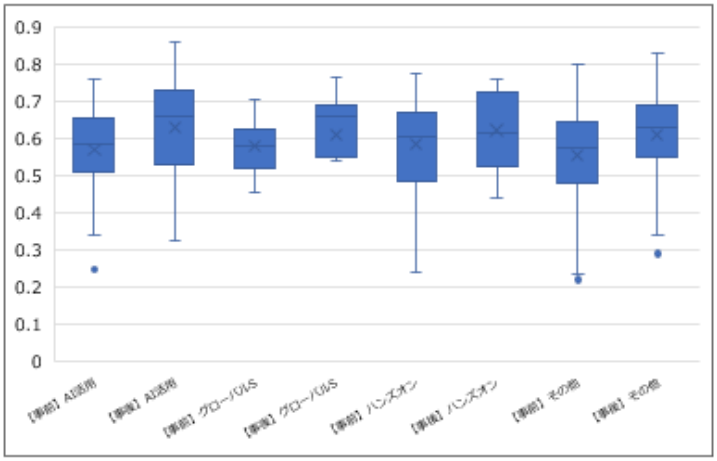




分類	AI活用			グローバルS			ハンズオン			その他		
n数	34			14			20			312		
受検時期	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率
平均値	0.577	0.610	0.033	0.573	0.615	0.042	0.545	0.618	0.073	0.560	0.606	0.046
標準偏差	0.123	0.116	-0.006	0.122	0.134	0.012	0.146	0.113	-0.033	0.113	0.106	-0.007
最小値	0.297	0.365	0.068	0.357	0.253	-0.104	0.253	0.379	0.126	0.137	0.210	0.074
中央値	0.584	0.604	0.020	0.578	0.655	0.077	0.526	0.631	0.105	0.565	0.616	0.051
最大値	0.783	0.860	0.077	0.780	0.790	0.010	0.827	0.814	-0.013	0.799	0.830	0.031

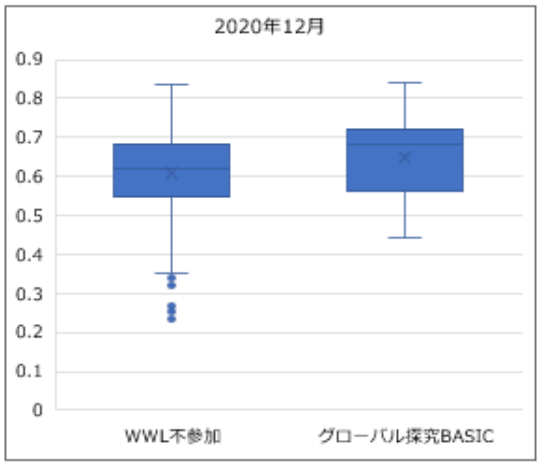
(7) 耐性（自己系コンピテンシー）

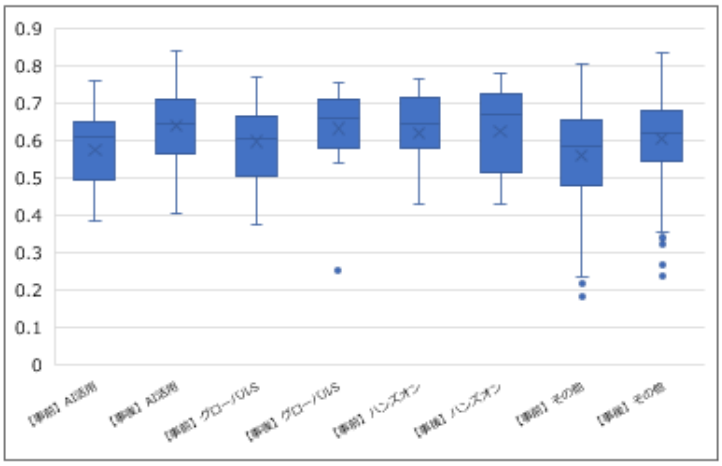




分類	AI活用			グローバルS			ハンズオン			その他		
n数	34			14			20			312		
受検時期	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率
平均値	0.571	0.631	0.060	0.580	0.612	0.032	0.585	0.624	0.039	0.556	0.610	0.054
標準偏差	0.116	0.126	0.010	0.071	0.122	0.051	0.131	0.107	-0.024	0.117	0.107	-0.010
最小値	0.246	0.324	0.078	0.453	0.253	-0.200	0.240	0.441	0.202	0.220	0.290	0.070
中央値	0.584	0.659	0.075	0.581	0.663	0.082	0.606	0.613	0.008	0.574	0.630	0.056
最大値	0.761	0.860	0.099	0.706	0.765	0.060	0.775	0.761	-0.014	0.800	0.833	0.033

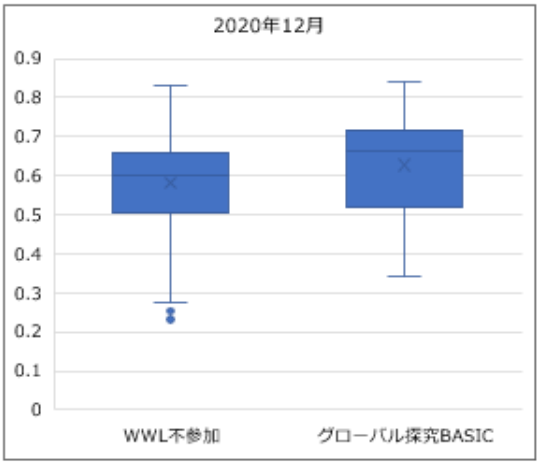
(8) 決断力（自己系コンピテンシー）

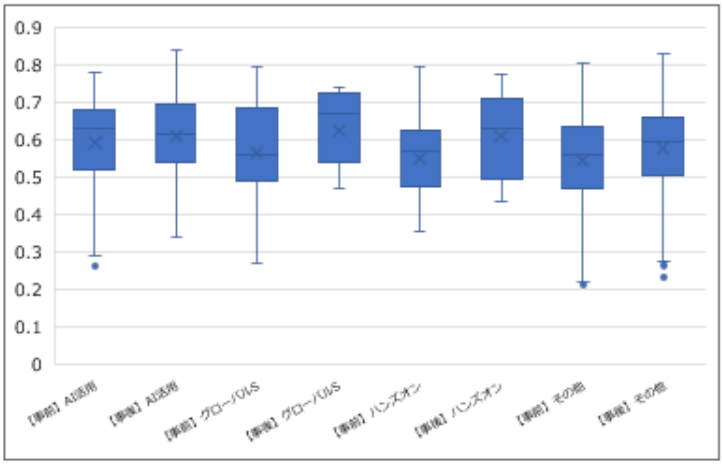




分類	AI活用			グローバルS			ハンズオン			その他		
n数	34			14			20			312		
受検時期	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率
平均値	0.575	0.641	0.066	0.598	0.633	0.036	0.623	0.625	0.003	0.562	0.607	0.045
標準偏差	0.100	0.101	0.001	0.101	0.123	0.021	0.116	0.115	-0.001	0.125	0.104	-0.021
最小値	0.383	0.403	0.020	0.376	0.253	-0.123	0.265	0.431	0.166	0.183	0.236	0.054
中央値	0.609	0.646	0.036	0.606	0.659	0.053	0.644	0.669	0.025	0.584	0.621	0.037
最大値	0.761	0.839	0.078	0.771	0.754	-0.017	0.767	0.782	0.015	0.804	0.834	0.029

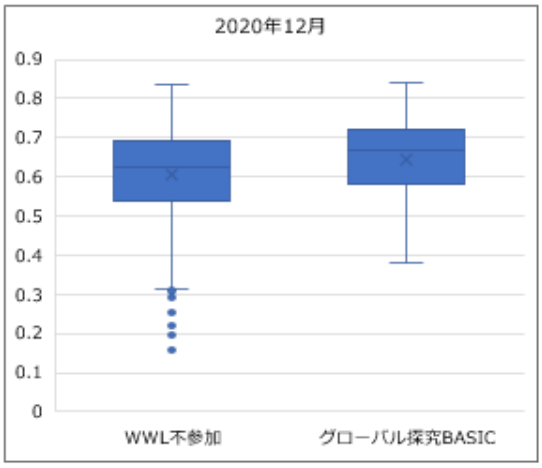
(9) 表現力（他者系コンピテンシー）

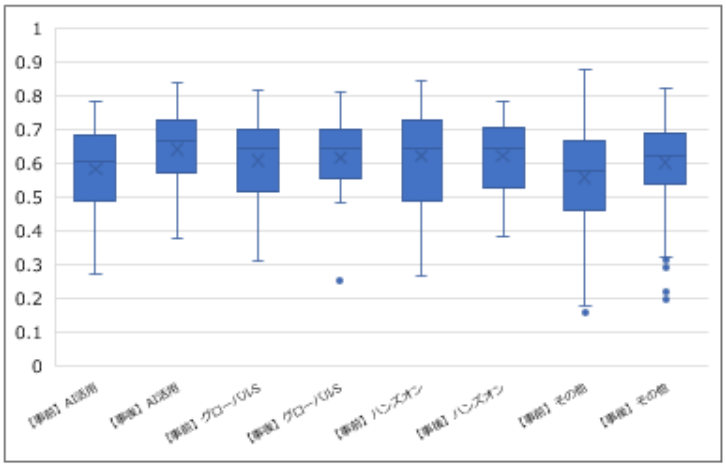




分類	AI活用			グローバルS			ハンズオン			その他		
n数	34			14			20			312		
受検時期	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率
平均値	0.593	0.612	0.020	0.566	0.624	0.058	0.551	0.610	0.059	0.546	0.578	0.032
標準偏差	0.128	0.120	-0.008	0.131	0.131	0.000	0.118	0.109	-0.009	0.124	0.110	-0.015
最小値	0.264	0.341	0.077	0.272	0.253	-0.019	0.253	0.434	0.181	0.212	0.232	0.020
中央値	0.633	0.613	-0.020	0.563	0.669	0.106	0.569	0.629	0.060	0.560	0.595	0.035
最大値	0.783	0.839	0.056	0.794	0.739	-0.055	0.797	0.778	-0.019	0.807	0.833	0.026

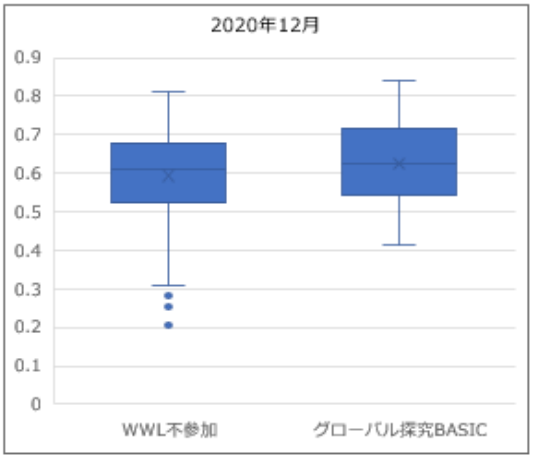
(10) 共感・傾聴力（他者系コンピテンシー）

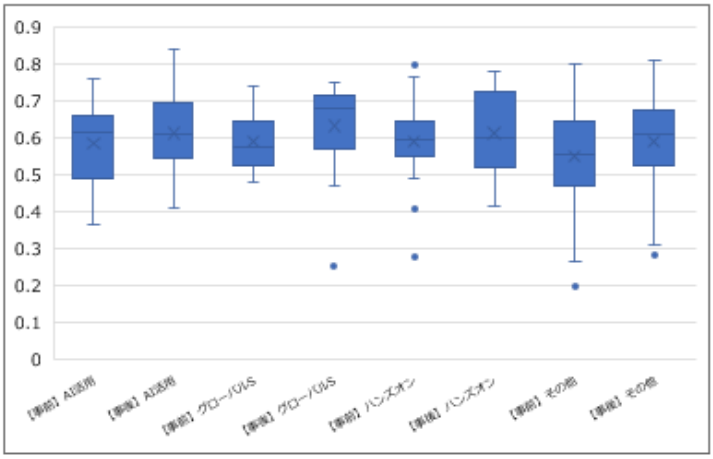




分類	AI活用			グローバルS			ハンズオン			その他		
n数	34			14			20			312		
受検時期	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率
平均値	0.585	0.643	0.058	0.609	0.618	0.010	0.621	0.622	0.001	0.559	0.603	0.044
標準偏差	0.124	0.122	-0.002	0.130	0.129	-0.001	0.153	0.110	-0.043	0.140	0.117	-0.023
最小値	0.272	0.381	0.108	0.312	0.253	-0.059	0.265	0.384	0.119	0.159	0.158	-0.001
中央値	0.607	0.669	0.062	0.644	0.648	0.004	0.646	0.645	-0.001	0.579	0.624	0.045
最大値	0.783	0.841	0.059	0.819	0.810	-0.010	0.846	0.784	-0.062	0.878	0.826	-0.052

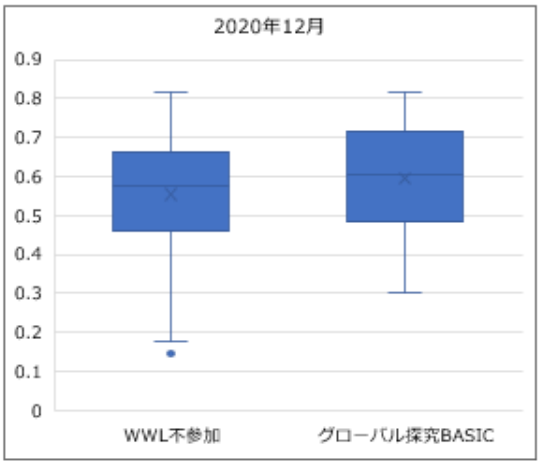
(11) 柔軟性（他者系コンピテンシー）

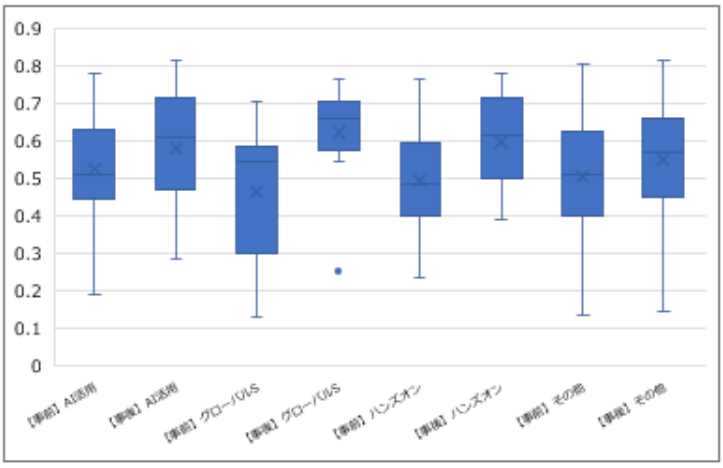




分類	AI活用			グローバルS			ハンズオン			その他		
n数	34			14			20			312		
受検時期	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率
平均値	0.584	0.614	0.030	0.590	0.633	0.043	0.590	0.613	0.024	0.549	0.592	0.043
標準偏差	0.110	0.103	-0.007	0.074	0.131	0.057	0.115	0.104	-0.011	0.121	0.110	-0.011
最小値	0.365	0.411	0.047	0.482	0.253	-0.229	0.276	0.416	0.140	0.197	0.206	0.010
中央値	0.615	0.609	-0.006	0.575	0.680	0.104	0.596	0.600	0.005	0.554	0.609	0.055
最大値	0.761	0.839	0.078	0.742	0.753	0.010	0.800	0.782	-0.018	0.801	0.812	0.012

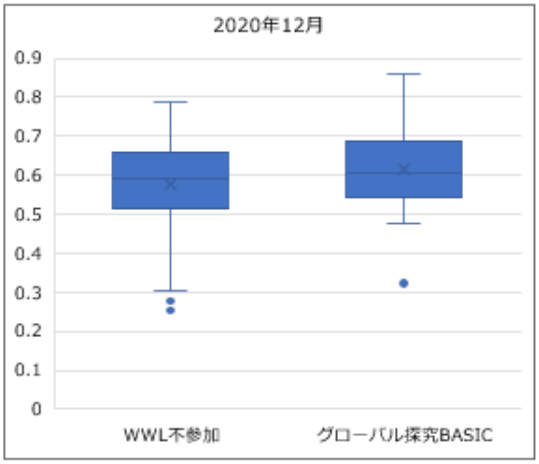
(12) 影響力の行使（他者系コンピテンシー）

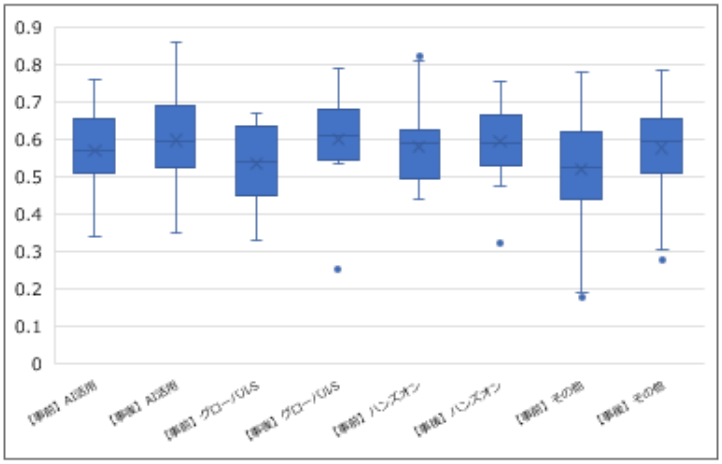




分類	AI活用			グローバルS			ハンズオン			その他		
n数	34			14			20			312		
受検時期	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率
平均値	0.525	0.582	0.057	0.466	0.623	0.157	0.497	0.599	0.102	0.505	0.551	0.045
標準偏差	0.135	0.155	0.020	0.174	0.122	-0.052	0.140	0.117	-0.023	0.148	0.141	-0.008
最小値	0.189	0.284	0.095	0.132	0.253	0.122	0.238	0.392	0.154	0.135	0.144	0.009
中央値	0.512	0.609	0.096	0.543	0.663	0.120	0.486	0.617	0.130	0.511	0.573	0.062
最大値	0.783	0.817	0.034	0.706	0.765	0.060	0.766	0.782	0.016	0.807	0.815	0.008

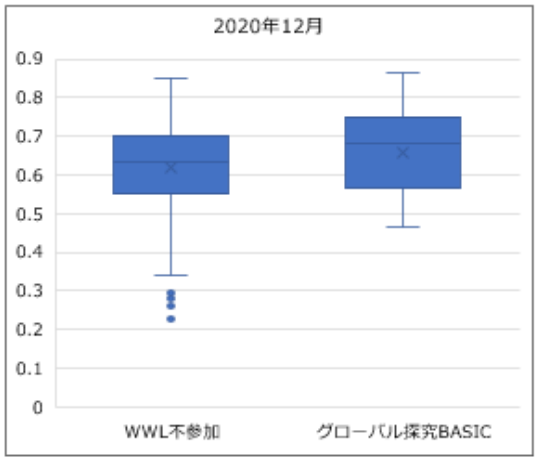
(13) 地球市民（コミュニティ系コンピテンシー）

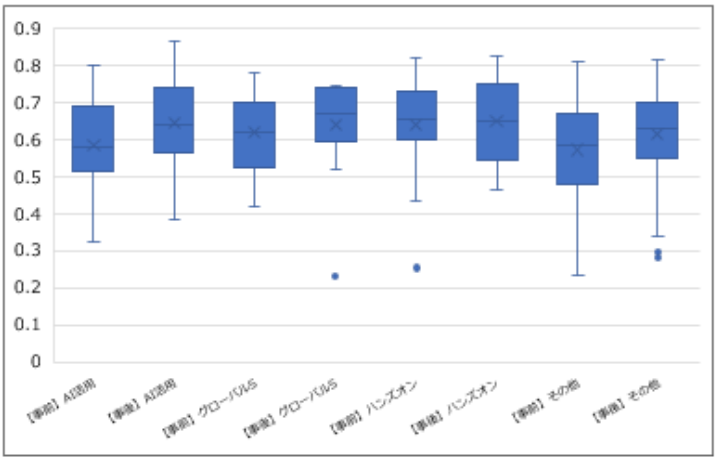




分類	AI活用			グローバルS			ハンズオン			その他		
n数	34			14			20			312		
受検時期	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率
平均値	0.570	0.599	0.029	0.536	0.602	0.066	0.580	0.596	0.016	0.522	0.578	0.056
標準偏差	0.107	0.104	-0.003	0.100	0.118	0.018	0.122	0.100	-0.022	0.122	0.103	-0.019
最小値	0.338	0.351	0.013	0.330	0.253	-0.077	0.265	0.323	0.058	0.177	0.277	0.100
中央値	0.572	0.598	0.026	0.540	0.611	0.071	0.589	0.591	0.002	0.524	0.594	0.069
最大値	0.761	0.860	0.099	0.669	0.790	0.121	0.824	0.755	-0.069	0.779	0.787	0.008

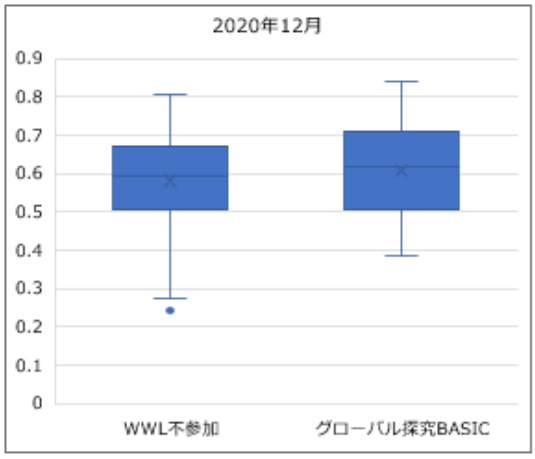
(14) 主体性（その他のコンピテンシー）

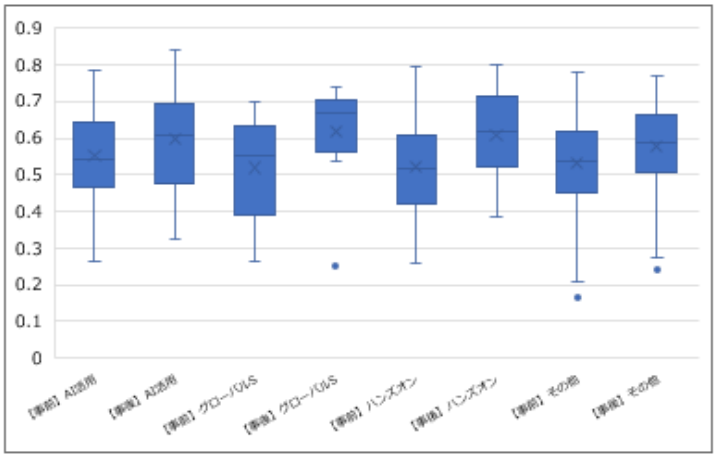




分類	AI活用			グローバルS			ハンズオン			その他		
n数	34			14			20			312		
受検時期	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率
平均値	0.586	0.646	0.060	0.619	0.639	0.020	0.642	0.649	0.007	0.573	0.617	0.044
標準偏差	0.113	0.112	-0.001	0.097	0.133	0.036	0.127	0.108	-0.019	0.126	0.107	-0.018
最小値	0.324	0.386	0.062	0.417	0.229	-0.188	0.254	0.464	0.210	0.236	0.263	0.027
中央値	0.580	0.640	0.060	0.622	0.672	0.050	0.655	0.648	-0.007	0.585	0.632	0.047
最大値	0.802	0.865	0.064	0.780	0.746	-0.034	0.821	0.825	0.004	0.809	0.818	0.008

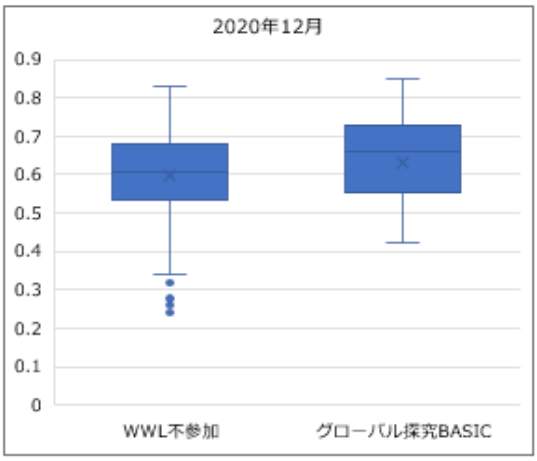
(15) 協働性（その他のコンピテンシー）

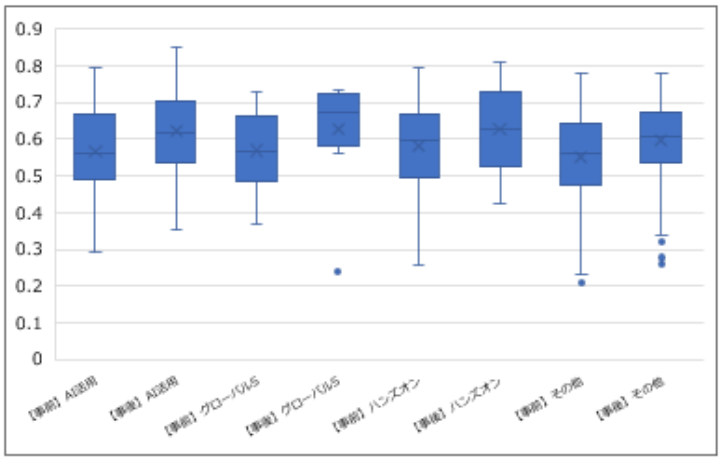




分類	AI活用			グローバルS			ハンズオン			その他		
n数	34			14			20			312		
受検時期	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率
平均値	0.551	0.596	0.045	0.519	0.619	0.100	0.521	0.608	0.087	0.533	0.578	0.045
標準偏差	0.116	0.123	0.006	0.135	0.122	-0.013	0.131	0.109	-0.023	0.115	0.110	-0.005
最小値	0.264	0.325	0.061	0.266	0.253	-0.013	0.259	0.386	0.126	0.163	0.240	0.077
中央値	0.541	0.609	0.068	0.554	0.669	0.115	0.519	0.618	0.099	0.538	0.587	0.048
最大値	0.783	0.838	0.056	0.697	0.737	0.041	0.796	0.798	0.002	0.780	0.770	-0.010

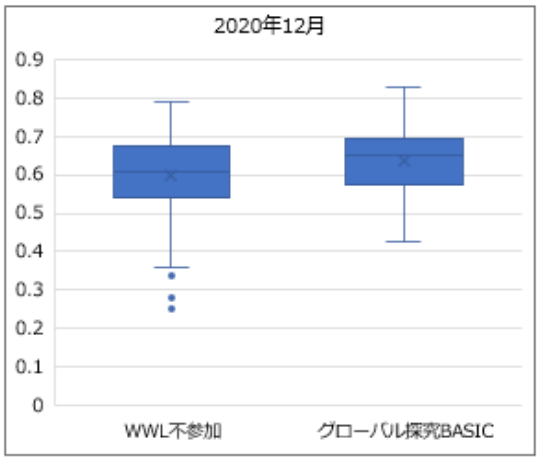
(16) リーダーシップ（その他のコンピテンシー）

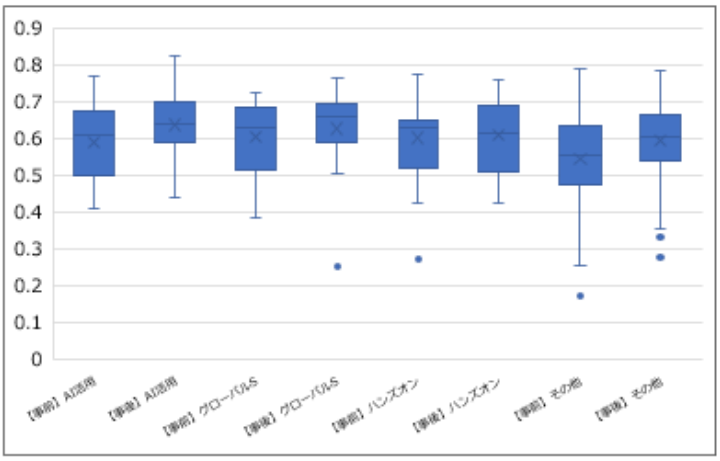




分類	AI活用			グローバルS			ハンズオン			その他		
n数	34			14			20			312		
受検時期	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率
平均値	0.568	0.621	0.052	0.569	0.629	0.060	0.581	0.629	0.047	0.553	0.597	0.045
標準偏差	0.112	0.109	-0.002	0.104	0.125	0.021	0.121	0.107	-0.014	0.112	0.102	-0.011
最小値	0.294	0.356	0.061	0.368	0.241	-0.127	0.256	0.425	0.168	0.208	0.260	0.052
中央値	0.562	0.616	0.054	0.568	0.674	0.106	0.598	0.626	0.028	0.562	0.609	0.047
最大値	0.792	0.852	0.060	0.731	0.734	0.003	0.794	0.812	0.018	0.780	0.782	0.002

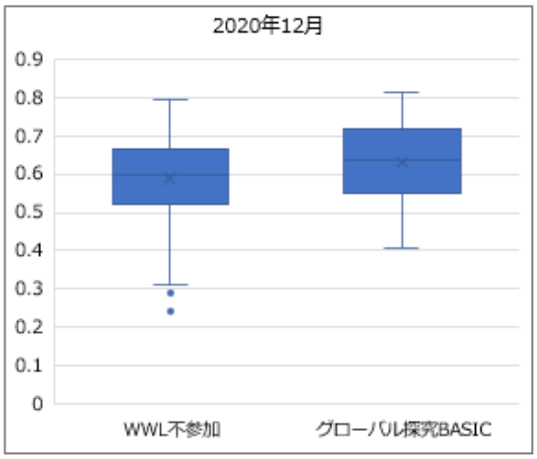
(17) イノベーション（その他のコンピテンシー）

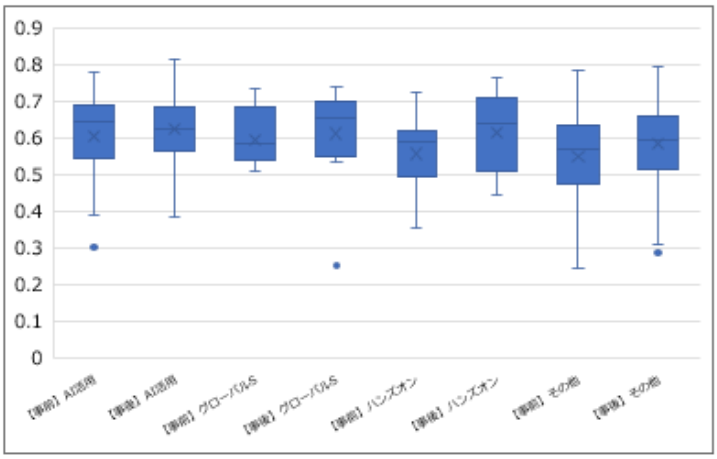




分類	AI活用			グローバルS			ハンズオン			その他		
n数	34			14			20			312		
受検時期	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率
平均値	0.592	0.640	0.047	0.605	0.629	0.023	0.604	0.611	0.007	0.548	0.596	0.048
標準偏差	0.100	0.092	-0.008	0.095	0.126	0.030	0.123	0.102	-0.021	0.114	0.099	-0.015
最小値	0.413	0.442	0.029	0.388	0.253	-0.135	0.276	0.426	0.150	0.173	0.280	0.107
中央値	0.614	0.641	0.027	0.633	0.663	0.030	0.630	0.617	-0.013	0.558	0.608	0.050
最大値	0.772	0.828	0.056	0.728	0.769	0.041	0.779	0.763	-0.016	0.793	0.788	-0.005

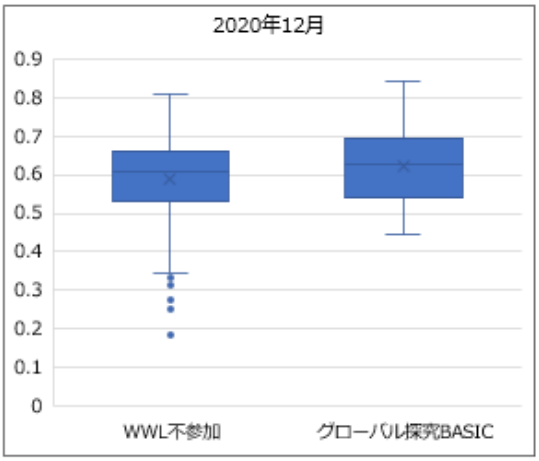
(18) 批判的思考力（その他のコンピテンシー）

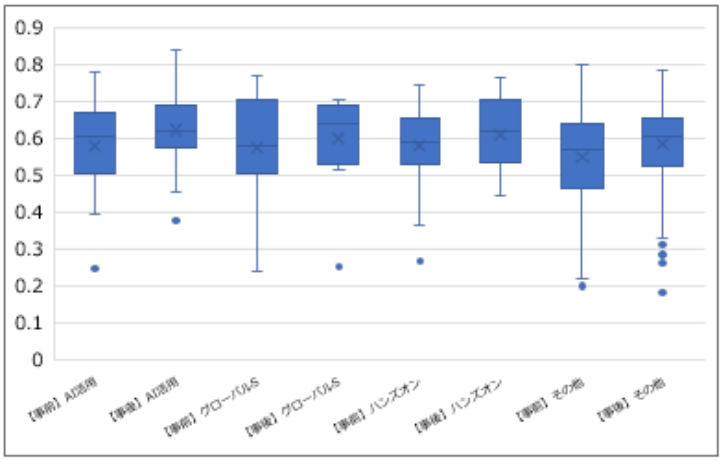




分類	AI活用			グローバルS			ハンズオン			その他		
n数	34			14			20			312		
受検時期	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率
平均値	0.607	0.626	0.020	0.595	0.614	0.019	0.559	0.618	0.059	0.553	0.588	0.035
標準偏差	0.110	0.098	-0.012	0.108	0.121	0.013	0.113	0.097	-0.016	0.115	0.100	-0.015
最小値	0.304	0.388	0.084	0.301	0.253	-0.048	0.247	0.448	0.202	0.244	0.242	-0.002
中央値	0.648	0.629	-0.019	0.589	0.654	0.066	0.590	0.641	0.051	0.569	0.597	0.028
最大値	0.783	0.815	0.032	0.738	0.742	0.004	0.728	0.767	0.039	0.789	0.795	0.006

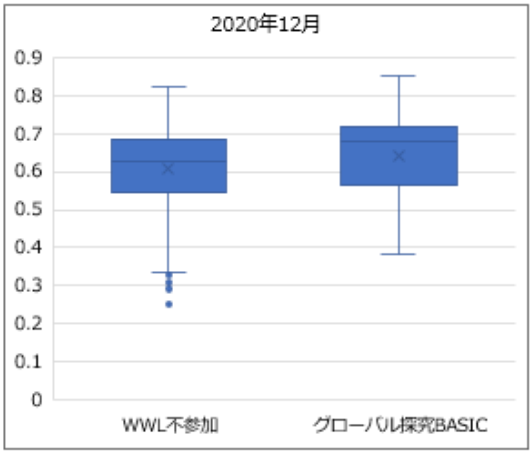
(19) 創造的思考力（その他のコンピテンシー）

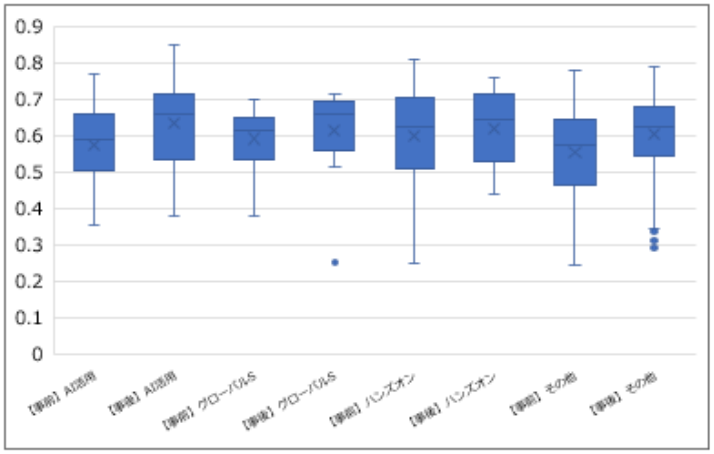




分類	AI活用			グローバルS			ハンズオン			その他		
n数	34			14			20			312		
受検時期	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率
平均値	0.583	0.624	0.041	0.578	0.602	0.024	0.583	0.613	0.030	0.550	0.586	0.036
標準偏差	0.109	0.100	-0.009	0.129	0.118	-0.010	0.117	0.096	-0.020	0.117	0.103	-0.014
最小値	0.248	0.377	0.130	0.241	0.253	0.012	0.270	0.445	0.174	0.201	0.184	-0.018
中央値	0.608	0.622	0.014	0.580	0.641	0.060	0.594	0.624	0.030	0.570	0.608	0.038
最大値	0.783	0.840	0.057	0.770	0.706	-0.064	0.748	0.765	0.017	0.801	0.786	-0.015

(20) 協働的思考力（その他のコンピテンシー）





分類	AI活用			グローバルS			ハンズオン			その他		
n数	34			14			20			312		
受検時期	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率	事前	事後	成長率
平均値	0.578	0.637	0.059	0.595	0.615	0.021	0.603	0.623	0.020	0.558	0.607	0.049
標準偏差	0.106	0.115	0.008	0.081	0.119	0.038	0.131	0.097	-0.034	0.116	0.103	-0.013
最小値	0.357	0.383	0.026	0.383	0.253	-0.130	0.252	0.441	0.188	0.245	0.292	0.047
中央値	0.593	0.662	0.070	0.618	0.662	0.043	0.627	0.644	0.018	0.577	0.625	0.047
最大値	0.772	0.851	0.079	0.701	0.719	0.018	0.811	0.764	-0.047	0.782	0.794	0.012

4. 有意性の検証まとめ

本結果の有意性を検証するため、2020 年 12 月の「Ai GROW」受検結果を基に t 検定を実施した。以下に、有意性が認められたコンピテンシーとそれを踏まえての来年度以降の展望について記載する。

（1）有意性が認められたコンピテンシー

1 年生では疑う力、自己効力、協働性、批判的思考力の成長に有意性が認められ、2 年生では自己効力、耐性、影響力の行使、協働性を除く 16 のコンピテンシーの成長に有意性が認められた。また、1・2 年生全体で WWL 参加者と不参加者とを比較したところ、自己効力、耐性、影響力の行使を除く 17 のコンピテンシーの成長に有意性が認められた。

これらの結果については、「学びの記録」等に代表される、各プログラム担当教員が実施してきた「定性的評価」の結果とある程度合致しており、「教員の肌感覚」がデータによって証明されたことにつながると考えている。

（2）今後の展望について

来年度のプログラムを計画する時期となっているが、Ai-GROW において生徒の成長に有意性が認められたコンピテンシーについては、その成長に寄与した活動を特定しながら、各プログラムにおいてその精度をより高めていく。

また、Ai GROW を事業の事前・事後だけでなく、事業の途中にも中間計測な意味合いで実施。中間計測を行うことで、年度途中にその結果を踏まえた改善を図ることができるだけでなく、コンピテンシーの成長に寄与する指導やプログラムを特定する精度もさらに高まるのではないだろうか。

拠点校においては、少なくとも WWL 事業指定期間中は全校生を対象に Ai-GROW の受検を実施することに決めている。WWL 事業指定期間終了後、「どの取り組みを残し、どの取り組みをやめるか」を決定していくための効果検証とその結果に基づいたプログラムの統廃合を実施していくこととなるが、その精度を高めるためにも、Ai-GROW の結果を積極的に活用していきたい。

【各コンピテンシーの計測結果】

(1) 1 年生の結果

コンピテンシー	WWL参加	WWL不参加	差	有意確率（両側）
課題設定	0.641	0.579	0.063	0.056
論理的思考	0.639	0.583	0.055	0.103
疑う力	**0.651**	**0.581**	**0.070**	**0.017**
創造性	0.556	0.522	0.034	0.365
個人的実行力	0.636	0.603	0.032	0.372
自己効力	**0.641**	**0.575**	**0.066**	**0.032**
耐性	0.621	0.595	0.026	0.376
決断力	0.630	0.579	0.051	0.105
表現力	0.612	0.547	0.065	0.062
共感・傾聴力	0.635	0.595	0.040	0.262
柔軟性	0.591	0.566	0.025	0.393
影響力の行使	0.535	0.473	0.062	0.148
地球市民	0.581	0.522	0.059	0.067
主体性	0.633	0.591	0.042	0.180
協働性	**0.588**	**0.524**	**0.064**	**0.050**
リーダーシップ	0.611	0.558	0.053	0.070
イノベーション	0.616	0.572	0.044	0.105
批判的思考力	**0.632**	**0.564**	**0.068**	**0.019**
創造的思考力	0.595	0.558	0.037	0.213
協働的思考力	0.628	0.595	0.033	0.241

※太字：有意性が認められたコンピテンシー

(2) 2 年生の結果

コンピテンシー	WWL参加	WWL不参加	差	有意確率（両側）
課題設定	**0.642**	**0.576**	**0.066**	**0.000**
論理的思考	**0.636**	**0.585**	**0.051**	**0.002**
疑う力	**0.620**	**0.582**	**0.038**	**0.014**
創造性	**0.595**	**0.557**	**0.038**	**0.019**
個人的実行力	**0.652**	**0.607**	**0.045**	**0.010**
自己効力	0.596	0.583	0.014	0.355
耐性	0.606	0.584	0.022	0.138
決断力	**0.626**	**0.586**	**0.040**	**0.008**
表現力	**0.600**	**0.565**	**0.035**	**0.021**
共感・傾聴力	**0.638**	**0.583**	**0.056**	**0.001**
柔軟性	**0.611**	**0.573**	**0.038**	**0.010**
影響力の行使	0.545	0.531	0.015	0.427
地球市民	**0.597**	**0.552**	**0.045**	**0.002**
主体性	**0.639**	**0.597**	**0.042**	**0.005**
協働性	0.571	0.557	0.014	0.342
リーダーシップ	**0.605**	**0.577**	**0.028**	**0.046**
イノベーション	**0.626**	**0.575**	**0.052**	**0.000**
批判的思考力	**0.610**	**0.574**	**0.037**	**0.009**
創造的思考力	**0.617**	**0.570**	**0.047**	**0.001**
協働的思考力	**0.622**	**0.584**	**0.039**	**0.007**

※太字：有意性が認められたコンピテンシー

(3) 1・2 年生の結果

コンピテンシー	WWL参加	WWL不参加	差	有意確率（両側）
課題設定	**0.642**	**0.577**	**0.065**	**0.000**
論理的思考	**0.636**	**0.584**	**0.052**	**0.000**
疑う力	**0.626**	**0.582**	**0.044**	**0.001**
創造性	**0.588**	**0.545**	**0.044**	**0.005**
個人的実行力	**0.649**	**0.606**	**0.043**	**0.006**
自己効力	0.604	0.580	0.024	0.064
耐性	0.609	0.588	0.021	0.109
決断力	**0.627**	**0.584**	**0.043**	**0.001**
表現力	**0.602**	**0.559**	**0.044**	**0.002**
共感・傾聴力	**0.638**	**0.587**	**0.051**	**0.001**
柔軟性	**0.607**	**0.570**	**0.037**	**0.005**
影響力の行使	0.544	0.510	0.033	0.060
地球市民	**0.594**	**0.541**	**0.052**	**0.000**
主体性	**0.638**	**0.595**	**0.043**	**0.001**
協働性	**0.574**	**0.545**	**0.029**	**0.036**
リーダーシップ	**0.606**	**0.570**	**0.036**	**0.005**
イノベーション	**0.625**	**0.574**	**0.051**	**0.000**
批判的思考力	**0.614**	**0.570**	**0.044**	**0.000**
創造的思考力	**0.613**	**0.566**	**0.047**	**0.000**
協働的思考力	**0.623**	**0.588**	**0.036**	**0.005**

※太字：有意性が認められたコンピテンシー

本研究における評価方法の展望と年度報告
―教科と行事における評価方法の見直しと取り扱い―

【展望】

本校でも従来、教科内での学習においては、量化が可能な事実的知識の習得度合いを測る筆記を中心とした評価がなされてきた。そこで、ＷＷＬＣ関連科目においてはコンピテンシーあるいは資質・能力ベースの学力に照準を絞り評価することで、他教科授業における評価の在り方におけるフロントランナーとして具体的な目的と方法を示すことを意図した。その結果、ＷＷＬＣ関連科目を展開して２年目となり、複数の教員がパフォーマンス課題による評価を取り入れようと他教科授業に即したルーブリックの作成や相互評価など、学内に評価に関する新しい取り組みが散見されるようになった。しかし、従来の考査によって量化される評価よりも、担当教員による評価の等化が難しく、生徒の成績に授業の評価をどのように結び付けていくべきなのかという議論が尽くされていない。また、評価があくまでも目標と表裏一帯であることから、教育活動全般にわたるカリキュラムの「逆向き設計」が求められるが、現段階では必ずしも全ての教育活動に明確な目標が設定され、それらが体系的に設計されているとは言えず、カリキュラムに応じた評価の在り方を検証すべきであるといえる。

このように、本年度はパフォーマンス課題に対する評価方法の検証（昨年度から継続）、その評価の等化、そしてカリキュラムに応じた評価の位置づけについて検証したい。

【実践報告（２０２０年度）】

【１】生徒の学びの深まりを測る。

① 学びの記録

授業中の教員の解説や講演者からの学び、調査訪問先での聞き取り、グループワークや他の学習者の発表などから「得た知識」がいかに整理され、自分なりに意味づけができているのかを評価対象とした。

知識の定着を確認する従来の筆記によるテストは、暗記力を問うものであるが、ここでは暗記しているかどうかではなく、どのような気づきや発見、疑問などに結び付いたのかというプロセスに焦点を当てている。

全ての授業や活動にこの「記録」を設け、教員によって毎回０点～２点の３段階で評価した。聞き取った情報や知識を生徒自身の表現によって換言することや、他のコンテンツへの転化など主体的な学びが見られるかどうかを基準とし、単なる知識の整理や単純な感想と峻別した。

② 相互チェック

他の学習者の成果物やパフォーマンス（レポートやプレゼンテーション）などを、ルーブリックに基づいて生徒が評価を行うことにより、自らの省察に繋げるとともにメタ認知力の伸長をも期待したい。自分と同じ活動を行った他者を評価することで、自らの活動を振り返る基準が形成され省察することができるようになることから、メタ的なものの見方に繋がるといえる。また、相互に評価者となることでピアティーチングや別のグループワークでの協働的な学びを促すことにも繋がっている。

③ 振り返り

生徒が自身の成果物やパフォーマンスについてメタ的に省察することで、具体的な成長のビジョンを持ち次の活動に生きるアクションに繋げることを目的としている。そのためには、生徒が自身をどのように評価すればよいのかといった基準を明確にしておくこととともに、同じ基準によって他者からどのように評価されているのかを具体的に知っておくことが必要となる。そのため、各担当教員は生徒の成果物やパフォーマンスに詳細な指摘やアドバイスを行うことで省察のヒントとした。

【２】生徒の学びの成果を測る。

ＷＷＬＣ関連のすべての科目においてパフォーマンス課題としてプレゼンテーションを求めた。自ら立てた問に対してどのような解決方法が考えられるのかといった探究型学習の評価対象としては、他にレポートや企画の実施などその他の成果物も有効であり、それらを総合的に組み合わせることが望ましいが、今回はプレゼンテーションをルーブリックにて評価することに統一し検証した。授業担当はＴＴであり、１名は前年度と同様の教員を配置し生徒のパフォーマンスの経年変化をとらえた。同一のカリキュラムで展開した授業に同様の評価基準を設けても年度によって成果の内容や質は異なるため、等化のための一つの取り組みとしてコアとなる教員が評価基準と評価対象を把握することとした。また、ペアとなった教員とともに評価に携わることにより教員間の評価のずれを調整することにもなった。生徒は教員からの評価基準に基づいたフィードバックをもとに次の活動へつなげようと計画することで、授業の目標と評価とが一体となった活動とすることもできた。

◇評価における課題：多岐に渡る評価対象、複数教員による評価の等化、逆向き設計カリキュラム

従来、事実的知識の習得を測ることによって、その度合いによって学習に必要な精神的な側面をも類推することができるという考え方がある。それは、知識の習得という結果の優劣がプロセスの優劣から生じるものであるというロジックだけではなく、多岐にわたる生徒の成果物やパフォーマンスを逐一評価対象とすることの非合理的な側面や、指標の不正確さからくるものである。もちろん、客観テストによる知識定着度の正確な把握は生徒の熟達度を測る点で有意義な評価法の一つであるが、資質・能力ベースでの評価にはある程度このような「非合理な側面」や「指標の不正確さ」を常に調整し受け入れていくことが求められる。

多岐に渡る評価対象をその内容によって適切な方法で評価しなければならない。それには、時間と手間を要するが、それは体系的な年間授業計画によって授業ごとの経験を積み、蓄積し共有することで緩和することができるのではないか。また、その共有を通して教員間の評価の等化を促すこともできる。

現在、評価に絞った教員研修を持てていないが、生徒の成果物やパフォーマンスを具体的にどのように評価していくのかと言った事例の共有を繰り返すことも有効である。そのことが、授業における評価の在り方に対する教員間の理解を促し自らの授業の目標やカリキュラムにおける位置づけについて自覚的な意識を持つことに繋がるのではないか。